

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（68）

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IX

上野城跡

川内市百次町上野

2004年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



上野城跡全景と川内市街地を臨む



遺構全景(真上から)

序 文

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う発掘調査は、西鹿児島駅緊急整備事業に伴う調査として平成5年に開始しましたが、諸般の事情で中断し、平成8年度から再開しました。

建設計画内の遺跡は鹿児島市から出水市まで21か所があり、関係機関との協議の結果、事前の記録保存調査を実施し、平成13年5月に全ての発掘調査が終了しました。

本報告書は21か所の遺跡のうち川内市に所在する上野城跡の発掘調査結果の記録です。

上野城跡は、別名「百次城」と呼ばれる中世の城ですが、調査の結果、旧石器・縄文・古墳・古代・中世・近世の各時代が複合された遺跡であることが判明しました。中でも中世の遺跡は、12～13世紀の掘立柱建物跡32棟、溝7条等が発見されたほか、大量の白磁等の遺物も出土し、ここが中世期の拠点であったことが分かりました。

そして、当センターはここに「上野城跡」として旧石器時代から近世までの調査結果をまとめました。この報告書が県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただく一助となれば幸いです。

発刊にあたり、鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局をはじめ、ご協力をいただいた川内市の関係部局、関係機関、そして、調査に携わった方々に対し、厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

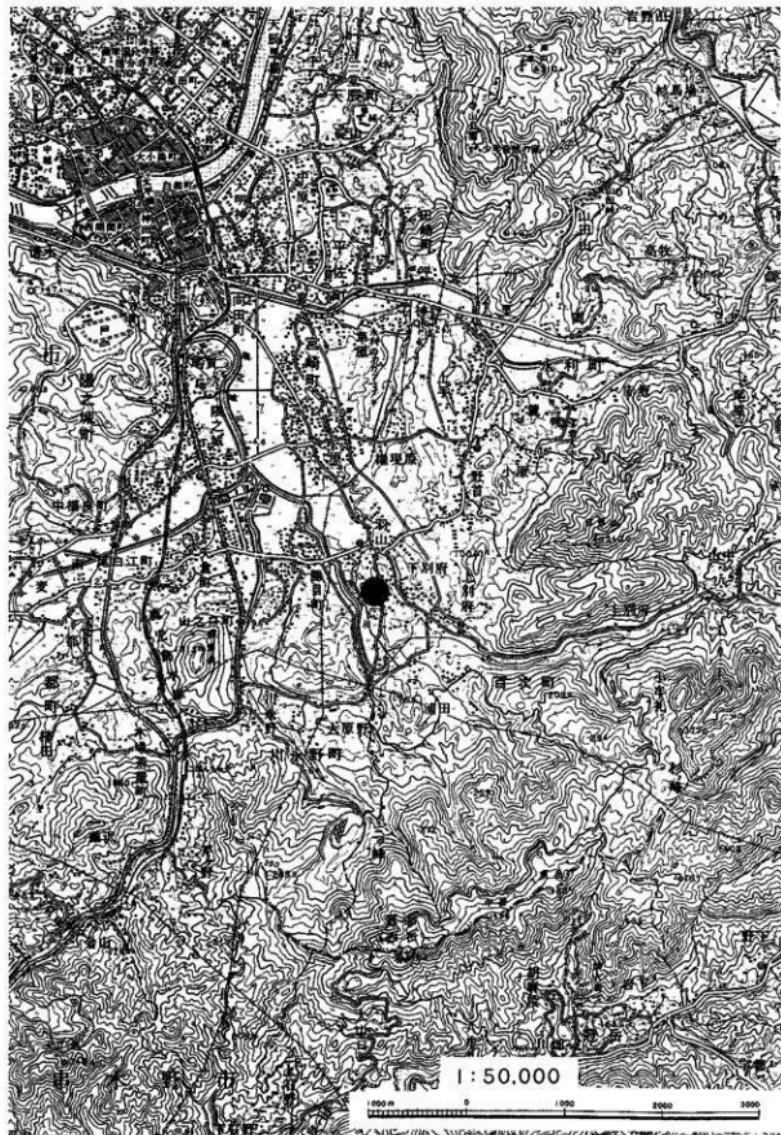
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 木原俊孝

報告書抄録

ふりがな	うえのじょうあと							
書名	上野城跡							
副書名	九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	IX							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	68							
編著者名	彌榮久志							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4661 鹿児島県国分市上之段 1175 番地1 Tel0995-48-5811							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村	遺跡番号	北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査起因
上野城跡	鹿児島県 川内市 百次町 上野			31° 46' 45"	130° 19' 50"	H11.12.1 ~ H12.3.24 H12.5.1 ~ H13.3.29	19,400	九州新 幹線鹿 児島ル ート
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
上野城跡	集落 散布地	旧石器時代 縄文時代 古墳時代 古代 中世 近世	落とし穴 掘立柱建物跡 方形竪穴状遺構 土壙墓 土坑 溝 古道	剥片尖頭器 ナイフ形石器 押型文土器 石坂式土器 阿高式土器 黒川式土器 石鎚・石匙 磨製石斧 石皿・磨石 土師器 白磁・青磁 中世須恵器・瓦器 中国陶器 短剣・鉄鎌・釘・鈴 その他鉄製品 青銅製鎗・その他青銅製品				

例　　言

- 1 本報告書は、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本報告書に掲載した遺跡は、上野城跡の記録である。
- 3 本遺跡は、鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局の委託を受けて調査したものである。
- 4 本報告書は、平成15年度の報告書作成として実施したものである。
- 5 遺物番号は通して付してある。
- 6 採図と図版の遺物番号は一致する。
- 7 採図の縮尺は、各図ごとに示している。
- 8 本遺跡に記載した高さは、海拔絶対高である。
- 9 本遺跡の執筆及び編集は瀬榮が行った。
- 10 自然科学分析調査は、(株)古環境研究所に依頼した。
- 11 出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示活用する計画である。



上野城跡の位置図

本文目次

第Ⅰ章 調査の経過	1	ア 挖立柱建物跡	45
第1節 調査に至るまでの調査	1	① 挖立柱建物跡1	45
第2節 調査の組織	1	② 挖立柱建物跡2	47
第3節 調査の経過	2	③ 挖立柱建物跡3	48
1 平成11年度の調査	2	④ 挖立柱建物跡4	49
2 平成12年度の調査	3	⑤ 挖立柱建物跡5	50
3 整理作業	5	⑥ 挖立柱建物跡6	52
4 発掘調査全体の経過と成果	6	⑦ 挖立柱建物跡7	53
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	9	⑧ 挖立柱建物跡8	54
第1節 遺跡の位置及び立地	9	⑨ 挖立柱建物跡9	55
第2節 周辺遺跡	9	⑩ 挖立柱建物跡10	56
第Ⅲ章 調査の概要	13	⑪ 挖立柱建物跡11	58
第1節 調査の基本計画	13	⑫ 挖立柱建物跡12	59
第2節 遺跡の層序	14	⑬ 挖立柱建物跡13	60
第3節 遺構と遺物	19	⑭ 挖立柱建物跡14	61
1 旧石器時代	19	⑮ 挖立柱建物跡15	63
(1) 経過及び遺構と遺物の出土状況	19	⑯ 挖立柱建物跡16	64
(2) 出土遺物	20	⑰ 挖立柱建物跡17	66
2 繩文時代	23	⑱ 挖立柱建物跡18	67
(1) 遺構	23	⑲ 挖立柱建物跡19	67
(2) 出土遺物	23	⑳ 挖立柱建物跡20	69
3 古墳時代	30	㉑ 挖立柱建物跡21	70
(1) 遺構	30	㉒ 挖立柱建物跡22	71
(2) 出土遺物	30	㉓ 挖立柱建物跡23	73
ア 瓢形土器	30	㉔ 挖立柱建物跡24	74
イ 壺形土器	35	㉕ 挖立柱建物跡25	75
ウ 高坏・手づくね製品	35	㉖ 挖立柱建物跡26	77
4 古代	36	㉗ 挖立柱建物跡27	78
(1) 遺構	36	㉘ 挖立柱建物跡28	79
(2) 遺物	36	㉙ 挖立柱建物跡29	80
ア 瓢形土器	36	㉚ 挖立柱建物跡30	81
イ 坏	36	㉛ 挖立柱建物跡31	82
ウ 塹	38	㉜ 挖立柱建物跡32	84
エ 須恵器	38	㉝ イ 方形竪穴遺構	85
5 中世	40	㉞ ① 方形竪穴遺構1	85
(1) 遺構	40	㉟ ② 方形竪穴遺構2	87

③ 方形堅穴遺構3	87	① 碗	138
④ 方形堅穴遺構4	89	② 盆	139
⑤ 方形堅穴遺構5	93	③ 小碗・蓋・二次加工品	141
ウ 土坑	93	エ 陶器	141
① 土坑I	93	① 貿易陶器	141
② 土坑II A類	101	② 常滑	143
③ 土坑II B類	102	オ 中世須恵器	143
④ 土坑II C類	102	カ 瓦器質土器	145
エ 焼土	108	キ 土師器	148
オ 留跡	112	① 土師器塊	148
カ 溝	113	② 黒色土器A塊	148
キ 柱穴遺構	121	③ 坯	153
(2) 遺物	125	④ 小皿	156
ア 白磁	125	⑤ 黒色土器B	156
① 白磁(1)	125	⑥ 土師特殊品	159
② 白磁(2)	125	ク 石鍋	160
③ 白磁(3)	125	ケ 滑石製品	162
④ 白磁(4)	125	コ 砧石	162
⑤ 白磁(5)	129	サ 石製品	164
⑥ 白磁(6)	129	シ 金属製品	164
⑦ 白磁(7)	130	6 近世	168
⑧ 白磁(8)	130	(1) 遺構	168
⑨ 白磁(9)	131	(2) 遺物	169
⑩ 墨書き器	131	ア 磁器	169
イ 青磁	131	イ 陶器	169
① 青磁(1)	131	第IV章 科学分析等の結果	200
② 青磁(2)	131	第1節 川内市上野城跡出土のウマ遺体	200
③ 青磁(3)	134	第2節 上野城跡出土種実の同定	204
④ 青磁(4)	134	第3節 上野城跡における自然科学分析	208
⑤ 青磁(5)	135	1 放射性炭素年代測定	208
⑥ 青磁(6)	135	2 植物珪酸体分析	209
⑦ 青磁(7)	136	3 花粉分析	217
⑧ 青磁(8)	136	4 種実同定	222
⑨ 青磁(9)	136	5 リン・カルシウム分析	223
⑩ 青磁(10)	137	第V章 まとめ	225
⑪ 青磁(11)	137		
ウ 染付	138		

挿図目次

第1図 遺跡の位置及び周辺遺跡	12	第33図 挖立柱建物跡3	49
第2図 上野城跡の地形と調査範囲	13	第34図 挖立柱建物跡4	50
第3図 上野城跡の基本的層序	14	第35図 挖立柱建物跡5	51
第4図 上野城跡の南北断面1 (D-2~5区, C-8~9区)	15	第36図 挖立柱建物跡6と出土遺物	52
第5図 上野城跡の南北断面2 (C-10~13区)	16	第37図 挖立柱建物跡7	54
第6図 上野城跡の東西断面 (C~F-8区, B-3~4区, B~C-5区)	17	第38図 挖立柱建物跡8と出土遺物	55
第7図 上野城跡の山部断面図 (G-16~18区, F~G-17~18区, 第6トレンチ)	18	第39図 挖立柱建物跡9	56
第8図 旧石器時代の出土分布	19	第40図 挖立柱建物跡10と出土遺物	57
第9図 E・F-3区の出土状況	19	第41図 挖立柱建物跡11と出土遺物	58
第10図 旧石器時代の土坑	20	第42図 挖立柱建物跡12	59
第11図 旧石器時代の出土遺物(1)	21	第43図 挖立柱建物跡13と出土遺物	61
第12図 旧石器時代の出土遺物(2)	22	第44図 挖立柱建物跡14	62
第13図 繩文時代の土坑(落とし穴)	23	第45図 挖立柱建物跡15	63
第14図 繩文時代の出土遺物(1)土器	25	第46図 挖立柱建物跡16	64
第15図 繩文時代の出土遺物(2)石器	26	第47図 挖立柱建物跡16の出土遺物	65
第16図 繩文時代の出土遺物(3)石器	27	第48図 挖立柱建物跡17と出土遺物	66
第17図 繩文時代の出土遺物(4)石器	27	第49図 挖立柱建物跡18と出土遺物	67
第18図 繩文時代の出土遺物(5)石器	28	第50図 挖立柱建物跡19と出土遺物	68
第19図 繩文時代の出土遺物(6)石器	29	第51図 挖立柱建物跡20と出土遺物	69
第20図 古墳時代・古代の土坑	31	第52図 挖立柱建物跡21と出土遺物	71
第21図 古墳時代の出土遺物(1)壺	32	第53図 挖立柱建物跡22と出土遺物	72
第22図 古墳時代の出土遺物(2)壺	33	第54図 挖立柱建物跡23	73
第23図 古墳時代の出土遺物(3)壺	34	第55図 挖立柱建物跡24と出土遺物	75
第24図 古墳時代の出土遺物(4)壺	35	第56図 挖立柱建物跡25と出土遺物	76
第25図 古墳時代の出土遺物(5)高坏・手づくね	36	第57図 挖立柱建物跡26	77
第26図 古代の出土遺物(1)壺	37	第58図 挖立柱建物跡26の出土遺物	78
第27図 古代の出土遺物(2)坏・塙	38	第59図 挖立柱建物跡27	79
第28図 古代の出土遺物(3)須恵器	39	第60図 挖立柱建物跡28	80
第29図 中世遺構全体配置	41	第61図 挖立柱建物跡29	81
第30図 挖立柱建物跡1と出土遺物(1)	46	第62図 挖立柱建物跡30と出土遺物	82
第31図 挖立柱建物跡1の出土遺物(2)	47	第63図 挖立柱建物跡31と出土遺物	83
第32図 挖立柱建物跡2	48	第64図 挖立柱建物跡32	84
		第65図 方形堅穴遺構1と出土遺物(1)	86
		第66図 方形堅穴遺構1の出土遺物(2)	87
		第67図 方形堅穴遺構2と出土遺物	88
		第68図 方形堅穴遺構3と出土遺物	89

第69図	方形堅穴遺構4	90	第106図	白磁(3)	128
第70図	方形堅穴遺構4の出土遺物	91	第107図	白磁(4)	129
第71図	方形堅穴遺構5と出土遺物(1)	92	第108図	白磁(5)	129
第72図	方形堅穴遺構5の出土遺物(2)	93	第109図	白磁(6)	129
第73図	土坑配置	94	第110図	白磁(7)	130
第74図	I区I類の土坑(1)	96	第111図	白磁(8)	130
第75図	I区I類の土坑(2)	97	第112図	白磁(9)	131
第76図	II区I類の土坑	98	第113図	墨書磁器	131
第77図	III区I類の土坑	99	第114図	青磁(1)	132
第78図	IV区I類の土坑	100	第115図	青磁(2)	133
第79図	土坑II類A	103	第116図	青磁(3)	134
第80図	土坑II類B・C	104	第117図	青磁(4)	134
第81図	土坑II類C	105	第118図	青磁(5)	135
第82図	土坑I・II類の出土遺物(1)	106	第119図	青磁(6)	135
第83図	土坑I・II類の出土遺物(2)	107	第120図	青磁(7)	136
第84図	焼土(1)	109	第121図	青磁(8)	136
第85図	焼土(2)	110	第122図	青磁(9)	136
第86図	焼土の出土遺物	111	第123図	青磁(10)	137
第87図	畠跡Iの全体図	112	第124図	青磁(11)	138
第88図	畠跡の出土遺物	113	第125図	染付碗	139
第89図	畠跡I-2(第2畠間)	114	第126図	染付皿	140
第90図	畠跡I-2(第1畠間)	115	第127図	染付碗・蓋・メンコ	140
第91図	畠跡II	116	第128図	貿易陶器	142
第92図	溝1	117	第129図	常滑	143
第93図	溝2・3	118	第130図	中世須恵器(1)	144
第94図	溝4・5	119	第131図	中世須恵器(2)	145
第95図	溝1~6の出土遺物	120	第132図	瓦器質土器(1)	146
第96図	同一遺構柱穴内の出土遺物	121	第133図	瓦器質土器(2)	147
第97図	柱穴内出土遺物(1)磁器	122	第134図	瓦器質土器(3)	148
第98図	柱穴内出土遺物(2)陶器	122	第135図	土師器塊	149
第99図	柱穴内出土遺物(3)土師器塊	123	第136図	黒色土器A塊(1)	150
第100図	柱穴内出土遺物(4)土師器坏小皿	124	第137図	黒色土器A塊(2)	151
第101図	柱穴内出土遺物(5)中世須恵器瓦古鏡	124	第138図	黒色土器A塊(3)	152
第102図	白磁(1)	125	第139図	土師器坏(1)	153
第103図	白磁(2)-1	126	第140図	土師器坏(2)	154
第104図	白磁(2)-2	127	第141図	土師器坏(3)	155
第105図	白磁(2)-3	128	第142図	土師器坏(4)	156

第143図 土師器小皿(1)	157	第151図 鉄製品(1)	166
第144図 土師器小皿(2)	158	第152図 鉄製品(2)	167
第145図 黒色土器B坏・小皿	159	第153図 鉄製品(3)と銅・鉛製品	168
第146図 土師特殊品	160	第154図 近世白磁	169
第147図 石鍋	161	第155図 近世陶器	170
第148図 滑石製品	162	第156図 中世遺構第A期想定配置	231
第149図 砥石	163	第157図 中世遺構第B期想定配置	232
第150図 石製品	165	第158図 中世遺構第C期想定配置	233

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧	10	第28表 掘立柱建物跡26の計測	78
第2表 古墳時代・古代の土坑	30	第29表 掘立柱建物跡27の計測	78
第3表 掘立柱建物跡1の計測	45	第30表 掘立柱建物跡28の計測	79
第4表 掘立柱建物跡2の計測	48	第31表 掘立柱建物跡29の計測	81
第5表 掘立柱建物跡3の計測	49	第32表 掘立柱建物跡30の計測	82
第6表 掘立柱建物跡4の計測	50	第33表 掘立柱建物跡31の計測	85
第7表 掘立柱建物跡5の計測	51	第34表 掘立柱建物跡32の計測	85
第8表 掘立柱建物跡6の計測	53	第35表 土坑I類の計測	95
第9表 掘立柱建物跡7の計測	53	第36表 土坑I類の計測	97
第10表 掘立柱建物跡8の計測	54	第37表 土坑I類の計測	99
第11表 掘立柱建物跡9の計測	56	第38表 土坑I類の計測	100
第12表 掘立柱建物跡10の計測	57	第39表 土坑I類の計測	101
第13表 掘立柱建物跡11の計測	59	第40表 焼土計測等一覧	108
第14表 掘立柱建物跡12の計測	60	第41表 石器一覧	171
第15表 掘立柱建物跡13の計測	60	第42表 繩文時代出土遺物一覧	172
第16表 掘立柱建物跡14の計測	62	第43表 古墳・古代出土遺物一覧	173
第17表 掘立柱建物跡15の計測	63	第44表 中世・近世出土遺物一覧	176
第18表 掘立柱建物跡16の計測	65	第45表 金属器出土一覧	199
第19表 掘立柱建物跡17の計測	66		
第20表 掘立柱建物跡18の計測	67		
第21表 掘立柱建物跡19の計測	68		
第22表 掘立柱建物跡20の計測	70		
第23表 掘立柱建物跡21の計測	70		
第24表 掘立柱建物跡22の計測	73		
第25表 掘立柱建物跡23の計測	74		
第26表 掘立柱建物跡24の計測	74		
第27表 掘立柱建物跡25の計測	76		

図版目次

巻頭図版1 上野城跡全景と川内市街地を臨む

巻頭図版2 遺構全景(真上から)

図版1 地層断面	237	図版20 繩文時代の出土遺物(土器)	256
図版2 地層断面・旧石器時代の出土状況	238	図版21 繩文時代の出土遺物(石器1)	257
図版3 繩文時代の落とし穴	239	図版22 繩文時代の出土遺物(石器2)	258
図版4 山部調査状況・山部出土状況	240	図版23 古墳時代の出土遺物	259
図版5 繩文土器出土状況・山部調査	241	図版24 古代の出土遺物	260
図版6 南北部の遺構	242	図版25 古代の須恵器・中世陶器	261
図版7 堀立柱建物跡1・26・27	243	図版26 白磁・土師器合子	262
図版8 建物跡12・13・14 方形竪穴遺構	244	図版27 白磁(1)	263
図版9 方形竪穴遺構1・2	245	図版28 白磁(2)	264
図版10 方形竪穴遺構3・4	246	図版29 青磁(1)	265
図版11 方形竪穴遺構5 土坑II	247	図版30 青磁(2)	266
図版12 土坑II-7・6	248	図版31 染付	267
図版13 土坑II-8・17	249	図版32 貿易陶器	268
図版14 土坑I・II	250	図版33 中世須恵器	269
図版15 溝・古道	251	図版34 瓦器質土器	270
図版16 畠跡I・II	252	図版35 土師器塊・皿	271
図版17 柱穴・土器出土状況	253	図版36 輻石製品・石製品	272
図版18 遺物出土状況	254	図版37 石鍋・滑石製品	273
図版19 旧石器時代の出土遺物	255	図版38 金属製品	274

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの調査

日本鉄道公団九州新幹線建設局は九州新幹線鹿児島ルート建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について、平成4年6月16日鹿児島県教育委員会文化課（当時、平成8年4月以降文化財課）に照会した。平成4年12月、建設用地内の分布調査が実施され計21か所の遺跡を確認した。

日本鉄道建設公団九州建設局と文化財課との協議の結果、平成5年度に鹿児島市の武遺跡、平成8年度に出水市の鳥越平遺跡をはじめ川内市の大原野遺跡、平成9年度に川内市の前畠遺跡、平成10年度に出水市の茶屋ノ元遺跡をはじめ東市来町の東下原遺跡など12遺跡の確認・全面調査を実施した。

上野城跡は平成11年度に川内市楠元遺跡や城下遺跡の全面調査とともに確認・全面調査を平成11年12月1日から実施することになった。

第2節 調査の組織

事業主体者 独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局

調査主体者 鹿児島県教育委員会

企画調整 鹿児島県教育庁文化財課

平成11年度の発掘調査体制

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉永和人
調査企画	〃	次長兼総務課長	黒木友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎勝洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新東晃一
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	立神次郎
	〃	主任文化財主事	彌榮久志
調査担当	〃	文化財主事	前田 誠
	〃	文化財調査員	川口雅之
事務担当	〃	総務係長	有村 貢
	〃	主査	今村孝一郎
	〃	主事	溜池佳子

平成12年度の発掘調査体制

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	井上明文
調査企画	〃	次長兼総務課長	黒木友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東晃一
	〃	課長補佐	立神次郎
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮久志

	〃	主任文化財主事	長野眞一
調査担当	〃	文化財主事	前野潤一郎
	〃	文化財研究員	川口雅之
	〃	〃	切通雅子
	〃	文化財調査員	徳田有希乃
事務担当	〃	総務係長	有村貢
	〃	主査	今村孝一郎
	〃	主事	瀬池佳子
調査指導	鹿児島国際短期大学	学長	三木 靖

平成 15 年度の整理体制

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	木原俊孝
調査企画	〃	次長兼総務課長	田中文雄
	〃	調査課長	新東晃一
	〃	課長補佐	立神次郎
調査企画及び担当	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	彌栄久志
整理担当	〃	文化財調査員	相美伊久雄
事務担当	〃	総務係長	平野浩二
	〃	主査	脇田清幸
	〃	主査	池 珠美
報告書作成検討委員会	〃	所長他 10 名	
企画担当者	〃	中村和美・八木澤一郎	

第 3 節 調査の経過

1 平成 11 年度の調査（第 1 次）

上野城跡の調査は平成 10 年度楠元遺跡調査の中で水の汲み上げ時間を利用してトレンチを 2 本入れ確認調査を実施したのが最初であった。この調査は楠元遺跡の一環として実施したが短時間のため、確認調査は全体の把握ができず次年度に引き継いだ。そして、平成 11 年 12 月 1 日から対象面積 19,400 m²に対し、平坦畑地部に 4 本、山林山部に 3 本トレンチを設定して本格的な確認調査を実施した。その結果、台地部は旧石器時代から中世までの包含層を確認した。山部は岩山で、遺跡の立地が良くなく、第 6 トレンチの岩石の間に土器片や剥片が出土した。

これらのことと踏まえ、日本鉄道公団九州新幹線建設局と協議し、平成 11 年度の全面調査は台地部の B～F 一 7 ～ 16 区約 3,000 m²を実施した。

なお、平成 10 年度の組織と日誌抄は楠元遺跡・城下遺跡を参照のこと。

日誌抄

平成 11 年 9 月 9 日から 10 月 14 日は楠元・城下遺跡の調査と同時並行での確認調査を実施した。実施した日は、9／9, 9／17, 9／20, 9／27・28, 10／1・4～8・12～14 で計 13 日であ

った。調査は第1～4トレンチを設定しての確認で、IからVII層のシラスまで掘り下げる。その結果、中世、旧石器時代の包含層を確認する。

平成11年12月6日～22日

本月から全面調査に入る。C～F-9・10区I a b層掘り下げ。C～E-11～14区のII・III a層上面地形コンタ図作成。C・D-12～14区の土坑、ピットの半裁。

平成12年1月5日～28日

C～F-7～10区I b・II・III層上面掘り下げ後遺物取り上げ。同区溝2及び道跡検出掘り下げ。C-13、D-10区土坑完掘写真撮影後実測。I b層C・D-11区III a層上面まで掘り下げ。D-9区II層内に畠跡検出。

2月1日～25日

C～F-7・8区II層掘り下げ。同区II層上面コンタ図作成。C-12区東西ペルト断面図作成。C-12・13区溝1平面図作成。C-9・10区畠跡の精査後写真撮影及び実測。C-12区石組み焼土跡の調査。山部にトレンチ設定。

3月

山部の3トレンチ掘り下げ。C・D-10・11区ピット土坑の平面断面図作成。溝2・3・4の掘り下げ後遺物取り上げ、実測。C・D-9区III a層まで掘り下げ。掘立柱建物跡1の柱穴掘り下げ後写真撮影及び実測。東壁と中央ペルトの土層図作成。B～F-10・16区終了。

2 平成12年度の調査（第2次）

平成11年度はB～F-10～16区について遺構の調査が終了していたので、平成12年度は残りの部分16,400m²を調査した。

平坦畑地部は、中世の遺構が主体をしめる包含層の調査を行い、その層の若干下部にある縄文包含層までを調査し、さらに下層にある旧石器時代の包含層まで調査した。

山部は、F・G-16～19区の調査を対象とした。さらに周囲に5本のトレンチを入れて、拡張の確認を実施した。その結果、遺物の拡張は確認されなかった。

日誌抄

平成12年5月1・8日～26日

道具搬入、環境整備、重機で調査区北側の掘り下げ。B～F-3～5区のI b層掘り下げ。10mグリッドの基準杭打ち。SK37半裁後写真撮影後掘り下げ、実測。B～D-2～7区I a b c層掘り下げ、遺物取り上げ。B・C-3～8区にI b層掘り下げ、遺物取り上げ。B～E-6・7区の地形コンタ図作成。石列I実測。D～F-2～5区のI b層掘り下げ、遺物取り上げ。掘立柱建物跡検出作業。B～D-2～7区地形コンタ図作成。D～F-4・5区I b層掘り下げ。

6月5日～23日

E～G-2～7区のI c・II層掘り下げ。同区III a層上面まで掘り下げて遺構検出作業。同区I c・II層遺物取り上げ。E・F-3～7区の遺構検出作業。B～D-3～7区のI c層掘り下げ。同区地層図作成。B～F-2～6区の清掃・掘り下げ・遺物取り上げ。E・F-5・6区地層断面図作成、ペルト崩し。E・F-3・4区ピット平板実測。E・F-2～6区の清掃後掘立柱建物跡検出

状況。同区写真撮影。同区土層断面図作成。山部に傾斜確認トレンチ5本設定。D・E-2・3区の遺構検出後配置図作成。E-3区の焼土跡掘り下げ、写真撮影、実測。D～F-3・4区のピット及び土坑掘り下げ。E・F-3～5区のピット及び土坑掘り下げ。E・F-7・8区のIII a層上面遺構図配置図作成。山部先行トレンチ掘り下げ。掘立柱建物跡4・6半裁実測。

7月3日～28日

掘立柱建物跡4・6・7半裁実測。E・F-3～7区の土坑群、半裁、実測、写真撮影。山部確認トレンチの掘り下げ。E・F-6・7区のピット及び土坑掘り下げ。E・F-2区の下層トレンチ掘り下げ開始。山部拡張区の表土剥ぎ。E・F-7・8区のピット及び土坑掘り下げ、実測。E・F-2・3区の下層トレンチ掘り下げ。山部拡張区の表土剥ぎ。F-8・9区III層以下全面調査、シラス上面に剥片先頭器出土。E・F-3・4区畠歛検出。E・F-3区の下層トレンチ掘り下げ。山部拡張区の表土剥ぎ。E・F-3・4区畠歛検出後実測。E・F-6・7区畠歛検出。

8月1日～28日

掘立柱建物跡7・8・9・10・11ピット実測、掘り下げ。E・F-7・8区、E-4・5・7区VII・IX層掘り下げ。同区掘り下げ終了後写真撮影、土層断面図作成。E・F-3～5区VII・IX層掘り下げ。E-5・6区、D・E-5・6区の重機によるIV・V層掘り下げ。D・E-4・5区ピット、土坑実測、掘り下げ。D・E-2～4区のIX層掘り下げ。D・E-2・3区土坑写真撮影後実測。E・F-3～8区調査終了。山部表土剥ぎ後、コンタ図作成。

9月1日～29日

今月から本格的に山部の調査に入る。6トレンチの掘り下げ、北側面の断面図作成。F・G-17～19区のII層掘り下げ、出土状況の写真撮影後平板実測。G・H-16・17区掘り下げ、出土状況の写真撮影後平板実測。F・G-16・17区、G-17・18・19区のベルト土層断面図作成。

10月3日～27日

G・H-16・18区掘り下げ、出土状況の写真撮影後平板実測、遺物取り上げ。4日で山部終了。E-11区の下層確認トレンチ設定後VI・VII層掘り下げ。C・D-3～7区のIII層検出後、遺構平板実測。D・E-11区下層確認トレンチ掘り下げ。C～E-5・6区ベルト土層断面図作成後ベルト崩し、精查遺構検出。B-5・4区ミニトレンチ掘り下げ。方形窓穴遺構①②検出状況写真撮影後掘り下げ。

D-4・5区焼土精査後写真撮影。C・D-5～7区遺構の平板実測。B～D-6区の遺構検出状況後写真撮影、掘り下げ。D-6区ベルト土層断面実測、ベルト崩し。

11月1日～28日

掘立柱建物跡12～19のピット検出写真撮影、実測、掘り下げ。方形窓穴遺構②の掘り下げ、写真撮影、実測。B-2～6区東側拡張区のII層まで掘り下げ。

12月1日～22日

掘立柱建物跡22・23・25～27のピット検出写真撮影、実測、掘り下げ。B-2～6区東側拡張区の掘り下げ。C-9区焼土①②の掘り下げ写真撮影後実測。D-8区の歛跡掘り下げ、断面実測。C・D-7・8区及びD・E-8～10区境ベルト土層断面実測後掘り下げ。B～E-9区のピット掘り下げ。C・D-7・8区の溝跡掘り下げ。B～E-6区の溝跡掘り下げ。B・E-8区以降の

空中写真撮影。C・D-9区以降の下層確認トレンチ掘り下げ。

平成13年1月5日～29日

掘立柱建物跡21・24・28のピット検出写真撮影、実測、掘り下げ。方形竪穴遺構①②③④⑤検出状況写真撮影後掘り下げ。C・D-9区以降の下層確認トレンチ掘り下げ。D-7区ピット・土坑掘り下げ。

2月1日～27日

C・D-9区以降のV層掘り下げ。方形竪穴遺構②③④⑤の写真撮影及び実測、ベルト崩し。C・D-7・8区ピット掘り下げ、実測。同区下層確認トレンチ掘り下げ。土坑74・76・77掘り下げ実測。空中写真撮影。8区トレンチ(東西)掘り下げ。B-2～5区Ⅲ層検出硬化面実測。

3月1日～19日

C-3区のV層掘り下げ。C・D-3・4・7・8区のV～Ⅶ層掘り下げ。B-4～6区、B・C-4区土層断面図作成。C～E-5～7区のV～Ⅶ層掘り下げ。C・D-5～8区の掘り下げ後写真撮影と土層断面図作成。B・C-5・6区の傾斜部トレンチ掘り下げ。C～E-8区下層確認トレンチ土層断面図作成。今月で発掘調査終了。

3 整理作業

整理作業は、新幹線建設工事が優先したため発掘調査が22遺跡全て終了した平成13年度から開始した。

計画は、日本鉄道建設公団九州新幹線建設局と協議した結果、全遺跡を計画的に3年間で整理し、随時報告書を刊行することとした。なお、最終年度は、上野城跡、大原野遺跡、上ノ平遺跡を刊行し、大坪遺跡、京田遺跡、大島遺跡は整理を終了させ平成16年度当初に刊行することとした。

上野城跡の整理作業は作業員8名で下記の通り実施した。

作業員名 笑喜ミチ子、竹ノ内礼子、坂元真由美、谷村志乃恵、山元順子、井出康代、堂龍久代、郷田千秋

4月 土器洗い、注記、接合

5月 接合、遺物選別・分類、遺構図作成

6月 遺物選別・分類、遺物実側、遺構図作成

7月 遺物実測、遺構図作成

8月 遺物実測

9月 遺物実測、トレース、原稿執筆

10月 トレース、レイアウト、原稿執筆

11月 レイアウト、拓本、復元、原稿執筆

12月 写真撮影、写真レイアウト、原稿執筆

1月 入札、収納整理

2月 校正、収納整理

3月 校正、受け取り

4 発掘調査全体の経過と成果

九州新幹線鹿児島ルートの発掘調査は、西鹿児島駅整備事業に伴う武遺跡の調査を平成5年5月12日より開始し、平成13年5月30日に川内市の京田遺跡を調査して全てを終了した。

平成5年度後の発掘調査は、北陸新幹線の一部である長野行新幹線建設が優先され九州新幹線鹿児島ルートの発掘調査は2年間中断となった。再開したのは、平成8年8月の鳥越平遺跡・松ヶ迫遺跡であった。しかも、その調査は短期間であった。

平成9年度は11月から大原野遺跡の調査を開始し、前畠遺跡の一部全面調査を実施した。平成11年度からは、調査体制を充実し、2年2か月間で対象遺跡全21ヵ所の内、14ヵ所の発掘調査を終了した。なお、その成果は次の表で示した通りである。

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物	備考
1	茶屋ノ元	出水市境町	H10.7.2~3 H11.3.2~4 計5日	240m ²	瀬榮久志 前田 誠	縄文早・前期	塞ノ神式、轟式 磨製石斧、黒曜石	
2	鳥越平	出水市境町	H8.8.5 計1日	55m ²	池畠耕一 中原一成	時期不明	包含層は確認されず。	
3	鏡・安原	出水市安原町	H11.2.17・18 H11.2.24・25 H11.3.9 計5日	60m ²	瀬榮久志 前田 誠	縄文晚期 平安時代	研磨土器、黒曜石 土師器	
4	榎木田 見入来 大坪	出水市美原町	H11.1.5~3.9 H11.5.6~ 12.3.31 H12.5.1~ 13.3.27 計420日	27,247m ²	瀬榮久志 前田 誠 濱崎一富 東 和幸 高岡和也 上床 真 森田裕之	縄文晩期 平安・鎌倉 時代	縄文晩期埋設土器38基、 平安期甕付壺穴住居跡1基、 掘立柱建物跡9棟、 焼土遺構3基、溝状遺構 30条、波板状遺構27条、 上加世田式 入佐式 黒 川式、土師器、須恵器、 玉縁白磁、滑石製石鍋、 刻畫土器、鉄製品、石 鐵、磨製石斧、打製土掘 り具、石匙、石皿、磨 石、凹石、玉類(勾玉6、 管玉25、丸玉5、平玉3、 垂飾品1)、剥片46、木製 品30)、異形石器。	
5	宮野脇	出水市上鰐淵	H11.2.19 H12.2 計2日間	48m ²	瀬榮久志 前田 誠 東 和幸	時代不明	包含層確認されず。	
6	松ヶ迫	出水市武本	H8.8.6 計1日間	12.5m ²	池畠耕一 中原一成	時期不明	包含層確認されず。	
7	小松	出水市武本	H10.7.8~10 計3日間	108m ²	瀬榮久志 前田 誠	縄文早期	土器、黒曜石	
8	前畠	川内市城上町	H9.11.1~ H10.3.31 H10.5.6~ H12.12.24 H11.12.13~ H12.2.24 計195日	11,800m ²	長野寅一 上床 真 瀬榮久志 前田 誠 宮田栄二 平木場秀夫	旧石器時代 縄文早・前 ・後期 中 近世	土坑(縮穴)25基、集 石4基、竪穴状遺構1 基、五輪塔、大型掘立建 物跡7棟、 ナイフ形石器、細石刃 模、吉田・石坂・轟式 石鐵、石斧、石皿、磨 石、凹石。 土師器、青磁、白磁、染 付、薩摩燒。	

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物 備考
9	計志加里	川内市中郷町	H11.7.1~8.27 H12.5.23~ H13.3.26 計218日	5,900m ²	宮田栄二 平木陽秀夫 樋渡将太郎	縄文早・後 ・晚朝、弥 生時代、古 墳時代、平 安時代、中 世。	竪穴住居1軒、掘立柱建 物跡5棟、土壇墓3基、 円形周溝状遺構1基、土 坑5基、中世掘立柱建物 跡2棟、古道、溝状遺 構。早期押型文土器、後 期の土器、磨製石織、打 製石斧、鉋、ビエスエス キュウ、スクレイパー、 磨石、石皿、石匙、石 鐵、砥石、土師器、須恵 器瓦、青磁、白磁、滑 石製品、刀子、青銅製 品、紡錘車。
10	京田 (京田里分 寺下)	川内市中郷町	H11.6.1~20 H12.5.8~6.6 H12.9.4~ H13.3.24 H13.4.9~5.31 計191日	5,900m ²	宮田栄二 平木陽秀夫 川口雅之 徳田有希乃 樋渡将太郎	弥生中期、 平安時代 中・近世	弥生期水田跡、土留め状 遺構、杭跡、ウケ鉢、ド ンクリビット、古代水田 跡。 弥生土器、三又鉢、二又 鉢、大足、一本梯子、横 梁材、網目、土師器、須 恵器、瓦、曲物。
11	原田・大島	川内市東大小 路町	H10.11.26 H11.5.6~ H12.3.24 H12.5.7~ H13.3.19 計275日	1,960m ²	宮田栄二 平木陽秀夫 樋渡将太郎	縄文晩期 ・平木陽秀夫 ・樋渡将太郎	弥生期竪穴住居跡4軒、 土坑1基 古墳期竪穴住居跡1軒 平安期竪穴住居跡3軒 (竪付2軒)、掘立建物 跡2棟、土壇墓1 中世竪穴建物跡1軒、掘 立柱建物跡1棟、晶跡、 弥生甕・壺、石包丁、 磨製石織、 古墳期川式須恵器、 大刀、劍、鉄鐵、 平安期土師器、須恵器 瓦、越州黒青磁、綠釉陶 器、転用硯、帶金具石製 丸輪、玉類、土鍛、金 環、青銅製品。
12	鎌治屋馬場 春田	川内市平佐町	H10.11.25 H11.9.1~9.27 H12.5.9~6.15 H12.9.1~12.27 計103日	2,850m ²	齋藤久志 前田 誠 宮田栄二 平木陽秀夫 川口雅之 徳田有希乃	古代 中世 近世	古代鍛冶炉6基、土坑2 基、竪穴住居跡1軒、掘 立柱建物跡4棟、炉跡7 基、晶跡。 越州窯系青磁、陶器壺、 土師器、鉄滓、鉄製品 (鍔、鍔先、紡錘車、鉄 鏡) 中世青磁、古錢 近世窯業焼、平佐燒、伊 万里燒、土師器、羽口、 銅硯。
13	橋元 城下	川内市百次町	H10.9.17~30 H10.11.4~24 H11.9.2~12.6 H11.5.6~11.8 計209日	1,800m ²	齋藤久志 前田 誠 川口雅之	縄文後期 ・弥生~古墳	弥生~古墳期竪穴住居跡 2軒、炉跡2基、土坑1 2基、溝7条(杭列を伴 う溝1条)。 縄文期押型文・市来式・ 西平式・北九根山式。

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物 備考
							弥生～古墳期土器、木製平歛、又歛、横歛、鐵の柄、掘り棒、丸木弓、容器（未製品）、櫛状木製品。
14	上野城跡	川内市百次町	H11.12.1～3.24 H12.5.1～ H13.3.29 計316日	19,400m ²	前田 誠 川口雅之 前原智一郎 切通雅子 徳田有希乃 瀬榮久志	旧石器 縄文 古墳 中世	中世掘立柱建物跡32棟、 土壙墓4基、方形堅穴建 物跡5軒、溝7条、古道 1条、高跡。 剥片先頭器、ナイフ形石 器、押形文、石板式、阿 高式、土師器、石皿、敲 石、凹石、石鐵、土師 器、須恵器、白磁、青 磁、短刀、古鏡、滑石製 石鍋、中世陶器、鐵鎌。
15	大原野	川内市百次町 浦田	H8.10.1～29 H9.11.～ H10.3.31 計171日	2,815m ²	青崎和憲 中原一成 長野寛一 国生 誠 上末 真 瀬榮久志	旧石器 縄文早・前 期	ナイフ形石器、細石器、 吉田式、石板式、条痕土 器、轍式、石鐵、石皿、 磨石、敲石、石斧。
16	東下原	日置郡東市来 町妻母	H10.10.27～29 H10.12.1～18 H11.3.12 計20日	248m ²	瀬榮久志 前田 誠	旧石器 縄文早期 古墳 古代	古代焼土付土坑 細石刃核 成川式、土師器。
17	上ノ平	日置郡伊集院 町下神殿4区	H11.2.26 H11.10.1～25 H12.11.14～ H13.3.29 計92日	2,328m ²	瀬榮久志 前田 誠 上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 馬籠亮道	旧石器 縄文後期 中世	縄文堅穴住居跡5軒、集 石4基、中世溝1条、細 石刃核、指宿式、磨製石 斧、石鐵。
18	山ノ脇 石坂 西原	日置郡伊集院 町郡	H11.5.6～24 H11.6.4～30 H11.11.1～ H12.3.24 H12.5.1～11.13 計184日	15,900m ²	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文草創・ 早・中期 古墳、中世	集石（早期3基、中期3 基）、 中世溝、農具埋納土坑、 掘立柱建物跡12棟、 縄文早期土器、船元式、 成川式、土師器、陶磁器 (中国南部)、滑石製石 鍋。
19	梅落	日置郡伊集院 町郡	H11.5.19～21 H11.6.14～17 H12.6.19～7.14 計24日	340m ²	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文早期	集石、塞之神式、スク レーパー。
20	尾崎	鹿児島市	発掘調査せず				遺跡土工事に触れず残
21	武ABCD	鹿児島市	H5.4.12～5.25 H5.5.21～7.2 H5.12.6～ H6.2.21 H6.3.9～30 H11.5.24～6.11 H11.7.1～9.28 H12.5.8～6.13 計175日	9,104m ²	瀬榮久志 倉良文良 鶴田靜彦 上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文前・中 期、弥生中 期、近世	古墳堅穴住居跡23基、 大型土坑11基、土坑3 7、溝4条、近世溝9 条、轍式、深浦式、春日 式、船元式、山之口式、 成川式、陶器・磁器、 瓦、木製品、金屬製品、 寿国寺跡のはん池（門前 池）跡。
22	前市野原	串木野市	H10.12.15 計1日	22m ²	瀬榮久志 前田 誠	時期不明	追加調査で博入、 包含層は確認されず。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置及び立地

上野城跡は鹿児島県川内市百次町上野に所在している。

上野城跡が所在する川内市は鹿児島県の北西部に位置し、九州でも大河川の範疇に入る川内川が市内を東西に流れている。川内川は源が熊本県の白髪山に発し、宮崎県えびの市、鹿児島県大口市を経由して川内市の中央部を横切り、東シナ海へ注いでいる。その川内川は、奔流とそれに注ぐ限之城川等の支流の河川によって川内平野や川内盆地と呼ばれる沖積平野を形成している。川内盆地の南側は標高 516m の冠岳がそびえ立ち隣接市の中木野市に繋がっている。上野城跡の南側には新幹線建設関係で平成 8・9 年度に調査した大原野遺跡が、その冠岳の麓で北斜面に立地している。北側には、平成 10・11 年度に発掘調査した楠元遺跡・城下遺跡が低地に立地している。

上野城跡のある丘陵は、川内盆地の中の南部にある限之城地区の低地から山地に上がる冠岳の裾部から水田を挟み北へ 3km 離れた標高約 40~50m の独立丘にあたる。周りは水田を形成し、西側が永利地区的台地に接している。水田を形成する河川は、川内川の支流限之城川に流入する百次川が東側に、山崎川が西側に北へ流れている。上野城跡が所在する独立丘は、同市永利地区的凝結凝灰岩台地の西端にあたり、上述の百次川が浸食して分離した台地である。なお、浸食された所は一部シラス台地となっている。シラス台地は独立丘の東側にあり平坦部を形成し、溶結凝灰岩は西側にあたり、一段高い山部を形成している。

第2節 周辺遺跡

川内川から南部に所在する遺跡群の発掘調査は、限之城バイパス建設関係、新幹線建設関係、現在行われている南九州自動車道建設関係がある。

限之城バイパス関係は昭和 55~59 年度に発掘調査され、上ノ原遺跡、西ノ平遺跡、成岡遺跡がこれにあたる。この中で特に西ノ平遺跡では中世の大型建物跡が発見され、鹿児島におけるこの地域の先進性が認められた。また、縄石器時代の石器をはじめ、縄文時代後期の完形土器が土坑内から出土している。

新幹線建設関係では川内川南側の鍛冶屋馬場遺跡をはじめ、楠元遺跡、城下遺跡、上野城跡が平成 10 年度から 12 年度にかけて発掘調査が実施された。この中で特に楠元遺跡では、弥生終末から古墳初頭における大量の木製品が発見され、南九州ではじめて本格的な低地の遺跡の存在を確認した。さらに、縄文時代後期の包含層もあり当時の海岸線を考える上で良い遺跡である。また、上野城跡では、旧石器時代の遺物をはじめ、12 世紀頃の掘立柱建物跡群とそれに伴う白磁が多く出土し、西ノ平遺跡同様鹿児島におけるこの地域の先進性が裏付けられている。

南九州自動車道建設関係では、現在調査中である霜月田遺跡は掘立柱建物跡が発見され、中世の遺跡の拡がりがとらえられる。

これらのほか、川内純心女子高等学校の台地縁辺部に縄文時代の貝塚がある尾賀台遺跡があり、限之城川を中心とした水田地帯の北側は海水が入り込んでいた入江と考えられる。それを裏付ける船着き場の意味と考えられる「津」の付く赤澤津もある。また、そこは遺跡に登録されている。

今回の調査対象になった上野城跡は、百次城とも言われている中世の城である。地形は、前に述べた河川や低地で囲まれた独立丘を利用し、生活はシラス台地の平坦部を利用していている。平坦部には、3つの郭を形成し、その間は空堀を設けた防備をしている。この郭から北側を眺めると隈之城川一帯の水田が一望に見えて、本地が統治しやすい所であったことが裏付けられる。また、台地の下段には上野氏三代の墓があり、拠点としての証となっている。

以上のように、現在の隈之城川の両岸地帯は旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世と長期にわたり生活の拠点が多かったことがわかる。このことはこの地域が弥生時代後期から中世にかけて鹿児島県でも先進的な地域であったことがわかる。

第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺構・遺物	備考
1	原口	田原町原口・外園	台地	縄文～江戸	土器・須恵器・染付	
2	大明原	田崎町大明原	台地	縄文～江戸	土器・染付・石鐵	
3	喜入原	平佐町喜入	台地	縄文～江戸	土器・須恵器・染付	
4	平佐城	平佐町藤崎ほか	丘陵	鎌倉～戦国		空堀跡
5	田中原	陽成町田中原	河岸段丘	鎌倉～室町	土器・青磁・白磁	
6	石神城	永利町石神	丘陵	不詳		堀切跡
7	石神原A	永利町石神原	台地	古墳～室町	土器・須恵器・青磁	
8	石神原B	永利町石神原	台地	古墳～室町	土器・須恵器・青磁	
9	若宮北	永利町西永崎ほか	台地	縄文～室町	土器・須恵器・青磁・石鐵	
10	若宮南	永利町若宮前ほか	台地	縄文～室町	土器・須恵器・青磁・石鐵	
11	宮崎北原	宮崎町出居原ほか	台地	古墳～室町	土器・須恵器・陶器	
12	瀬戸口	宮崎町瀬戸口	台地下	縄文～平安	土器・土師器・石鐵	
13	赤穂原	宮崎町赤穂原	微高地	古墳～室町	土器・土師器	
14	赤沢津	宮崎町赤沢津	微高地	縄文～平安	並木式土器・須恵器・石斧	
15	日暮丘	向田町鉢本ほか	丘陵	古墳～江戸	土器・須恵器・染付	
16	尾賀台	隈之城町尾賀原外	丘陵	縄文～室町	土器・須恵器・染付・石鐵	一部貝塚
17	椿城	隈之城町尾賀	丘陵	不詳		堀切跡
18	池尻	隈之城町池尻	丘陵	古墳	須恵器	
19	西ノ口	隈之城町西ノ口	台地	古墳		
20	湯之谷	隈之城町湯之谷	丘陵	平安	土師器	
21	上ノ原	中福良町上ノ原	台地	縄文～戦国	土器・須恵器・青磁・染付	S55 発掘
22	西ノ平	中福良町西ノ平	台地	旧石器～江戸	土師器・青磁・細石刃核	S55～59 発
23	成岡	中福良町成岡	台地	旧石器～江戸	須恵器・青磁・細石刃	S55～59 発
24	金剛院跡	中福良町石原		鎌倉	層塔・宝塔	
25	立石A	中福良町立石	丘陵	縄文～室町	土器・土師器・青磁	
26	立石B	中福良町立石	丘陵	縄文～室町	土器・石鐵・黒曜石	

27	集	中福良町集	丘陵	縄文～室町	土器・陶器・黒曜石	
28	上中原	永利町上中原	台地	古墳～室町	土器・土師器	
29	権現原	永利町権現原	台地	古墳～室町	土器・青磁・染付	
30	鎮守原	宮崎町鎮守原	台地	古墳～室町	土器・青磁・須恵器	
31	宮崎南原	宮崎町大堀	台地	古墳～室町	土器・青磁・須恵器	
32	三本松	宮崎町三本松	台地	古墳～室町	土器・土師器・陶器	
33	百次原	百次町六反ほか	台地	古墳～室町	土器・内黒土師器	
34	別府原	百次町別府原	台地	古墳～室町	須恵器・青磁・染付	
35	楠元	百次町楠元	平野	縄文～近世	土器・木製品・石鐵	H10~11
36	城下	百次町城下	台地下	縄文～近世	土器・須恵器・陶器	H10~11
37	上野	百次町上野	台地	旧石器～江戸	尖頭器・土器・白磁	H10~11
38	上野氏三代墓	百次町2383番地	台地下	鎌倉	宝塔・五輪塔	
39	大畠	百次町大畠	台地端	古墳～江戸	土器・青磁・染付	H3 発掘
40	小城	勝目町小城	平地	不詳		消滅
41	桙城	勝目町桙	丘陵	不詳		東ノ丸字
42	勝目原	勝目町桙・集ほか	台地	古墳～江戸	須恵器・青磁・染付	
43	二福城	隈之城町城	丘陵	鎌倉～戦国		曲輪跡
44	矢倉城	矢倉町矢倉城	平地	不詳		消滅
45	山口原	山之口町山口原	台地	古墳～江戸	土器・青磁・染付	
46	四反畑	尾白江町四反畑	微高地	平安～江戸	土師器・青磁・染付	
47	瀬戸山	木場茶屋町瀬戸山	丘陵	古墳～江戸	土器・須恵器・青磁	
48	都城	都町都原	台地	不詳		空堀跡
49	都原	都町都原	台地	平安～室町	土師器・青磁・染付	
50	経徳城	都町麦・屋敷田ほか	丘陵	不詳		堀切跡
51	霜月田	都町霜月田	台地	古墳～室町	土器・青磁・染付	H14・15



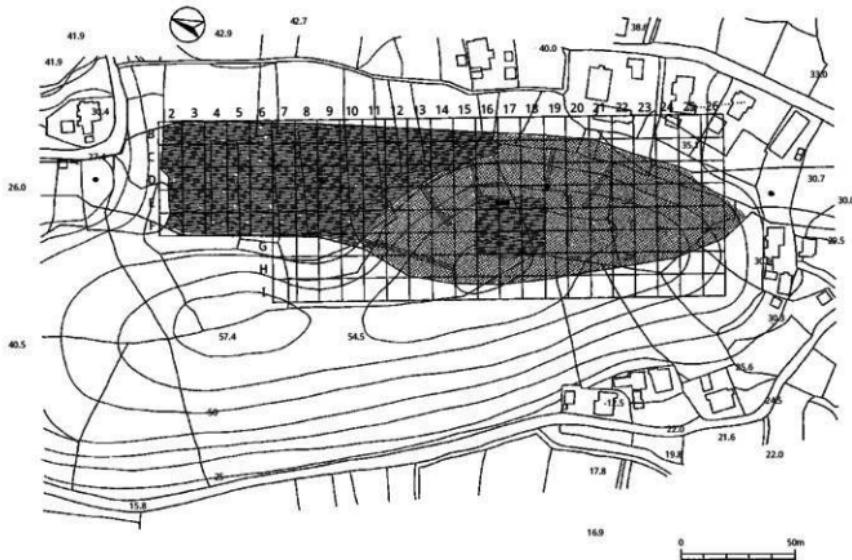
第1図 遺跡の位置及び周辺遺跡

第三章 調査の概要

第1節 調査の基本計画

本遺跡は、現在、地形が畠地となっている平坦地と雜木林になっている山部に大きく分けられているため両方に網がかけられるように新幹線建設の新八代起点からの41.6km杭を起点として、平坦部の東端がA列に、北端が第1列に入るよう10mグリッドを設定して発掘調査を実施した。

本遺跡の調査方法は、中世城のため、平坦部を生活拠点の館跡、山部を有事の時の山城と想定して進めた。平坦部における調査は、建物跡構等の精密な検出、山部における段々に造られた帯曲輪類似のものと頂上部における建物構等の検出に力を注ぐ方法をとった。よって、調査の進め方としては、山部の帯曲輪調査時の土落とし場として、7～16区の地域を最初に調査した。



第2図 上野城跡の地形と調査範囲

第2節 遺跡の層序

調査の結果、畑地の平坦部と岩山の山部に分けて下記の層序が設定された。

平坦部

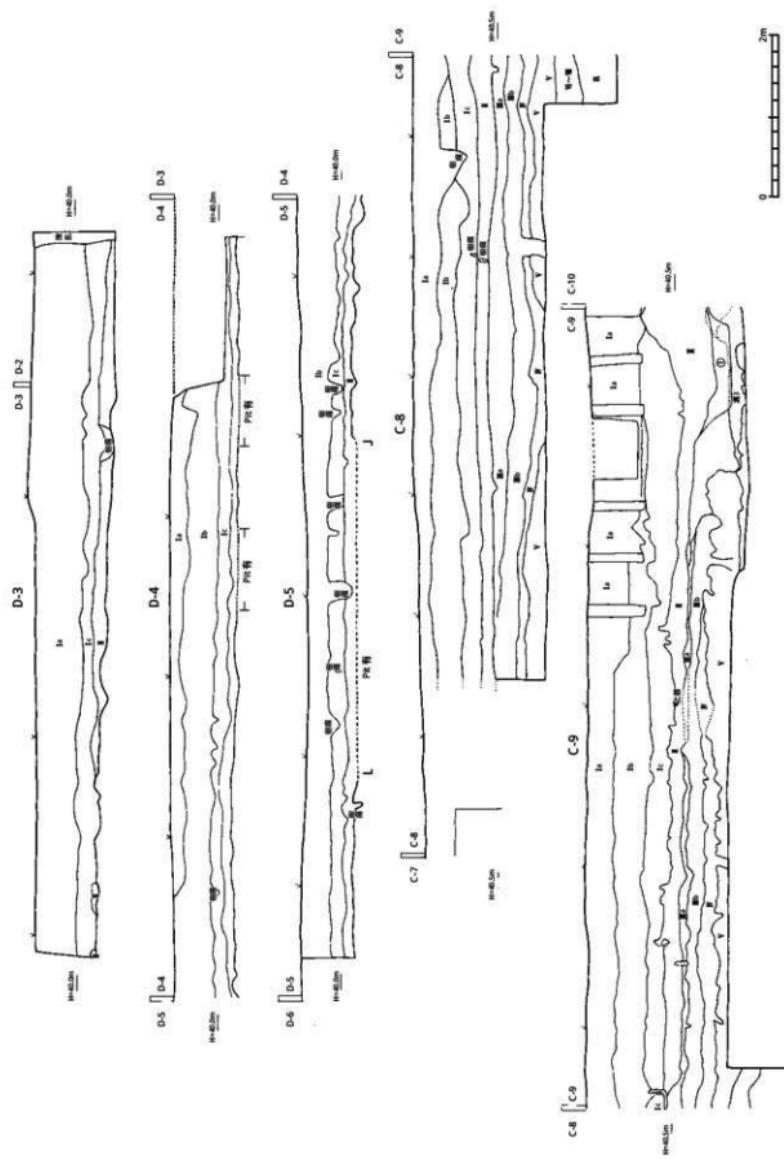
	I a	I a	表土	(現耕作土)
	I b	I b	暗褐色砂質土層	(13世紀～15世紀頃)
	I c	I c	黒褐色砂質土層	(10世紀～13世紀頃)
	II	II	黒色砂質土層	(10世紀～13世紀頃)
	III a	III a	淡黃褐色砂質土層	(古墳時代～縄文時代中期)
	IV	III b	黄褐色砂質土層	
	V	IV	にぶい黄褐色砂質土層	
	VI	V	黒褐色土層	
	VII	VI	暗褐色粘質土層	
	VIII	VII	褐色粘質土層	(旧石器時代)
	IX	VIII	シラス二次堆積層	(旧石器時代)
		IX	シラス層	

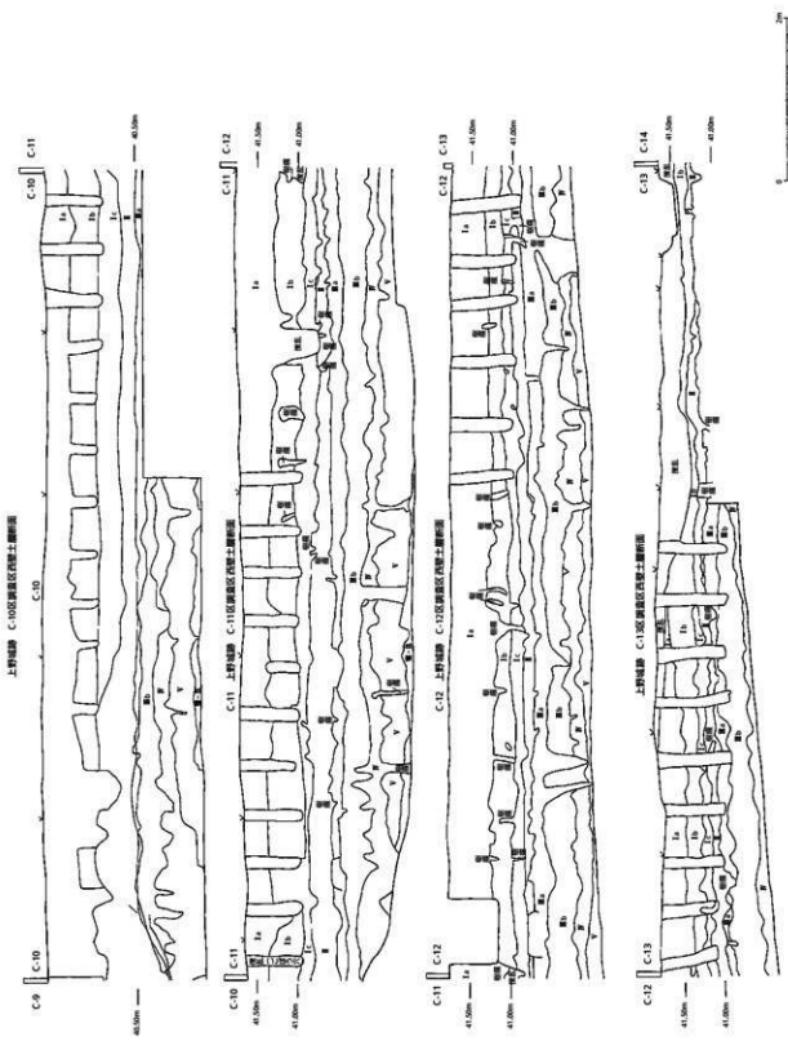
山部

	I	I	表土	(開墾土)
	II	II	暗褐色土	(縄文時代～旧石器時代)
	III	III	下部に溶結凝灰岩礫を含む褐色土	(")
			III層直下は溶結凝灰岩の岩盤	(加久藤溶結凝灰岩?)

第3図 上野城跡の基本的層序

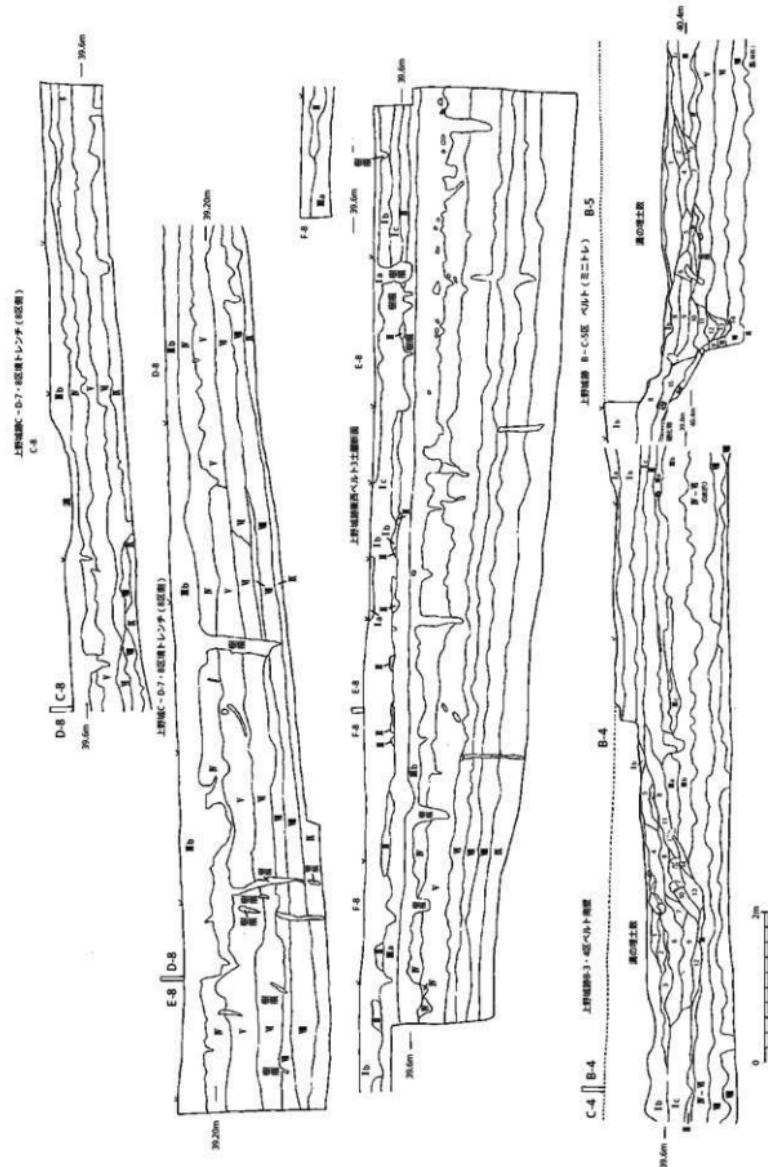
第4図 上野城跡の南北断面1 (D-2~5区・C-8~9区)

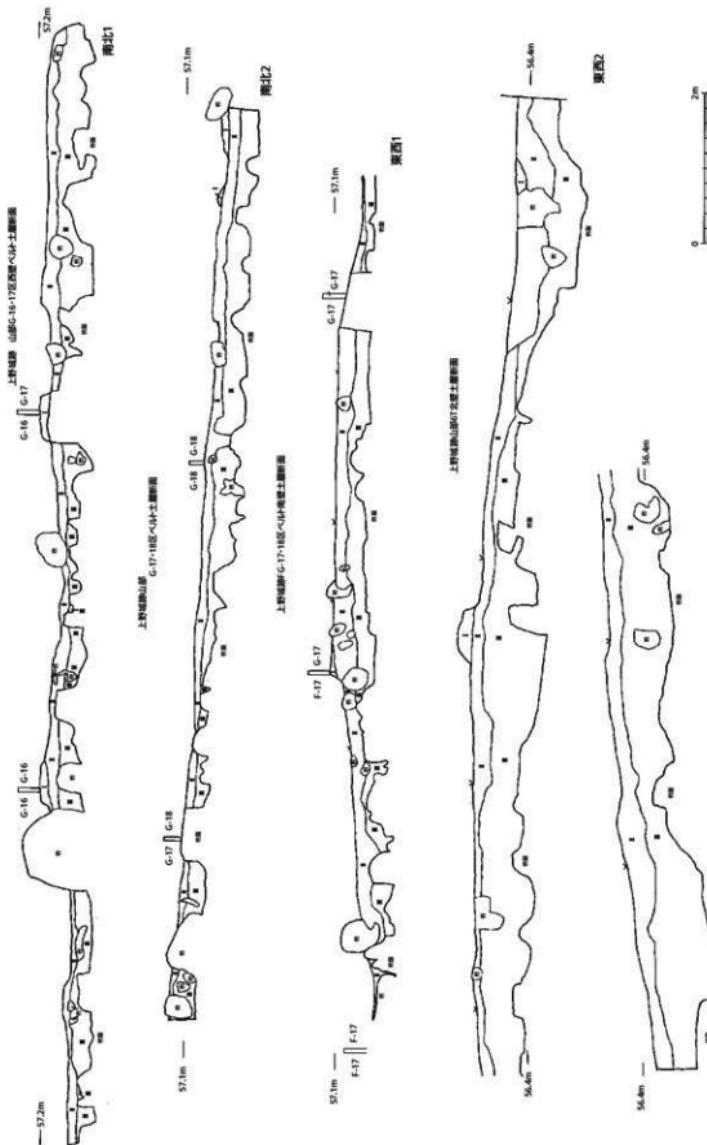




第5図 上野城跡の南北断面2 (C-10~13区)

第6図 上野城跡の東西断面 (C-F-8区、B-3・4区、B-C-5区)





第7図 上野城跡の山部断面 (G-16-18区、F-G-17-18区、第6トレンチ)

第3節 遺構と遺物

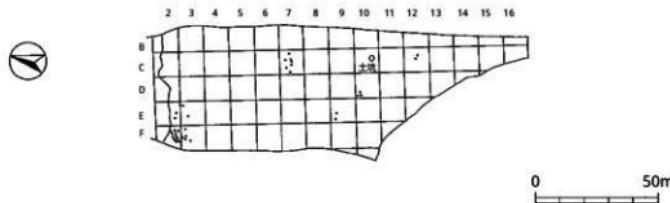
1 旧石器時代

(1) 経過及び遺構と遺物の出土状況

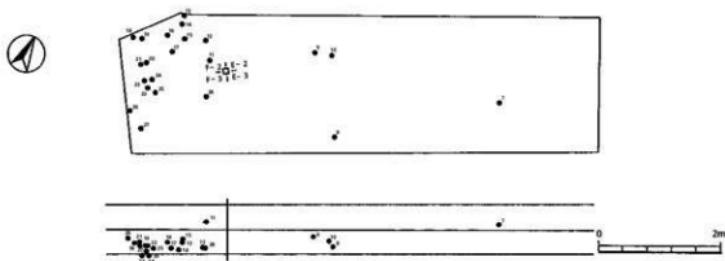
旧石器時代の遺物は確認調査でE-6区のVIからVII層にかけて黒曜石と玉髓の剥片が出土し、旧石器時代の本格的な遺跡と想定して調査を実施した。その結果、トレンチ周辺に遺物が散布した状態で出土し、そこは本格的な遺跡にはならなかった。

次に、III層調査終了後下層確認のトレンチを入れ調査した結果、E・F-3・4区のVII層にナイフ形石器1点、剥片先頭器1点のほかフレーク・チップが20点、E-9区のVII層にフレーク3点、C-12、D-10区のVII層にフレーク・チップが5点、C-7区のVII層にフレーク・チップが7点出土している。第9図はE・F-3・4区の出土状況図である。

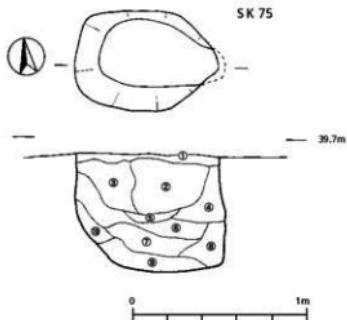
また、下層確認トレンチ調査でC-10区に土坑(第10図)がVII層に検出した。形は長軸70cm、短軸58cmの略五角形で片方が床面より鋭角に、片方が丸味をもって立ち上がっている。埋土は基本的にレンズ状堆積を保ち次のように観察された。最下層の⑥は褐色土でぬれシラスを多く含み、⑥⑦⑧はにぶい黄褐色土層であった。これらの層は⑥がVII層に大きい軽石や白色粒子を少量含み、⑦は⑥に大きな軽石は含まず、⑧は⑦より明るい。⑤は褐色土層でVII層主体の層である。④はにぶい褐色土で3mm大の黄色軽石を多量に含んでいる。③は暗褐色土層で黄色軽石と白色粒子を含んだ砂質層である。②は黒褐色土で白色粒子を少量含んでいる。①は暗褐色土で非常に小さい白色粒子とシラスの黄色軽石を含んでいる。なお、拡張の結果、周囲には検出しなかった。



第8図 旧石器時代の出土分布



第9図 E・F-3区の出土状況



第 10 図 旧石器時代の土坑

(2) 出土遺物 (第 11・12 図 1~18)

旧石器時代の遺物は、前述で示したように 3か所に検出した。1~5・8・9までが E・F・3 区のⅦ層に出土した一群のものである。1 は剥片尖頭器であるが、背面調整と基部調整がおこなわれ、主要剥離面と組み合わせて刃部を作っている。丁寧な背面調整は先端部と基部にみられ、先端部は欠損している。なお、石材は頁岩である。2 はナイフ形石器である。形は彫刻刀型で背面調整が全体にみられ刃部は主要剥離面と組み合っている。刃部は横位に近い斜位であり先端部は欠損している。石材は玉髓である。3 は主要剥離面が縦長であるフレイクで、下縁に若干のプランティングがみられる。原石の自然面が多くみられるもので石材は黒曜石である。4 は一次剥片を加工したもので縁を刃部に利用したスクレイパーと思われる。石材は黒曜石である。

5 は両面加工されたものでグレイバーの要素をもつ石器である。石材は黒曜石である。8 は自然面が残ったフレイクで、上半分が欠損している。剥離面は少なく主要剥離面がみられる。下縁には使用によったと思われる剥離痕がみられる。石材は黒曜石である。9 は自然面を残した剥片で、斜方に剥がれたものである。この剥片を剥ぐ段階の前に 2 面の剥離面がみられる。使用痕は確認できない。石材は黒曜石である。

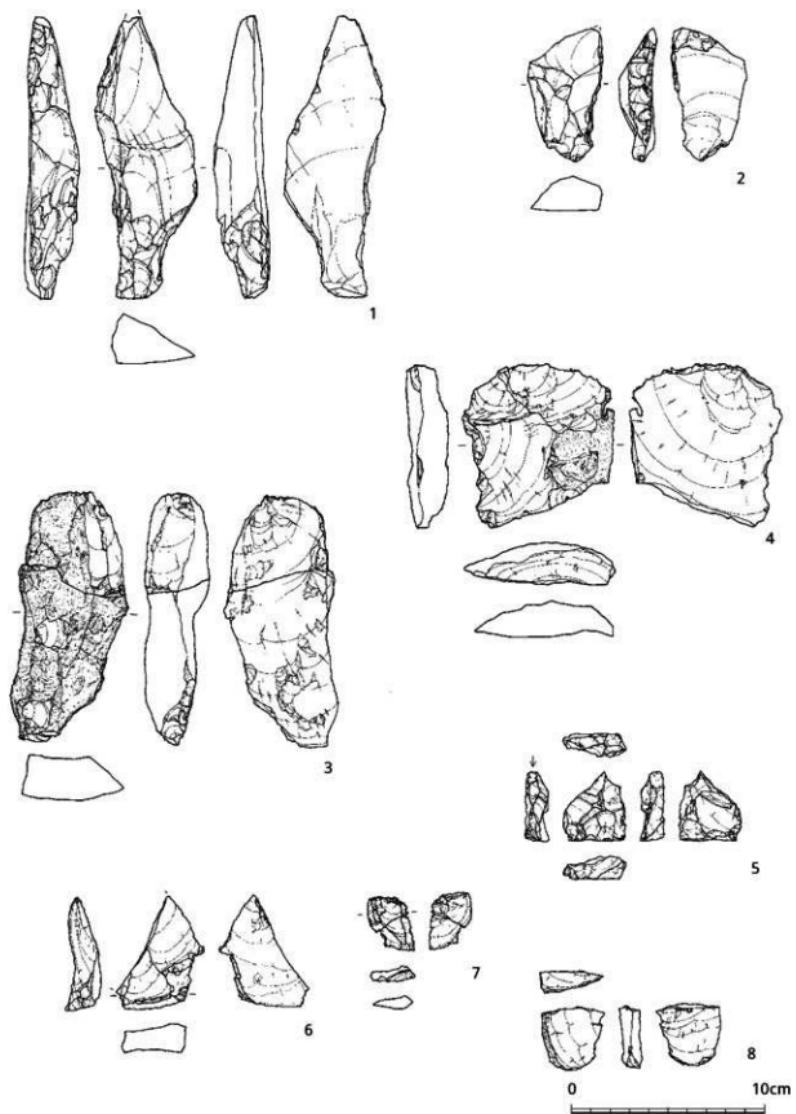
6・7・10 は C-12, D-10 区のⅦ層に出土した一群のものである。6 は自然面が残ったフレイクである。主要剥離面の上位に使用による剥離痕がみられる。石材は黒曜石である。7 は小さめの自然面が残るフレイクである。二つに割れた状態である。石材は黒曜石である。10 は厚みをもち先端を剥離調整したドリルと思われる。石材は黒曜石である。

以上が旧石器時代の包含層から出土した遺物である。

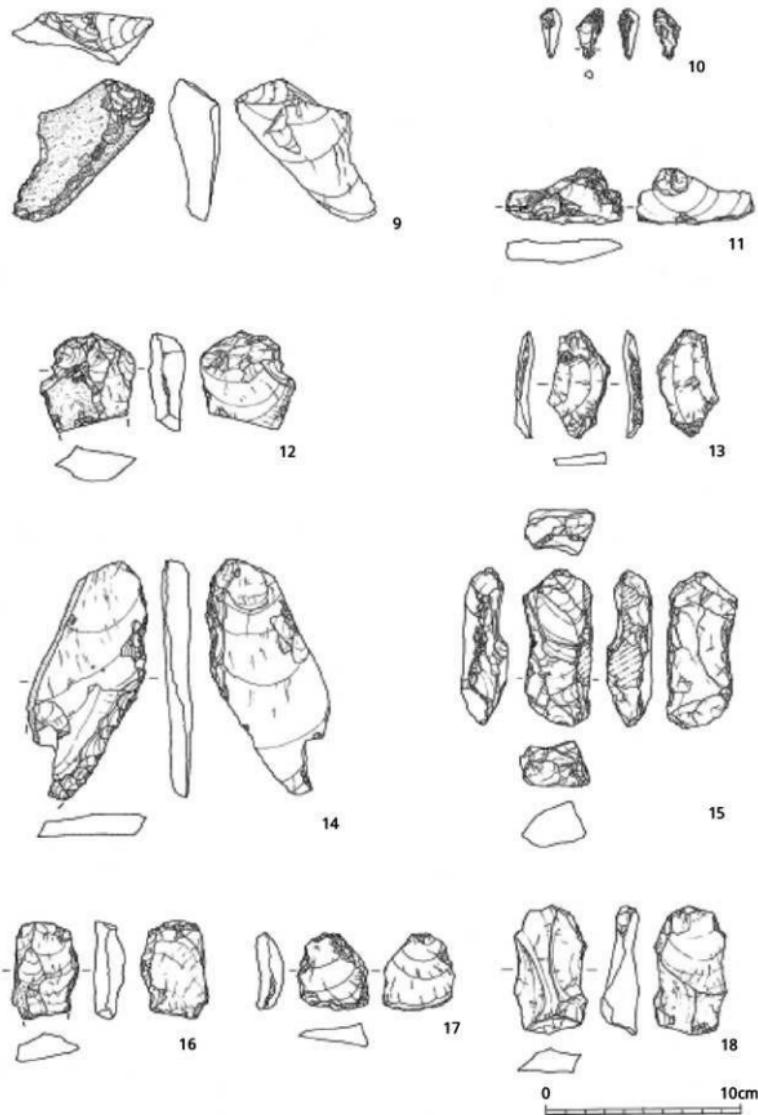
なお、C-7 区から出土した遺物は小フレイクやチップのため搭載しなかった。

11~18 は表面採集、I・II 層の出土遺物である。形態や調整度で旧石器時代の層から遺物がなんらかの作用で上がってきたと考えられる。

11 は横剥ぎのフレイクである。断面が三角形を示しているが背面調整はみられない。石材は黒曜石である。12 は剥離面に自然面が残る縦長剥片で、半分欠損したスクレイパーである。刃部は両縁と思われる。石材は玉髓である。13 は横剥ぎのフレイクを背面調整した石器である。用途はスクレイパー的であるが形としてはナイフ形石器である。石材は黒曜石である。14 は縦長剥片を利用したスクレイパーである。刃部は片方の縁をプランティングして作っている。石材は頁岩である。15 は厚い剥片の両縁を加工したものである。用途はスクレイパー的なものが考えられる。石材は玉髓である。16 は厚手自然面が残る剥片を加工したもので、スクレイパー的用途が考えられる。石材は玉髓である。17 は薄手の第一次剥片を利用したスクレイパーと思われる。石材は玉髓である。18 は使用痕のある剥片である。石材は玉髓である。



第11図 旧石器時代の出土遺物(1)



第12図 旧石器時代の出土遺物(2)

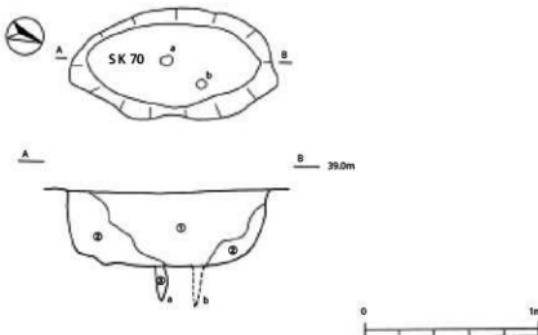
2 繩文時代

(1) 遺構

遺構はE-4区のV層上面に梢円形の土坑が検出した。規模は長径1m15cm短径65cm深さ48cmで、半裁した結果、径5cm深さ20cmの円錐形をした逆茂木用と考えられる細穴が2穴確認された。よって、この遺構は落とし穴の遺構と考えられる。

遺構内の埋土②は埋まる最初の埋土にはにぶい褐色シルトが流れ込んだ状態で、その後、埋土①の明褐色シルト層が埋まっている。明褐色シルト層はアカホヤ火山灰に比定されるもので、軽石も含まれている。逆茂木穴③は褐色シルト層でしまりがよい。

現在の深さは浅いが、アカホヤ層堆積後の生活面と考えると、まだ深さがあると考えられる。床面は平坦に作られ凹凸が少なく、壁の立ち上がりも床面に対して直に立ち上がり、全体に丁寧につくられた土坑である。遺物の出土はなかった。



第13図 繩文時代の土坑（落とし穴）

(2) 出土遺物

土器 (第14図 19~39)

19~28は早期の土器である。19は円筒形の土器で器面に貝殻条痕を横位に施し、口縁部には貝殻刺突がみられる。内面はヘラ搔き調整である。20は外反する口縁部で断面が鋭角を呈する。外面の文様は短い貝殻条痕を鋸齒状に施している。21・22は円筒土器の底部近くの部分である。外面はヘラ搔き上げを縦位に施している。23は平底の底部である。外面の文様は短い貝殻条痕を組み合わせている。24~27は外開きする厚手で胴部の器面に山形押型文を横位・斜位に施している。

29~35は中期の土器である。29は口唇部の平坦面に刻みを施した薄手の直行する口縁部である。30~33は直行する器形で太い凹線文の文様を施している薄手の土器である。内面はヘラ搔き撫でで横位・斜位に施している。文様は30・31にみられるように直線のみの部分や32・33にみられるように直線を基本に組み合わせた三角形がある。34は凹線文を渦巻き状に施し、口縁部は蒲鉾状の突起がみられ、口唇部に竹管文の刺突がみられる。35は薄手の土器で突縁の上下に刺突を横位に施して

いる。胎土は29~33・35は滑石が少々混ざり、焼成は硬質である。34の胎土は滑石がなく焼成も柔い。

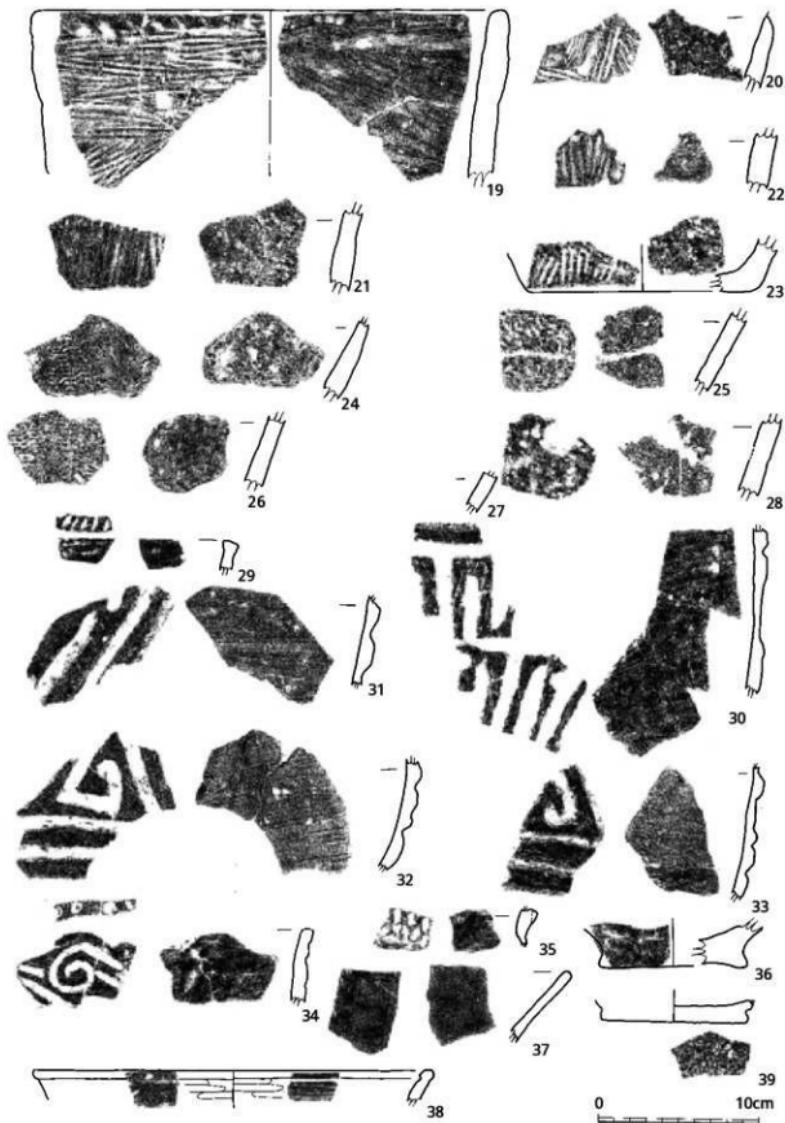
36~39は晩期の土器である。36は深鉢の底部である。器形は平底で張り出しがみられるものである。37は浅鉢で、直線的に外開する口縁部の黒色研磨土器である。38は浅鉢で、口縁部の内外面に段差がみられる玉縁を呈するものである。器面は黒色研磨が施されている。39は浅鉢の底部である。内面は少し剥落しているが黒色研磨土器である。

石器（第15~19図40~76）

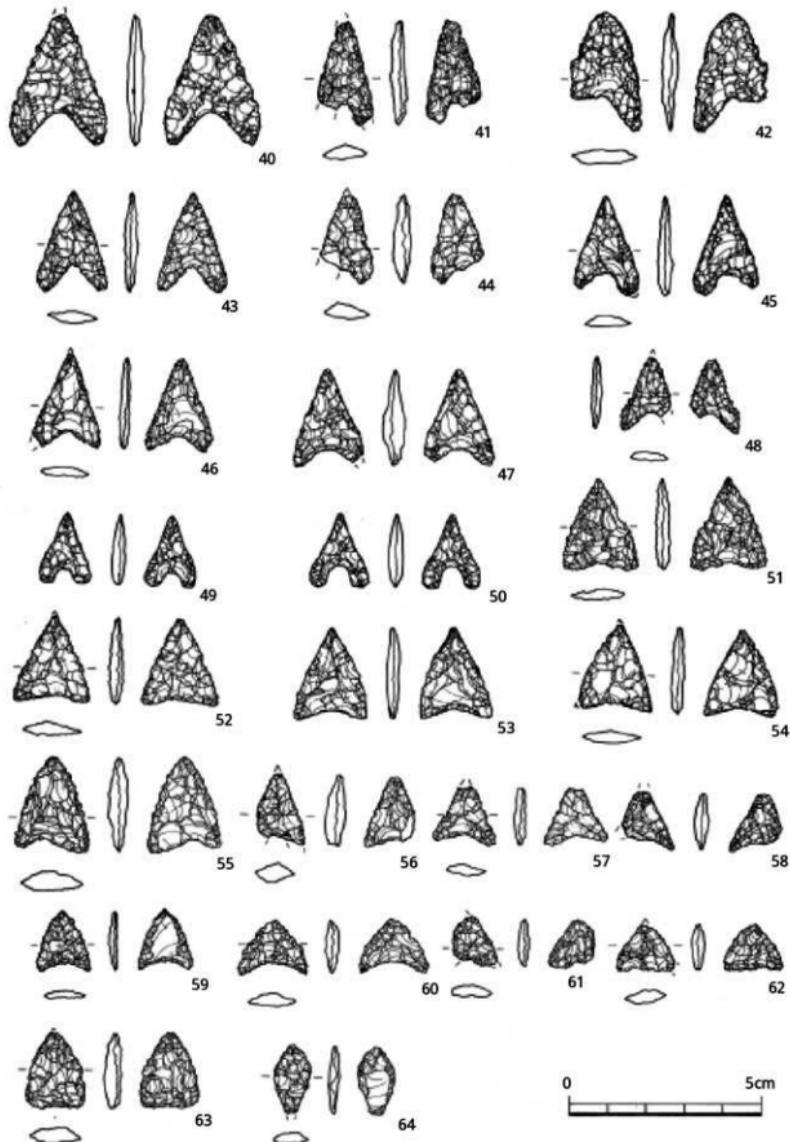
40~64は石鎌である。40は溝2から出土し、大型の2等辺三角形で抉りが深いタイプである。石材は黒曜石である。41は畠内から出土し、抉りの深い長目の二等辺三角形タイプである。石材は黒曜石である。42はV層から出土し、深い抉りを持つもので幅広タイプである。石材は黒曜石である。43は溝3から出土し、抉りの深い長めの二等辺三角形タイプである。石材は黒曜石である。44は柱穴から出土し、前タイプと同じである。石材は黒曜石である。45は4TⅢ層から出土し、抉りの深い前タイプと同じである。石材は黒曜石である。46はD-10区Ⅲ層から出土し、前タイプと同じである。石材は頁岩である。47は方形窪1から出土し、前タイプと同じである。石材は黒曜石である。48はD-5区Ⅲ層から出土し、抉りの深い二段脚タイプである。石材は黒曜石である。50はG-17区Ⅲ層から出土し、抉りの深い二段脚タイプである。石材は玉髓である。51はD-8区Ⅱ層から出土し、抉りの浅い正三角形タイプである。石材は黒曜石である。52はF-4区Ⅲa層から出土したもので、抉りの浅い正三角形タイプである。石材は頁岩である。53はF-18区Ⅱ層から出土し、前タイプと同じである。石材は頁岩である。54は溝3-I層から出土し、前タイプと同じである。石材は玉髓である。55はE-6区I層から出土し、丸みを持つ抉りの浅いタイプである。石材は頁岩である。56はC-11区V層から出土し、前タイプと同じである。石材は玉髓である。57はF-7区Ia層から出土し、前タイプと同じである。石材は頁岩である。58はG-16区II層から出土し、前タイプと同じである。石材は黒曜石である。59はC-9区II層から出土し、前タイプと同じである。石材は黒曜石である。60は5T-IIb層から出土し、抉りの浅い幅広三角形タイプである。石材は頁岩である。61はE-7区Ib層から出土し、抉りの浅い幅広三角形タイプである。石材は黒曜石である。62はE-4区V層から出土し、前タイプと同じである。石材は黒曜石である。63はD-3区Ib層から出土し、抉りの浅い丸みを持つタイプである。石材は黒曜石である。64はE-8区Ib層から出土し、木の葉状を呈する。石材は黒曜石である。

65~67はスクレイバーの類である。65はC-7区Ib層から出土した横形の両面剥離調整をした石匙と思われる。石材は頁岩である。66はE-8区V層から出土したもので親指状に調整したものである。石材は黒曜石である。67はF-9区VII層から出土したもので、縦長剥片に片歯調整をしたものである。石材は頁岩である。これらは旧石器時代の可能性もある。

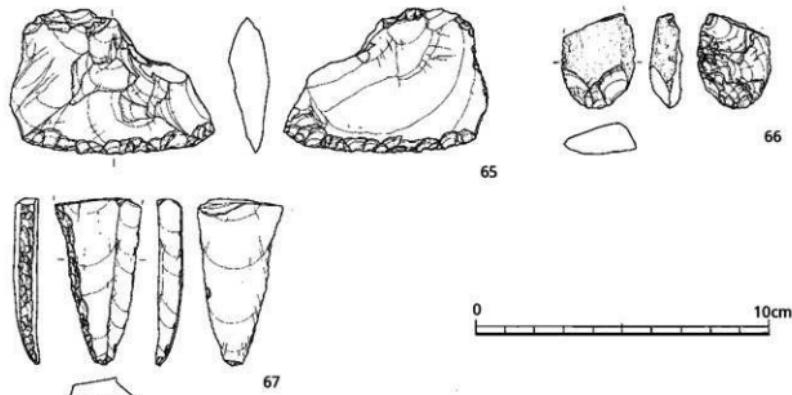
68~71は石斧類である。68はD-6区II層に出土したもので、全面を両面から磨いた磨製石斧である。石材は金雲母が混入したホルンフェルス（花崗岩質）である。69は山部の表採で、磨製石斧の刃部である。石材は頁岩である。70は山部6Tから出土したもので、自然面を利用した打製石斧である。石材は頁岩である。71はB-6区II層に出土したもので、自然面を利用した打製石斧である。石材は安山岩である。



第14図 縄文時代の出土遺物(1) 土器



第15図 縄文時代の出土遺物(2) 石器1



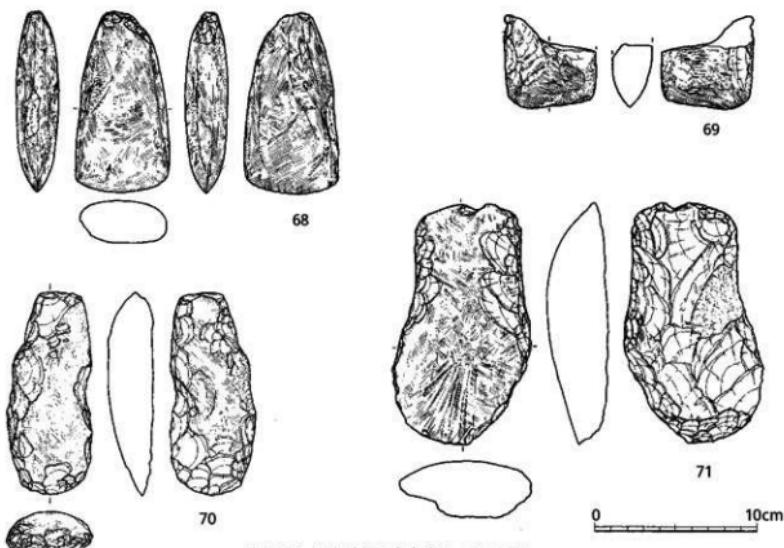
第16図 縄文時代の出土遺物(3) 石器2

72~75は磨石・凹石・敲石である。

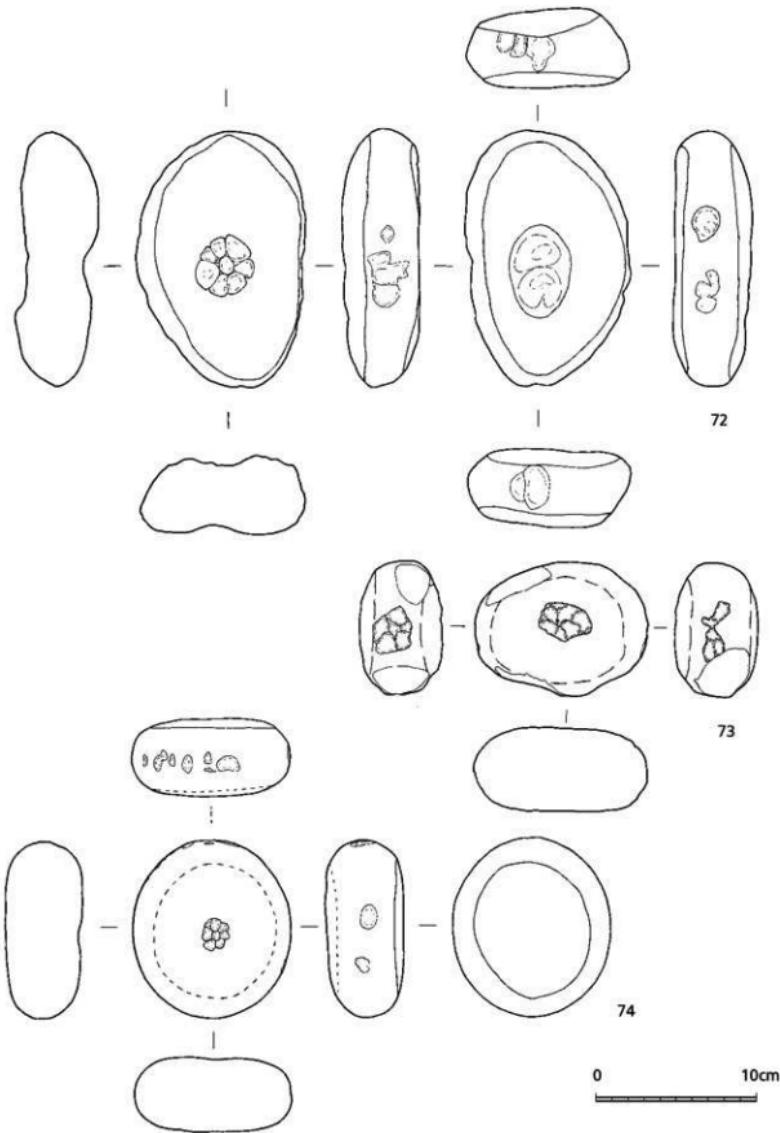
72~74は凹石と敲石使用である。石材は72・73が安山岩 74が砂岩である。石材の粒子は72が粗く他は細かい。

76~78は片面を使用された石皿である。石材は76が安山岩、77・78が頁岩である。

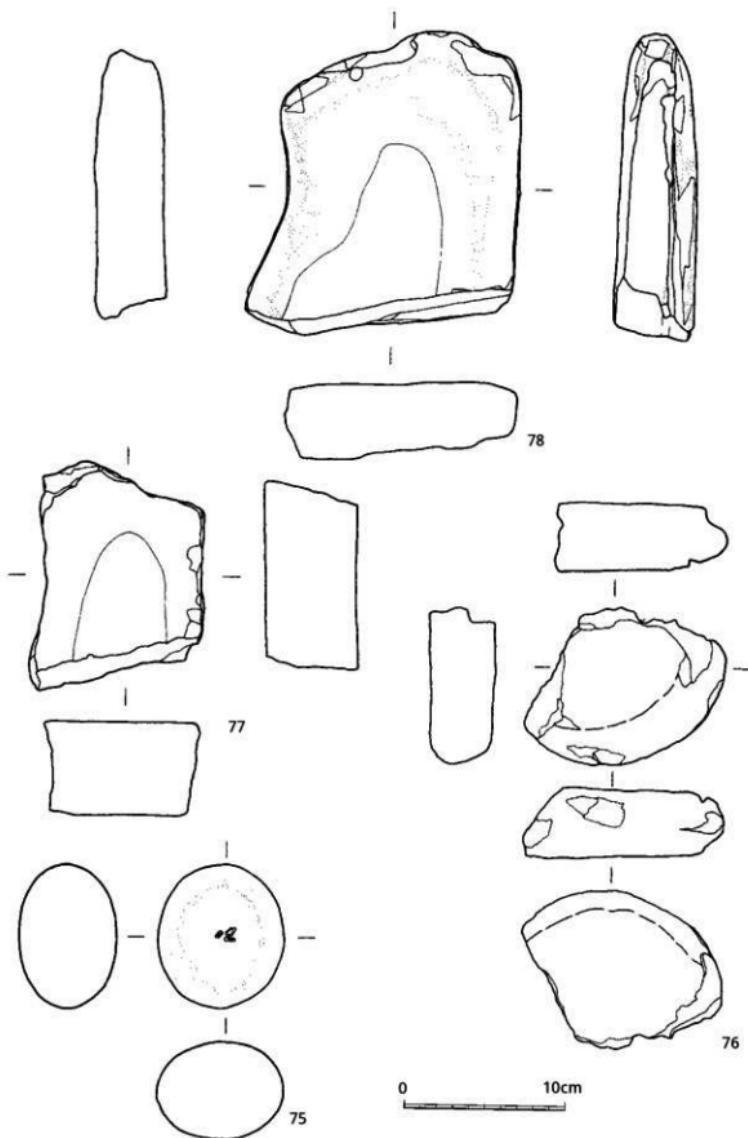
76は火を受けたようにボロボロと割れる 他は半欠である



第17図 縄文時代の出土遺物(4) 石器3



第18図 縄文時代の出土遺物(5) 石器4



第19図 縄文時代の出土遺物(6) 石器5

3 古墳時代

(1) 遺構 (第20図 古墳時代・古代土坑1~25)

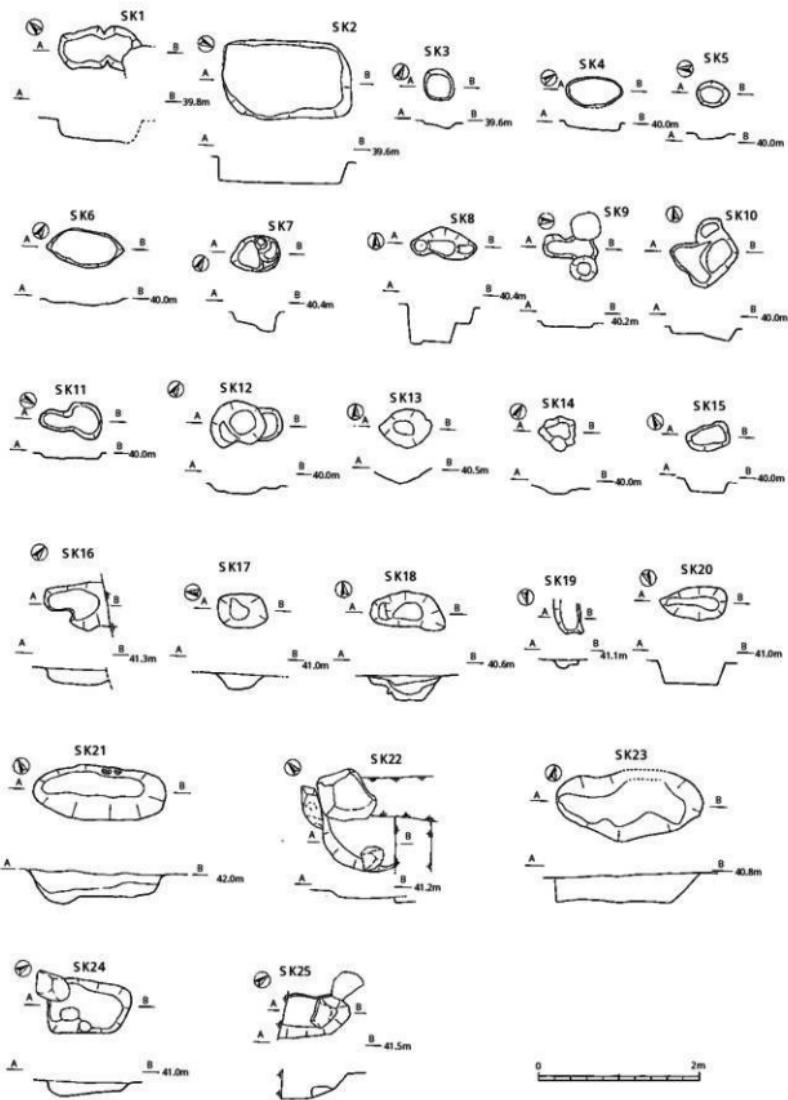
この時代の遺構と次の古代の遺構は検出状況の判断では中世の遺物が混入しているものの埋土と違いⅢ層上面の埋土がみられるものである。形状は円形、楕円形、方形のほか変則形のものが25基検出されている。これらの土坑は規則性やまとまりが見あたらない。

第2表 古墳時代・古代の土坑

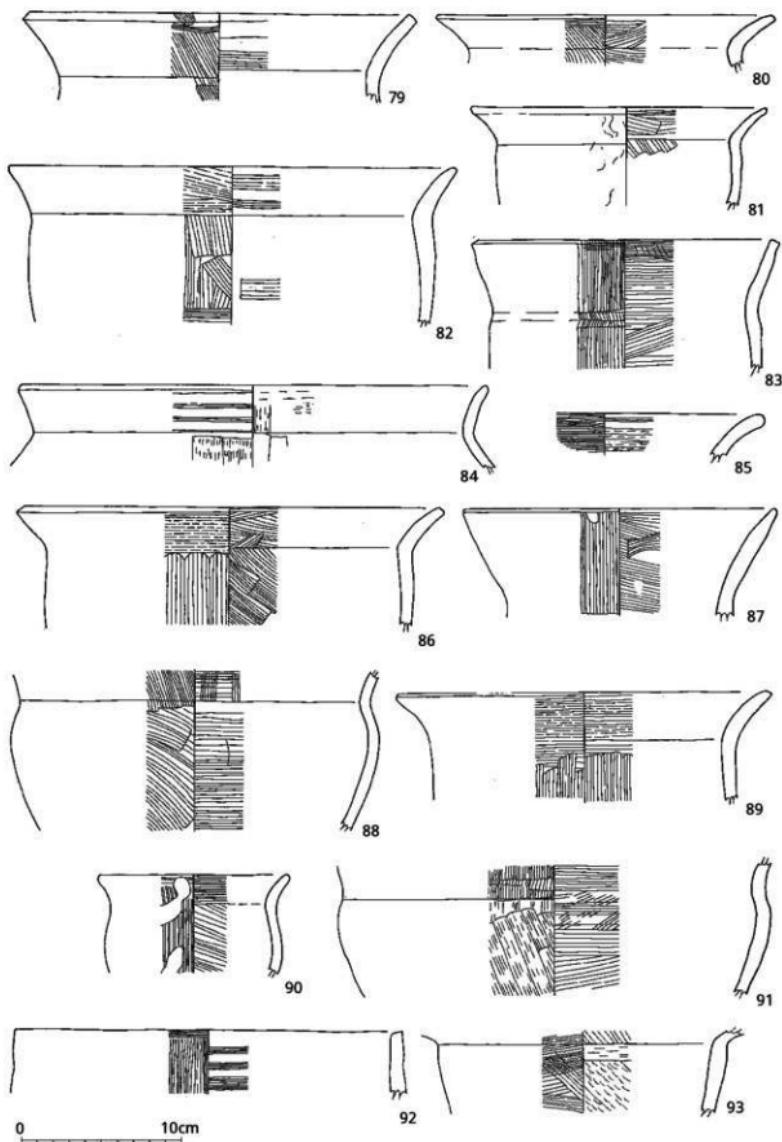
No.	検出区	検出番号	長 軸 (cm)	短 軸 (cm)	深 さ (cm)	形態	規模・特徴
1	D-2	P453/455	108	50	20	長方形	小が2連結
2	D-2	Sk51	158	98	30	長方形	大
3	E-4	P132	40	35	8	長方形	小
4	E-7	P298	70	60	10	楕円形	小
5	E-8	P477	40	30	10	円形	小
6	E-7	P306	95	45	8	楕円形	小
7	C-6	P852	60	45	35	円形	小
8	C-5	P660~662	80	35	50	変則楕円形	小が3連結
9	C-6	P353	65	30	6	長方形	小が2連結
10	D-7	P1576	88	80	15	変則方形	中が3連結
11	D-6	P1561/1562	75	40	7	円形	小が2連結
12	D-6	P1152/1153	88	60	10	円形	小が3連結
13	E-9	P510	65	50	15	円形	小で尖り底
14	E-8	P449	43	43	7	変則円形	小
15	C-9	P968	55	30	12	長方形	小
16	C-14	Sk16	78α	55	20	変則長方形	小
17	D-11	Sk32	60	40	16	変則長方形	小
18	C-11	Sk21	90	40	30	変則長方形	小
19	D-13	P10	40α	30	8	長方形	小
20	D-12	Sk30	75	30	25	変則楕円形	小
21	D-11	Sk22	168	67	40	楕円形	大、底に窪み有
22	C-14	Sk15	88α	70α	8	円形	溝で切られる
23	D-12	Sk36	180	85	40	楕円形	大
24	D-19	Sk17	105	67	18	長方形	中、石有り
25	C-13	Sk2	70α	50	30	楕円形	小、石有り

(2) 出土遺物 (第21~25図 79~144)

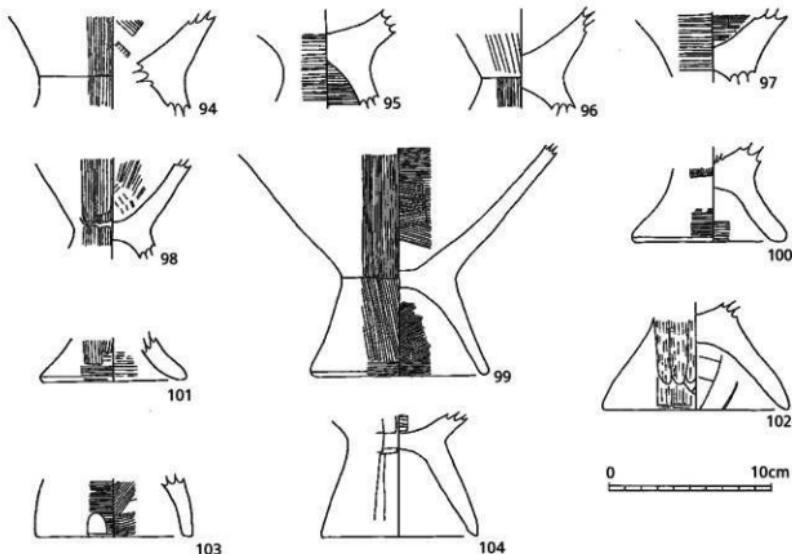
ア 変形土器 (第21・22図 79~104)



第20図 古墳時代・古代の土坑

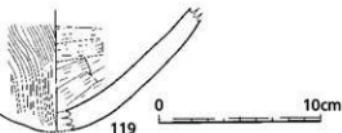
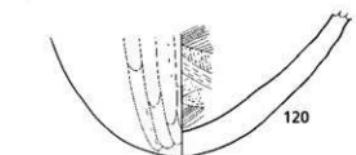
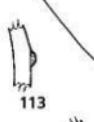
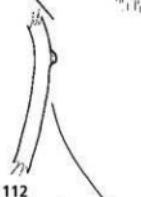
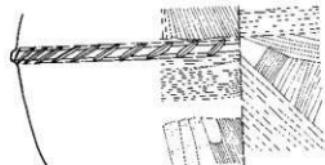
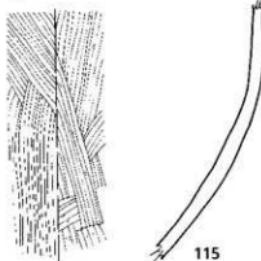
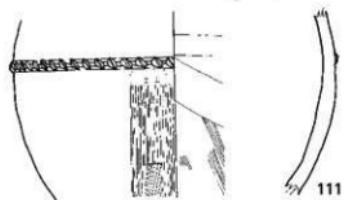
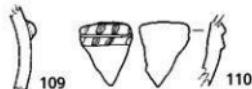
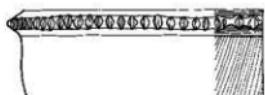


第21図 古墳時代の出土遺物(1) 桿1

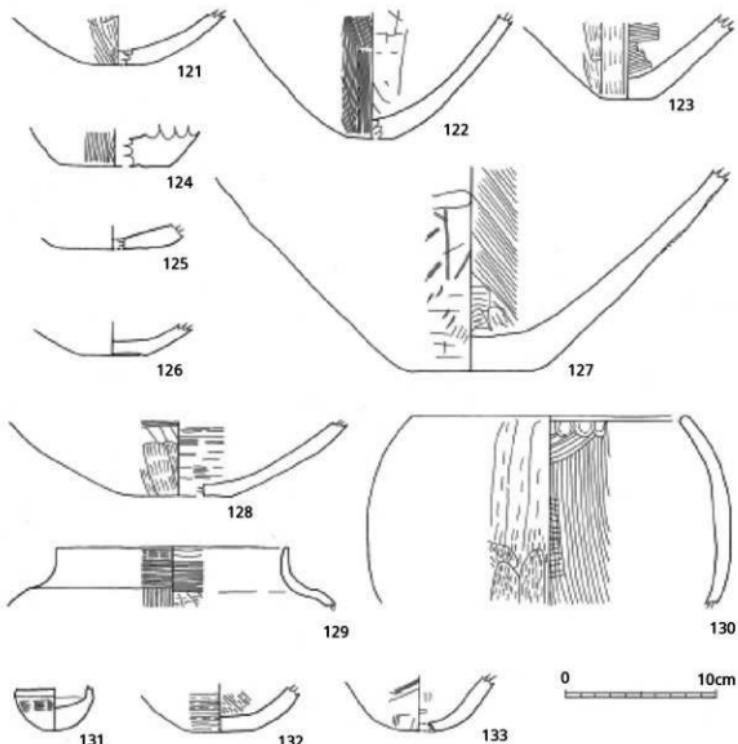


第22図 古墳時代の出土遺物(2) 横2

79は頸部で「く」の字状に外反する口縁部である。器面は刷毛目調整を斜位に施している。80は頸部で「く」の字状に大きく外反する口縁部である。器面は刷毛目調整を斜位に施している。81は頸部で「く」の字状に外反する口縁部である。内器面は刷毛目調整を短く斜位に施している。外面は手撫で気味である。82は頸部で「く」の字状に外反する口縁部をもち胴部は若干張る器形である。器面は刷毛目調整を斜位に施している。83は頸部で「く」の字状に外反する口縁部である。器面は刷毛目調整を縦位と横位に施している。84は頸部で「く」の字状に大きく外反する口縁部で、肩部は大きく張る器形である。器面は刷毛目調整を横位と縦位に施している。85は頸部で「く」の字状に外反する口縁部である。器面は刷毛目調整を横位に施している。86は頸部で「く」の字状に外反する口縁部で、胴部は若干張る器形である。器面は刷毛目調整を縦位と斜位に施している。87は頸部で「く」の字状に外反する長めの口縁部である。器面は刷毛目調整を縦位と斜位に施している。なお、頸部の折れ線部は明瞭でない。88は頸部で「く」の字状に外反する口縁部からやや膨らみを持つ胴部である。器面は刷毛目調整を斜位と横位に施している。なお、口唇部は欠損している。89は頸部で「く」の字状に外反する口縁部である。器面は刷毛目調整を縦位に施している。なお、頸部の折れ線は明瞭でない。90は頸部で「く」の字状に外反する口縁部である。器面は刷毛目調整を縦位と斜位に施している。なお、頸部の折れ線は明瞭でない。91は頸部で「く」の字状に外反する口縁部からやや張る胴部である。器面は刷毛目調整を斜位と横位に施している。92は直行する口縁部で、縦位と横位に刷毛目調整を施している。93は頸部で折れ、直行する胴部である。器面は刷毛目と搔き撫で調整である。



第23図 古墳時代の出土遺物(3) 壺1



第24図 古墳時代の出土遺物(4) 壺2

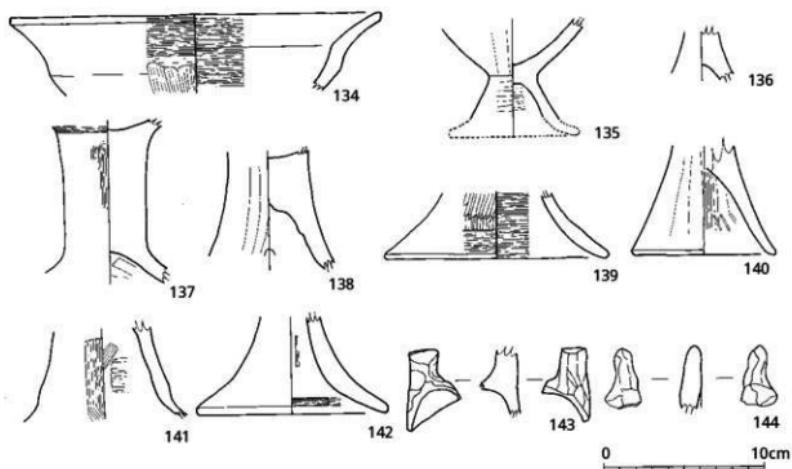
94~104は脚部をもつ底部である。100・101は外反し、99・102・104は直行し、103は内反する。器面は刷毛目調整である。

イ 壺形土器 (第23・24図 105~133)

105は外反する口縁部で、器面は刷毛目調整である。106は直行する頸部で、器面は刷毛目調整である。108は鋸歯状の文様をもつ胴部である。傾きと文様からみれば長頸壺の可能性が高い。107・109~114は肩部ないし胴部にある突帯部である。突帯の刻みは箇で縦位・斜位・格子状に施している。115・116は胴部から底部で、刷毛目調整がみられる。117~128は底部である。117~120は尖り気味の丸底で、121・122は平底気味の丸底。123~128は平底である。なお、器面調整は刷毛目である。129は口縁部が直行する肩部の張る薄手のものである。器面調整は刷毛目である。130は無頸壺とおもわれる。器面調整は刷毛目と箇削りと指つかみ調整である。131~133は壺の類である。

ウ 高坏・手づくね製品 (第25図 134~144)

134は段を持ちながら外反する坏部である。器面調整は刷毛目である。135は脚の低いもので



第25図 古墳時代の出土遺物(5) 高環・手づくね

坏の開きが狭く深い器形をしている。136は小型のものである。137は脚に筒部をもつもので、脚は大きく外開きする。138は短い筒部をもつものである。139は大きく開いた脚部である。器面調整は外面が研磨で内面が刷毛目である。140は狭く開いた脚部である。141は広幅の脚部である。142は大きく開いた脚部で、内面に刷毛目がみられる。143・144は匙の手づくねの一部である。

4 古代

(1) 遺構

遺構は第20図の古墳時代と区別ができなかった。

(2) 遺物 (第26~28図 145~196)

ア 豊形土器 (第26図 145~161)

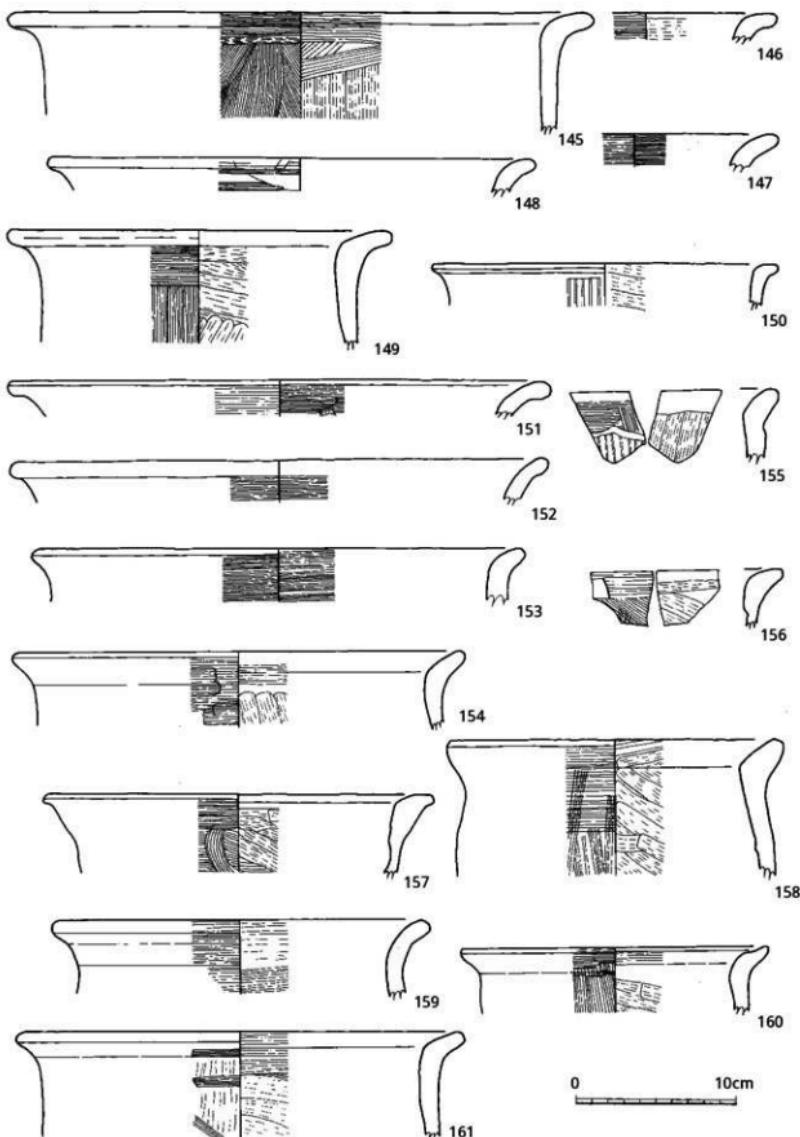
器形は口縁部が「L」字状になるものと、「く」字状になるものと、「C」字状になるものとに分けられる。器面調整は外面が刷毛目で、内面は窓削りである。

「L」字状のものは145・146・149・150・153・156・157・160である。「く」字状のものは154・155・158・161である。「C」字状のものは、147・148・151・152・159である。

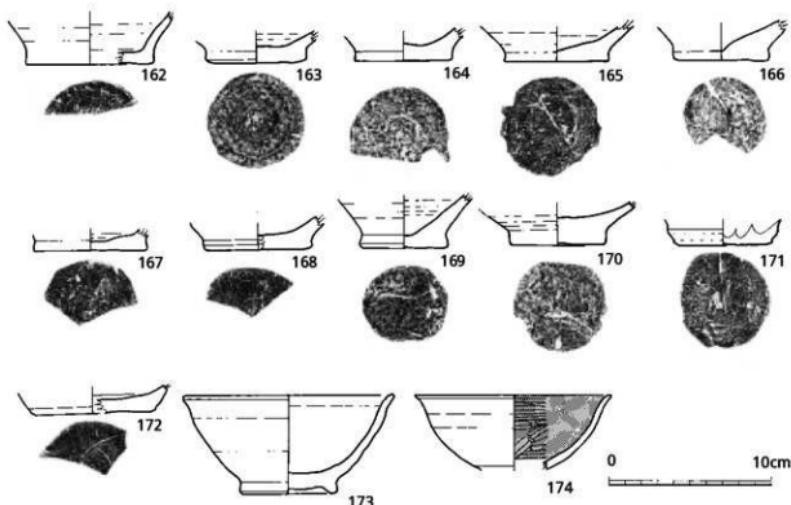
器面の外面調整は口縁部が横位で頸部は縦位が多い。

イ 坏 (第27図 162~172)

162は薄手の底部で外反する器形である。底部の切り離しは窓である。163は厚手の底部で外反する器形である。底部の切り離しは窓である。164は厚手の底部で外反する器形である。見込みの中央部は盛り上がりがみられる。底部の切り離しは窓である。165・166は厚手の底部で外反する器形である。見込みの中央部は薄くなっている。底部の切り離しは窓である。167・168はやや厚手の底部で、底部の切り離しは窓である。169・170は厚手の底部で、底部の切り離しは窓である。



第26図 古代の出土遺物(1) 瓢



第27図 古代の出土遺物(2) 坯・塊

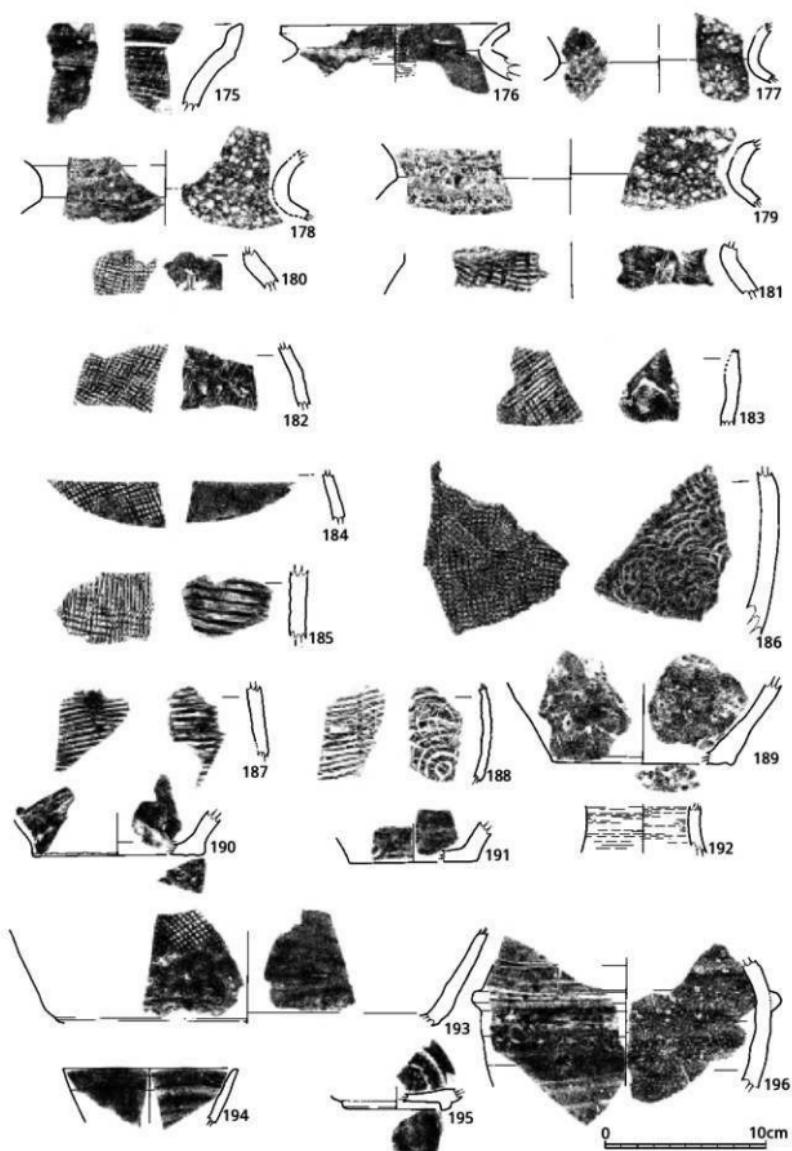
171・172は底部の外縁が斜めに削られている。底部の切り離しは箇である。

ウ 檻 (第27図 173・174)

173は口縁部が外反し、体部は丸みをもしながら湾曲している。底部の高台は低く若干外開き気味で幅が広い。174は口縁部が外反し、体部は湾曲している。これは内黒土師器で黑色土器Aである。

エ 須恵器 (第28図 175~196)

175は外反する甕の口縁部である。176・177・178・179は「く」の字に外反する甕の短い口縁部である。180・181は甕の頸部である。182~188は甕の胴部で敲き目がみられる。189~191は壺の底部である。192は壺の頸部でロクロ調整痕がみられる。193は盤の可能性がある。194は直行する坏である。195は塊の底部で低い幅広い高台が若干外開き気味にみられる。196は肩部から胴部にかけての部位である。肩部に突帯がみられる。器形は藏骨器に類似している。192の頸部や190の底部は同一個体の可能性もある。



第28図 古代の出土遺物(3)須恵器

5 中世

(1) 遺構

中世遺構は平坦部であるB～F－2～16区のⅢ層上面に検出した。

調査区は標高57mの山地より西側に拡がる平坦地形で標高約40mである。調査の結果、山手側が一段低くなっている。北側が高く南側に向かってなだらかに低くなっている。また、B－2～6区より東側が約50cm一段高く直線状に造成されている。

遺構は全面に検出し、ピット・土坑・方形窓穴遺構・溝・畠跡・焼土等が1400以上にも及ぶ数であった。第29図はその全体図である。北側の崖より約10mから掘立柱建物跡がみられる。この北側の崖はシラス台地の端で崖下は湿地や水田となっているため崩壊がくり返していた可能性が高く、当時はまだ崖との距離があったと考えられる。

遺構は第29図で示したように、掘立柱建物跡32棟、方形窓穴遺構5基、溝7本、土壙墓と思われる土坑4基、炉跡と思われる土坑5基、廐棄用と思われる土坑145基、焼土20基、古道1条と多数のピットが確認された。

遺構の配置としては、C・D－5・6区に方形窓穴遺構がまとまり、それらを取り囲むようにC～F－4区、F－4～9区、B～D－7・8区と半円状にみられる。溝は溝4と溝5そして大溝である溝3がほぼ東西に掘られている。また、大溝である溝2が溝3の上から掘り返された形で東西と南北にL字状に掘られ、大溝である溝1が山裾に沿って南北に掘られている。そして、溝6がB－3・4区の段下にみられる。畠跡はC・D－9・10区に東西と南北に畠が検出されている。焼土はまばらに20か所確認されている。土壙墓と思われる群も焼土同様まばらに検出され、まとまりがない。貯藏穴と思われる土坑はD～F－3～6区とD・F－7・8区、B～D－2～7区、B～F－8・9区、B～D－11～14区の地区別にしか分けられない。古道は、B－3～6区の一段高い所にみられる。

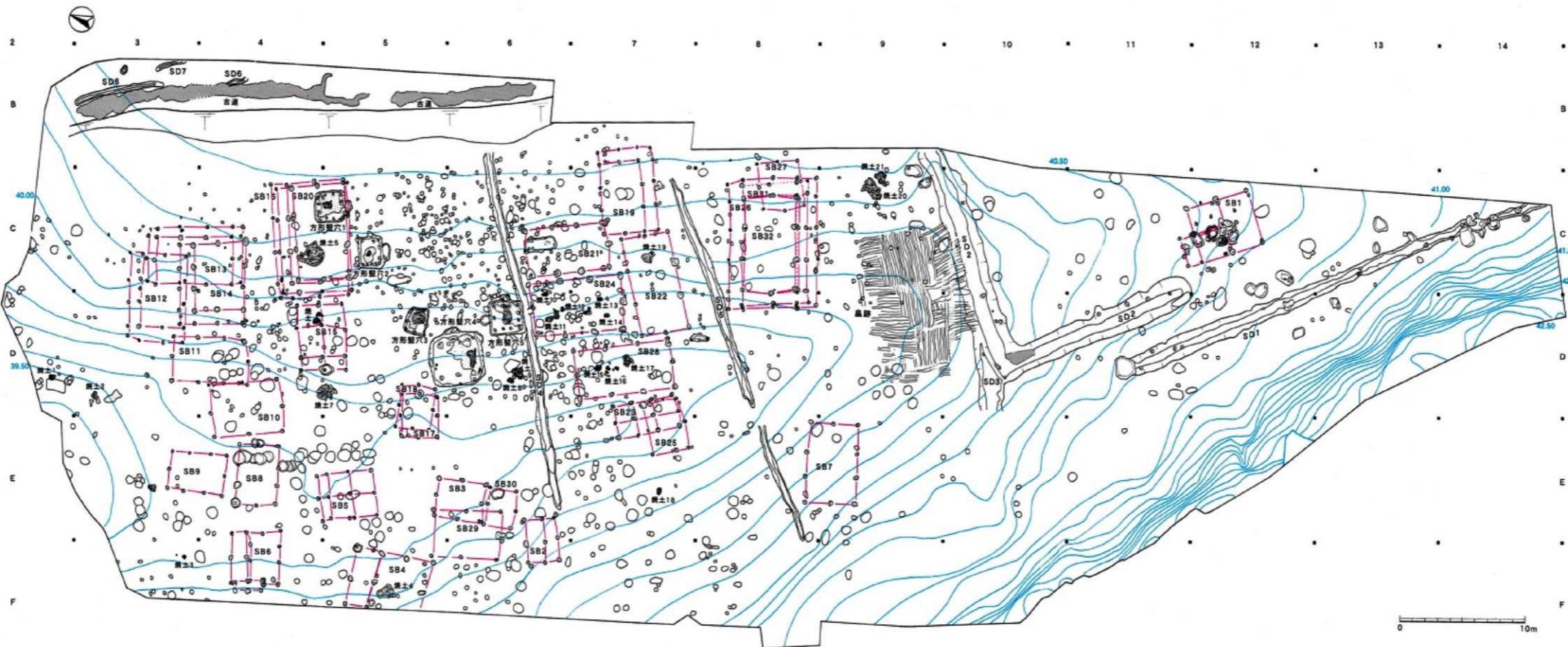
これらの遺構は切り合いで検出されている所がある。この切り合いで3時期に確認できる地区的遺構はC・D－3・4区の掘立柱建物跡12・13・14である。掘立柱建物跡14は梁2間と桁3間の上屋を東西方向に建て、北側と西側に半間の下屋を造っている。掘立柱建物跡13は梁2間と桁3間を南北方向に建て、東側と南・北側に下屋を造っている。掘立柱建物跡12は梁2間と桁3間を東西に建て北側と西側に下屋を造っている。掘立柱建物跡14と異なる点は下屋の角部の柱が半尺内側に建てていることである。

次にC・D－8区の掘立柱建物跡26と掘立柱建物跡31と掘立柱建物跡32の切り合いである。こちも、梁2間桁3間を東西に建てた柱穴が3重に検出されている3間の柱列があり3時期に確認できる。これらの掘立柱建物跡の下屋は掘立柱建物跡31が西側と南側に、掘立柱建物跡32が東側と南側に、掘立柱建物跡26が東西南北の四面に造られ、東側の角部の柱が半尺内側に建てている。

また、E・F－5・6区にある掘立柱建物跡3、掘立柱建物跡29、掘立柱建物跡30が3重に検出されている。

他、2時期重なっている掘立柱建物跡はC－4区にある掘立柱建物跡16と掘立柱建物跡20、D・E－7区の掘立柱建物跡23と掘立柱建物跡25である。

掘立柱建物跡の特徴は、上屋下屋があるものが掘立柱建物跡12・13・14・16・20・19・26・31・



第29図 中世遺構全体配置

32で、総柱が掘立柱建物跡 15・5・23で、下屋がない梁2間桁3間のものが掘立柱建物跡 11・9・8・24・28・21・22・7で、梁桁2間のものが掘立柱建物跡 10・18・17・3・29・25・27で、2間の小規模で上屋と下屋がある掘立柱建物跡 6・4・2である。

方形堅穴造構は5基検出している。これらは自体の重なりは無いが、方形堅穴造構1が掘立柱建物跡 16・20と、方形堅穴造構5が溝4と重なり合っている。

溝は大溝3本が9~14区に小溝4本が6区、8区に2本、B-3~4区に2本、計7本が検出されている。溝自体の重なりは、溝2と溝3である。溝2を再び掘り上げている。他の造構との重なり合いは、溝2と畠跡、溝4と方形堅穴造構5、溝5と掘立柱建物跡 26がある。

土坑は大きく分けて、焼土を伴う炉跡と、磁器や鉄器を伴う土壤墓と、食物残渣用に用いた廃棄用土坑の3類に分けられる。前2つの類はまばらにみられ、後の類は重なりや列に作られた所があるが、これらの作られた詳細は不明である。よって、ここでは説明を省き、傾向は土坑の項目で説明をするが、他の造構との重なりとしては、掘立柱建物跡1と炉跡とみられる土坑II類、掘立柱建物跡11と土坑I類、掘立柱建物跡8と土坑I類がみられる。

焼土は20基確認されている。他の造構との重なり関係は、焼土5が掘立柱建物跡 16・20、焼土6が掘立柱建物跡 15、焼土4が掘立柱建物跡 4、焼土10~14が掘立柱建物跡 24、焼土15~17が掘立柱建物跡 28となっている。

畠跡はC-D-9・10区に南北の畠跡の後に東西の畠跡が検出されている。この造構は溝2よりも上に検出されている。

古道はB-3~6区の一段高い所に犬走り的な部分として検出されている。

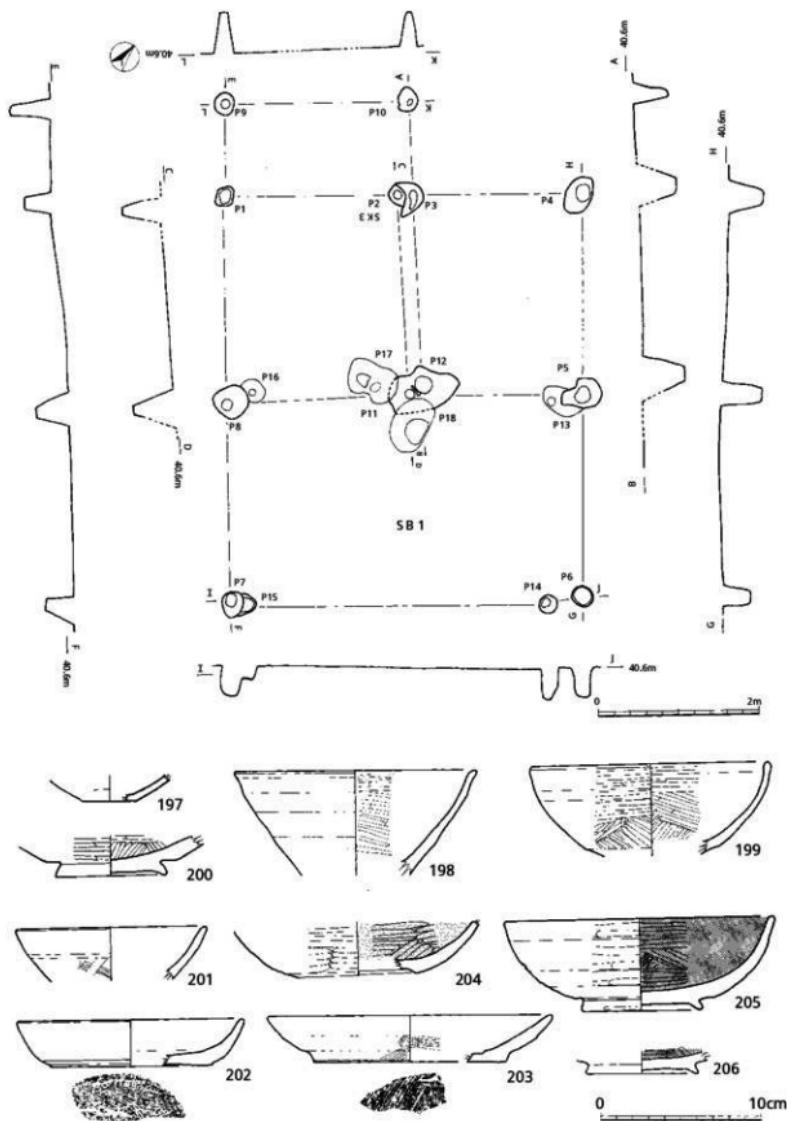
ア 挖立柱建物跡

① 挖立柱建物跡1 (SB 1)

掘立柱建物跡1は本調査区の南部C-12区に検出した梁・桁行2間の基本構造の建物跡である。南北の桁行には間柱跡があるが、梁間の南梁間は間柱跡が無く間口が広い。また、北側の梁間には半間の造りだしと考えられる柱穴がみられる。中央に炉跡と考えられる焼石列と土坑があり火を使う作業小屋が考えられる。なお、南側半分の柱穴P14・P15は建てかえたと考えられる2柱穴である。

第3表 挖立柱建物跡1の計測

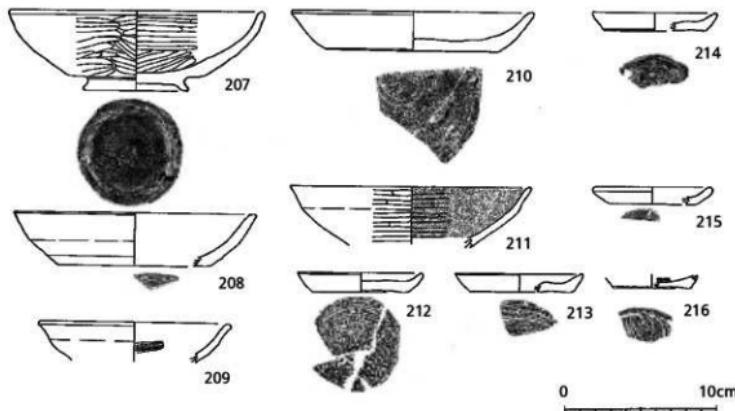
建物	梁間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 1	上屋2間	上屋1間	4.45 m	2.30 m	5.03 m	1.15 m	C-11-12	P 1. 23 × 22 × 32 2. 29 × 22 × 48 3. 41 × 22 × 50 4. 43 × 34 × 44 5. 50 × 37 × 50 6. 27 × 26 × 35 7. 32 × 24 × 35 8. 44 × 40 × 41 9. 29 × 24 × 50 10. 30 × 24 × 43 11. 84 × 55 × 53 12. 84 × 55 × 53
	下屋1間	下屋1間	m	m	m	m	方位 W43°	
上屋梁間柱間			下屋梁間柱間			上屋桁行柱間		
P 1~2	2.15 m	P 9~10	2.30 m	P 1~8	2.60 m	P 1~9	1.15 m	
3~4	2.10			7~8	2.45	2~10	1.15	
6~7	4.40			4~5	2.50			
5~12	1.95			5~6	2.50			
8~11	2.27							



第30図 掘立柱建物跡1と出土遺物(1)

出土遺物（第30・31図 197～216）

197は白磁の皿である。198は土師器塊の体部・口縁部である。器形は深めのもので直線状に立ち上がっている。器面調整は見込みが横位の研磨で、外面は水挽き痕がみられる。199は半球状をした土師器塊で、内外面研磨が施されている。口縁部は横位で見込み中央は縱と横の研磨を組み合わせている。200は外側に拡がった高台の低い土師器塊の底部である。見込み中央は縱と横の研磨を組み合わせている。201は土師器塊の体部・口縁部である。202は土師器の壺である。底部は糸切り離しであり、体部・口縁部は直に立ち上がっている。203は土師器の壺である。体部・口縁部は外反して立ち上がっている。204は内側が黒色で両面とも研磨を施し、いわゆる黒色土器Aである。205は内赤の土師器で半球状の器形で外に拡がる低い高台をもつ壺である。見込み中央の研磨は縱と横の組み合わせで、口縁部は横位の研磨である。206は黒色土器Aの壺底部である。204と同類である。207は土師器塊である。器形は半球状で、低く拡がる高台をもつ。両面研磨が強く、口縁部は横位、見込み中央部は縱と横の組む合わせで施している。208は壺である。平底から丸味をもって立ち上がる体部・口縁部をもつ。底部は糸切り離しである。209は体部・口縁部が外反する壺である。210は平底から丸味をもって立ち上がる体部・口縁部をもつ。211は黒色土器Aの壺である。器形は口縁部で直になるものである。両面とも横位の研磨がみられる。212は少し上げ底に底部から丸味をもって体部・口縁部へ立ち上がる皿である。213は平底に底部から直に体部・口縁部へ立ち上がる皿である。底面は糸切り離しである。214は平底に底部から直に体部・口縁部へ立ち上がる皿である。口唇部は厚みがあり全体的に丸味がある。



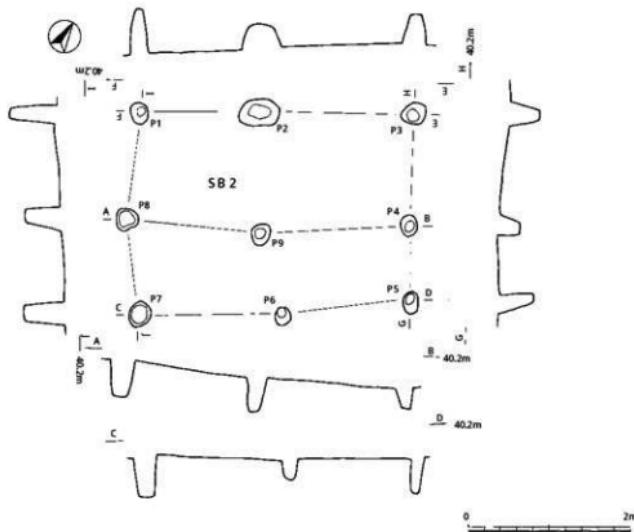
第31図 掘立柱建物跡1の出土遺物（2）

② 掘立柱建物跡2（SB2）

掘立柱建物跡2はE・F-6区に検出した。この建物跡は東西に長い梁2間、桁行2間で、間柱穴がみられ北側の部分が広い。また、南側の桁行よりも北側の桁行が長く、台形様変則的な建物跡であると考えられる。

第4表 挖立柱建物跡2の計測

建物	梁間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 2	上屋2間	上屋2間	2.50 m	m	3.35 m	m	E・F-6	P 1. 28 × 21 × 56
				m		m	方位 E 56°	2. 48 × 32 × 31 3. 30 × 35 × 37 4. 26 × 20 × 27 5. 20 × 18 × 43 6. 23 × 19 × 25 7. 32 × 27 × 50 8. 28 × 27 × 45 9. 26 × 22 × 42
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1～8	1.35 m	P	m	P 1～2 2～3 5～6 6～7 4～9 8～9	1.45 m	P	m	
3～4	1.36			1.90				
4～5	0.90			1.57				
7～8	1.20			1.75				
				1.85				
				1.65				

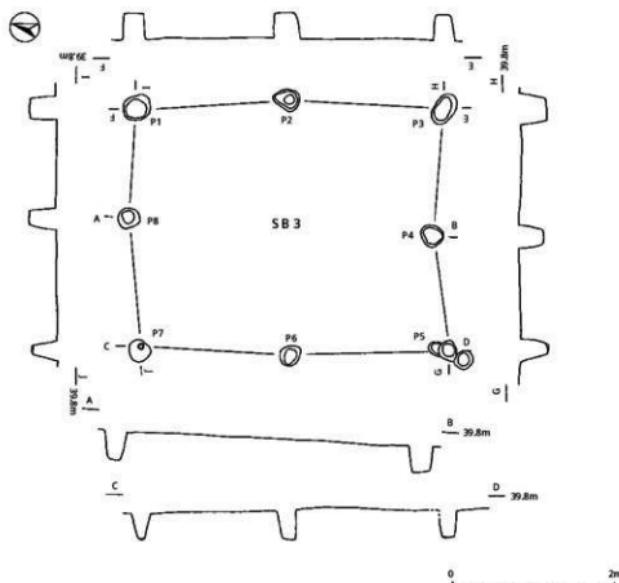


第32図 挖立柱建物跡2

③ 挖立柱建物跡3 (SB 3)

掘立柱建物跡3はE-5・6区に検出された。検出状況は掘立柱建物跡29と東西に重なっているが、掘立柱建物跡30とは少しずれた形で南北に接して柱穴が掘られている。周囲には土坑が検出していない。

本遺構は梁間2間、桁行2間であるが南北の桁行が長い建物跡である。この建物跡は建物跡としては小規模にあたる。



第33図 挖立柱建物跡3

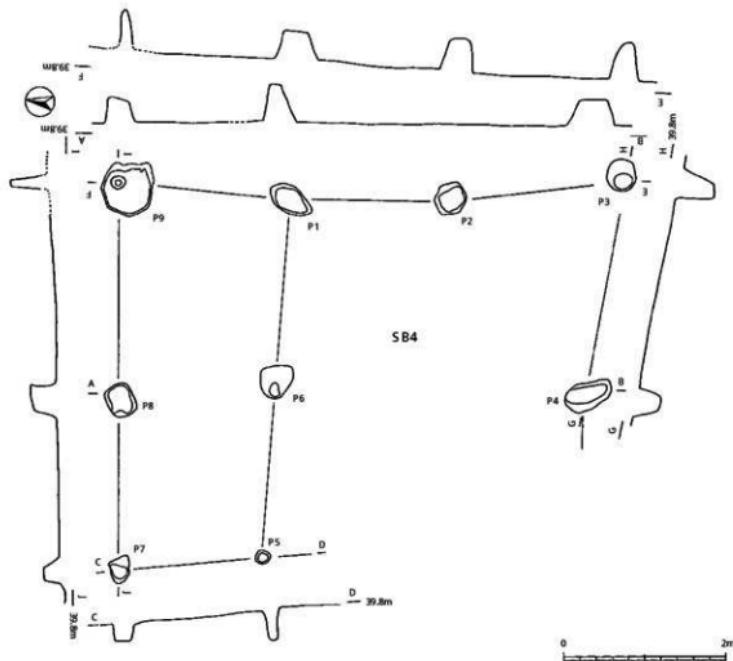
第5表 挖立柱建物跡3の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 3	上屋 2間	上屋 2間	2.92 m	m	3.82 m	m	E-5・6	P 1. 34 × 29 × 32 2. 30 × 27 × 32 3. 34 × 28 × 32 4. 28 × 27 × 30 5. 25 × 21 × 34 6. 28 × 24 × 36 7. 27 × 24 × 30 8. 25 × 25 × 34
			m	m	m	m	方位 W13°	
上屋梁間柱間			下屋梁間柱間			上屋桁行柱間		
P 1～8	1.33 m	P	m	P 1～2 2～3 5～6 6～7	1.87 m 1.87 1.95 1.85	P	m	
7～8	1.60							
3～4	1.57							
4～5	1.42							

④ 挖立柱建物跡4 (SB 4)

掘立柱建物跡4は本調査区の東部にあたるF-5に検出した。東西梁間は上屋2間で南北は桁行2間に北側に下屋半間を合わせた建物跡で、やや小型の建物跡に附属する。この建物跡の特徴は南東角のP 3が広くとられ、鋭角に角張っている。また、下屋の梁間は広めにとっている。

この掘立柱建物跡4と重なっている遺構は土坑。焼土4がある。2つとも建物跡以前のものと考えられる。



第34図 挖立柱建物跡4

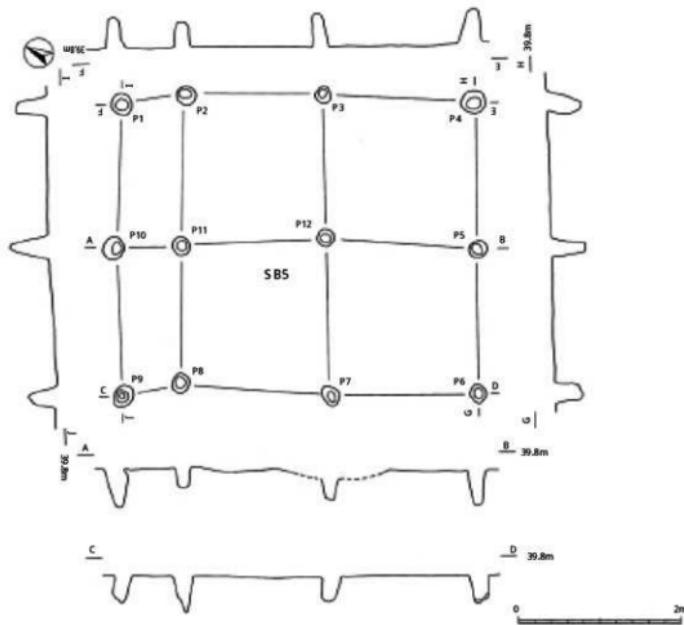
第6表 挖立柱建物跡4の計測

建物	梁間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ(cm)
SB 4	上屋2間	上屋2間	4.10 m	2.12 m	4.37 m	4.77 m	F-5	P 1. 58 × 35 × 37 2. 45 × 38 × 42 3. 28 × 20 × 47 4. 61 × 35 × 32 5. 19 × 16 × 39 6. 47 × 31 × 47 7. 37 × 22 × 20 8. 43 × 32 × 22 9. 74 × 61 × 46
	下屋半間	下屋2間	m	m	m	m	方位W12°	
	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行				
P1～2	2.00 m	P1～9	2.10 m	P1～6	2.35 m	P7～8	2.10 m	
2～3	2.14	5～7	1.77	5～6	2.06	8～9	2.67	
				3～4	2.62			

⑤ 挖立柱建物跡5 (SB 5)

本遺構はE-5区に検出した総柱建物跡である。建物跡は梁間2間桁行2間半のもので半間は北側に設けてある。

この建物跡の東側には土坑列が重なり合って、北側には列になって検出している。この土坑は本建物との並びが沿っているので関係があると思われる。また、南東側の土坑群の一部は建物の範囲に重なり別時期と考えられる。



第35図 振立柱建物跡5

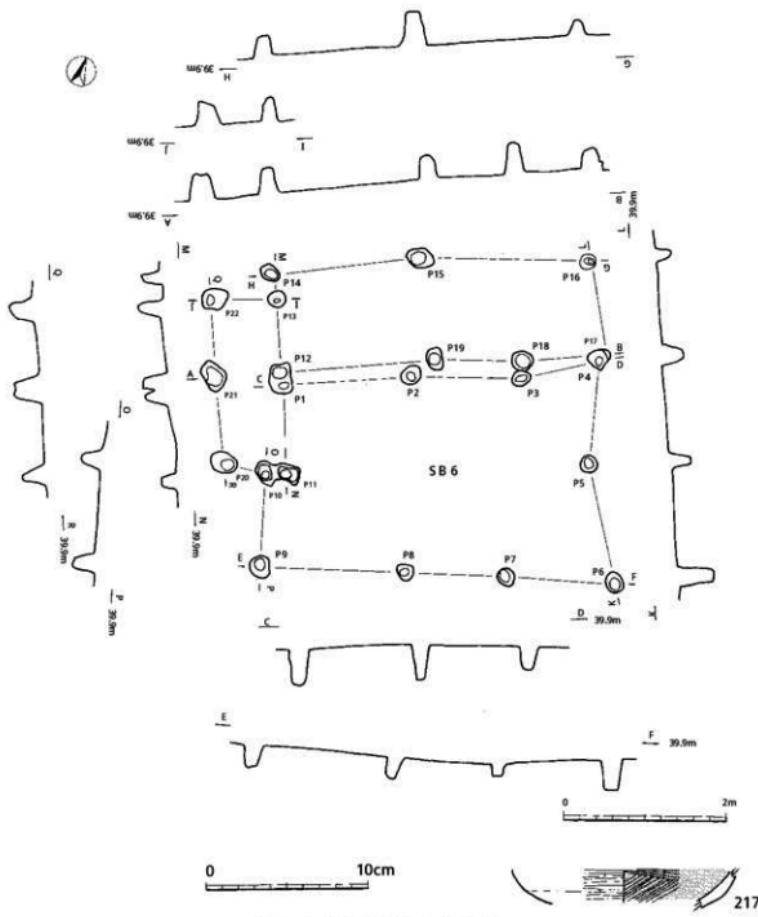
第7表 振立柱建物跡5の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋架間	下屋架間	上階桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 5	上屋 2間	上屋 2間半	3.57 m	m	4.32 m	m	E-4・5	P 1. 27 × 25 × 38 2. 24 × 22 × 31 3. 22 × 19 × 41 4. 32 × 28 × 43 5. 23 × 20 × 43 6. 29 × 21 × 34 7. 28 × 20 × 31 8. 26 × 20 × 45 9. 30 × 24 × 34 10. 27 × 26 × 48 11. 23 × 21 × 25 12. 22 × 21 × 25
			m	m	m	m	方位 W27°	
上屋架間柱間		下屋架間柱間			上屋桁行柱間		下屋桁行柱間	
P 1～10	1.76 m	P	m	P 1～2	0.80 m	P	m	
9～10	1.87			2～3	1.68			
2～11	1.88			3～4	1.85			
8～11	1.68			6～7	1.82			
3～12	1.77			7～8	1.85			
7～12	1.92			8～9	0.75			
4～5	1.88			10～11	0.80			
5～6	1.78			11～12	1.78			
				5～12	1.86			

⑥ 挖立柱建物跡6 (SB 6)

本遺構はF-4区に検出した。梁2間、桁行3間を基本に北に半間と2間の下屋、西に四半間と2間の狭い下屋を組んでいる建物跡である。東南角の柱穴は少しほみ出し鋭角になり、広さが違う2つ下屋が付き変則建物跡と考えられる。この類と同型は掘立柱建物跡4と掘立柱建物跡2が考えられる。なお、この建物跡は、単独で他の遺構との切り合ひが無い。

出土遺物は第36図の217で黒色土器A塊である。



第36図 掘立柱建物跡6と出土遺物

第8表 挖立柱建物跡6の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 6	上屋2間	上屋3間	2.75 m	2.05 m	4.47 m	3.90 m	E・F-4	P 1. 39 × 24 × 32
	下屋1間	下屋2間半	m	m	m	m	方位 E66°	2. 27 × 20 × 43 3. 25 × 20 × 29 4. 30 × 19 × 26 5. 21 × 21 × 26
	上屋梁間柱間	下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		6. 27 × 21 × 43 7. 22 × 22 × 15 8. 23 × 21 × 26 9. 28 × 24 × 28 10. 34 × 20 × 43 11. 33 × 18 × 43 12. 38 × 24 × 32 13. 22 × 20 × 30 14. 26 × 21 × 31 15. 35 × 24 × 43 16. 21 × 18 × 19 17. 30 × 19 × 26 18. 27 × 23 × 38 19. 28 × 20 × 30 20. 35 × 25 × 29 21. 40 × 25 × 34 22. 34 × 25 × 27
P 1~11	1.05 m	P 12~13	0.90 m	P 1~2	1.55 m	P 14~15	1.82 m	
9~10	1.12	13~14	0.33	2~3	1.35	15~16	2.10	
4~5	1.25	16~17	1.22	3~4	1.00	17~18	1.03	
5~6	1.54	20~21	1.10	6~7	1.34	18~19	1.05	
		21~22	0.95	7~8	1.25	12~19	1.90	
				8~9	1.78	13~22	0.82	
						10~20	0.46	

⑦ 挖立柱建物跡7 (SB 7)

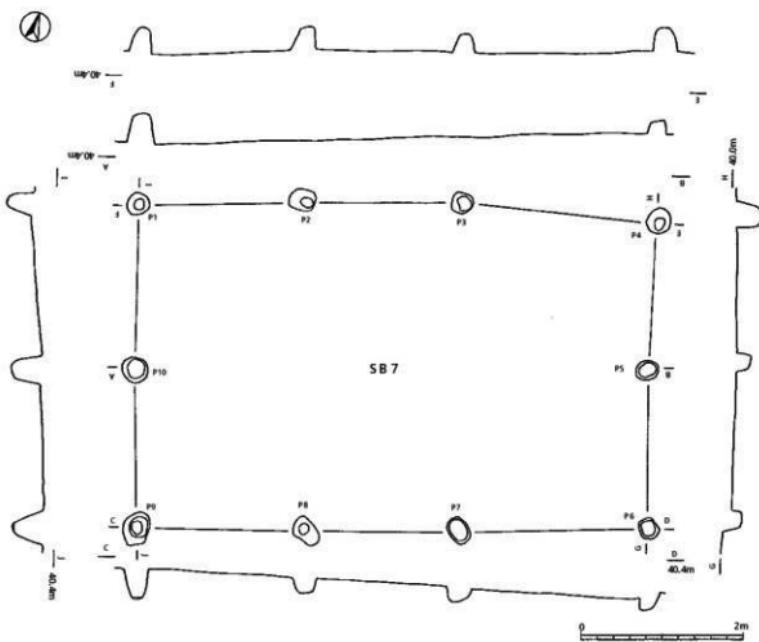
この遺構は建物跡全体でみると南部に位置する。検出はE-8・9区で、この建物跡の位置としては建物群内の西側の南部にある。

この建物跡は桁行を東西に、梁2間、桁行3間で造られている。この建物の特徴は東北角のP 4柱穴が少し内側に掘られている部分がある。

この遺構の重なりは、土坑だけで周りの建物跡との関係はない。

第9表 挖立柱建物跡7の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 7	上屋2間	上屋3間	3.95 m	m	6.40 m	m	E-8・9	P 1. 28 × 26 × 32
			m	m	m	m	方位 E74°	2. 34 × 22 × 28 3. 27 × 21 × 23 4. 33 × 22 × 30
	上屋梁間柱間	下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		5. 36 × 24 × 18 6. 27 × 24 × 21 7. 34 × 24 × 18 8. 38 × 22 × 19 9. 45 × 31 × 39 10. 33 × 31 × 38
P 1~10	2.00 m	P	m	P 1~2	2.05 m	P	m	
9~10	1.96			2~3	1.95			
4~5	1.75			3~4	2.40			
5~6	1.97			6~7	2.33			
				7~8	1.90			
				8~9	2.05			



第37図 挖立柱建物跡

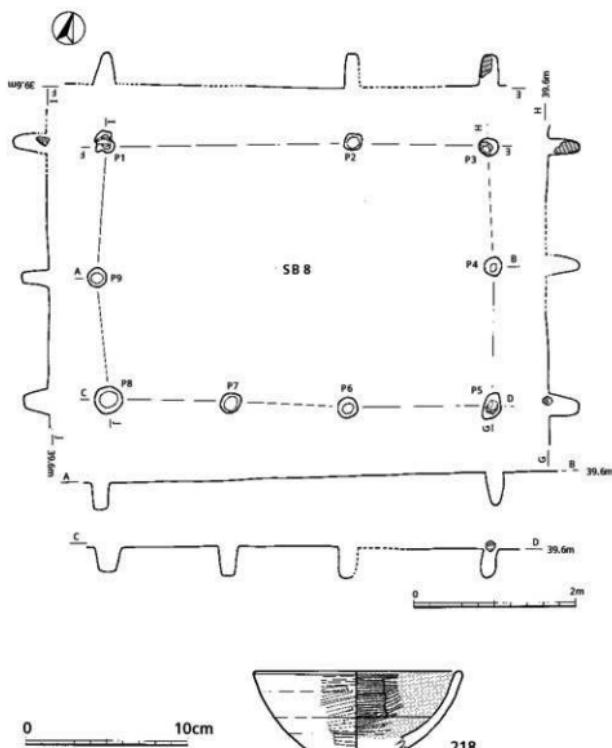
⑧ 挖立柱建物跡8 (SB 8)

本遺構は調査区では北部にあたるE-4区に桁行が東西で検出した。建物跡は梁2間、桁行3間の規模でやや小型に属する。

他の遺構との重なりは、柱穴と土坑の外、列になっている土坑がある。また、重なりではないが、掘立柱建物跡9・10とは近接の位置にある。

第10表 挖立柱建物跡8の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 8	上屋2間	上屋3間	3.20 m	m	4.70 m	m	E-4	P 1. 29 × 19 × 40 2. 22 × 21 × 44 3. 24 × 22 × 39 4. 23 × 20 × 42 5. 37 × 21 × 36 6. 26 × 23 × 39 7. 39 × 23 × 38 8. 34 × 34 × 30 9. 24 × 23 × 33
				m	m	m	方位 E72°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1～9	1.68 m	P	m	P 1～2	3.05 m	P	m	
8～9	1.52			2～3	1.63			
3～4	1.47			5～6	1.77			
4～5	1.70			6～7	1.45			
				7～8	1.50			



第38図 掘立柱建物跡8と出土遺物

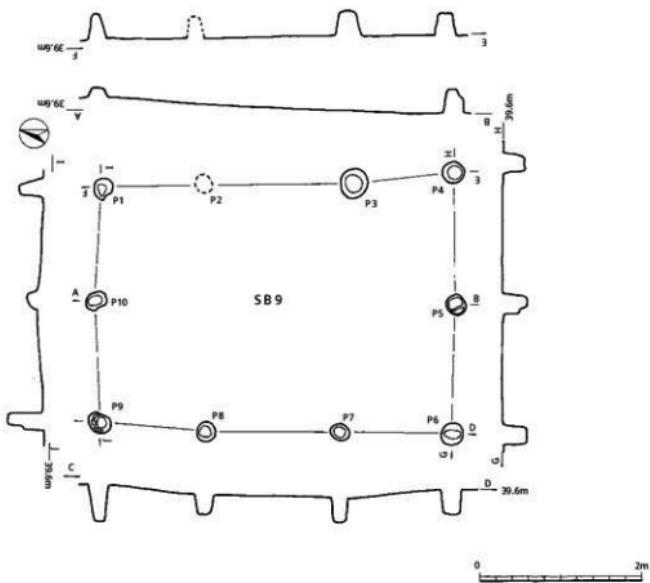
出土遺物（第38図218）

218はP4から出土している。器形は半球状の壺で内側に黒色を施し、内外面は横位に研磨されているが、水挽き痕は残っている。

⑨ 掘立柱建物跡9（SB 9）

本遺構は、調査区の北部にあたるE-3・4に検出した。建物跡自体は桁行が南北にあり、梁2間、桁行3間のもので、規模的には小型に属する。構造的には桁行の中間間が一間取っているが、南北の桁行間は狭く建てている。さらに北面の梁は南面よりも狭く棟柱は外側にはみ出していない。これは近接している掘立柱建物跡8・10・11にみられる棟柱のはみ出しと異なるため、近接しているがこれらと使用目的が異なると考えられる。

他の遺構との重なりはないが、北西部と西部に土坑列がみられ、何らかの関係遺構と思われる。



第39図 掘立柱建物跡9

第11表 掘立柱建物跡9の計測

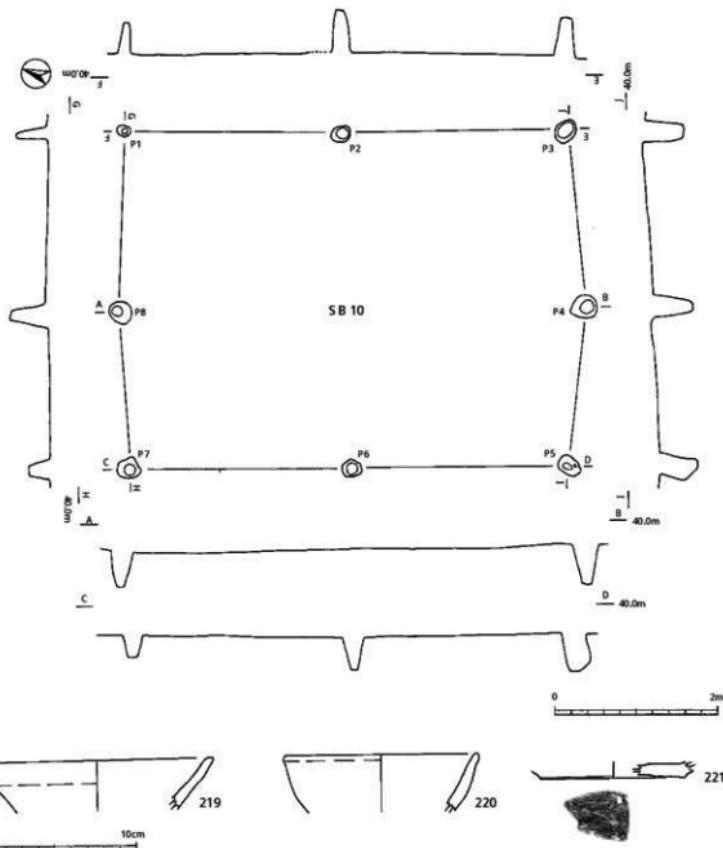
建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 9	上屋2間	上屋3間	2.90 m	m	4.35 m	m	E-3・4	P 1. 24 × 23 × 31 2. 23 × 21 × 27 3. 47 × 34 × 30 4. 29 × 17 × 28 5. 16 × 15 × 30 6. 27 × 27 × 31 7. 27 × 21 × 30 8. 25 × 23 × 25 9. 25 × 23 × 45 10. 26 × 24 × 15
			m	m	m	m	方位W17°	
上屋架間柱間		下屋架間柱間			上屋桁行柱間		下屋桁行柱間	
P 1~10	1.35 m	P		m	P 1~2	1.25 m	P	
9~10	1.50				2~3	1.85		
4~5	1.60				3~4	1.25		
5~6	1.60				6~7	1.40		
					7~8	1.67		
					8~9	1.26		

⑩ 掘立柱建物跡10 (SB10)

本遺構はD・E-4区に検出した。位置的には調査区の北部にあたる。建物としては間の広い梁2間、桁行2間で造られている。特に桁行は広い。また、南梁面の棟柱が外側にはみ出している型の建物である。遺構との重なりは、掘立柱建物跡11と東側で接しているほか、土坑がみられる。

出土遺物(第40図219~221)

219はP5より出土している土師器壺である。220はP8より出土している土師器壺である。221はP2より出土している壺の底部である。



第40図 挖立柱建物跡10と出土遺物

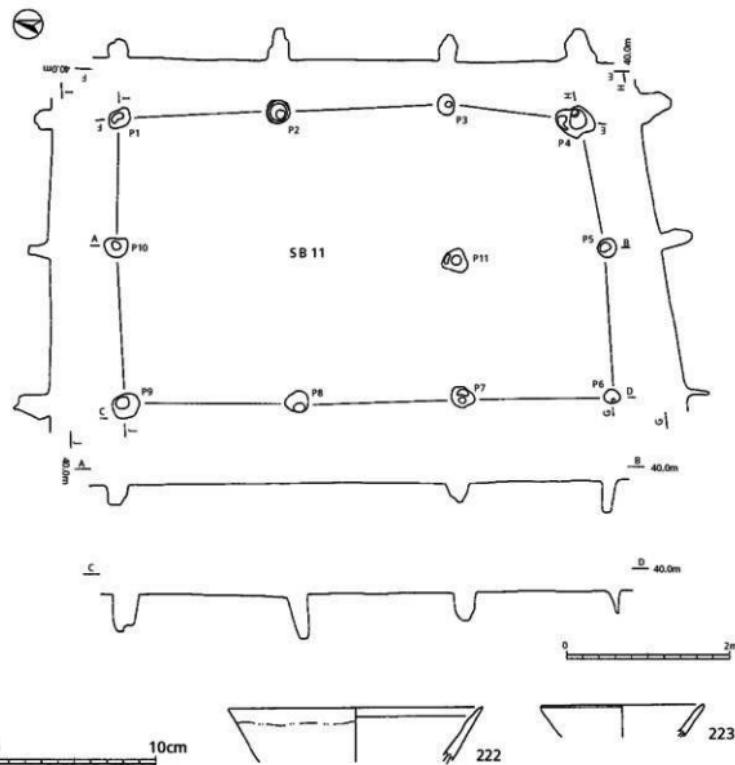
第12表 挖立柱建物跡10の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 10	上屋2間	上屋2間	4.17 m	m	5.40 m	m	D-E-4	P 1. 17 × 13 × 49
				m	m	m	方位W18°	2. 24 × 19 × 53
上屋梁間柱間			上屋桁行柱間			下屋桁行柱間		
P 1~8	2.20 m	P	m	P 1~2	2.68 m	P	m	3. 25 × 17 × 49
7~8	1.96			2~3	2.71			4. 31 × 23 × 50
3~4	2.20			5~6	2.65			5. 25 × 23 × 48
4~5	1.97			6~7	2.71			6. 25 × 12 × 40
								7. 29 × 26 × 28
								8. 28 × 28 × 44

⑪ 挖立柱建物跡 11 (S B11)

本遺構はD-3・4区に桁行が南北で検出した。位置的には調査区の北部にあたる。建物跡は梁2間、桁行3間で、南西角の柱穴が若干内側に入っている。

他の遺構との重なりは、掘立柱建物跡10・12と南西側並びに北東側で切り合っている。また、土坑列が2列重なっている。



第41図 挖立柱建物跡11と出土遺物

出土遺物 (第41図 222・223)

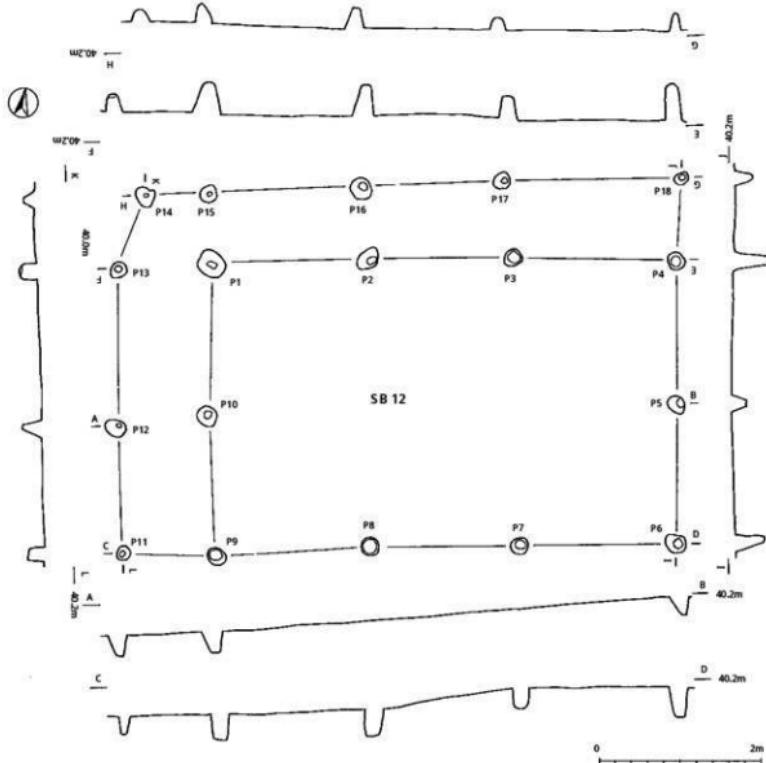
222はP1に出土している。これは体部・口縁部が直線状に立ち上がる器形をもつ青磁碗である。器面は、口縁部内側に稜がかすかにみられ、外面に釉垂れがみられる。223はP3に出土している。これは土師器の壺の体部～口縁部である。

第13表 摺立柱建物跡11の計測

建物	梁間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 11	上屋2間	上屋3間	3.50 m	m	5.62 m	m	D-3・4	P 1. 31 × 22 × 22 2. 31 × 28 × 40 3. 25 × 19 × 33 4. 49 × 32 × 41 5. 24 × 22 × 38 6. 21 × 17 × 29 7. 28 × 25 × 35 8. 29 × 26 × 54 9. 35 × 29 × 46 10. 29 × 23 × 26
			m	m	m	m	方位W13°	
	上屋梁間柱間	下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1～10	1.56 m	P		P 1～2	2.00 m	P		
9～10	1.95			2～3	2.05			
4～5	1.58			3～4	1.63			
5～6	1.85			6～7	1.85			
				7～8	2.00			
				8～9	2.15			

(12) 摺立柱建物跡12 (SB12)

C・D-3区に検出した。調査区では最も北側の建物である。桁行が東西で上屋と下屋からなって



第42図 摺立柱建物跡12

いる。建物は上屋の梁が2間、桁行が3間で、北側と西側に「L」字状の半間の下屋をもち、下屋の北西角が内側に入り込んでいる。遺構の切り合ひは、掘立柱建物跡11・13・14が重なっている。

第14表 掘立柱建物跡12の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ(cm)
SB 12	上屋2間	上屋3間	3.55 m	4.40 m	5.73 m	6.45 m	C-D-3	P 1. 35 × 30 × 39 2. 32 × 22 × 39 3. 24 × 19 × 28 4. 22 × 22 × 46 5. 25 × 21 × 19 6. 28 × 21 × 35 7. 22 × 20 × 26 8. 22 × 22 × 33 9. 25 × 22 × 32 10. 25 × 25 × 27 11. 18 × 16 × 22 12. 26 × 21 × 25 13. 23 × 19 × 23 14. 24 × 21 × 15 15. 21 × 19 × 24 16. 28 × 26 × 27 17. 22 × 19 × 15 18. 18 × 15 × 22
	下屋2間半	下屋3間半	m	m	m	m	方位 E76°	
上屋梁間柱間			下屋梁間柱間			上屋桁行柱間		
P 1~10	1.85 m	P 11~12	1.57 m	P 1~2	1.96 m	P 14~15	0.77 m	
9~10	1.73	12~13	1.92	2~3	1.75	15~16	1.90	
4~5	1.75	13~14	0.98	3~4	2.00	16~17	1.75	
5~6	1.73	4~18	1.02	6~7	1.95	17~18	2.20	
				7~8	1.85	9~11	1.15	
				8~9	1.90			

(13) 掘立柱建物跡13 (SB13)

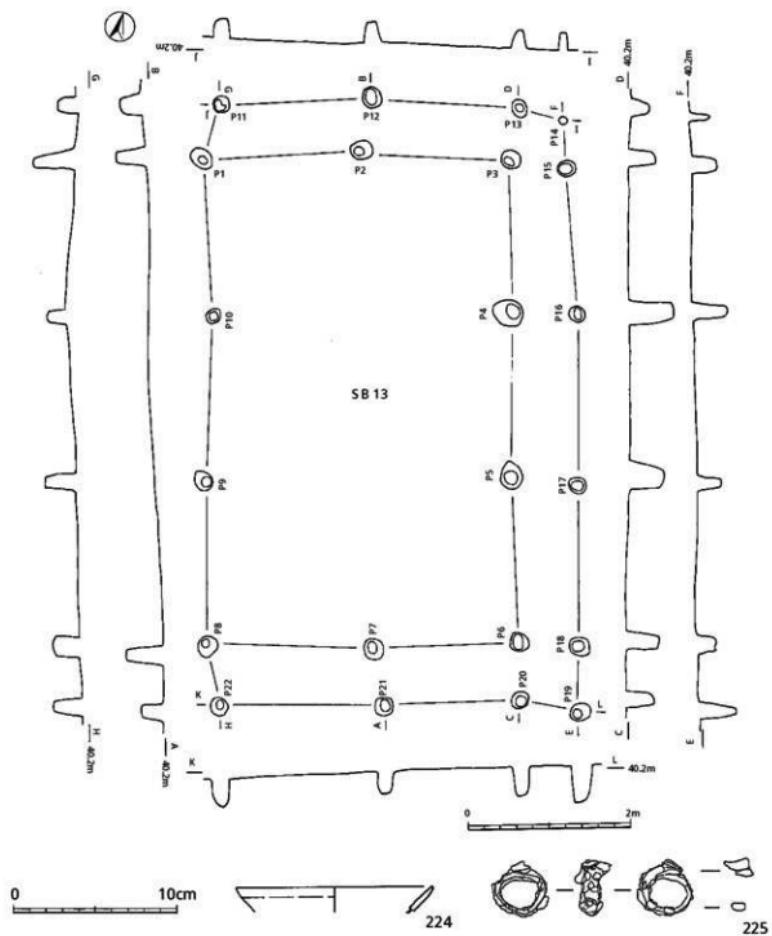
本遺構はC-3・4区に検出した。桁行が南北方向で上屋と下屋がある建物である。上屋は梁2間、桁行3間で南北と西側に半間の下屋を「コ」の字にもつ特徴がある。また、北西角の下屋の柱穴は若干内側に入り込んでいる。遺構の切り合ひは、掘立柱建物跡12・14が重なっている。

出土遺物 (第43図224・225)

224はP21から出土している。口縁部が直線に外向する青磁碗である。225はP5から出土した鉄製品である。用途は道具の柄部を絞めた金具の可能性がある。

第15表 掘立柱建物跡13の計測

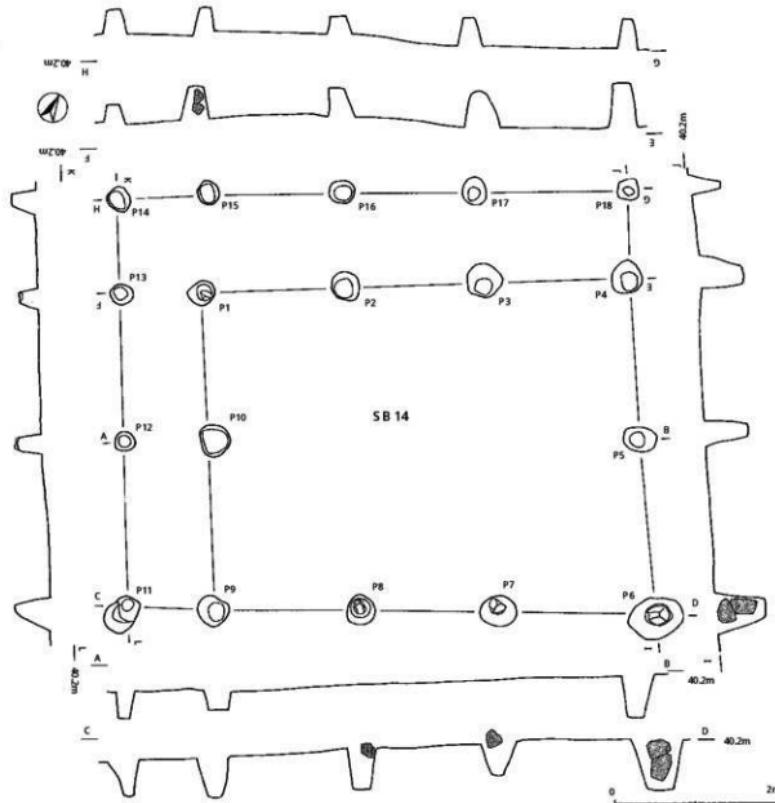
建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ(cm)
SB 13	上屋2間	上屋3間	3.73 m	4.20 m	5.90 m	7.30 m	C-3・4	P 1. 30 × 22 × 52 2. 28 × 22 × 36 3. 25 × 22 × 33 4. 38 × 33 × 54 5. 34 × 27 × 42 6. 26 × 22 × 40 7. 27 × 24 × 45 8. 27 × 24 × 33 9. 27 × 22 × 37 10. 20 × 17 × 22 11. 21 × 20 × 24 12. 27 × 24 × 25 13. 23 × 17 × 24 14. 11 × 9 × 22 15. 23 × 19 × 31 16. 21 × 19 × 45 17. 21 × 20 × 30 18. 28 × 22 × 24 19. 27 × 20 × 45 20. 24 × 21 × 34 21. 25 × 21 × 27 22. 24 × 21 × 36
	下屋2間半	下屋4間	m	m	m	m	方位 W16°	
上屋梁間柱間			下屋梁間柱間			上屋桁行柱間		
P 1~2	1.92 m	P 11~12	1.85 m	P 3~4	1.85 m	P 1~11	0.70 m	
2~3	1.84	12~13	1.80	4~5	2.05	14~15	0.60	
6~7	1.78	13~14	0.55	5~6	2.03	15~16	1.78	
7~8	2.04	19~20	0.70	8~9	2.00	16~17	2.12	
		20~21	1.65	9~10	2.05	17~18	1.98	
		21~22	2.00	1~10	1.93	18~19	0.85	
						8~22	0.77	



第43図 挖立柱建物跡13と出土遺物

⑭ 挖立柱建物跡14 (SB14)

この遺構はC・D-3・4区に検出した。桁行が東西の方向にある上屋と下屋をもつ建物である。上屋は梁2間、桁行3間で、北側と西側に半間の下屋が「L」字に付いている。他の遺構の重なりは、掘立柱建物跡12・13がある。



第44図 掘立柱建物跡14

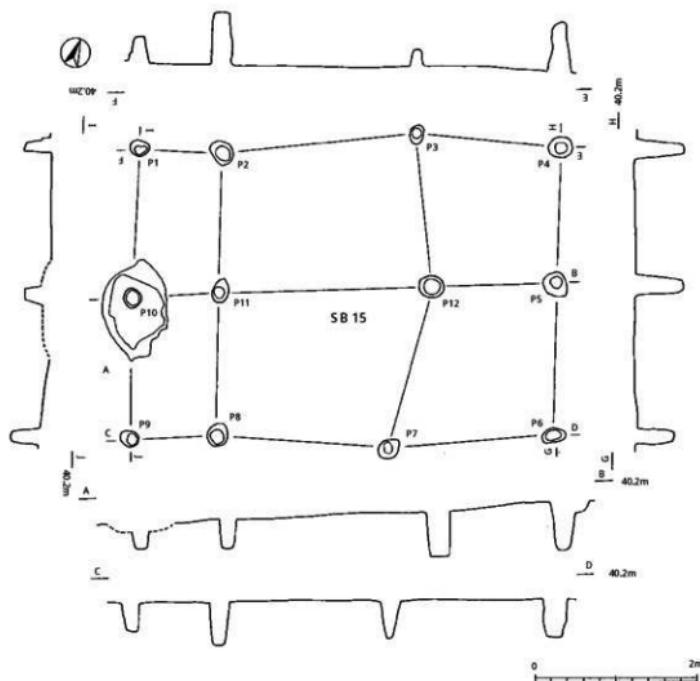
第16表 掘立柱建物跡14の計測

建物	梁間隔	桁行間	上履架間	下履架間	上履桁行	下履桁行	横出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 14	上履 2間	上履 3間	3.92 m	4.97 m	6.28 m	6.30 m	C-D・3・4	P 1. 34 × 28 × 41 2. 39 × 33 × 35 3. 42 × 41 × 45 4. 42 × 36 × 44 5. 42 × 30 × 53 6. 70 × 50 × 62 7. 45 × 38 × 41 8. 37 × 35 × 52 9. 40 × 33 × 50 10. 42 × 36 × 44 11. 50 × 35 × 44 12. 25 × 23 × 31 13. 25 × 25 × 24 14. 31 × 29 × 28 15. 31 × 26 × 32 16. 32 × 26 × 22 17. 35 × 30 × 35 18. 27 × 25 × 37
	下履 2間半	F屋 3間半	m	m	m	m	方位 E67°	
	上履架間柱寸間	下履架間柱寸間		上履桁行柱寸間		下履桁行柱寸間		
P 1～10	1.85 m	P 11～12	2.00 m	P 1～2	1.75 m	P 9～11	1.07 m	P 1. 34 × 28 × 41 2. 39 × 33 × 35 3. 42 × 41 × 45 4. 42 × 36 × 44 5. 42 × 30 × 53 6. 70 × 50 × 62 7. 45 × 38 × 41 8. 37 × 35 × 52 9. 40 × 33 × 50 10. 42 × 36 × 44 11. 50 × 35 × 44 12. 25 × 23 × 31 13. 25 × 25 × 24 14. 31 × 29 × 28 15. 31 × 26 × 32 16. 32 × 26 × 22 17. 35 × 30 × 35 18. 27 × 25 × 37
9～10	2.10	12～13	1.83	2～3	1.70	14～15	1.12	
4～5	1.96	13～14	1.15	3～4	1.78	15～16	1.65	
5～6	2.15	4～18	1.07	6～7	1.95	16～17	1.60	
				7～8	1.70	17～18	1.90	
				8～9	1.80			

⑯ 挖立柱建物跡 15 (SB 15)

本遺構はD-4・5区に検出した。建物跡は桁行が東西方向にあり、梁間2間、桁行間2間半の総柱である。中央部は1間を田の字状に組み、西側は半間間である。

他の遺構との重なりは土坑I類と焼土6である。なお、周囲にも同じ遺構がみられる。



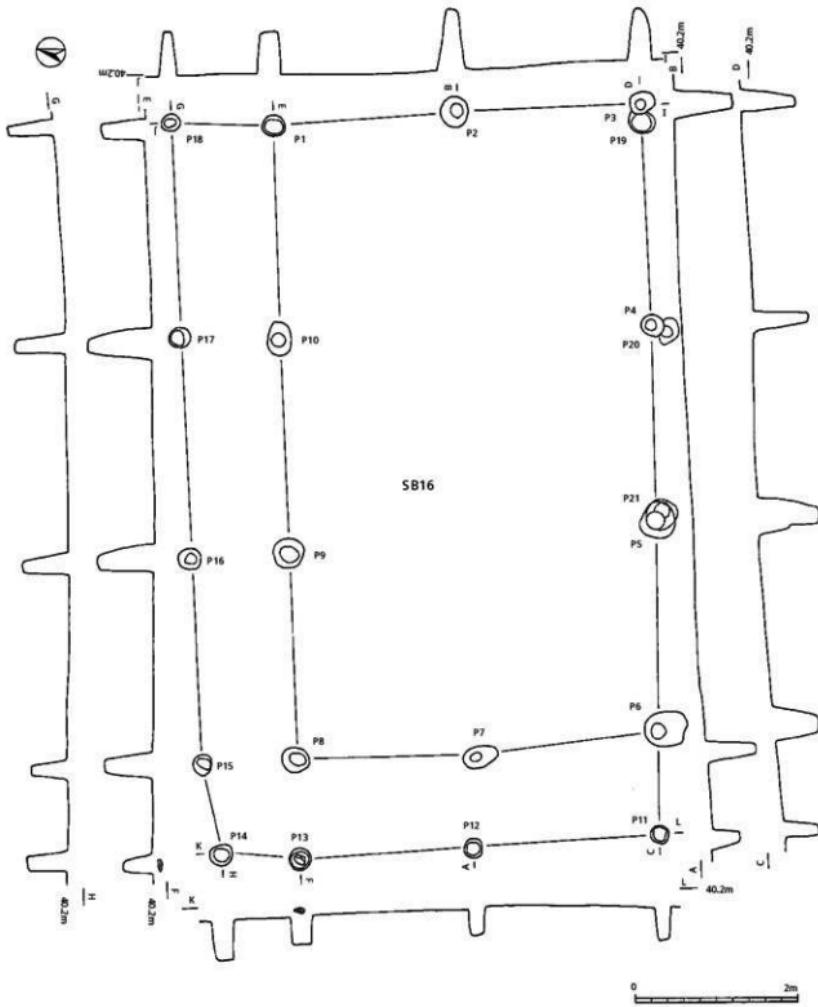
第45図 挖立柱建物跡15

第17表 挖立柱建物跡15の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)	
SB 15	上屋2間	上屋3間	3.55 m	m	5.21 m	m	D-4・5	P 1. 24 × 19 × 31 2. 32 × 25 × 65 3. 23 × 17 × 20 4. 30 × 25 × 61 5. 33 × 29 × 59 6. 30 × 18 × 46 7. 30 × 24 × 46 8. 30 × 26 × 54 9. 24 × 20 × 45 10. 25 × 21 × 32 11. 31 × 20 × 36 12. 32 × 28 × 56	
				m	m	m	方位 E69°		
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間			
P 1 ~ 10 9 ~ 10 2 ~ 11 8 ~ 11 3 ~ 12 7 ~ 12 4 ~ 5 5 ~ 6	1.80 m 1.74 1.70 1.75 1.83 2.05 1.65 1.85	P	m	P 1 ~ 2 2 ~ 3 3 ~ 4 6 ~ 7 7 ~ 8 8 ~ 9 5 ~ 12 11 ~ 12 10 ~ 11	1.05 m 2.40 1.80 2.03 2.13 1.05 1.53 2.62 1.06	P	m		

⑯ 掘立柱建物跡 16 (S B16)

本遺構はC-4・5区に検出した。建物跡は桁行が東西方向にあり、梁間2間、桁行3間の上屋に北側と西側に半間の下屋を付けている。遺構の重なりは、掘立柱建物跡20と方形窓穴遺構1と焼土5がみられる。柱穴の範囲を比較すると掘立柱建物跡20とは建て替えた建物と考えられる。

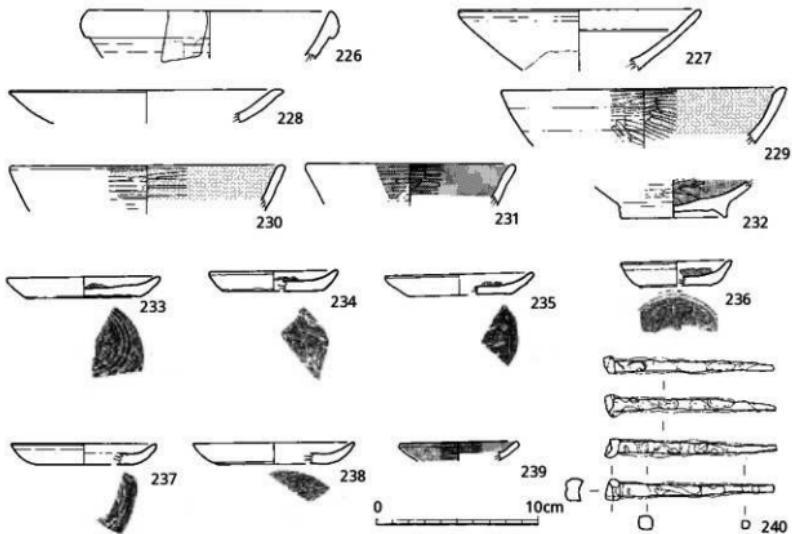


第46図 掘立柱建物跡16

方形堅穴造構は建物跡の東南部にあり、降り口の段等から考えると時期差があると思われる。焼土5も同じと考えて良いが、掘立柱建物跡のどちらかが建ててない時期の遺構と思われる。

第18表 掘立柱建物跡16の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 16	上屋2間	上屋3間	4.50 m	5.38 m	7.70 m	8.95 m	C-D-4・5	P 1. 28 × 26 × 54
	下屋2間半	下屋3間半	m	m	m	m	方位 E79°	2. 38 × 35 × 74
	上屋梁間柱間	下屋梁間柱間			上屋桁行柱間	下屋桁行柱間		3. 32 × 27 × 66 4. 29 × 25 × 68 5. 45 × 40 × 75 6. 54 × 43 × 56 7. 44 × 26 × 61 8. 34 × 32 × 58 9. 39 × 36 × 70 10. 42 × 29 × 78 11. 23 × 23 × 43 12. 24 × 21 × 33 13. 27 × 27 × 34 14. 27 × 25 × 48 15. 25 × 23 × 44 16. 28 × 26 × 57 17. 27 × 25 × 63 18. 24 × 20 × 55
P 1~2	2.25 m	P 1~18	1.25 m	P 1~10	2.65 m	P 6~11	1.25 m	
2~3	2.25	11~12	2.29	9~10	2.65	14~15	1.15	
6~7	2.25	12~13	2.15	8~9	2.50	15~16	2.53	
7~8	2.20	13~14	0.95	5~6	2.60	16~17	2.70	
				4~5	2.40	17~18	2.65	
				3~4	2.72			



第47図 掘立柱建物跡16の出土遺物

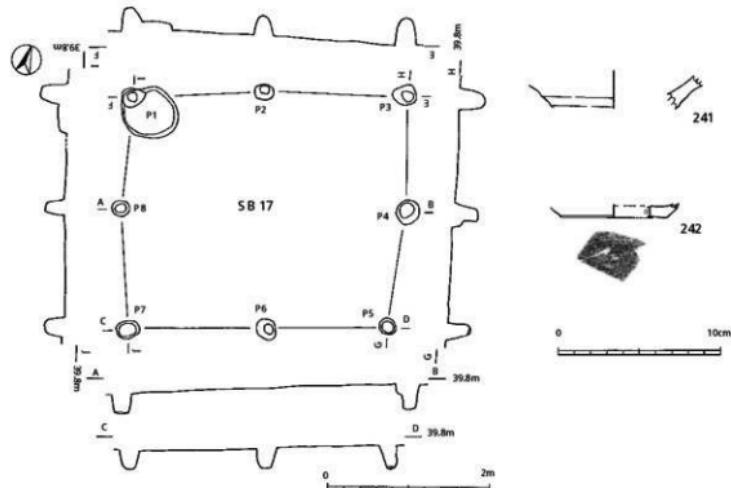
出土遺物 (第47図 226~240)

226はP5出土で、白磁IV類にあたる玉縁口縁部をもつ碗である。227はP9出土で、口縁部が直に開く白磁の碗である。228はP16に出土した土師器の壊である。229はP14に出土した黒色土器Aの壊である。230はP17に出土した黒色土器Aの壊である。231はP9から出土した黒色土器Aの壊である。232はP5から出土した黒色土器Aの壊の底部である。233・234はP9出土、235が

P 8 出土, 236 が P 1 出土, 238 は P 7 から出土した土師器の小皿である。これらの底は糸切り離しである。239 は P 9 から出土した黒色土器Bの小皿である。底面は糸切り離しである。240 は P 6 に出土した鉄製品の鉄釘である。

⑦ 挖立柱建物跡 17 (SB17)

本遺構はD・E-5 区に検出した。この建物跡は桁行が東西と考えられる方向で、梁2間、桁行2間である。特徴は東梁間の棟柱が若干出ている。また、掘立柱建物跡 18 と重なっている。



第 48 図 掘立柱建物跡17と出土遺物

出土遺物 (第 48 図 241・242)

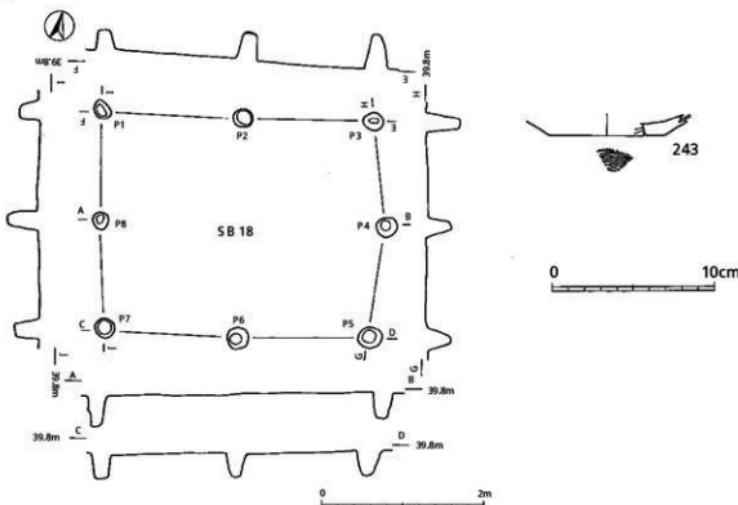
241 は P 7 から出土した土師器の壊である。242 は P 7 から出土した土師器の小皿である。底面は糸切り離しである。

第 19 表 掘立柱建物跡17の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 17	上屋 2 間	上屋 2 間	2.82 m	m	3.40 m	m	D・E-5	P 1. 18 × 20 × 30 2. 24 × 19 × 25 3. 35 × 25 × 33 4. 31 × 28 × 30 5. 20 × 20 × 27 6. 25 × 24 × 25 7. 30 × 23 × 23 8. 23 × 20 × 23
				m	m	m	方位 E 69°	
上屋梁間柱間			下屋梁間柱間			上屋桁行柱間		下屋桁行柱間
P 1～8	1.38 m	P		m	P 1～2	1.64 m	P	m
3～4	1.42				2～3	1.79		
4～5	1.45				5～6	1.48		
7～8	1.48				6～7	1.75		

⑯ 挖立柱建物跡 18 (SB18)

本遺構はD・E-5 区に検出した。この建物跡は桁行が東西と考えられる方向で、梁2間、桁行2間である。特徴は東梁間の棟柱が若干出ている。また、掘立柱建物跡 17 と重なっている。



第49図 掘立柱建物跡18と出土遺物

出土遺物（第49図 243）

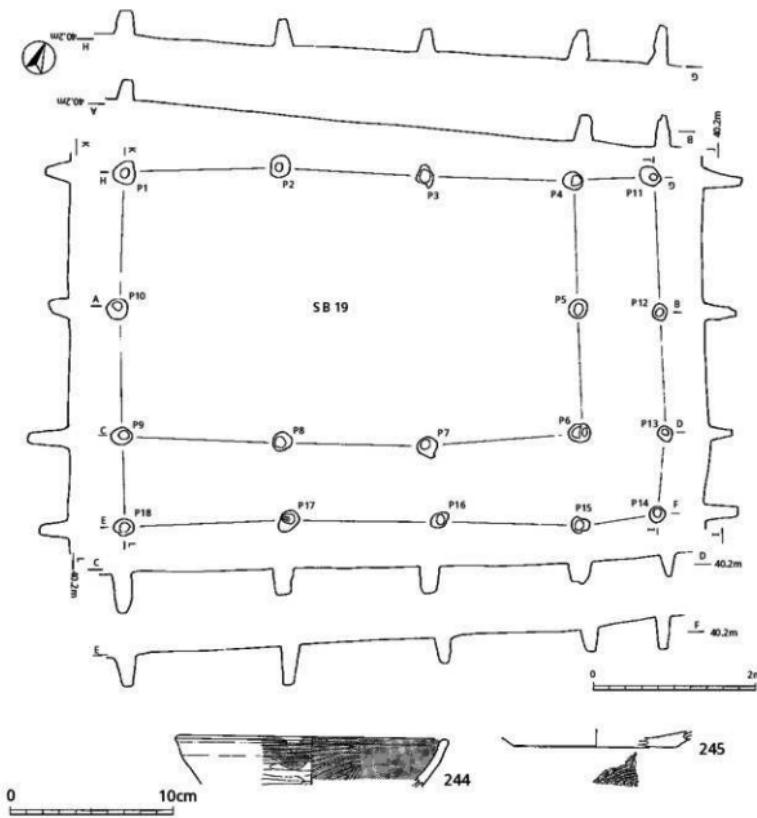
243はP 8に出土している。これは土師器の壺の底部である。

第20表 掘立柱建物跡18の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上層桁行	下層桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 18	上屋2間	上屋2間	2.63 m	m	3.35 m	m	D・E-5	P 1. 24 × 19 × 23 2. 25 × 12 × 35 3. 26 × 24 × 43 4. 25 × 24 × 28 5. 29 × 25 × 22 6. 27 × 24 × 29 7. 25 × 25 × 30 8. 23 × 18 × 47
			m	m	m	m	方位 E80°	
上屋梁間柱間			下屋梁間柱間			上屋桁行柱間		
P 1～8	1.35 m	P	m	P 1～2	1.75 m	P	m	
3～4	1.30			2～3	1.61			
4～5	1.47			5～6	1.63			
7～8	1.33			6～7	1.65			

⑰ 挖立柱建物跡 19 (SB19)

本遺構はB・C-7 区に検出した。建物跡の桁行方向は東西で、上屋と下屋からなる。上屋は梁2間、桁行3間で、下屋は半間間で南側と東側に付いている。他との重なりは、掘立柱建物跡 21 があり、掘立柱建物跡 22 とは接している。出土遺物は244がP 4に出土している。これは黒色土器Aの碗である。245もP 4に出土している。糸切り離しの壺底部である。

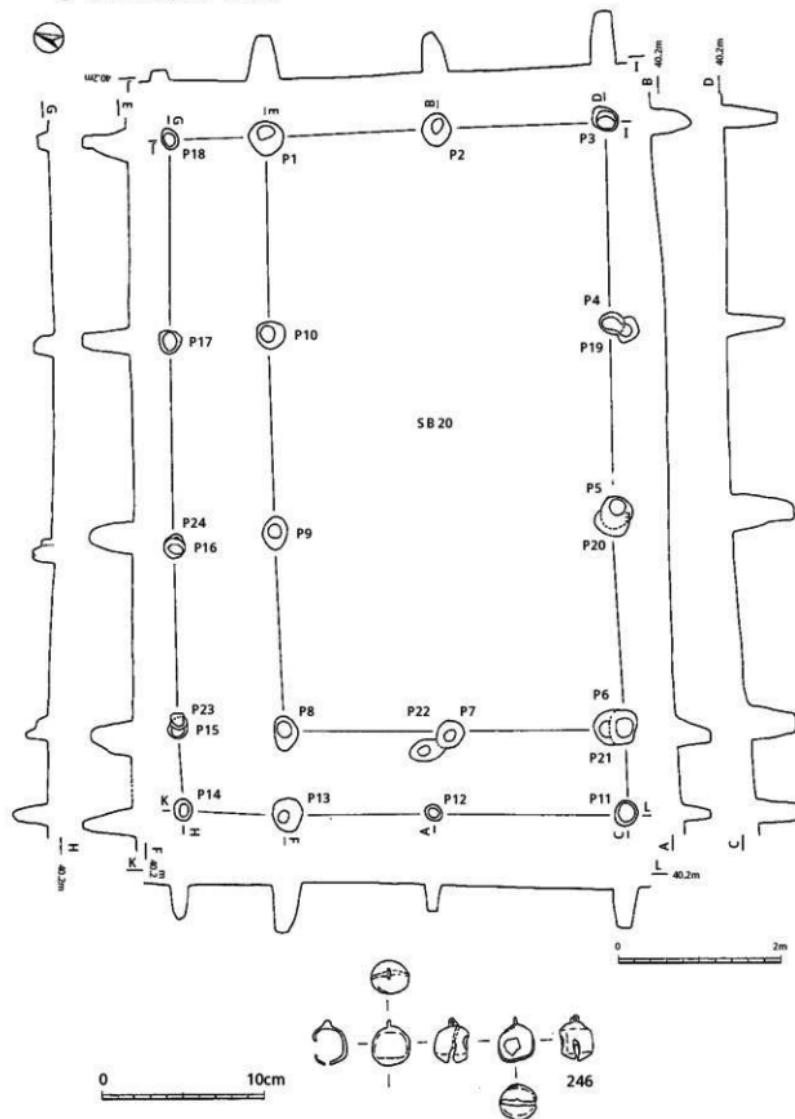


第50図 掘立柱建物19と出土遺物

第21表 掘立柱建物19の計測

建物	梁間距	桁行距	上層梁間	下層梁間	上層桁行	下層桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 19	上層 2 間		3.20 m	4.13 m	5.55 m	6.50 m	B・C・7	P 1. 31 × 28 × 29 2. 28 × 26 × 33
	下層 2 間半	下層 3 間半	m	m	m	m	方位 E 68°	3. 30 × 21 × 27 4. 25 × 21 × 36 5. 25 × 23 × 32 6. 28 × 22 × 27 7. 27 × 24 × 34 8. 25 × 22 × 34 9. 26 × 22 × 50 10. 26 × 24 × 23 11. 27 × 21 × 49 12. 22 × 17 × 39 13. 20 × 16 × 28 14. 20 × 16 × 42 15. 22 × 14 × 50 16. 25 × 17 × 32 17. 29 × 22 × 49 18. 25 × 21 × 36
上層梁間柱間		下層梁間柱間		上層桁行柱間		下層桁行柱間		
P 1～10	1.62 m	P 9～18	1.13 m	P 1～2	1.90 m	P 4～11	0.95 m	
9～10	1.68	11～12	1.65	2～3	1.80	14～15	0.98	
4～5	1.56	12～13	1.48	3～4	1.85	15～16	1.70	
5～6	1.53	13～14	1.00	6～7	1.85	16～17	1.86	
				7～8	1.80	17～18	2.02	
				8～9	1.95			

㉙ 据立柱建物跡 20 (S B20)



第51図 据立柱建物跡20と出土遺物

本遺構はC-4・5区に検出した。建物跡の桁行は東西方向で、上屋と下屋からなる。下屋は梁2間、桁行3間で、下屋が北側と西側に付いている。そして、掘立柱建物跡16と重なり合って検出している。掘立柱建物跡16との違いは掘立柱建物跡16の北西角が内側に柱穴を掘っているが、本遺構はそれがない。他の切り合いは掘立柱建物跡16と同じである。

出土遺物はP8に246の青銅製鉈が出土している。

第22表 掘立柱建物跡20の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 20	上屋2間	上屋3間	4.20 m	5.40 m	7.50 m	8.50 m	C-D-4・5	P 1. 44 × 42 × 54 2. 40 × 36 × 50 3. 36 × 30 × 66
	下屋3間半	下屋2間半	m	m	m	m	方位 E66°	4. 30 × 28 × 70 5. 40 × 36 × 76 6. 45 × 32 × 56 7. 36 × 34 × 32
	上屋梁間柱間	下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		8. 43 × 30 × 61 9. 40 × 30 × 55 10. 34 × 33 × 60 11. 31 × 29 × 34 12. 22 × 20 × 33 13. 40 × 38 × 61 14. 27 × 22 × 64 15. 26 × 25 × 52 16. 26 × 25 × 54 17. 30 × 28 × 59 18. 27 × 21 × 54
P 1~2	2.13 m	P 1~18	1.17 m	P 3~4	2.45 m	P 6~11	1.05 m	
2~3	2.08	11~12	2.35	4~5	2.50	14~15	0.97	
6~7	2.50	12~13	1.85	5~6	2.25	15~16	2.25	
7~8	2.04	13~14	1.25	8~9	2.70	16~17	2.55	
				9~10	2.45	17~18	2.50	
				1~10	2.47			

② 掘立柱建物跡21 (SB21)

本遺構はC-6・7区に検出している。建物跡の桁行は南北方向で、梁2間、桁行3間である。南梁面の棟柱跡が少し外側に掘られている。建物跡としては大型に属する。

他の遺構との重なりは、掘立柱建物跡19と土坑II-8と用途不明の土坑がみられる。また、掘立

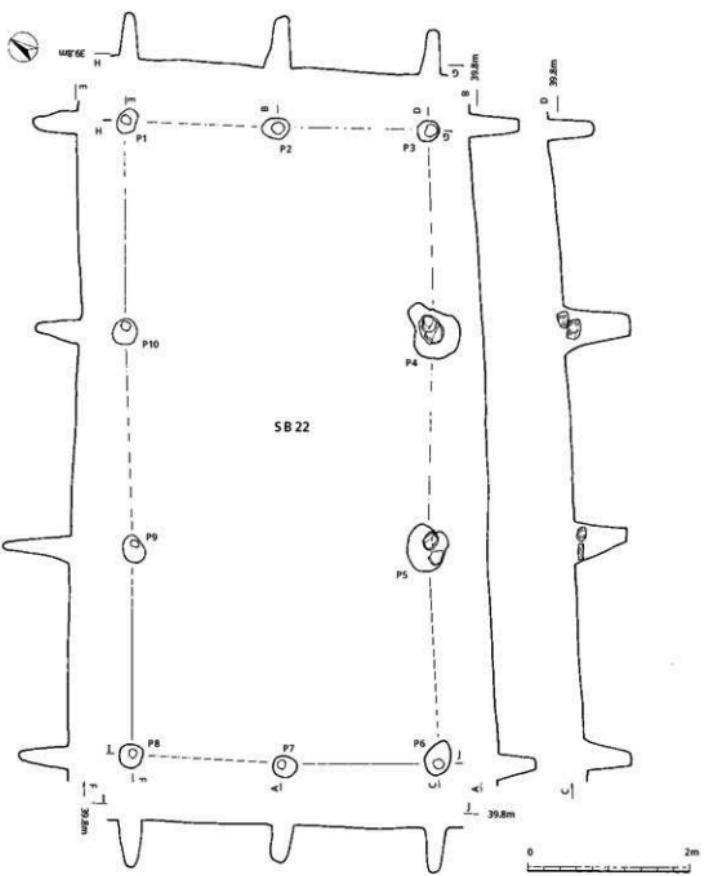
第23表 掘立柱建物跡21の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 21	上屋2間	上屋3間	3.65 m	m	6.10 m	m	C-6・7	P 1. 49 × 40 × 35 2. 39 × 35 × 50 3. 43 × 36 × 58
			m	m	m	m	方位 W25°	4. 45 × 33 × 46
	上屋梁間柱間	下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		5. 55 × 38 × 57 6. 40 × 31 × 51 7. 55 × 50 × 62 8. 64 × 48 × 60 9. 80 × 64 × 60 10. 40 × 18 × 42
P 1~10	1.80 m	P	m	P 1~2	2.10 m	P	m	
4~5	1.70			2~3	1.97			
5~6	1.83			3~4	2.05			
9~10	1.82			6~7	2.15			
				7~8	2.05			
				8~9	2.10			

柱建物跡24とは隣接し平行している。

出土遺物 (第52図247~251)

247はP9から出土している。口縁部が少し外反する半球状の黒色土器Aの塊である。248はP6から出土した半球状の黒色土器Aの塊である。249はP7から出土した黒色土器Aの塊である。これら247~249は両面に丁寧な研磨がされている。250はP7から出土した土師器の塊である。251は、P2から出土したものである。器形は平底で体部から口縁部は直に立ち上がっている。



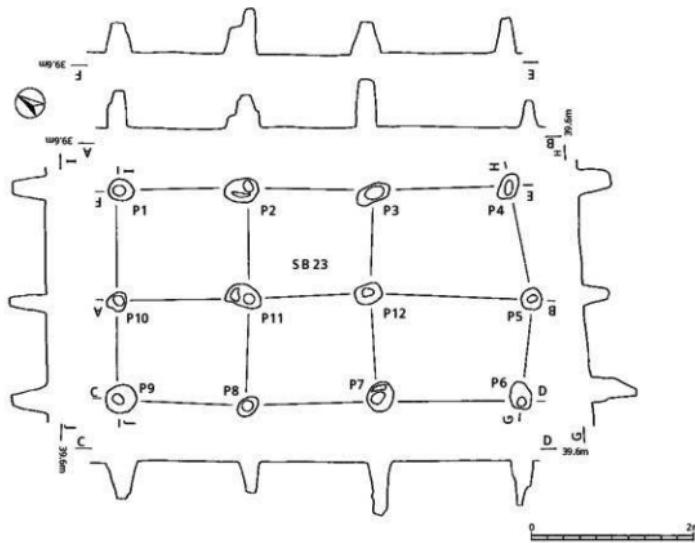
第53図 掘立柱建物跡22と出土遺物

第24表 掘立柱建物跡22の計測

建物	梁間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 22	上屋 2間	上屋 3間	3.75 m	m	7.85 m	m	C・D-7	P 1. 32 × 23 × 55
			m	m	m	m	方位 E55°	2. 35 × 27 × 65
	上屋梁間柱間	下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 30 × 28 × 57
P 1～2	1.87 m	P		P 3～4	2.50 m	P	m	4. 78 × 56 × 83
2～3	1.90			4～5	2.75			5. 59 × 51 × 67
6～7	1.90			5～6	2.70			6. 45 × 30 × 56
7～8	1.86			8～9	2.55			7. 30 × 27 × 48
				9～10	2.70			8. 31 × 30 × 58
				1～10	2.60			9. 36 × 27 × 85
								10. 35 × 30 × 56

(2) 掘立柱建物跡 23 (SB23)

D・E-7 区に検出している。建物跡は桁行が南北方向で、梁2間、桁行3間の総柱である。この建物跡は、梁間の1間が狭く、南面の棟柱の位置が若干外側にみ出している。さらに、桁行においては南側の1間が広く掘られている。よって、南側の部屋は広く取っていたと考えられる。



第54図 掘立柱建物跡23

他の遺構との重なり合いは、掘立柱建物跡 25 が直角にみられる。また、用途不明の土坑とも重なり合っている。

第25表 挖立柱建物跡23の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 23	上屋2間	上屋2間	2.25 m	m	4.80 m	m	D-E-7	P 1. 32 × 28 × 38 2. 43 × 30 × 57 3. 43 × 22 × 40 4. 32 × 24 × 45 5. 27 × 26 × 33 6. 34 × 24 × 56 7. 37 × 34 × 67 8. 30 × 21 × 40 9. 38 × 35 × 47 10. 25 × 23 × 47 11. 43 × 29 × 42 12. 33 × 25 × 60
			m	m	m	m	方位W34°	
	上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間	
P 1~10	1.35 m	P	m	P 1~2	1.54 m	P	m	
10~9	1.17			2~3	1.56			
4~5	1.40			3~4	1.55			
5~6	1.27			6~7	1.77			
2~11	1.36			7~8	1.55			
8~11	1.31			8~9	1.60			
3~12	1.22			10~12	1.60			
7~12	1.29			11~12	1.46			
				5~12	2.01			

② 挖立柱建物跡24 (SB24)

本遺構はC・D-6・7区に検出している。建物跡は、桁行が南北方向にみられ、広い1間を使用した梁間2間、桁行3間である。よって、大型の建物に属する。

他の遺構との重なりは、焼土11・12・13のほか、土坑がみられる。また、溝4とは切り合がみ

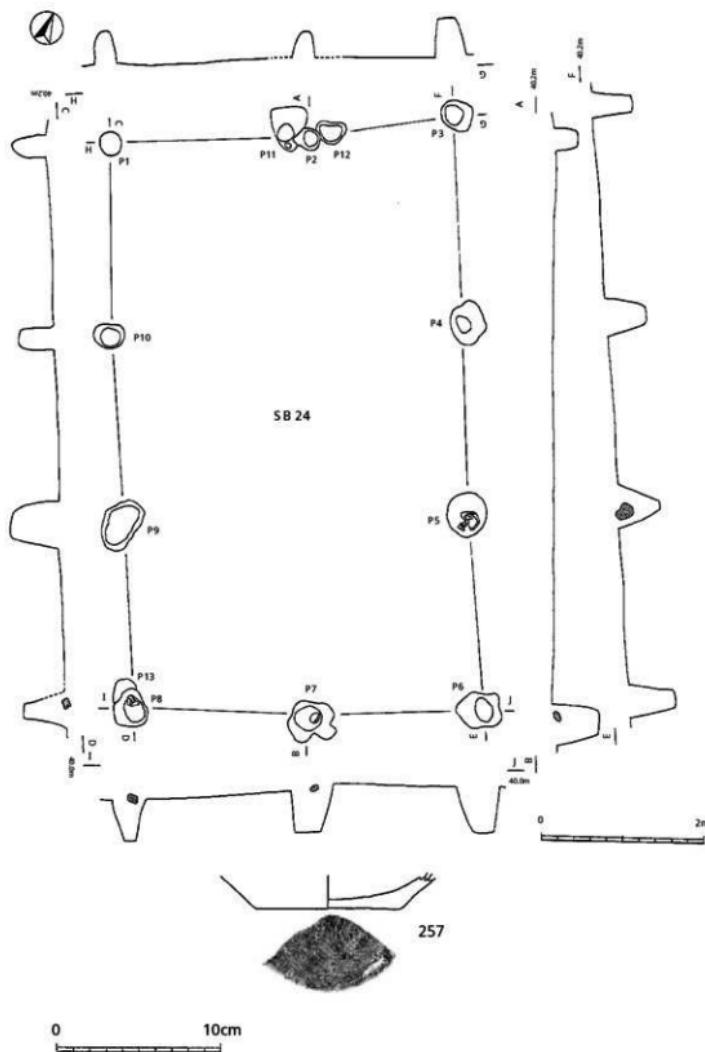
第26表 挖立柱建物跡24の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 24	上屋2間	上屋3間	4.30 m	m	7.30 m	m	C-D-6-7	P 1. 30 × 28 × 42 2. 33 × 29 × 33 3. 42 × 40 × 48 4. 50 × 43 × 50 5. 55 × 49 × 53 6. 40 × 53 × 58 7. 53 × 48 × 55 8. 56 × 42 × 52 9. 57 × 46 × 60 10. 38 × 30 × 45
			m	m	m	m	方位W26°	
	上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間	
P 1~2	2.45 m	P	m	P 1~10	2.40 m	P	m	
2~3	1.80			10~9	2.30			
6~7	2.15			9~8	2.30			
7~8	2.15			6~5	2.42			
				5~4	2.32			
				4~3	2.58			

られ、時期差が認められる。さらに、方形堅穴遺構5、掘立柱建物跡21・22とは近接関係にあると考えられる。これらの遺構とは同時共存の可能性はない。

出土遺物 (第55図257)

257はP 9から出土したやや大形の壺である。平底で体部・口縁部は外向する。底面は糸切り離しである。

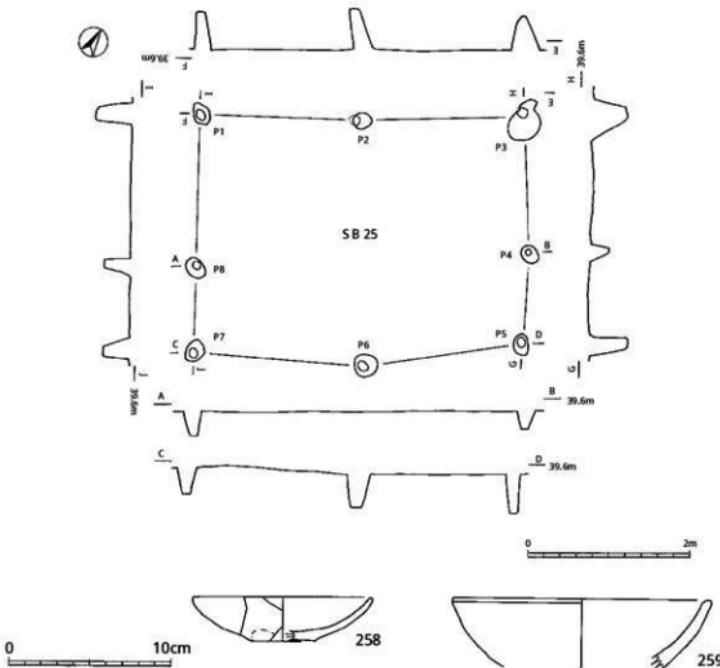


第 55 図 捜立柱建物跡24と出土遺物

㉙ 捜立柱建物跡 25 (S B25)

D・E-7 区に検出した。建物跡の桁行は東西方向で、梁2間（1間半）、桁行2間である。

他の遺構との重なりは、掘立柱建物跡23が直角にみられるほか、土坑がある。



第56図 掘立柱建物跡25と出土遺物

出土遺物(第56図 258・259)

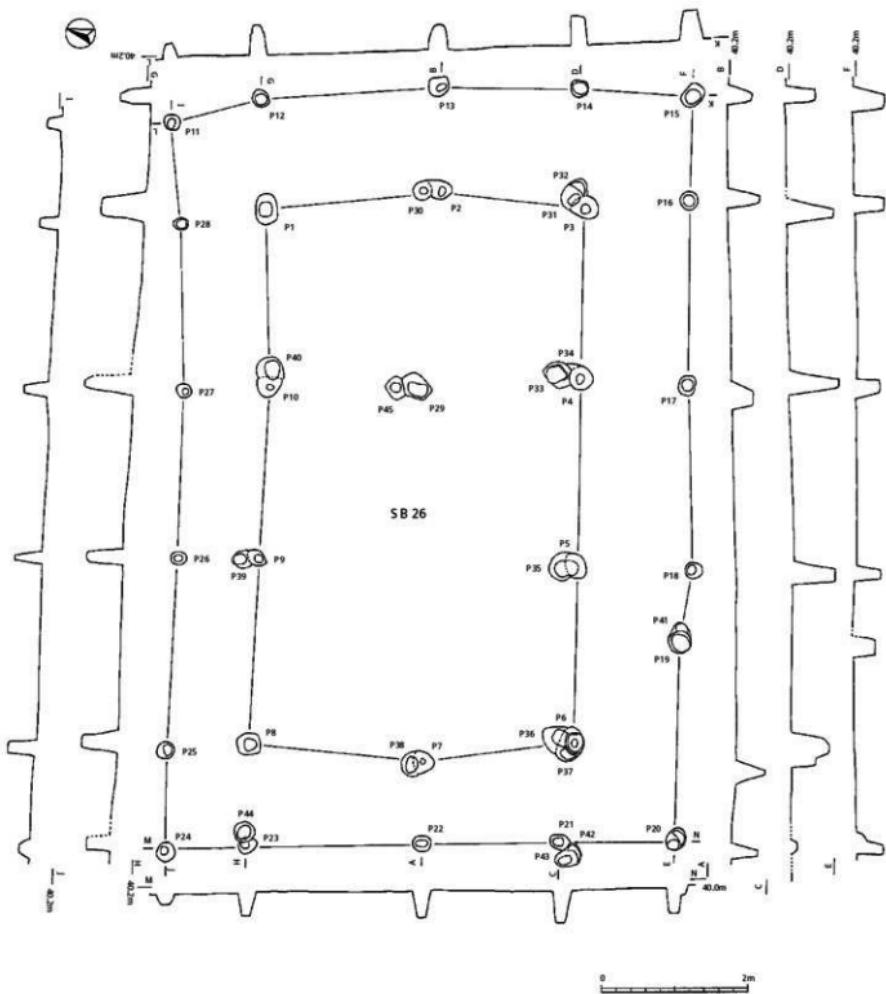
白磁皿の258と土師器壺の259が出土している。

第27表 掘立柱建物跡25の計測

建物	梁間間	析行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋析行	下屋析行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 25	上屋2間	上屋2間	2.95 m	m	4.00 m	m	D-E-7	P 1. 32 × 21 × 46 2. 24 × 20 × 50 3. 53 × 33 × 48 4. 25 × 20 × 24 5. 28 × 18 × 48 6. 30 × 28 × 42 7. 30 × 23 × 34 8. 28 × 21 × 34
				m	m	m	方位 E 58°	
	上屋梁間柱間	下屋梁間柱間		上屋析行柱間	下屋析行柱間			
P3~4	1.70 m	P	m	P 1~2	1.92 m	P	m	
4~5	1.10			2~3	2.00			
7~8	1.10			5~6	2.00			
8~1	1.85			6~7	2.10			

㉙ 据立柱建物跡 26 (S B26)

本遺構はC-8区に検出した。この建物跡の桁行方向は東西で、上屋と下屋からなり上屋は梁2間、桁行3間で、下屋は半間を廻らしている。下屋の北東角の柱穴は少し狭めている位置にある。



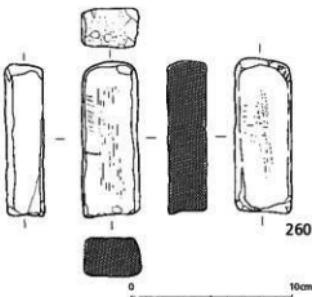
第57図 据立柱建物跡26

この建物跡は、掘立柱建物跡 31・32 と重なり検出している。それは、下屋の桁行南面の柱穴が 3 重に検出している。このことは 3 回同じ所に建てなおしたことを物語っている。また、掘立柱建物跡 27 も重なり、土坑も周囲にみられる。

出土遺物(第 58 図 260)

260 は P 5 に砥石が出土している。

石材は砂岩質である。2 面の中央部を使用している。また、頂部は敲石に使用されている。



第 58 図 掘立柱建物跡 26 の出土遺物

第 28 表 掘立柱建物跡 26 の計測

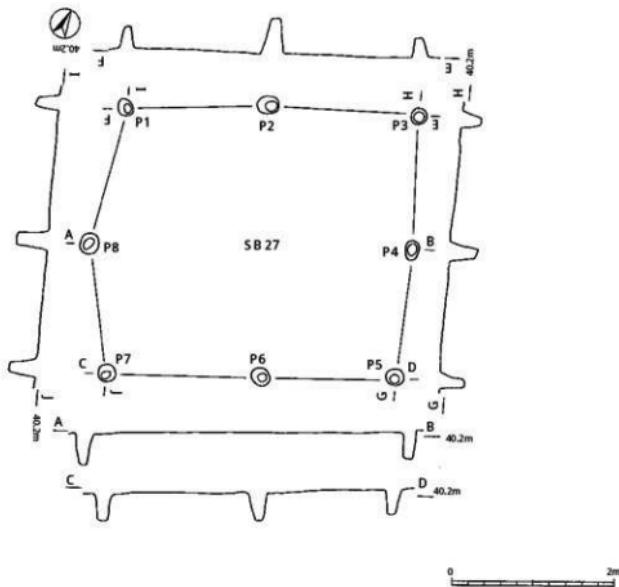
建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 26	上屋 2 間	上屋 3 間	4.37 m	7.15 m	7.30 m	10.24 m	C-D-8	P 1. 44 × 30 × 61
	下屋 4 間	下屋 5 間	m	m	m	m	方位 E 72°	2. 28 × 27 × 44 3. 40 × 33 × 62 4. 33 × 32 × 68 5. 35 × 28 × 57 6. 46 × 35 × 52 7. 31 × 27 × 40 8. 36 × 30 × 49 9. 36 × 23 × 50 10. 37 × 30 × 67 11. 26 × 22 × 20 12. 31 × 26 × 41 13. 27 × 23 × 34 14. 35 × 26 × 40 15. 26 × 25 × 40 16. 28 × 23 × 40 17. 26 × 21 × 32 18. 33 × 30 × 35 19. 33 × 26 × 31 20. 30 × 22 × 37 21. 30 × 22 × 44 22. 26 × 23 × 38 23. 27 × 23 × 32 24. 27 × 25 × 15 25. 26 × 24 × 37 26. 24 × 18 × 37 27. 22 × 20 × 32 28. 22 × 17 × 25
	上屋梁間柱間	下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1 ~ 2	2.40 m	P 11~12	1.27 m	P 3 ~ 4	2.33 m	P 15~16	1.45 m	
2 ~ 3	2.00	12~13	2.45	4 ~ 5	2.60	16~17	2.50	
6 ~ 7	2.07	13~14	1.90	5 ~ 6	2.40	17~18	2.53	
7 ~ 8	2.37	14~15	1.53	8 ~ 9	2.55	18~19	1.00	
		20~21	1.60	9~10	2.35	19~20	2.78	
		21~22	1.87	10~1	2.45	24~25	1.37	
		22~23	2.45			25~26	2.65	
		23~24	1.12			26~27	2.29	
						27~28	2.30	
						28~11	1.40	

⑦ 掘立柱建物跡 27 (SB 27)

本遺構は C-8 区に検出した。東西の桁行で梁間 2 間、桁行 2 間の建物跡である。

第 29 表 掘立柱建物跡 27 の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 27	上屋 2 間	上屋 2 間	3.23 m	m	3.60 m	m	B-C-8	P 1. 22 × 18 × 30
				m	m	m	方位 E 63°	2. 27 × 12 × 45 3. 22 × 20 × 27 4. 26 × 18 × 36
	上屋梁間柱間	下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 3 ~ 4	1.65 m	P	m	P 1 ~ 2	1.68 m	P	m	5. 23 × 21 × 32 6. 25 × 21 × 35 7. 23 × 21 × 42 8. 27 × 23 × 40
4 ~ 5	1.55			2 ~ 3	1.82			
7 ~ 8	1.62			5 ~ 6	1.63			
8 ~ 1	1.74			6 ~ 7	1.92			



第 59 図 掘立柱建物跡27

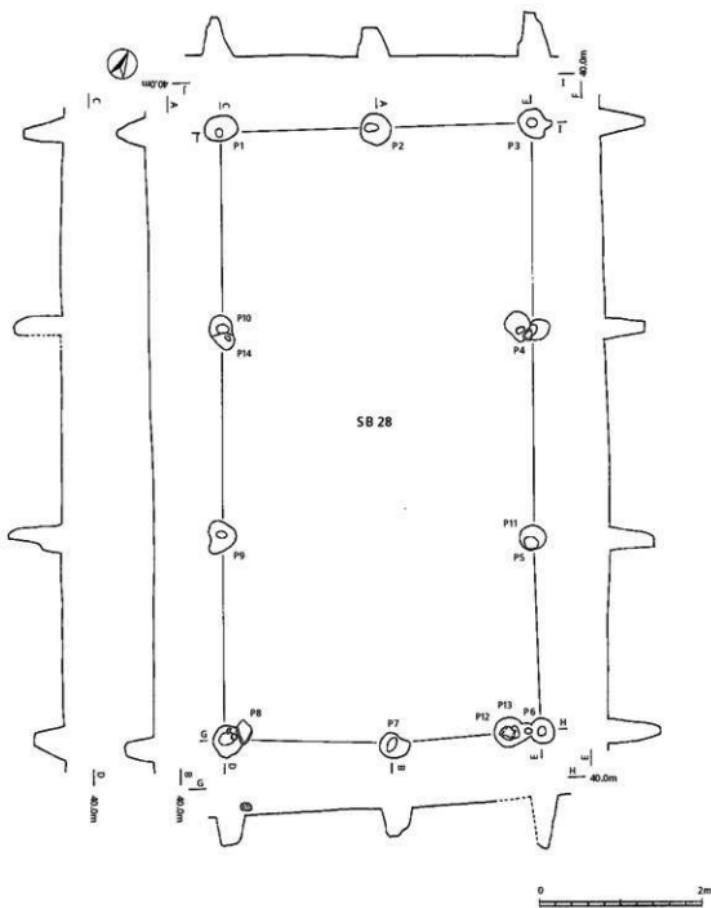
㉙ 掘立柱建物跡 28 (SB 28)

本遺構はD-7区に検出した。建物跡の桁行は南北で、梁間2間、桁行3間である。この建物の1間は広いため、大型の建物跡の類に属する。

本建物跡に重なっている遺構は焼土15・16・17と土坑がある。また、近接している建物は掘立柱建物跡22・23がある。

第 30 表 掘立柱建物跡28の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 28	上屋 2間	上屋 3間	3.85 m	m	7.45 m	m	D-7	P 1. 40 × 30 × 47 2. 40 × 35 × 37 3. 42 × 32 × 45 4. 30 × 24 × 49 5. 32 × 27 × 56 6. 32 × 28 × 66 7. 37 × 30 × 37 8. 40 × 35 × 40 9. 42 × 34 × 68 10. 30 × 25 × 60
				m	m	m	方位 W27°	
上屋梁間柱間			下屋梁間柱間			上屋桁行柱間		下屋桁行柱間
P1~2	1.87 m	P		m	P 1~10 9~10 8~9 3~4 4~5 5~6	2.42 m	P	m
2~3	1.95				2.53			
6~7	1.85				2.50			
7~8	2.04				2.52			
					2.62			
					2.32			

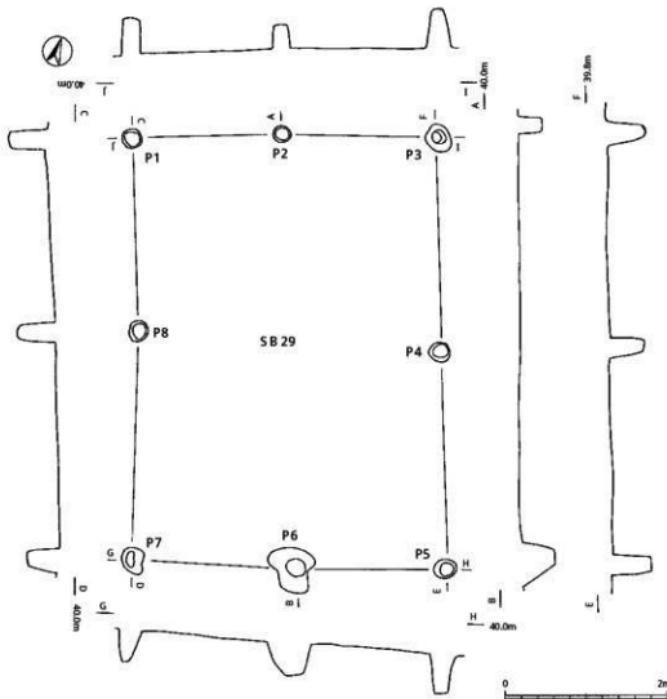


第 60 図 挖立柱建物跡28

㉙ 挖立柱建物跡 29 (SB 29)

本遺構はE・F-5・6区に検出した。建物跡の桁行は南北方向で、梁間2間、桁行3間である。その梁南面の棟柱跡は南側に出ている。なお、この建物跡は1間が広いため大型の建物に属する。

この建物跡と重なる遺構は、掘立柱建物跡3・30である。なお、周囲には土坑が東西にみられる。



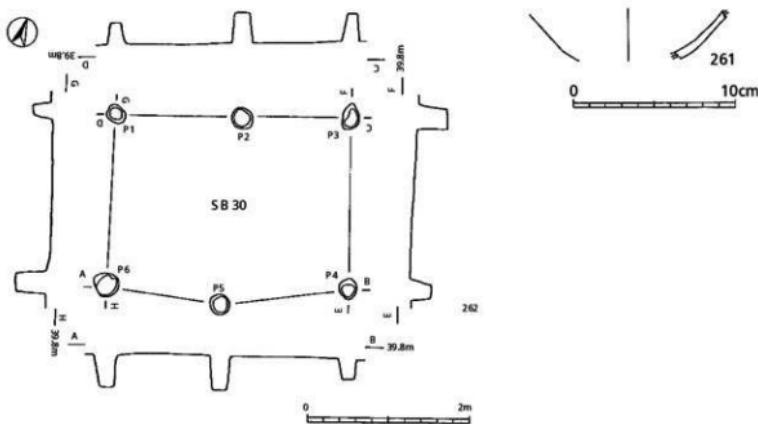
第 61 図 捜立柱建物跡29

第 31 表 捜立柱建物跡29の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 29	上屋 2 間	上屋 2 間	3.75 m	m	5.32 m	m	E-F-5・6	P 1. 27 × 24 × 47 2. 23 × 20 × 31 3. 37 × 30 × 50 4. 28 × 24 × 44 5. 30 × 22 × 50 6. 61 × 50 × 42 7. 35 × 25 × 40 8. 28 × 23 × 48
				m	m	m	方位 W20°	
上屋梁間柱間			下屋梁間柱間			上屋桁行柱間		
P1～2	1.85 m	P		m	P 3～4 4～5 7～8 8～1	2.63 m 2.68 2.80 2.38	P	m
2～3	1.90							
5～6	1.85							
6～7	2.05							

③ 捜立柱建物跡 30 (S B30)

本遺構はE-6区に検出した。桁行方向は東西で、梁1間、桁行2間である。重なりの遺構は捜立柱建物跡3・29である。



第 62 図 掘立柱建物跡 30 と出土遺物

第 32 表 掘立柱建物跡 30 の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 30	上屋 1 間	上屋 2 間	2.12 m	m	2.90 m	m	E - 6	P 1. 26 × 20 × 28
				m	m	m	方位 E 70°	2. 28 × 22 × 39
	上屋梁間柱間	下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 33 × 20 × 35
P 1 ~ 6 3 ~ 4	2.15 m 2.12	P	m	P 1 ~ 2 2 ~ 3 4 ~ 5 5 ~ 6	1.56 m 1.45 1.58 1.40	P	m	4. 26 × 22 × 25 5. 26 × 24 × 43 6. 33 × 30 × 40

出土遺物 (第 62 図 261)

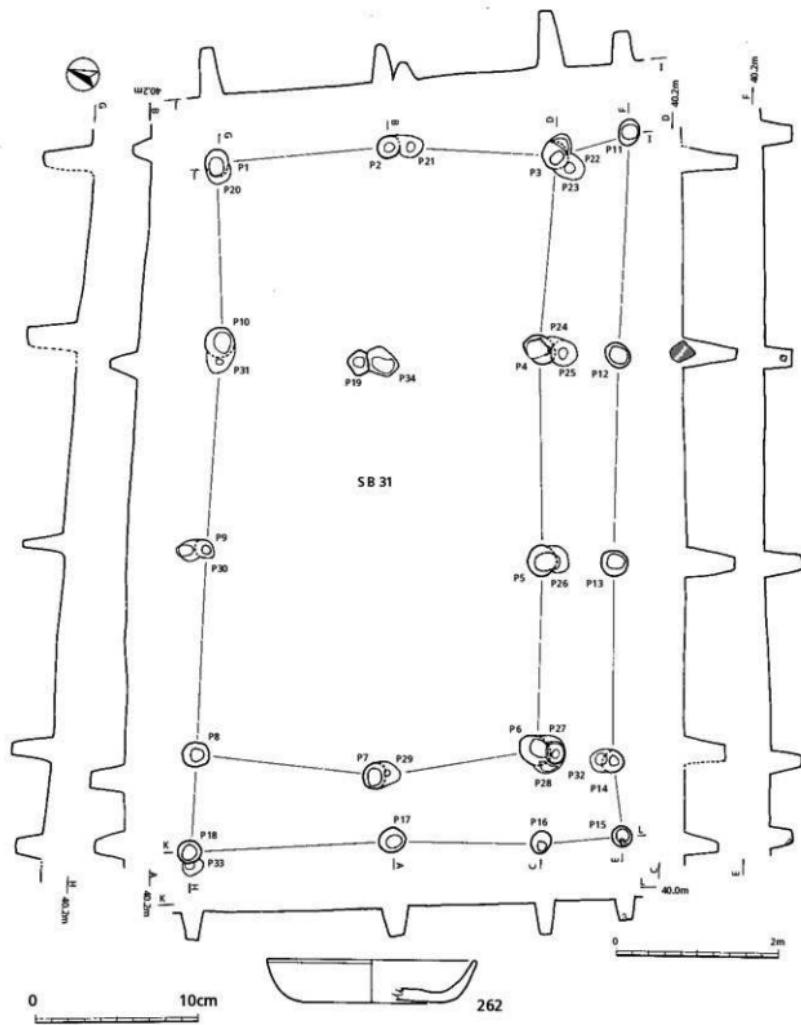
261 は白磁の碗の体部である。口縁部や底部がないため分類は不明である。

③ 掘立柱建物跡 31 (S B31)

本遺構は C - 8 区に検出した。この建物跡の桁行方向は東西で、上屋と下屋からなる。上屋は梁 2 間、桁行 3 間で、下屋は西面と南面に半間で付く柱穴がみられる。他の遺構の重なりは、掘立柱建物跡 26・32 がある。この遺構の 3 重は上屋の南桁行の柱穴が 3 重に検出していることから考えられる。また、掘立柱建物跡 27 も変則的に重なっている。なお、周囲は近接して土坑やピットがみられるが量は少ない。

出土遺物 (第 63 図 262)

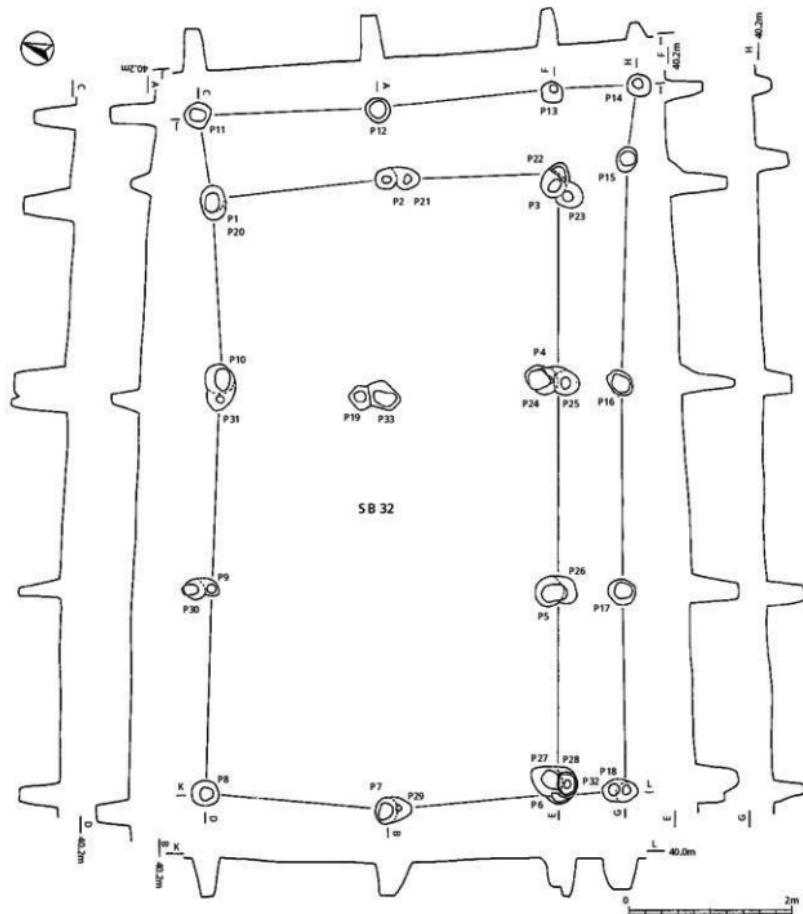
262 は P 15 から出土している土師器の坏である。底部から体部・口縁部への立ち上がりは丸味があり、底部の中央は上がっている。底面は糸切り離してある。



第63図 掘立柱建物跡31と出土遺物

② 挖立柱建物跡 32 (S B32)

本遺構はC-8区に検出した。この建物跡の桁行方向は東西で、上屋と下屋からなる。上屋は梁2間、桁行3間で、下屋は東面と南面に半間で付く柱穴がみられる。他の遺構の重なりは、掘立柱建物跡26・31がある。この遺構の3重は上屋の南桁行の柱穴が3重に検出していることから考えられる。また、掘立柱建物跡27も変則的に重なっている。なお、周囲は近接して土坑やピットがみられるが量は少ない。



第64図 挖立柱建物跡32

第33表 振立柱建物跡31の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 31	上屋2間	上屋3間	4.20 m	5.30 m	7.28 m	8.70 m	C・D-8	P 1. 33 × 30 × 60
	下屋2間半	下屋3間半	m	m	m	m	方位 E 72°	2. 28 × 30 × 46
	上屋梁間柱間	下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 35 × 32 × 70 4. 41 × 33 × 68 5. 39 × 37 × 60 6. 40 × 37 × 50 7. 33 × 28 × 43 8. 34 × 30 × 52 9. - × 23 × 53 10. - × 39 × 62 11. 34 × 26 × 39 12. 35 × 28 × 25 13. 34 × 32 × 50 14. - × 29 × 40 15. 26 × 25 × 29 16. 29 × 25 × 43 17. 35 × 29 × 37 18. 30 × 27 × 35
P 1 ~ 2	2.15 m	P 3 ~ 11	0.98 m	P 3 ~ 4	2.37 m	P 11 ~ 12	2.75 m	
2 ~ 3	2.09	15 ~ 16	1.00	4 ~ 5	2.65	12 ~ 13	2.55	
6 ~ 7	2.12	16 ~ 17	1.83	5 ~ 6	2.30	13 ~ 14	2.45	
7 ~ 8	2.20	17 ~ 18	2.53	1 ~ 10	2.15	14 ~ 15	0.93	
				10 ~ 9	2.56	8 ~ 18	1.18	
				9 ~ 8	2.51			

第34表 振立柱建物跡32の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 32	上屋2間	上屋3間	4.25 m	5.40 m	7.70 m	8.70 m	C・D-8	P 1. 34 × 30 × 63
	下屋2間半	下屋3間半	m	m	m	m	方位 E 70°	2. 27 × 25 × 25
	上屋梁間柱間	下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 36 × 32 × 70 4. 32 × - × 67 5. - × 39 × 59 6. 47 × - × 53 7. 34 × 26 × 40 8. 35 × 31 × 50 9. 23 × 20 × 52 10. 38 × 35 × 64 11. 35 × 30 × 56 12. 33 × 30 × 56 13. 28 × 25 × 47 14. 32 × 28 × 22 15. 32 × 25 × 40 16. 36 × 28 × 34 17. 37 × 33 × 47 18. 28 × 22 × 28
P 1 ~ 2	2.15 m	P 11 ~ 12	2.23 m	P 1 ~ 10	2.23 m	P 14 ~ 15	0.93 m	
2 ~ 3	2.08	12 ~ 13	2.18	10 ~ 9	2.60	15 ~ 16	2.80	
8 ~ 7	2.23	13 ~ 14	1.05	9 ~ 8	2.55	16 ~ 17	2.53	
7 ~ 6	2.15	6 ~ 18	0.90	3 ~ 4	2.45	17 ~ 18	2.48	
				4 ~ 5	2.60	1 ~ 11	1.09	
				5 ~ 6	2.50			

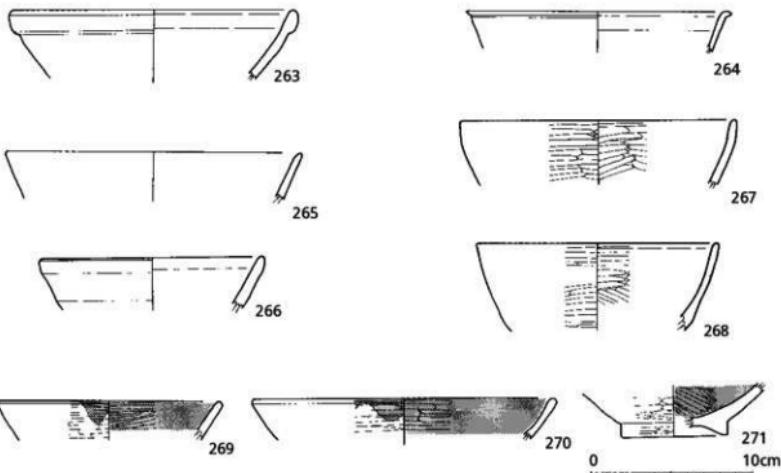
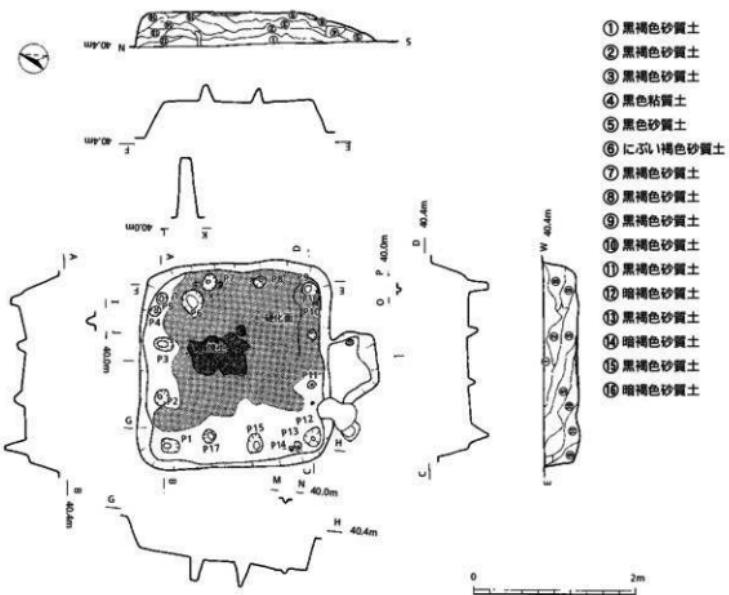
イ 方形豊穴造構

① 方形豊穴造構 1

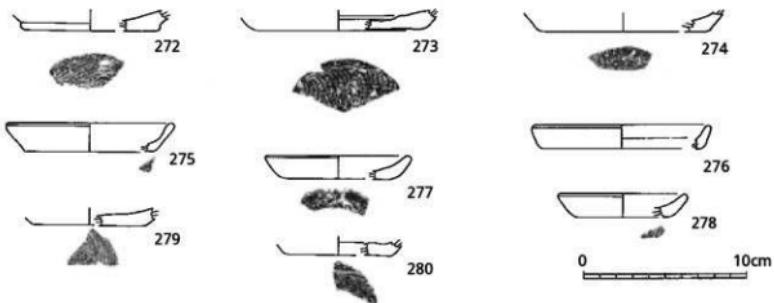
本造構はC-4区に検出した。規模は東西2m50cm、南北2m40cm、深さ40cmの豊穴造構である。南側には1段の段差があり、入り口の可能性が高い。豊穴内には17か所の柱穴が壁に沿って廻っている。柱穴の径は20cm前後のものと、8cm前後のものとある。後者はP10・11で深さは10cmと浅く梯子設置のピットの可能性もある。他は20cm前後である。

造構の中央には何度も使用により形成されたと思われる硬化面があり、その上に炭化物が4cmほど集積している。しかし、炉として何度も焚いたにしては床が赤化しておらず焼土もわずかに分布する程度であるため、炭を置いたかもしくは弱火で燃やすといった作業を行った可能性が指摘できる。

埋土は西側からの堆積が観察できる。各層とも色調・土質に大差はなく、同形のブロック（アカ



第 65 図 方形竪穴遺構1と出土遺物 (1)



第 66 図 方形堅穴遺構1の出土遺物（2）

ホヤ・V層・シラス)が混入することから、人為的に西側から埋めたと考えられる。

出土遺物は、白磁の玉縁(263)、端反り(264)、青磁(265)、土師器の塊(267・268)、壺(266・272～274)、黒色土器Aの塊(269～271)、小皿(275～280)等が出土している。

② 方形堅穴遺構2

本遺構はC-5区に検出した。規模は東西2m50cm、南北2m、深さ70cmの堅穴遺構である。堅穴内には14か所の柱穴が東西壁と南壁に沿って廻っている。柱穴の径は20cm前後のものと、10cm前後のものとある。この内P5・6は支え柱跡であるが、P12・13は梯子設置のピットと想定される。深さは20cm前後と10cm前後がある。

遺構の中央には何度も使用により形成されたと思われる硬化面があり、その上に炭化物が3cmほど集積している。しかし、炉として何度も焚いたにしては床が赤化しておらず焼土もわずかに分布する程度であるため、炭をおいたかもしくは弱火で燃やすといった作業を行った可能性が指摘できる。

埋土は総じてIc層を主体にアカホヤブロック、黒褐色(V層)ブロック、シラスブロックがまざらに混ざっている。よって人為的に埋められた可能性が高い。

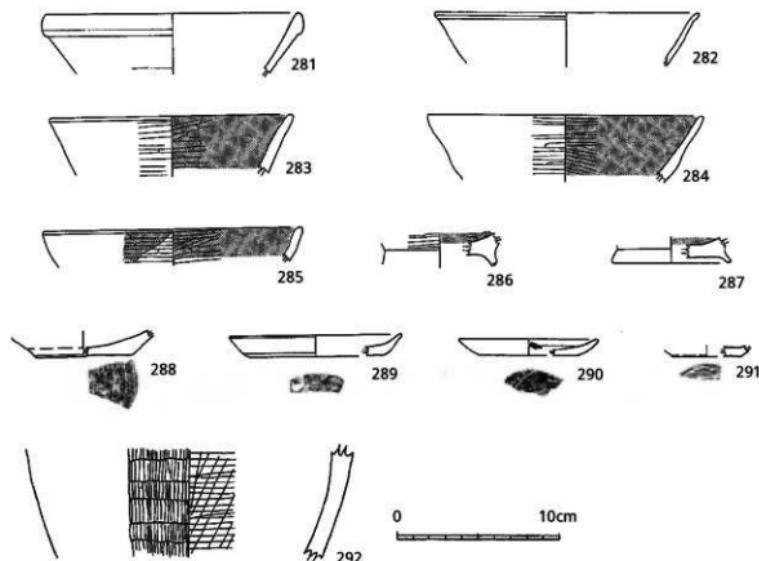
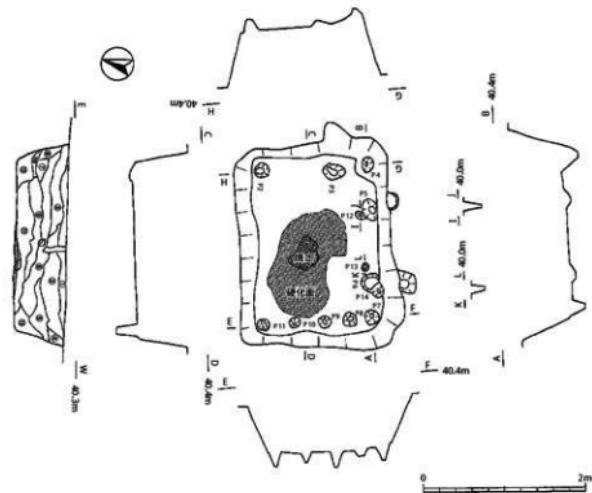
出土遺物は、白磁の玉縁(281)、端反り(282)、黒色土器Aの塊(283～287)、土師器の壺(288)、小皿(289～291)、滑石製石鍋(292)等が出土している。

③ 方形堅穴遺構3

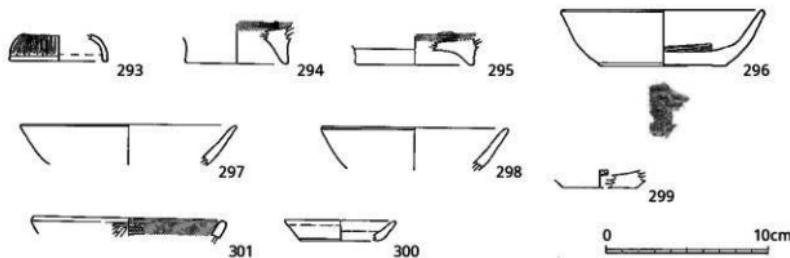
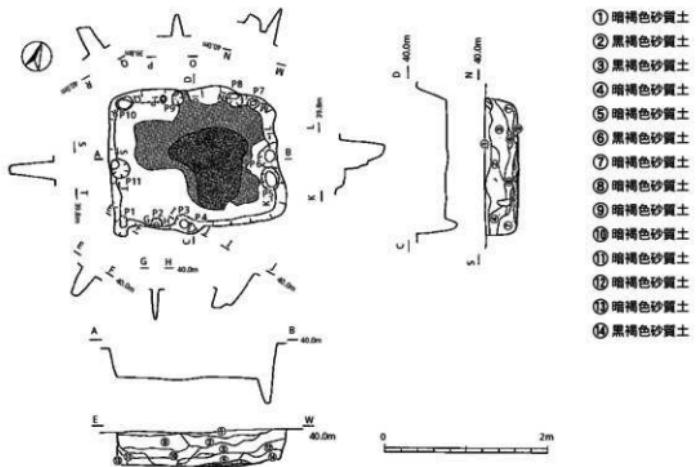
本遺構はC-5区に検出した。規模は東西2m10cm、南北1m70cm、深さ45cmの堅穴遺構である。堅穴内には11か所の柱穴が壁に沿って廻っている。柱穴の径は20cm前後のものと、10cm前後のものとあり、深さは30cm前後で深い。

遺構の中央には何度も使用により形成されたと思われる硬化面があり、その上に炭化物が3cmほど集積している。しかし、炉として何度も焚いたにしては床が赤化しておらず焼土もわずかに分布する程度であるため、炭を置いたかもしくは弱火で燃やすといった作業を行った可能性が指摘できる。

- ① 増褐色砂質土
- ② 黒褐色砂質土
- ③ 黒褐色砂質土
- ④ 黒褐色
- ⑤ 増褐色砂質土
- ⑥ 黒褐色砂質土
- ⑦ 増褐色砂質土
- ⑧ 増褐色砂質土
- ⑨ 增褐色砂質土
- ⑩ 増褐色砂質土
- ⑪ 増褐色砂質土
- ⑫ 黒褐色
- ⑬ 黒褐色
- ⑭ 硬化面



第67図 方形竪穴遺構2と出土遺物



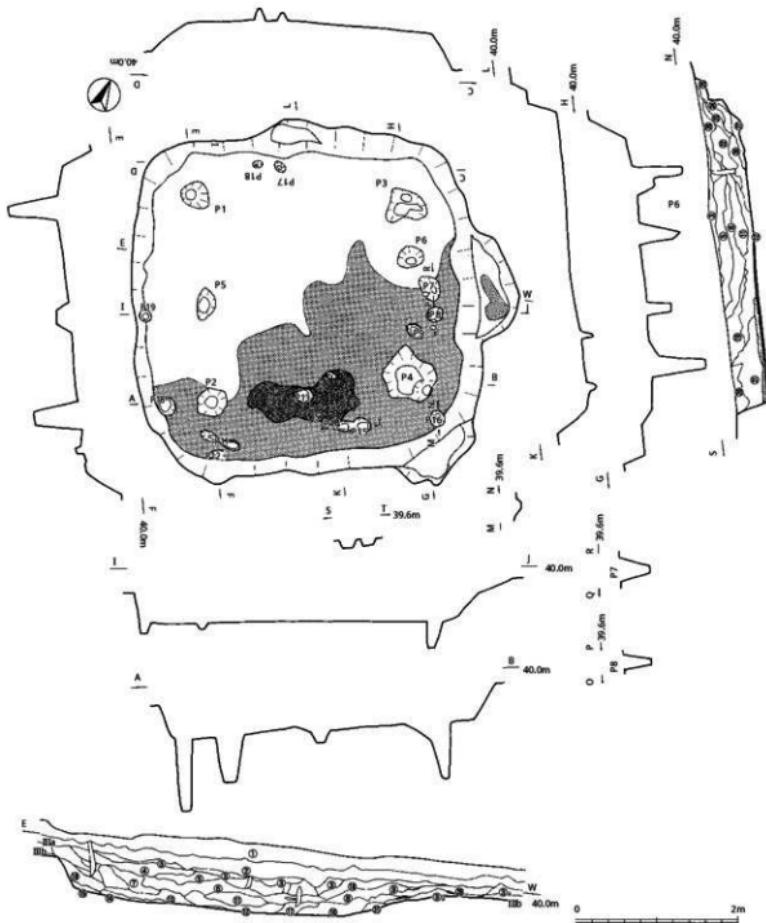
第68図 方形堅穴遺構3と出土遺物

埋土は総じてIc層を主体にアカホヤブロック、黒褐色（V層）ブロック、シラスブロックがまざっている。よって人為的に埋められた可能性が高い。

出土遺物は、青白磁（293）、黒色土器Aの塊（294・295・301）、土師器の塊（296～299）、小皿（300）等が出土している。

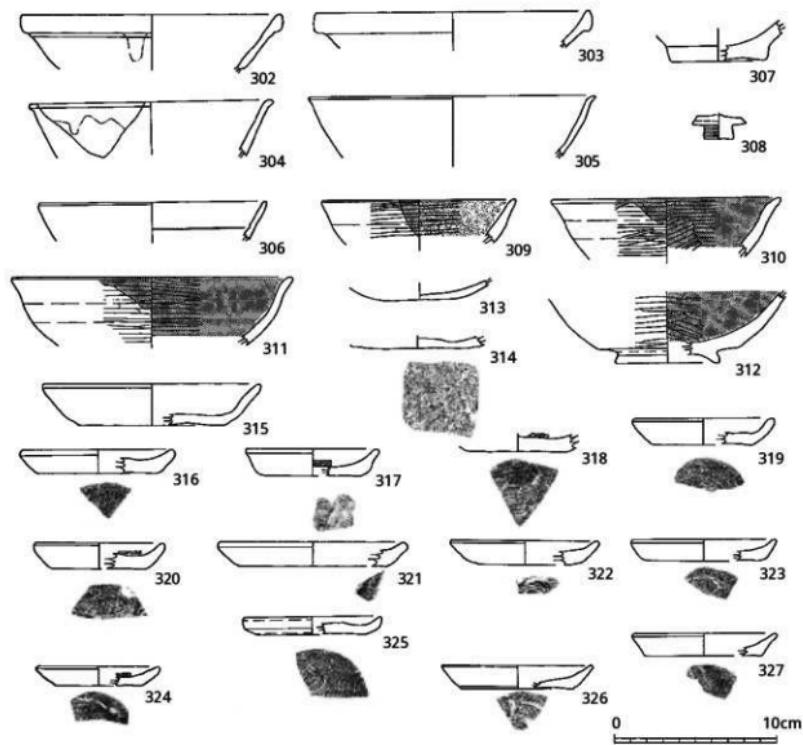
④ 方形堅穴遺構4

本遺構はD-5・6区に検出した。規模は東西4m25cm、南北4m20cm、深さ45cmの堅穴遺構である。堅穴内には18か所の柱穴がある。柱穴はP1～4の四隅が主柱跡と考えられ、径が30～40cm、深さが60～70cmである。他の柱穴の径は25cm前後のものと、10cm前後のものとある。この内P6・9は支え柱跡であるが、P7・8とP17・18は梯子施設の設置のピットとして想定され



- | | | | |
|-----------|--------|------------|--------|
| ① にじいろ褐色土 | ⑦ 暗褐色土 | ⑪ 暗褐色土 | ⑮ 黑褐色土 |
| ② 暗褐色土 | ⑧ 暗褐色土 | ⑫ 褐色土 | ⑯ 暗褐色土 |
| ③ 暗褐色土 | ⑨ 暗褐色土 | ⑩ 暗褐色土 | ⑰ 暗褐色土 |
| ④ 暗褐色土 | ⑪ 暗褐色土 | ⑪ 暗褐色土 | ⑱ 暗褐色土 |
| ⑤ 暗褐色土 | ⑫ 暗褐色土 | ⑭ 黄褐色土 | ⑲ 暗褐色土 |
| ⑥ 暗褐色土 | ⑬ 暗褐色土 | ⑮ にじいろ黄褐色土 | ⑳ 暗褐色土 |

第69図 方形竪穴構造4

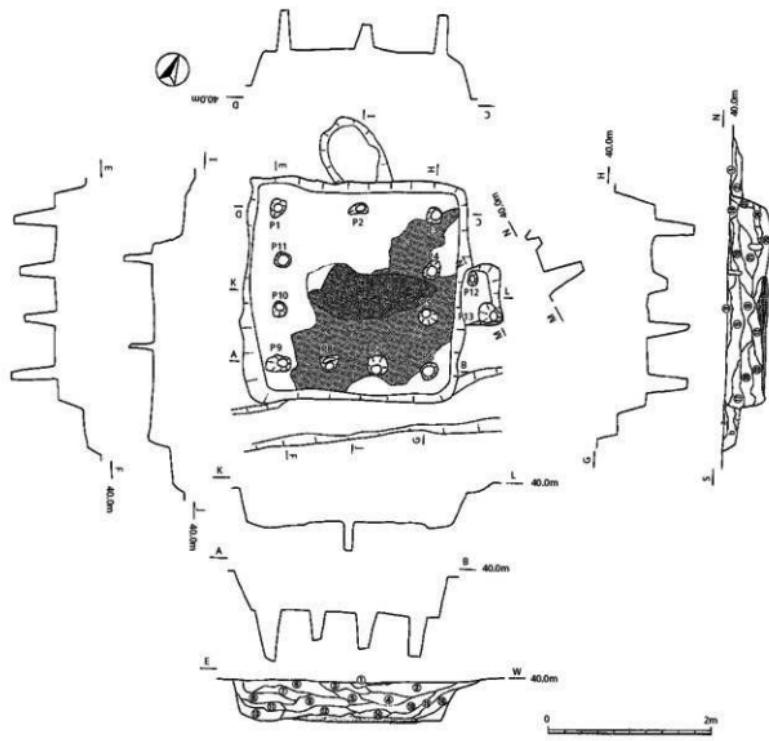


第70図 方形竪穴遺構4の出土遺物

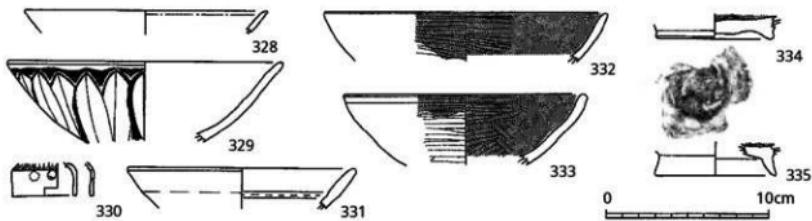
る。深さは前者が40cm前後と後者が10cm前後である。この梯子施設跡と思われる西側と北側に一段の段差施設があり、硬化面がみられる。

遺構の南側床面には何度も使用により形成されたと思われる硬化面があり、その上に炭化物が5cmほど集積している。しかし、炉として何度も焚いたにしては床が赤化しておらず焼土もわずかに分布する程度であるため、炭をおいたかもしくは弱火で燃やすといった作業を行った可能性が指摘できる。

埋土は総じてIc層を主体にアカホヤブロック、黒褐色(V層)ブロック、シラスブロックがま



- | | | | | | |
|--------|-----------|--------|--------|-----------|-----------|
| ① 増褐色土 | ⑥ にぶい黄褐色土 | ⑪ 増褐色土 | ⑯ 増褐色土 | ㉑ 増褐色土 | ㉖ 増褐色土 |
| ② 増褐色土 | ⑦ 増褐色土 | ⑫ 增褐色土 | ㉒ 増褐色土 | ㉓ 増褐色土 | ㉗ 増褐色土 |
| ③ 増褐色土 | ⑧ 増褐色土 | ㉓ 増褐色土 | ㉔ 増褐色土 | ㉔ にぶい黄褐色土 | ㉘ 増褐色土 |
| ④ 褐色土 | ⑨ にぶい黄褐色土 | ㉕ 増褐色土 | ㉖ 増褐色土 | ㉕ にぶい黄褐色土 | ㉙ にぶい黄褐色土 |
| ⑤ 増褐色土 | ⑩ 増褐色土 | ㉗ 増褐色土 | ㉗ 増褐色土 | ㉗ にぶい黄褐色土 | ㉚ にぶい黄褐色土 |



第 71 図 方形竪穴遺構5と出土遺物 (1)

だらに混ざっている。よって人為的に埋められた可能性が高い。

出土遺物は、白磁の玉縁(302・303)、端反り(304・305)、その底部(307)と蓋(308)、青磁(306)、赤色土器の塊(309)、黒色土器Aの塊(310~312)、土師器の坏(315)、小皿(313・314・316~327)等が出土している。

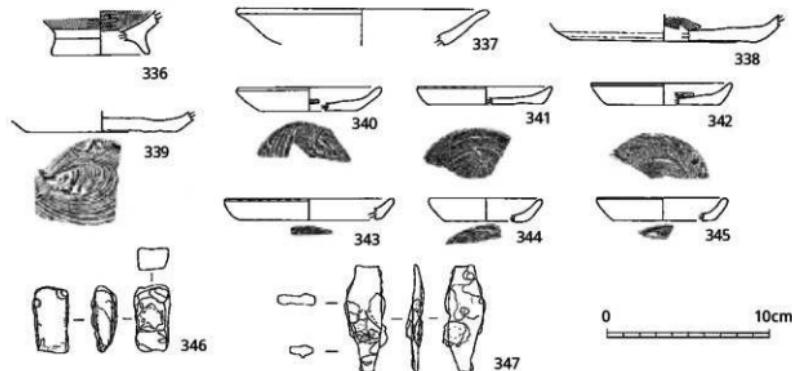
⑤ 方形豎穴遺構5

本遺構はD-6区に検出した。規模は東西2m70cm、南北2m70cm、深さ50cmの豎穴遺構である。豎穴内には14か所の柱穴が壁に沿って廻っている。柱穴の径は20cm前後で深さは深いもので50cm、浅いもので30cmである。また、東側に深さ15cmで70cm方形の段差がある。この中にはP12の浅い柱穴と深い柱穴P13がある。P12・13は深さで他の遺構と比較すると梯子設置のピットと想定されない。

遺構の中央には何度も使用により形成されたと思われる硬化面があり、その上に炭化物が11cmほど集積している。しかし、炉として何度も焚いたにしても床が赤化しておらず焼土もわずかに分布する程度であるため、炭をおいたかもしくは弱火で燃やすといった作業を行った可能性が指摘できる。

埋土は総じてIc層を主体にアカホヤブロック、黒褐色(V層)ブロック、シラスブロックがまだらに混ざっている。よって人為的に埋められた可能性が高い。

出土遺物は、白磁の口剥げ(328)、鏡蓮弁青磁(329)、青白磁の合子(330)、黒色土器Aの塊(332~336)、土師器の坏(331・337~339)、小皿(340~345)、鉄製品(346・347)等が出土している。347は鉄鎌と思われる。



第72図 方形豎穴遺構5の出土遺物(2)

ウ 土坑

III層上面の土坑と考えられるものは、古墳時代・古代の土坑が25基、中世I類が145基、中世II類が17基検出している。第73図はそれを示すもので、緑色の土坑が古墳・古代で、朱色が中世土坑I類、茶色が中世土坑II類とした。

① 土坑I

中世土坑I類は145基検出している。この土坑はドングリや穀物の種子類が埋土に混入していたものとそれに形態が類するものである。形態は、円形・椭円形・方形とがみられる。



第73图 土坑配置

この土坑の分布は第 73 図に示した通りで、山部の裾側に集中してみられる。そして、この 145 基はある程度まとまりがみられる。それを 4 つの区に分けた。

I 区は北部に集中し、D～F-5 区の建物跡と関係して列にみられるのが特徴である。掘立柱建物跡との関係は掘立柱建物跡に記載している。

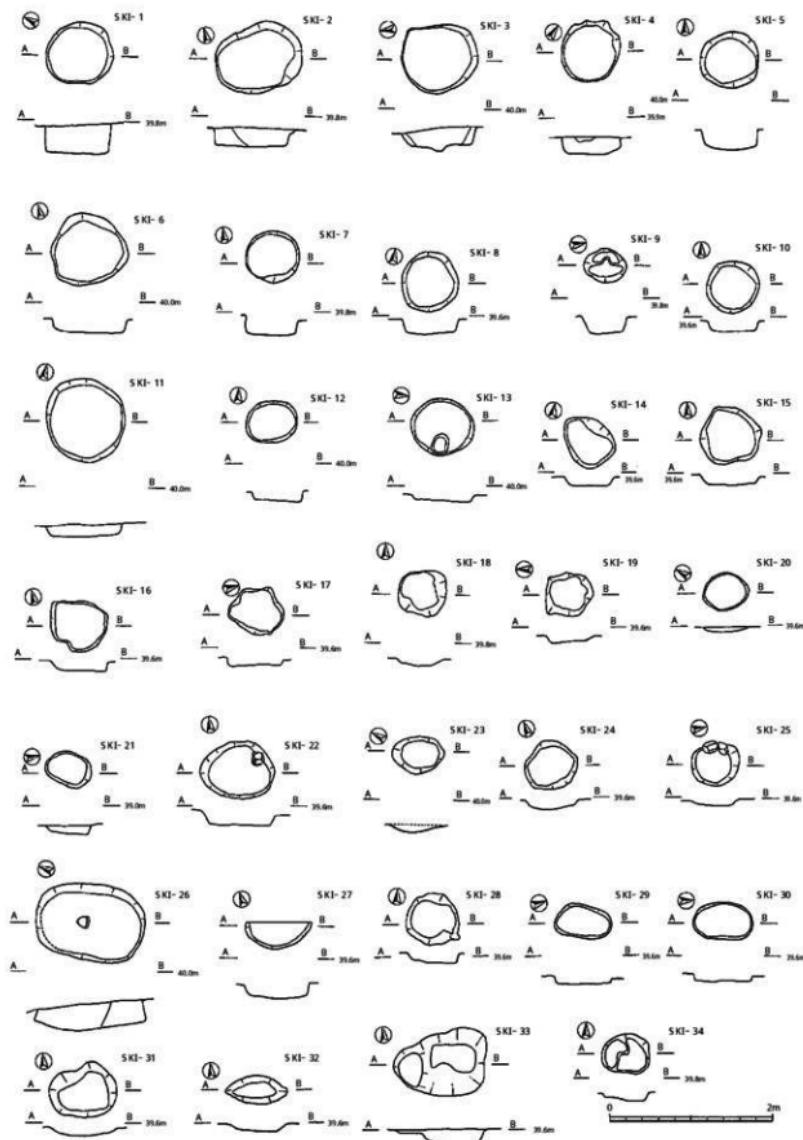
II 区は D～F-6～8 区にまとまっているものである。この地域の土坑は列を組む等の規則性はない。この地域には掘立柱建物跡がなく、溝 4 の先端地域になる。なお B～D-6・7 に散在するものはこの区に入れた。

III 区は C～F-8・9 区で溝 5 の南側に位置する。遺構との重なりと掘立柱建物跡 7 と畠跡である。

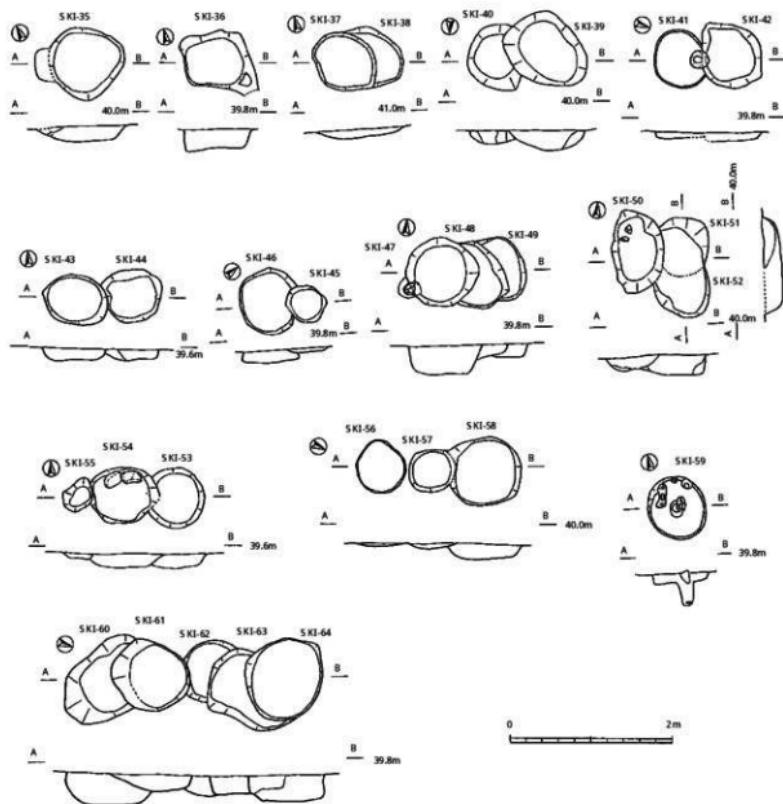
IV 区は C～E-10～14 区にあたる。この地域は溝 1・2 の東西に分布する。列を組むような規則性はない。

第 35 表 土坑 I 類の計測 (cm)

番号	区	長径	短径	深さ	形態	番号	区	長径	短径	深さ	形態
1	I	83	75	35	円形	24	I	65	60	9	円形
2	I	105	87	24	円形	25	I	58	48	6	円形
3	I	94	84	29	円形	26	I	134	95	22	円形
4	I	75	72	21	円形	27	I	81	33	17	円形
5	I	72	69	25	円形	28	I	65	63	13	円形
6	I	96	89	18	円形	29	I	70	42	10	梢円形
7	I	66	64	21	円形	30	I	74	45	9	梢円形
8	I	74	70	16	円形	31	I	84	69	9	円形
9	I	52	42	20	円形	32	I	76	36	14	梢円形
10	I	65	64	13	円形	33	I	112	83	25	梢円形
11	I	103	96	16	円形	34	I	58	48	12	円形
12	I	63	52	15	円形	35	I	94	89	18	円形
13	I	77	71	10	円形	36	I	85	74	26	方形
14	I	64	60	16	円形	37	I	74	71	11	円形
15	I	73	70	12	円形	38	I	71	34α	8	円形
16	I	69	63	12	方形	39	I	95	90	24	円形
17	I	69	56	11	円形	40	I	81	53α	16	円形
18	I	59	54	9	円形	41	I	72	58α	7	円形
19	I	58	54	11	円形	42	I	80	72	10	円形
20	I	56	48	6	円形	43	I	78	60	16	円形
21	I	55	43	10	円形	44	I	66α	65	14	円形
22	I	92	70	18	円形	45	I	51	45	5	円形
23	I	64	47	9	円形	46	I	56α	83	15	円形



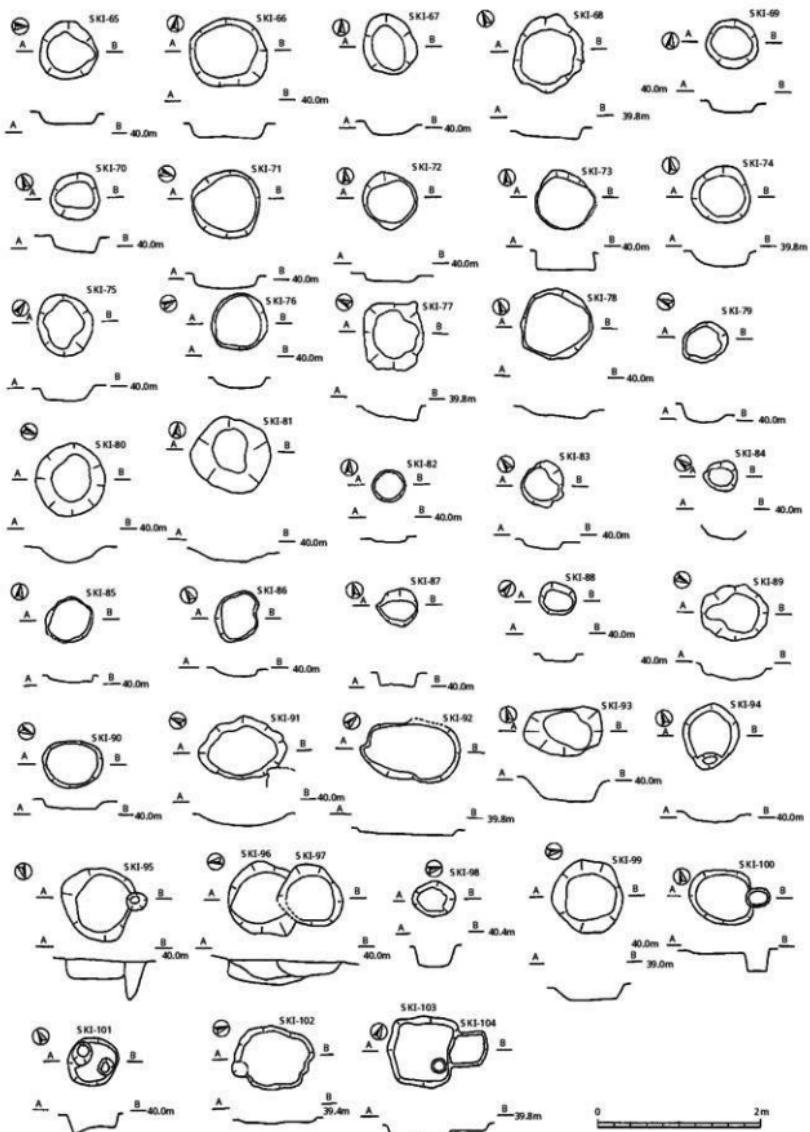
第74図 I区Ⅰ類の土坑(1)



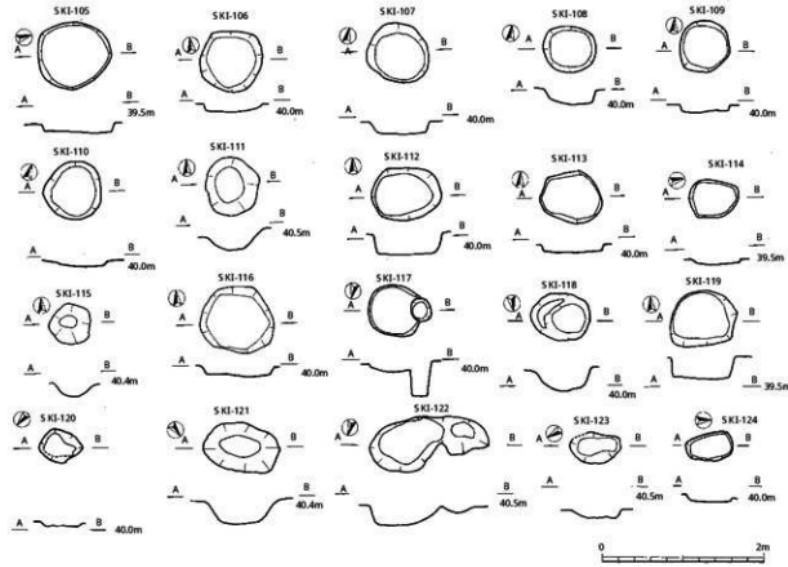
第75図 I区Ⅰ類の土坑(2)

第36表 土坑Ⅰ類の計測(cm)

番号	区	長径	短径	深さ	形態	番号	区	長径	短径	深さ	形態
47	I	90	84	35	円形	53	I	75	54α	17	円形
48	I	81	31α	19	円形	54	I	82	69	18	円形
49	I	78	27α	16	円形	55	I	37	37	6	円形
50	I	102	64	16	楕円形	56	I	66	62	4	円形
51	I	72	55α	25	円形	57	I	58	52	6	円形
52	I	67	52α	25	円形	58	I	84	81	20	円形



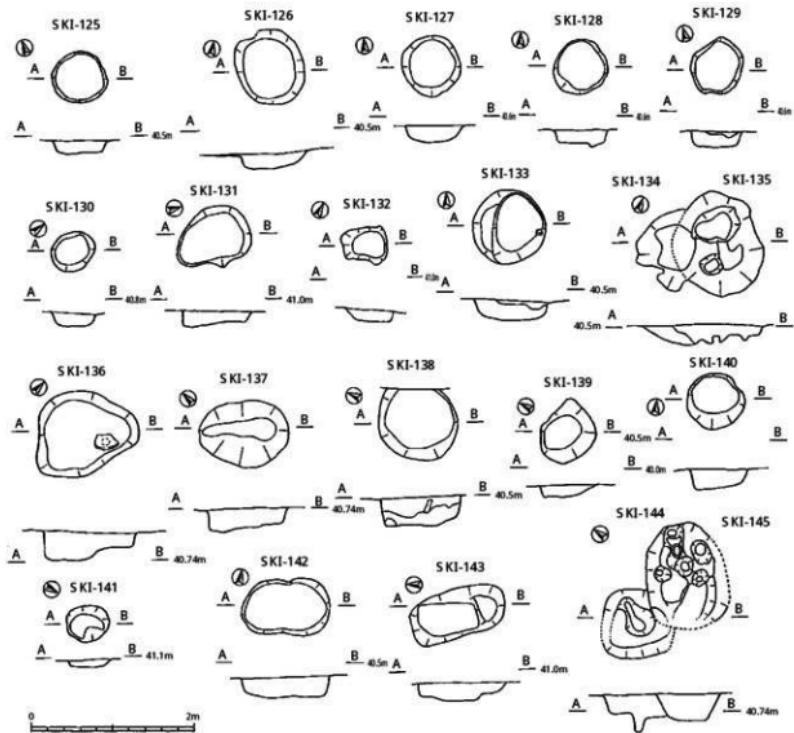
第 76 図 I 区 I 類の土坑



第 77 図 II 区 I 類の土坑

第 37 表 土坑 I 類の計測 (cm)

番号	区	長径	短径	深さ	形態	番号	区	長径	短径	深さ	形態
59	I	77	71	40	円形	74	II	72	70	18	円形
60	I	95	95	32	円形	75	II	75	68	17	円形
61	I	92	43 α	22	円形	76	II	69	68	13	円形
62	I	74	24 α	22	円形	77	II	82	74	19	方形
63	I	88	86	20	円形	78	II	89	86	11	円形
64	I	96	57 α	39	円形	79	II	55	50	16	円形
65	II	71	71	15	円形	80	II	88	85	20	円形
66	II	95	83	19	円形	81	II	98	91	12	円形
67	II	74	66	14	円形	82	II	44	41	5	円形
68	II	94	82	15	円形	83	II	57	51	10	円形
69	II	64	61	11	円形	84	II	47	42	13	円形
70	II	60	59	18	円形	85	II	57	55	8	円形
71	II	84	83	17	円形	86	II	59	52	10	円形
72	II	70	67	9	円形	87	II	51	47	18	円形
73	II	73	73	23	円形	88	II	45	40	10	円形



第 78 図 N 区 I 類の土坑

第 38 表 土坑 I 類の計測 (cm)

番号	区	長径	短径	深さ	形態	番号	区	長径	短径	深さ	形態
89	II	82	68	17	円形	99	II	90	87	18	円形
90	II	73	57	11	円形	100	II	80	67	5	円形
91	II	108	77	15	椭円形	101	II	62	59	25	円形
92	II	123	75	6	椭円形	102	II	98	80	5	円形
93	II	97	58	26	椭円形	103	II	87	84 α	19	方形
94	II	80	69	12	円形	104	II	45 α	43	8	方形
95	II	90	90	24	円形	105	III	90	84	13	円形
96	II	89	60 α	30	円形	106	III	77	75	11	円形
97	II	80	75	19	円形	107	III	76	73	16	円形
98	II	53	44	25	円形	108	III	64	57	20	円形

第39表 土坑Ⅰ類の計測(cm)

番号	区	長径	短径	深さ	形態	番号	区	長径	短径	深さ	形態
109	III	64	63	10	円形	128	IV	68	67	21	円形
110	III	71	71	8	円形	129	IV	70	63	20	円形
111	III	72	66	20	円形	130	IV	54	49	16	円形
112	III	87	65	26	円形	131	IV	85	76	20	円形
113	III	75	65	9	円形	132	IV	54	46	15	円形
114	III	62	48	7	円形	133	IV	91	89	25	円形
115	III	50	50	16	円形	134	IV	96	44α	25	円形
116	III	92	82	13	円形	135	IV	126	108	24	円形
117	III	62	53α	12	円形	136	IV	123	105	25	円形
118	III	73	58	28	円形	137	IV	110	82	29	円形
119	III	79	67	27	円形	138	IV	98	87	36	円形
120	III	53	42	5	円形	139	IV	76	69	14	円形
121	III	95	61	30	椭円形	140	IV	71	69	25	円形
122	III	147	66	23	椭円形	141	IV	52	45	10	円形
123	III	62	40	11	椭円形	142	IV	107	70	25	円形
124	III	59	36	7	椭円形	143	IV	110	62	22	円形
125	IV	64	58	15	円形	144	IV	85	63α	46	円形
126	IV	92	84	19	円形	145	IV	130	100	33	円形
127	IV	75	73	20	円形						

中世土坑II類は平坦地の東側に17基検出している。この中で集中地域はC-9区、C・D-12区である。また、建物遺構との重なりは、掘立柱建物跡1・21に土坑II 1・2・3・5・8が、壇跡に土坑II 13がみられる。

この土坑はA・B・Cに分別できる。Aは土坑IIの1~5で焼土及び灰と焼け石があるもの、Bは土坑IIの6~9で副葬品があるもの、Cは土坑IIの10~17で土坑の中に深い柱穴が1か所あるものである。

② 土坑II A類（土坑II類A）

土坑II-1はC・D-12区に検出している。形態は長軸135cm、短軸85cm、深さ33cmの長方形で、両端に深さ20cmのピットがある。埋土は黒褐色層が2層に分かれ、なお、上部には焼土や礫がみられる。

土坑II-2はC・D-12区に検出している。形態は長軸60cm、短軸40cm、深さ21cmの椭円形で、両端が深くなっている。埋土は黒褐色層が2層になり、上部に礫がみられる。遺物は380~382で土師器の壺が出土している。

土坑II-3はC・D-12区に検出している。形態は長軸85cm、短軸75cm、深さ18cmの円形で、

両端に深さ 20 cm のピットがある。埋土は黒褐色層の中に一部焼土がみられる。

土坑 II-4 は E-3 区に検出している。形態は長軸 125 cm, 短軸 80 cm, 深さ 38 cm のだるま形で、北側は深さ 13 cm の段がある。埋土は黒褐色層が 3 層に分かれ、上部には焼土がみられる。なお、埋土上部の南には礫がみられる。約 50 cm と 25 cm の礫がある。

土坑 II-5 は C-D-12 区に検出している。形態は長軸 95 cm, 短軸 83 cm, 深さ 25 cm の長方形である。埋土は茶褐色層がブロック状に分かれ、焼土と灰が多くみられる。なお、東南部には 10~40 cm の焼けた円弧状の礫列がみられ、この中には土師器等の遺物も含まれている。この 2 つの遺構は炉跡と焼土・灰原の関係と考えられる。出土遺物は 383~386 で、土師器の壺と土師器の小皿である。

③ 土坑 II B 類（土坑 II 類B）

土坑 II-6 は C-5 区に検出している。形態は長軸 165 cm, 短軸 80 cm, 深さ 20 cm のだるま形で、南の円形が大きい土坑である。この土坑の方位軸は北東と南西である。遺物は、南側の一段上がった円形部の床面に白磁が完全な形で出土している。床面であるため副葬関係に近いと思われる。

土坑 II-7 は C-7 区に検出している。形態は長軸 135 cm, 短軸 86 cm, 深さ 20 cm の梢円形で、北の円部が大きい土坑である。この土坑の方位軸は北東と南西である。遺物は、北側の円形部の床面に白磁が完全な形で出土している。床面であるため副葬関係に近いと思われる。

土坑 II-8 は C-6 区に検出している。形態は長軸 250 cm, 短軸 100 cm, 深さ 30 cm の長方形で、南の円形が大きい土坑である。この土坑の方位軸は北東と南西である。遺物は、北側の中央部の床面に白磁・土師器等が完全な形で出土している。床面であるため副葬関係に近いと思われる。出土遺物は 348~364 である。348 は白磁の玉縁、349 は白磁の端反りである。350・351 が土師器の壺で、352~363 が土師器小皿である。この中で 363 は黒色土器 B である。364 は鉄製品で鐵の柄部と思われる。

土坑 II-9 は D-12 区に検出している。形態は長軸 105 cm, 短軸 65 cm, 深さ 14 cm の略長方形である。この土坑の方位軸は北東と南西である。遺物は、中央部南側の床面に礫と古錢が出土した。これらは床面で検出したため副葬関係に近いと思われる。出土遺物は 387~394 で古錢である。古錢は、394 が 2 枚であるため全部で 9 枚である。古錢の字は洪武通寶、永樂通寶等が読みとれる。

④ 土坑 II C 類（土坑 II 類C）

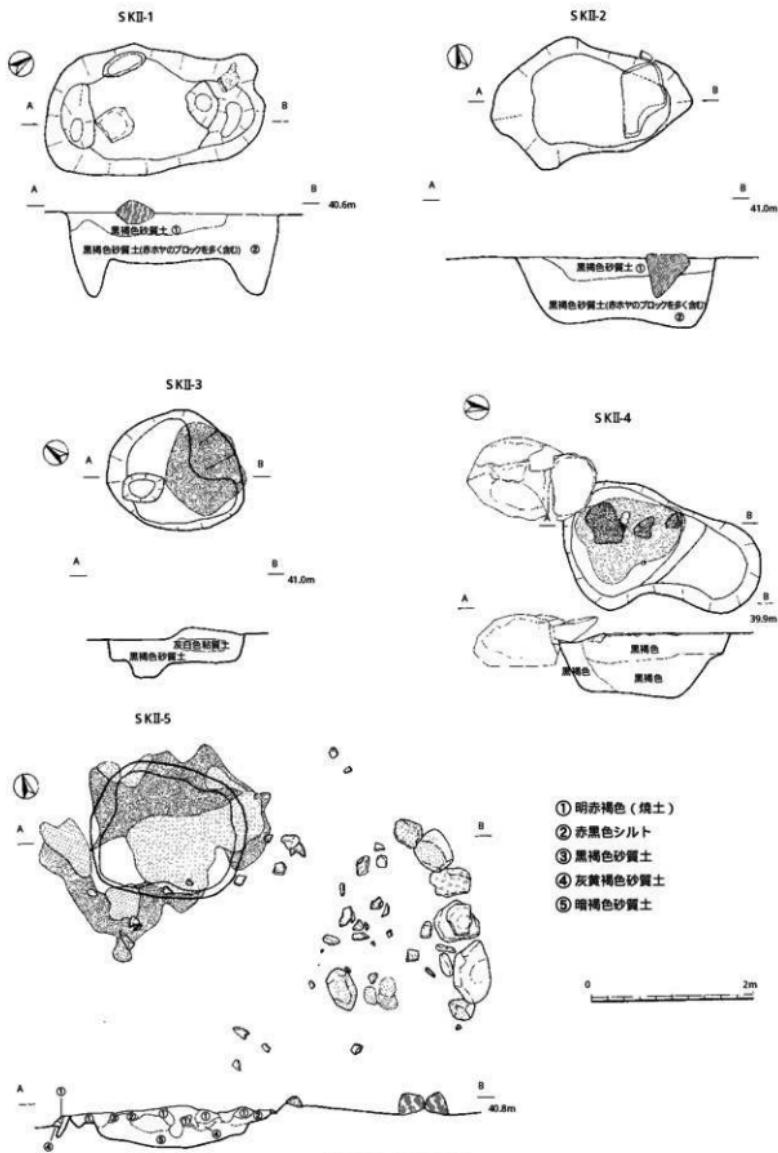
この類は C-9 区の畠東側に 10・11・13・14 がまとまっている状態が特徴である。12 は C-12 区、15 が D-4 区、16 が D-6 区、17 が D-8 区に一基ずつ散発的に検出している。

土坑 II-10 の形態は長軸 110 cm, 短軸 70 cm, 深さ 30 cm の梢円形である。この土坑の方位軸は北東と南西である。この土坑の南側には径 15 cm 深さ 45 cm のピットがある。出土遺物は白磁の碗が土坑上面に出土しているが、上面であるためこの遺構とは関係が薄いと思われる。

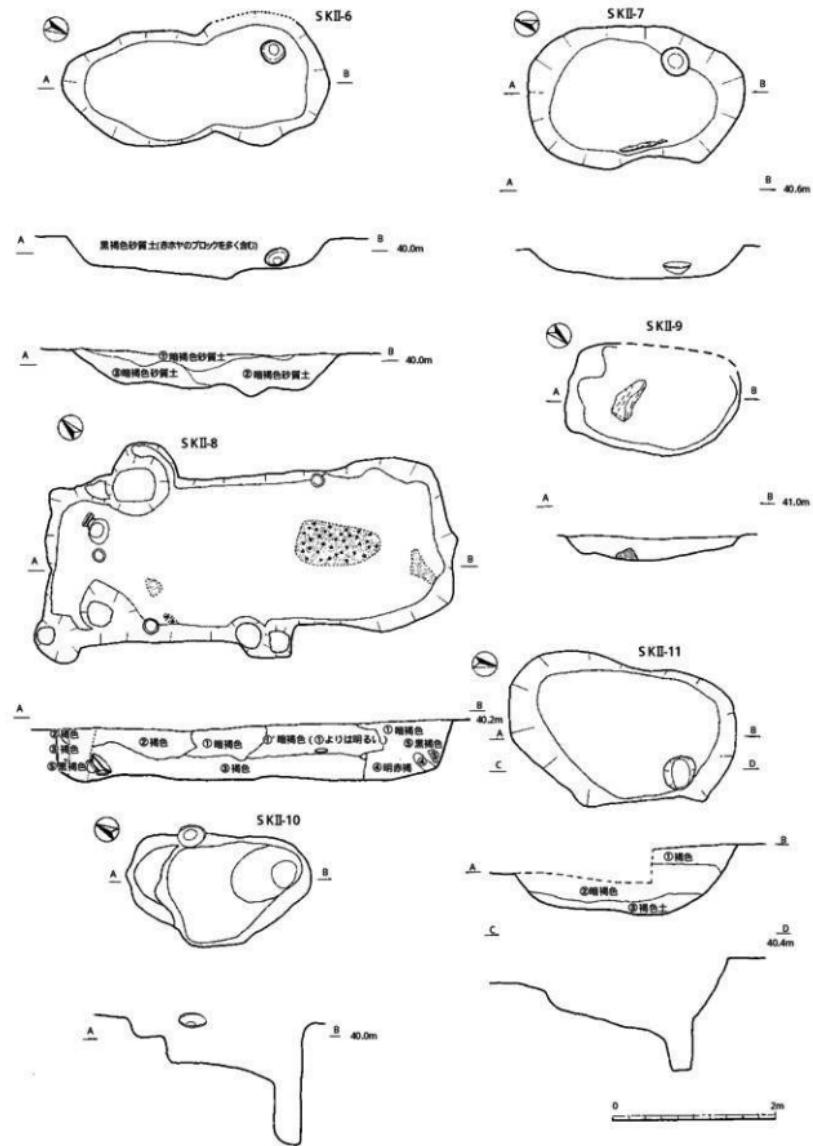
土坑 II-11 の形態は長軸 140 cm, 短軸 90 cm, 深さ 40 cm の梢円形である。この土坑の方位軸は南北である。この土坑の北側には径 18 cm 深さ 30 cm のピットがある。遺物の出土はない。

土坑 II-12 の形態は長軸 150 cm, 短軸 90 cm, 深さ 55 cm の梢円形である。この土坑の方位軸は南北である。この土坑の北側には径 30 cm 深さ 45 cm のピットがある。遺物の出土はない。

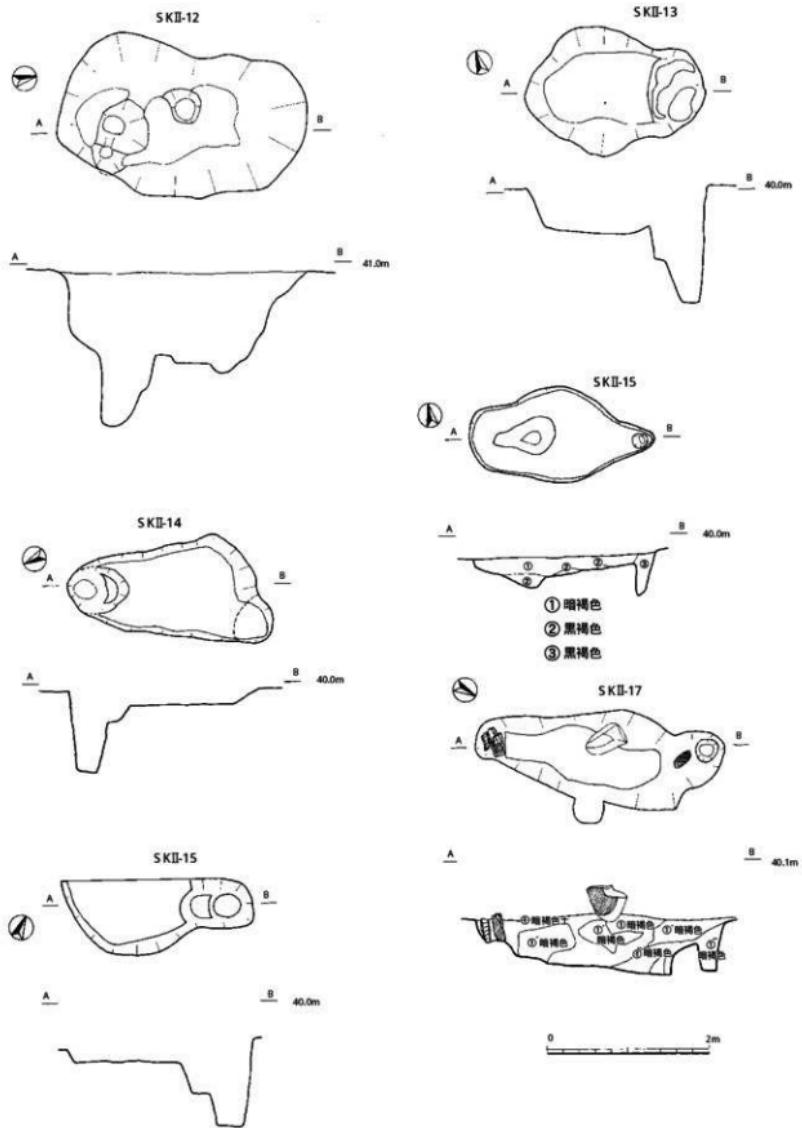
土坑 II-13 の形態は長軸 110 cm, 短軸 80 cm, 深さ 30 cm の梢円形である。この土坑の方位軸は



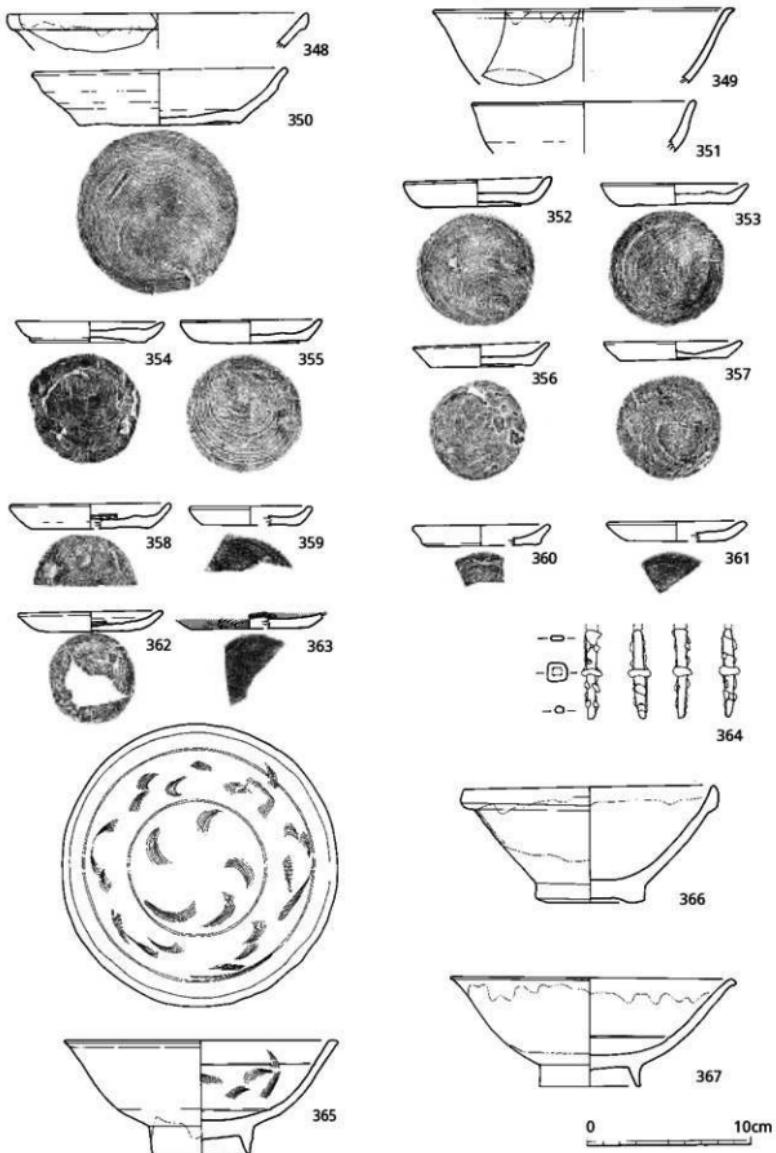
第79図 土坑Ⅰ類A



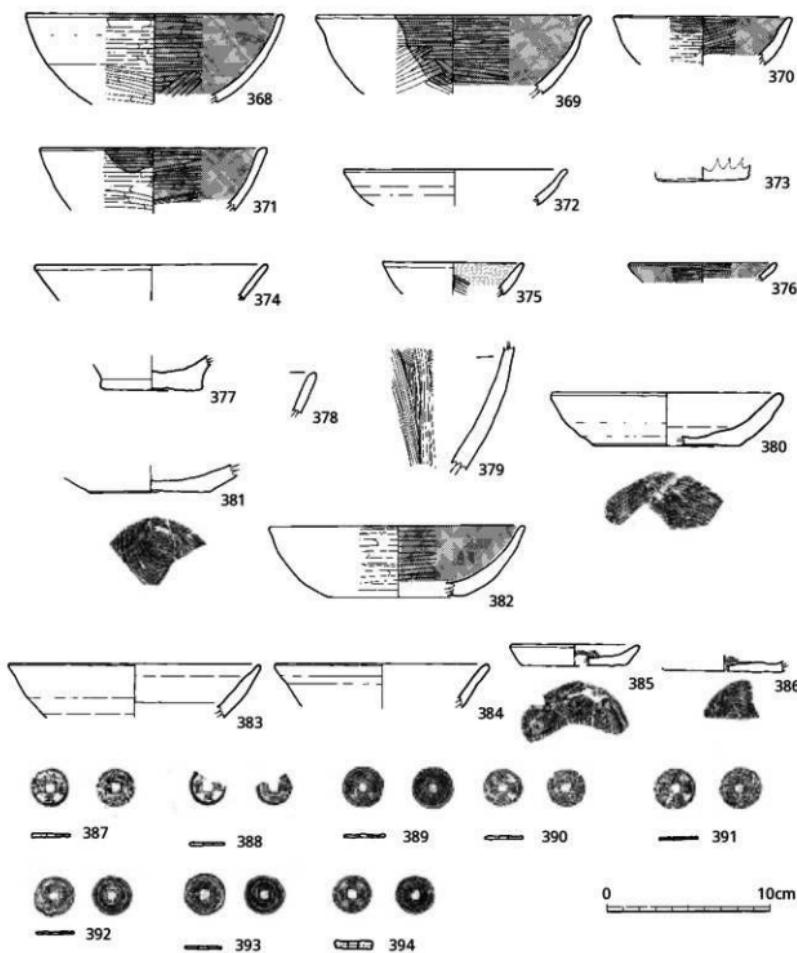
第80図 土坑Ⅱ類B(6~9)、C(10~11)



第 81 図 土坑 I 類C



第82図 土坑I・II類の出土遺物(1)



第 83 図 土坑 I・II 類の出土遺物 (2)

東西である。この土坑の東側には径 32 cm 深さ 50 cm のピットがある。遺物の出土はない。

土坑 II-14 の形態は長軸 120 cm, 短軸 65 cm, 深さ 20 cm の楕円形である。この土坑の方位軸は南北である。この土坑の北側には径 20 cm 深さ 45 cm のピットがある。遺物の出土はない。

土坑 II-15 の形態は長軸 115 cm, 短軸 60 cm, 深さ 20 cm の楕円形である。この土坑の方位軸は東西である。この土坑の東側には径 10 cm 深さ 20 cm のピットがある。遺物の出土はない。

土坑II-16の形態は長軸115cm、短軸50cm、深さ15cmの楕円形である。この土坑の方位軸は南北である。この土坑の東側には径40cm深さ40cmのピットがある。遺物の出土はない。

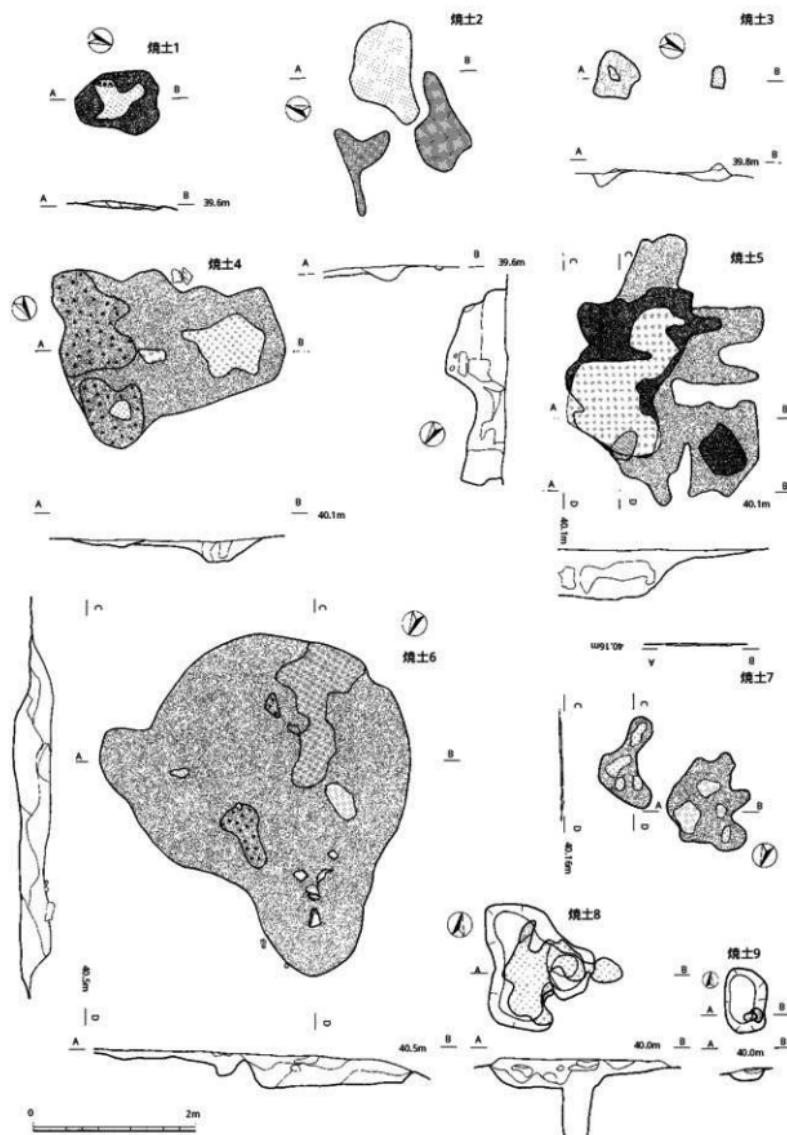
土坑II-17の形態は長軸155cm、短軸60cm、深さ35cmの楕円形である。この土坑の方位軸は南北である。この土坑の北側には径15cm深さ18cmのピットがある。遺物は南側に馬の歯が出土している。

エ 焼土（第29図全体配置図内に位置は示す）

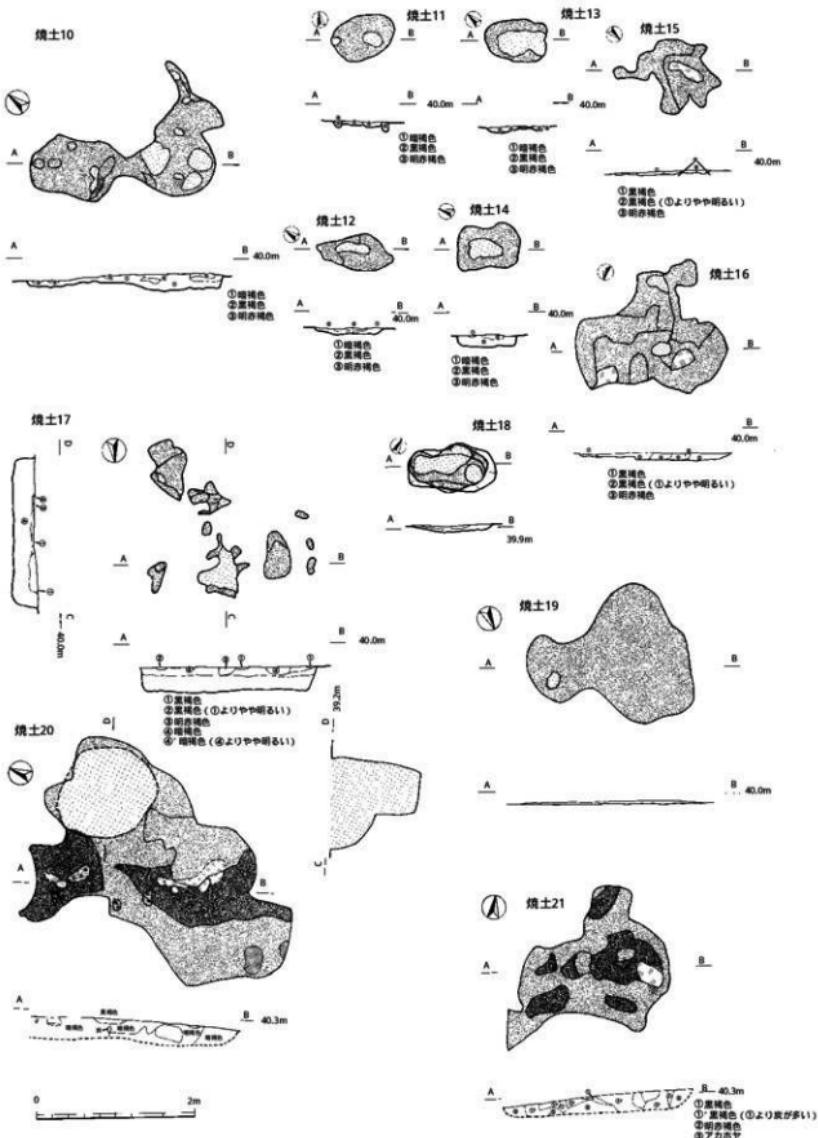
焼土は21か所を確認できた。この内、掘立柱建物跡との重なりが認められるものは、焼土4が掘立柱建物跡4、焼土5が掘立柱建物跡16・20、焼土6が掘立柱建物跡15、焼土11・12・13・14が掘立柱建物跡24、焼土15・16・17が掘立柱建物跡17、焼土19が掘立柱建物跡22である。建物跡と近接するものは焼土3・7・9で、離れているものは焼土1・2・20・21である。調査時は建物と関係がみられるのではないかとの目で実施したが、構造との関係においてばらつきがあり、確証は得られなかった。なお、報告書作成時でも遺跡の中の分類はできなかった。

第40表 焼土計測等一覧(cm)

No.	検出区	長軸	短軸	厚深	灰混入	炭混入	その他
1	D-2	44	37	3	有	有	
2	D-3	120	80	9	有	無	3か所所有り
3	F-3	80	30	8	有	無	2か所所有り
4	F-5	140	110	12	有	有	
5	C-4	170	110	30	有	無	土坑有り
6	D-4	200	190	22	有	有	土師器出土
7	D-4・5	90	70	2	有	無	
8	D-6	80	70	16	有	無	ピットと重なる。
9	D-6	40	20	70	有	無	
10	D-6	120	80	10	有	無	
11	D-6	40	30	3	有	無	
12	D-6	40	24	4	有	無	
13	D-7	37	28	4	有	無	
14	D-7	40	30	7	有	無	
15	D-7	60	45	2	有	無	
16	D-7	95	82	6	有	無	
17	D-7	100	90	5	有	無	9か所に分散
18	E-7	60	30	4	有	無	
19	C-7	100	80	2	有	無	
20	C-9	170	150	10	有	有	土坑有り
21	C-9	100	90	12	有	無	



第 84 図 燃土 (1)



第 85 図 燃土 (2)

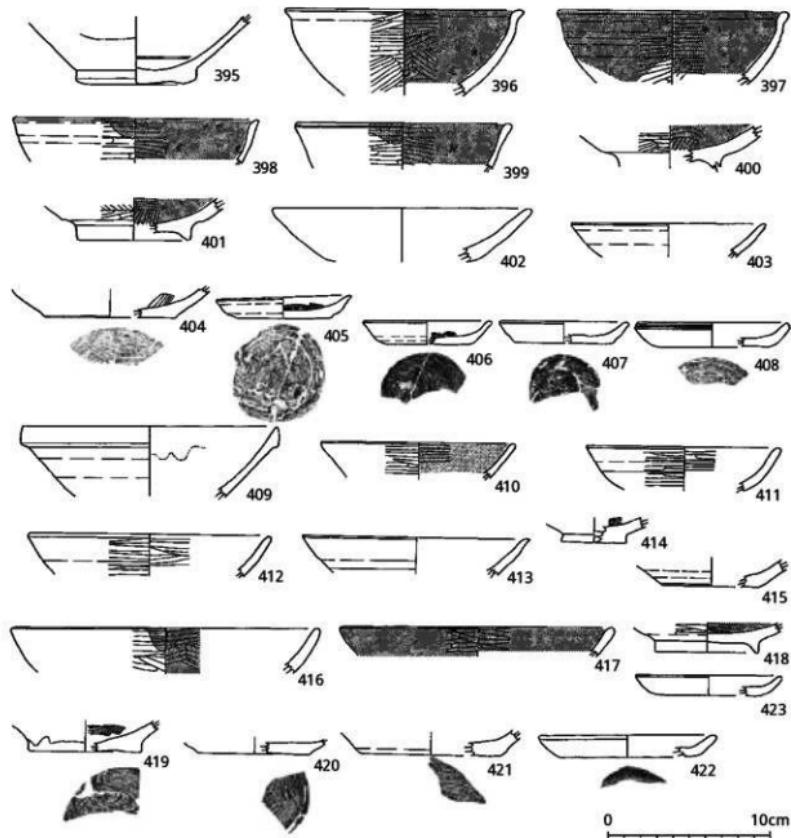
出土遺物 (395~422)

焼土で遺物を出土したのは焼土4, 焼土5, 焼土8, 焼土17であった。

焼土4は404の土師器壊が出土している。

焼土5は395~403, 405~408である。395は白磁V類の底部で, 396~401は黒色土器A類の壊にあたる。402・403は土師器の壊にあたる。405~408は土師器小皿にあたる。

焼土8は410・411・413~415である。410は黒色土器A類の壊にあたる。411・413~415は土師器の壊である。焼土17は409・412・416~423である。409は白磁V類にあたる。412・419~421は土師器の壊である。416・418は黒色土器A類の壊。417は黒色土器B類の壊である。422・423は土師器の小皿である。



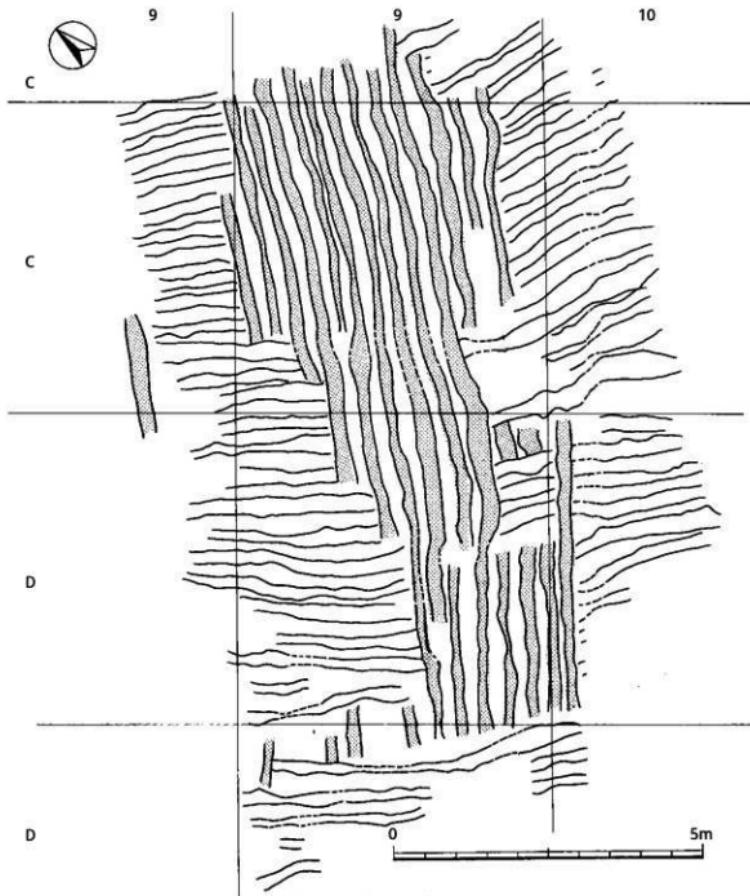
第86図 焼土の出土遺物

才 崩跡

崩跡は大きく2面に検出した。第1面は中世遺構と同面でC-D-9・10区に検出し、第2面はその面を少々掘り下げる面である。第1面は第87図が全体で、東西12m、南北8mである。第89・90図は第1歓と第2歓を分けた図である。

第1歓間は東西方向に走り、東西11m、南北4mである。歓間は10~30cmで平均20cmである。歓の長さは東部が4mと中央部が3mと西部が2m80cmである。歓間の深さは5~10cmである。

第2歓間は南北に走り、東西12m、南北8mである。歓間は10~30cmで平均20cmである。この歓間は第1歓の下から検出し、歓の途切れが少ないのが特徴である。

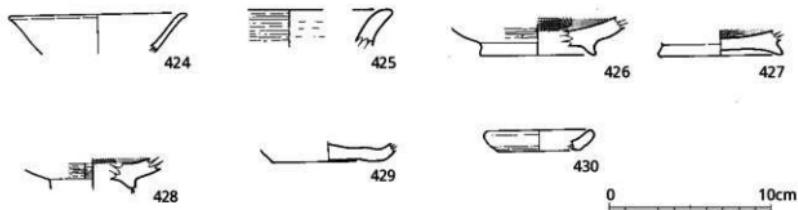


第87図 崩跡Iの全体図

島 I の第2畝間は溝 2・3 の上から検出した。第29図ではその重なりを示している。よって、島 I は溝 2・3 が埋まつてからの時期と考えられる。

島跡 I の出土遺物 (第88図 424~430)

424 は畝間から検出したもので、白磁の端反りである。425 は、古代土師器の甕。旧生活面から掘り上がったと思われる。426 は土師器の塊である。427・428 は黒色土器 A の塊である。429 は土師器の壊である。430 は土師器の小皿である。



第88図 島跡の出土遺物

島跡 II (第91図)

島 II は E・F-3 区から D-10 区にかけて中世面より少し下に検出した。畝間は東西方向に 3 区が 9m, 4 区が 5m, 5 区が 7m, 6 区が 7m, 7 区が 9m, 8 区が 12m, 9 区が 15m, 10 区が 4m である。これをみると 9 区付近が長く 4 区付近が短い。畝間の幅は 10~50cm で平均 20cm である。

この畝間は出土遺物で特定できず、時期が確定しない。ただ、溝 4・5、土坑 II 類 17 等が畝間を切っているため、中世遺構より少し古いことが言える。

力溝

溝は第29図の全体図で示しているように、全域にかけて7本が検出している。溝 1 は D-11 区より、C-14 区にかけて直線的である。溝 2 は C-D-9・10・11 区にあり、L 字形に掘られている。溝 3 は B-E-9~10 区に溝 2 と重なっている。溝 4 は C-E-6 区に直線状に検出した。溝 5 は C-E-7・8 区に直線状に検出した。溝 6・7 は B-3・4 区に途切れ状態で検出した。

これらの他の遺構との新旧関係は、溝 3 の跡に溝 2 が掘り返された状態で検出し、溝 4 は方形堅穴 5 より古い状態で検出し、溝 5 は掘立柱建物跡 26 との同時期が比定できる状態で検出している。

溝 1 は長さ 35m 最大幅 190cm、最大底幅 60cm、最大深さ 80cm である (第92図)。北端は大石から始まり、南は細くなっている。この溝は山裾と平行に造られ、掘立柱建物跡 1 とも平行である。

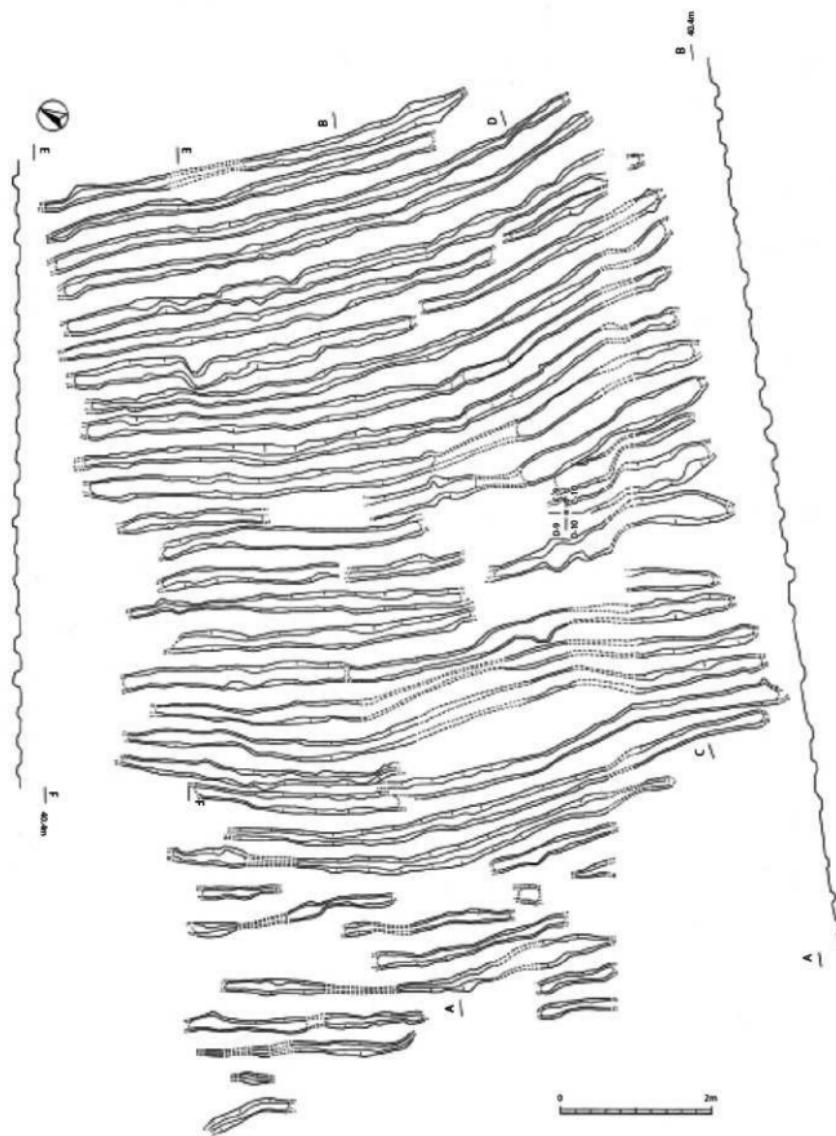
溝 2 は南北 15m、東西 17.5m、最大幅 2m 40cm、最大底幅 120cm、最大深さ 80cm である。形態は、山部の裾に平行に走り、平坦部が広くなった所で、直角に折れている。

溝 3 は溝 2 の折れた溝とかさなり、幅は広くなっている。溝 2 がある所は溝 2 の計測でしかできないが、重なっていない D-10 区は溝 3 そのものである。長さは 21m の内 5m が確認できる。最大幅は 190cm で、最大深さは 30cm である。溝 2 との違いは深さである。

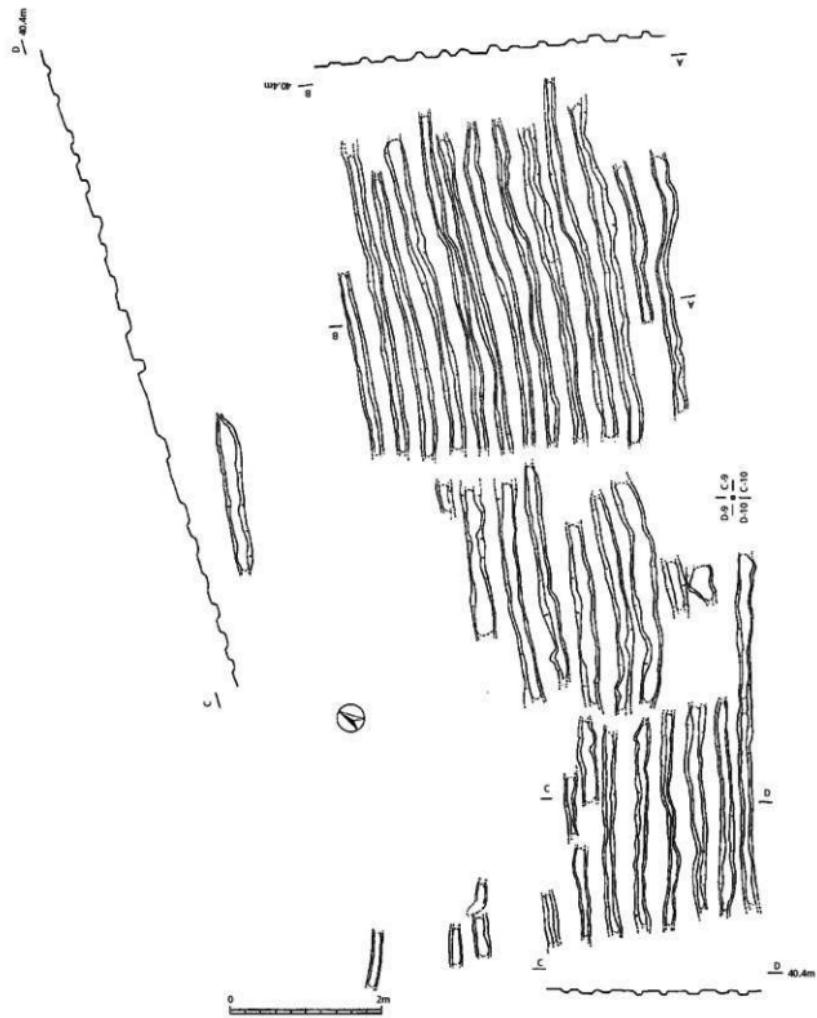
溝 4 は浅い溝で、長さは 29m、最大幅 80cm、深さ 15cm である。部分的に硬化面はみられる。

溝 5 は浅い溝で、長さは 31m、最大幅 80cm、深さ 15cm である。部分的に硬化面はみられる。

溝 6 は浅い溝で、長さ 6m、幅 60cm、深さ 15cm である。溝 7 は長さ 2m で溝 6 と同じである。

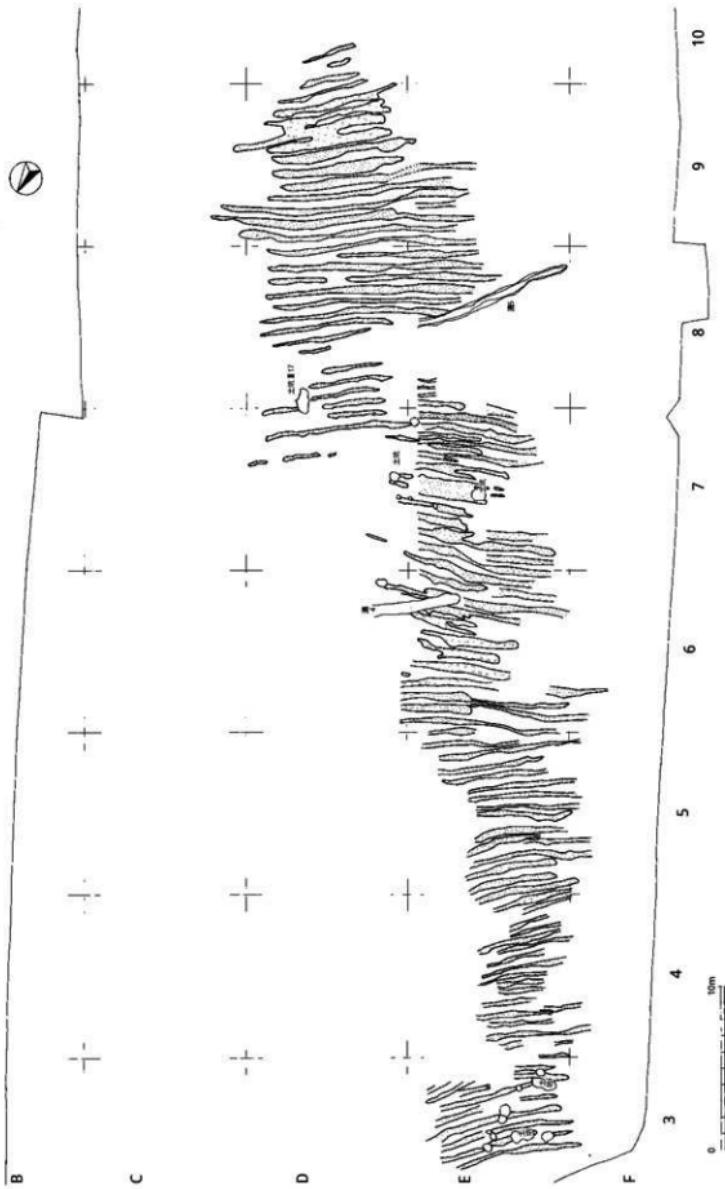


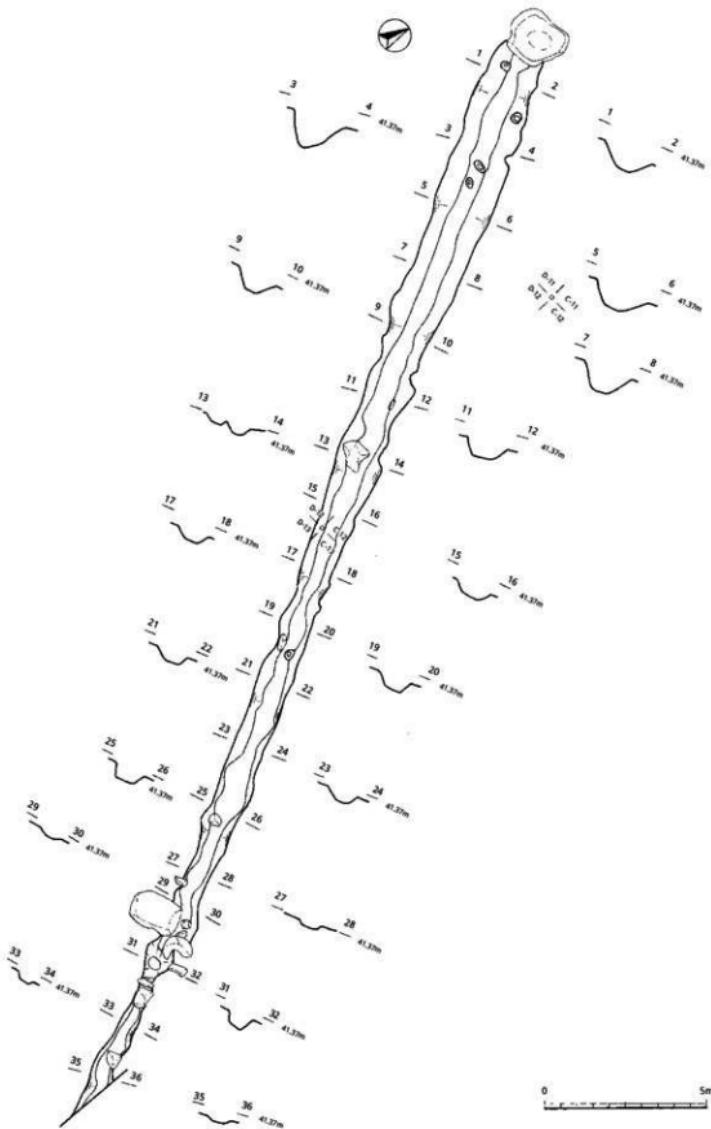
第89図 崩跡I-1(第2段間)



第90図 畦跡I-2(第1段間)

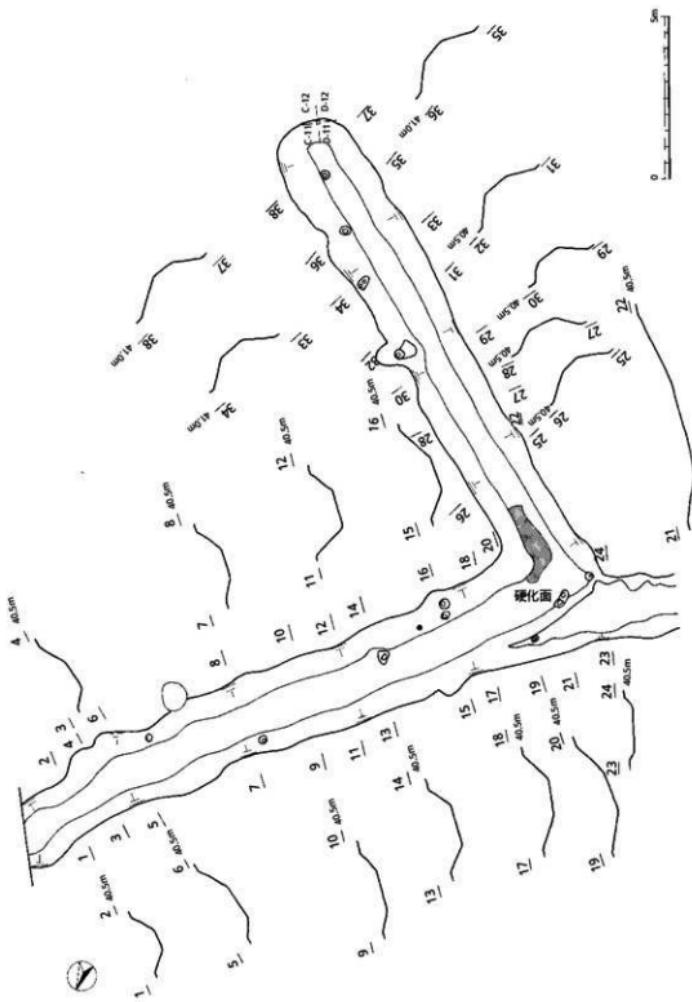
第91図 菌物 I

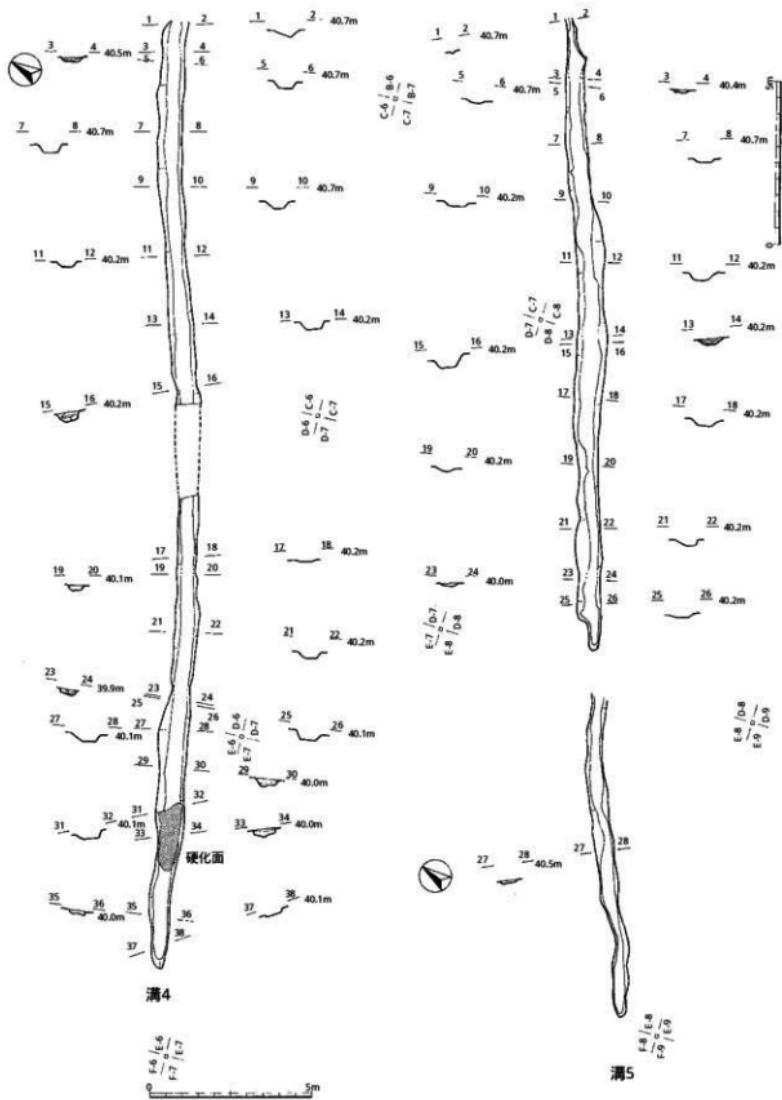




第92図 満1

第93図 潟2-3

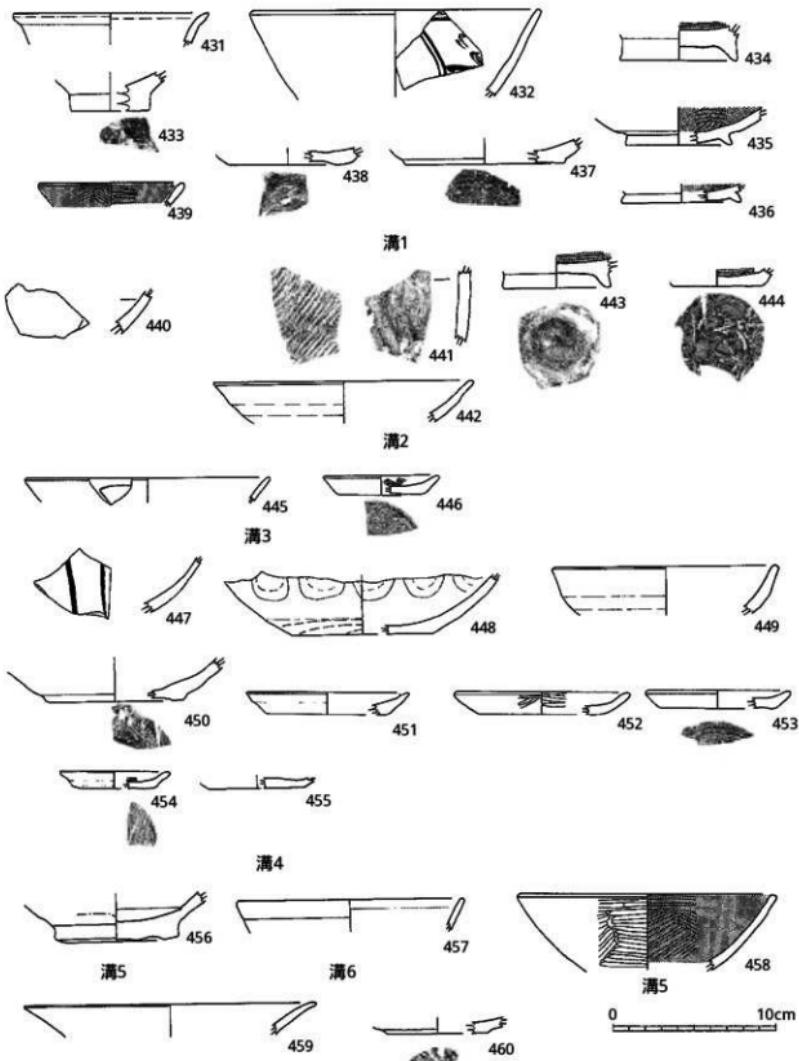




第94図 溝4・5

溝1～6の出土遺物（第95図 431～460）

溝1は431～439である。431は白磁の端反りの碗である。432は青磁Iの碗である。



第95図 溝1～6の出土遺物

433・437・438は土師器の塊、坏、小皿である。434～436は黒色土器Aの塊で439は同Bの小皿である。

溝2は440～444である。440は青磁碗で錦蓮弁文がある。441は中世須恵器である。442は土師器の坏で、443は黒色土器Aの塊。444は土師器の小皿である。

溝3は445の白磁碗、446の土師器小皿が出土している。

溝4は447～455が出土している。447は錦蓮弁文の青磁碗で、448は中国陶器の壺底部である。449～451・453～455は土師器で、449・450は坏ほか小皿である。452は黒色土器Bの小皿である。

溝5は456の白磁碗の底部、黒色土器Aの塊が出土している。

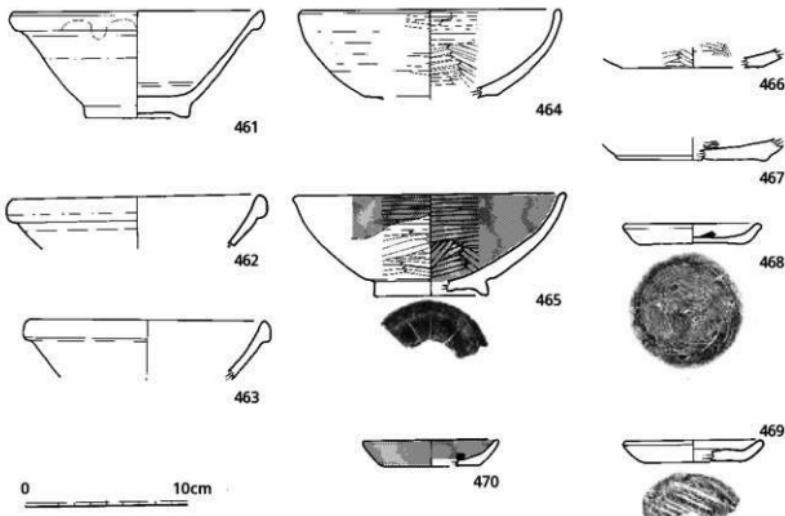
溝6は457の青磁とほか土師器が出土している。

キ 柱穴遺構（第96～101図 461～525）

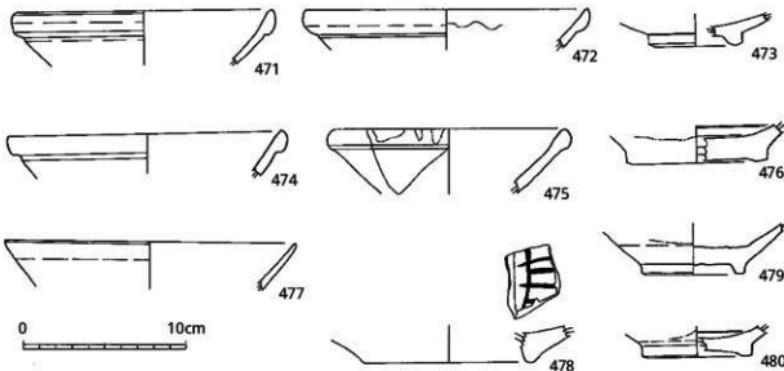
この柱穴遺構は、掘立柱建物跡1内で建物に組み込めなかったものである。位置は第29図の全体図で参照のこと。

同一柱穴遺構から出土したものは、461～463が白磁IV類、464が土師器塊、465が黒色土器A、466・467が土師器坏、468・469が土師器小皿、470が黒色土器Bの小皿である。

これらの遺物は同一遺構ととらえられたために掲載した。磁器と土師器のセット関係ととらえたい。



第96図 同一遺構柱穴内の出土遺物

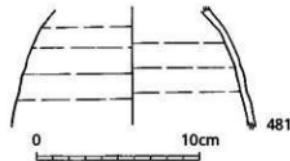


第97図 柱穴内の出土遺物(1)磁器

471は白磁IV類で玉縁口縁の幅が太い。器形は体部が若干彎曲している。472は白磁IV類で玉縁口縁の幅が太い。器形は体部が直線状である。内面に垂軸がみられる。473は白磁IV類の底部である。474は白磁IV類で玉縁口縁の幅が太い。器形は体部が直線状である。475は白磁IV類で玉縁口縁の幅が太い。器形は体部が直線状である。476は白磁IV類の底部で、低い高台である。477は青磁の碗である。478は青磁の盤の底部である。479は高台のある白磁VII類の底部である。480は低い高台の底部である。

陶器 (481)

陶器は中国陶器が出土している。第98図の481である。薄手の陶器で褐釉がかかったものである。形態は四耳壺の胴部と思われる。



第98図 柱穴内の出土遺物(2)陶器

土師器(482~521)

土師器は塊(482~499)と坏(500~508)と小皿(509~521)が出土している。

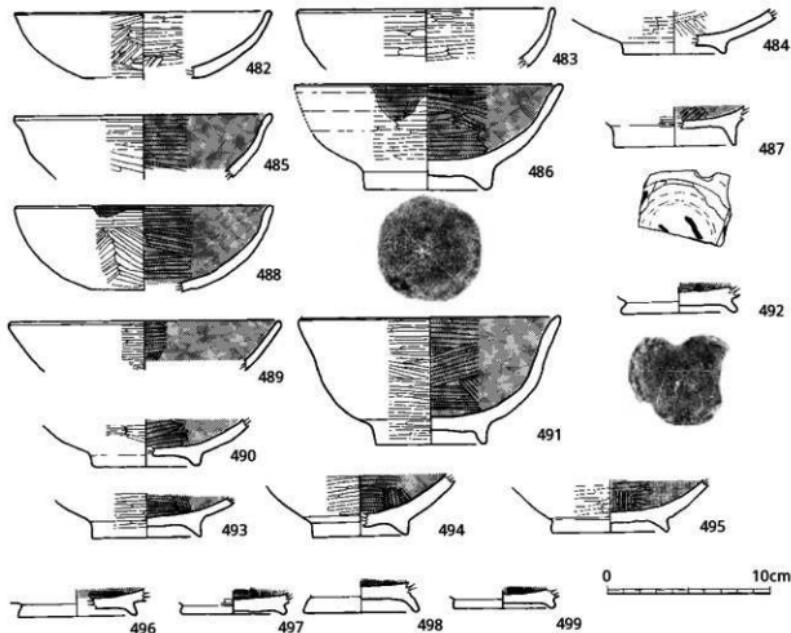
塊は482~484が土師器で、485~499が黒色土器Aである。本来内側だけ黒色を施すものであるが、486・488は外面の一部にもみられる。

この中で、高台の低いものは484・492・495・496・497・499である。高台の高いものは486・487・490・491・493・494・495・498である。

口縁部は内湾するものが482・483・488で、直線状は489、外反が485・486・491である。

これらは、全面に丁寧な研磨痕があり、水漏れ防止が良くおこなわれている。特に見込みの中央部は縦位と横位にみられる。

特徴のある土師器は、487に墨書きがみられる。また、486の底部外面に×と一を重ねた線刻がみられる。492には一と三の組み合わせの線刻がみられる。



第99図 柱穴内の出土遺物(3) 土器の塊

壊は500・501が口縁から底部まであるもので、底部からの立ち上がりは斜位に直線状である。502はやや厚みがあり、内湾ぎみである。503～508は底部である。503・504・505は底部が角張っているものである。506は底部の角が丸味をもっているものである。507は充実高台ぎみにつくっている。508も充実高台ぎみにつくっているが上げ底である。

製作は糸切り離しである。

小皿は509・510・511が深めの皿で、512～519浅めの皿である。小皿の立ち上がりは509・510・511・519が上に、512～518が斜めにみられる。この中で、512～516の底面は上げ底ぎみになっている。また、520は底部である。

製作は糸切り離しである。

521は黒色土器Aの皿である。内外面は研磨がみられ、口縁部が外反している。全体的に薄手に作られている。

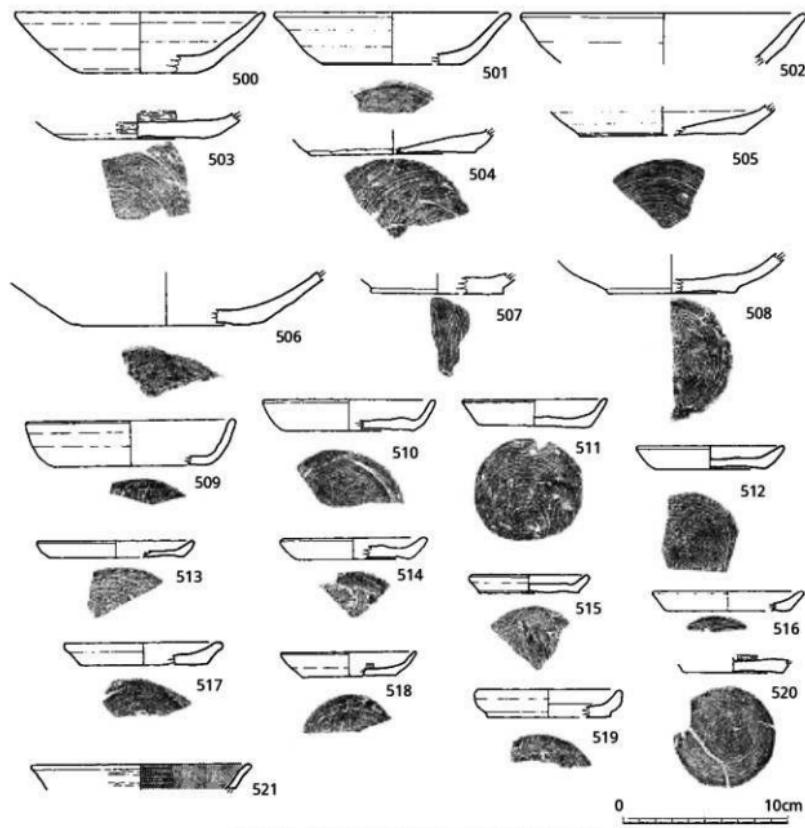
522は捏鉢である。中世須恵器で東播磨系と思われる。

523は小刀の柄部である。

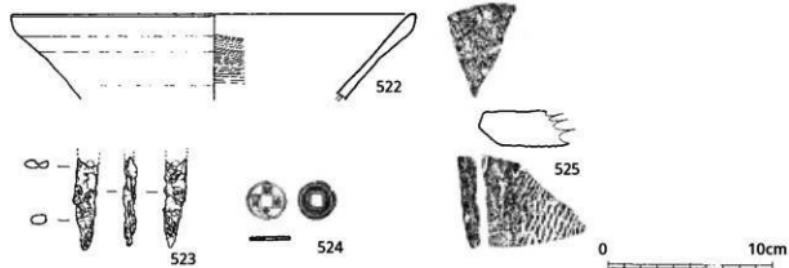
524は古錢で開元通寶である。

525は布目瓦である。平瓦と思われる。

以上が柱穴内出土遺物で、包含層出土と区別した。



第100図 柱穴内の出土遺物(4)土師器の坏・小皿



第101図 柱穴内の出土遺物(5)中世須恵器・瓦・鉄器・古銭

(2) 遺物

ア 白磁

① 白磁(1) (第102図 526~528)

この類は、幅が狭い玉縁口縁をもつ白磁III類である。

526は幅の狭い玉縁をもつ白磁の碗である。器形は内湾するものである。527は幅の狭い玉縁をもつ白磁の皿である。器形は外反するものである。528は幅の広い玉縁をもつ白磁の皿である。器形は内湾するものである。

② 白磁(2) (第103~105図 529~589)

この類は、幅が広い玉縁口縁をもつ白磁IV類である。また、それとセットになる皿である。碗は529~586で、皿は587~589である。碗は口縁部から体部にかけてのものが529~572で、底部が573~586である。

この玉縁口縁は厚みのないものが529・530・532・536・539・553・565・572で、他は厚手の玉縁を口縁外面に廻らしている。

器形は直行の外反で、口縁内側の口唇部近くが内湾するが多い。

口径は、最も狹径が530で13.8cm、広径が557で22cm、大方は15~18cmである。器高は6.5~7.5cmが想定される。

施釉は、内面が全面施釉で外面が口縁から体部にかけて行われている。この中で534・540等にみられるように釉を厚手にかけたため垂れている垂釉があるものもある。

底部は削り込みが浅く高台が低い。そして、疊付けは外側を多く削り断面が斜めになっている。

器面調整は見込みが全面施釉で、外面は体部に施釉があるが底面にはない。

これらで見込みに沈線ないし段がみられるものは529・573・574・577・578・582・583・584・585・586である。

587は小皿である。底部は平底で体部は直線状に口縁部まで外反している。口唇部は外側に斜傾している。588は外反する口縁部である。589は若干上げ底の底部で、体部は外反する器形である。見込みに線がみられる。

③ 白磁(3) (第106図 590~602)

この類は、口縁部が外側に反る端反りで白磁V類にあたる。

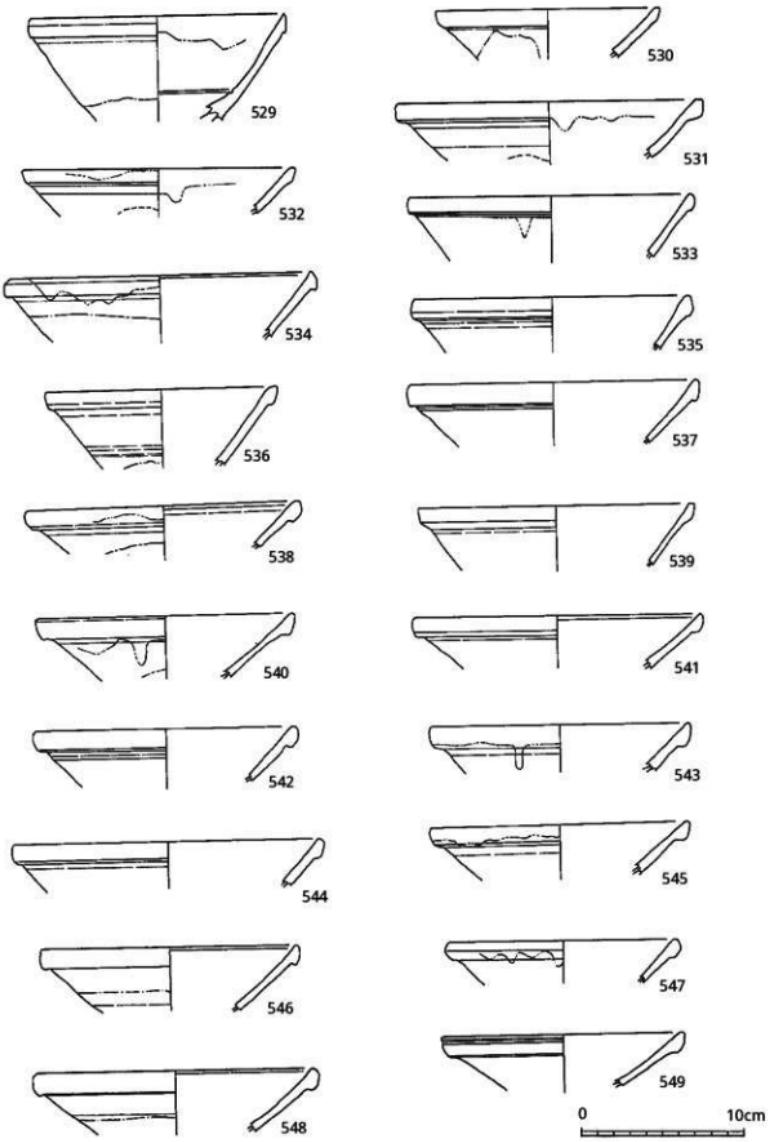
590は見込みに櫛書き文がみられるものである。器形は丸味をもつ体部から口縁部にかけて外反している。591~595は無紋である。596は見込みに櫛書き文がある底部である。597~599は底部で高台が高く、疊付は尖っている。施釉は見込みが全面施釉で段があり、外面は体部までの施釉である。

600~602は皿である。600・601は底部から直接外反するタイプであるが602は見込みに段がある。また、線書の文様もみられる。

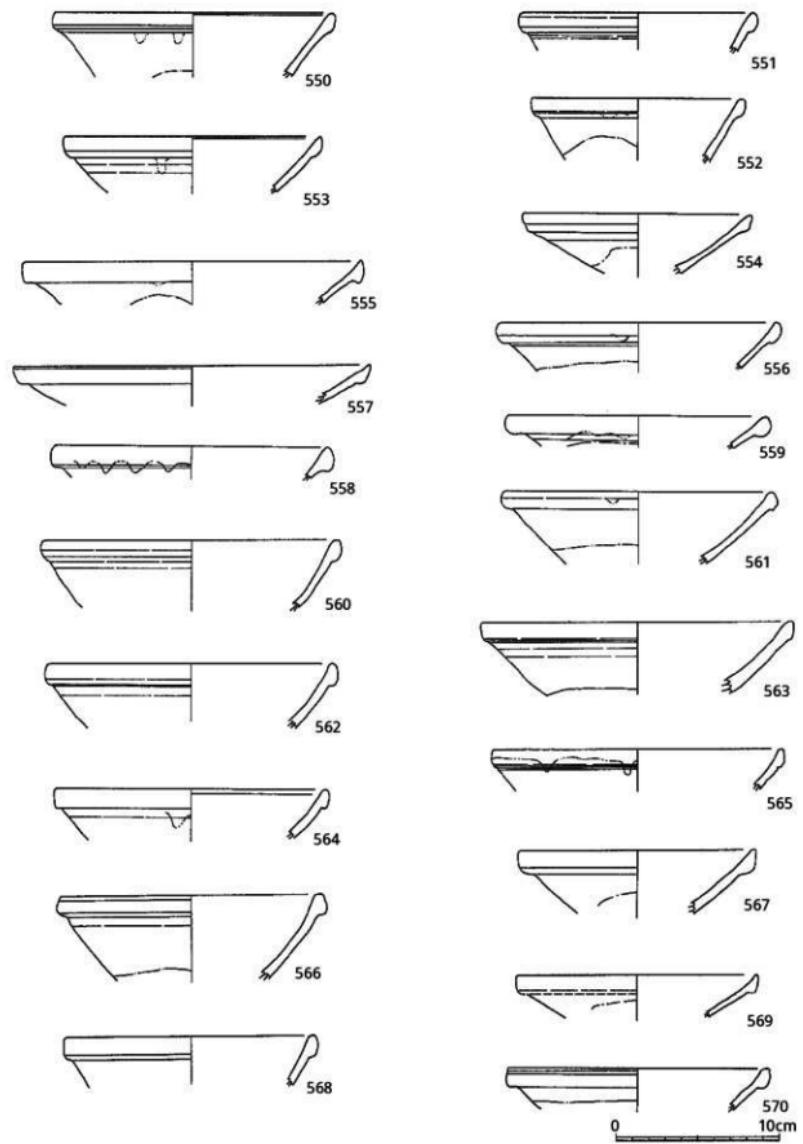
④ 白磁(4) (第107図 603~606)



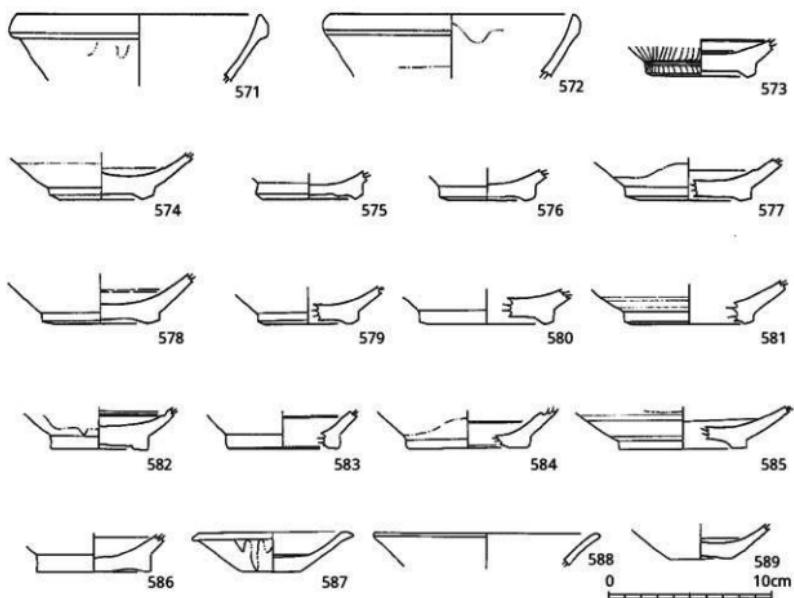
第102図 白磁(1)



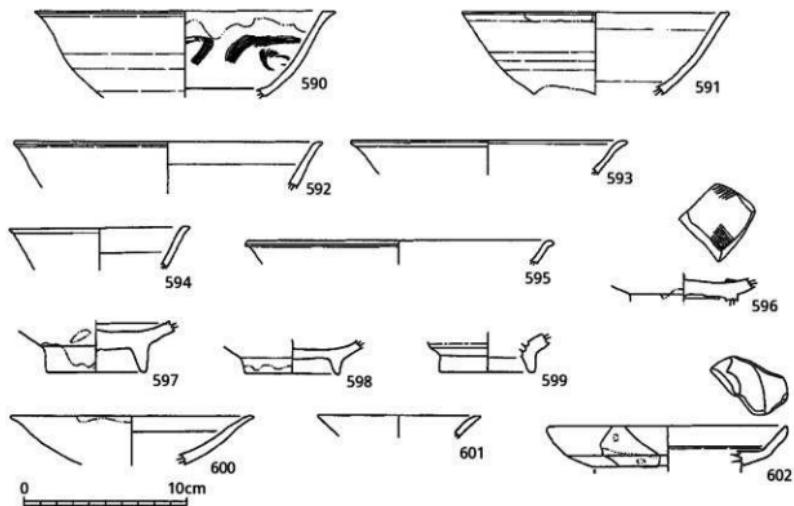
第103図 白磁(2)-1



第104図 白磁(2)~2



第105図 白磁(2)~3



第106図 白磁(3)

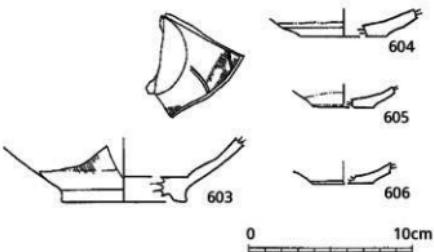
この類は白磁VII類に比定する。603は高台の低い碗である。見込みに櫛書文がみられる。604~606は小皿である。

⑤ 白磁(5) (第108図 607~620)

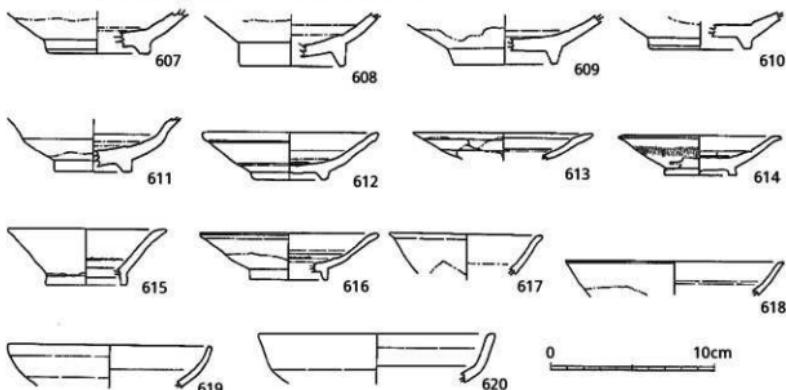
この類は見込みに釉剝が蛇の目状にある白磁VII類に比定する。この中で607~611は高台が少し高い碗である。612~620は皿である。

⑥ 白磁(6) (第109図 621~639)

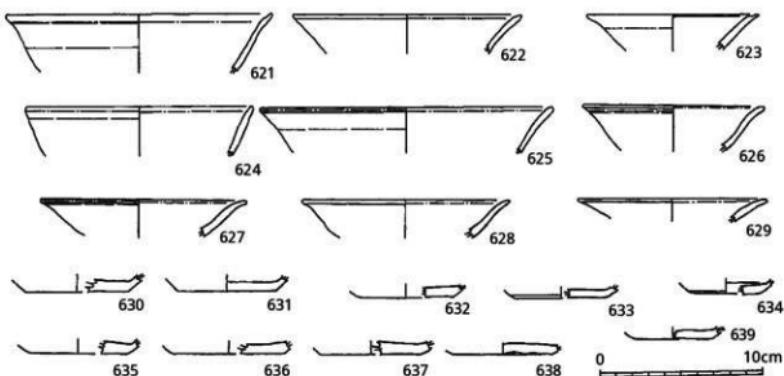
この類は口縁部の釉を挿している口剥に比定する。



第107図 白磁(4)



第108図 白磁(5)



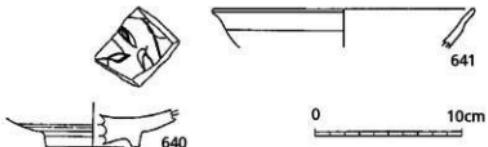
第109図 白磁(6)

621～629は口縁部から体部である。口縁部は大きく外反する。この中で、623は口縁部の軸を描いた時に削り痕で段になっている。630～639は底部である。底部は平底の薄手で、軸は表裏とも全面施釉である。

これらは皿である。

⑦ 白磁（7）（第110図 640・641）

この類は白磁B・C類にあたる。



640は白磁B類である。これは厚い碗の底部である。高台はそれほど高くなく疊付は平坦である。見込みには草花文がみられる。

第110図 白磁（7）

641はC類の碗である。口縁部は直線状に外反し、体部で少し「S」字状に曲がっている。口縁部は薄い。施釉は全面である。

⑧ 白磁（8）（第111図 642～649）

この類は、白磁D類に比定する。

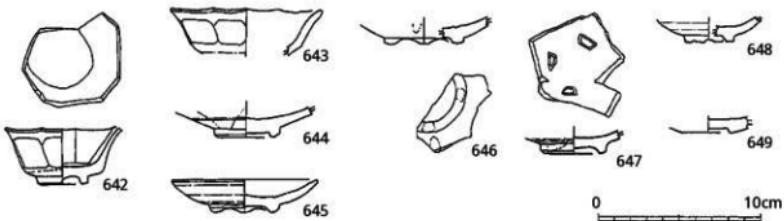
642は八角の小碗である。口唇部は平坦面を作り山形に波状している。体部から口縁部は外反し、8面の四角面を作っている。底部は横に張り高台を設けている。見込みは円形に近く稜がみえていて。施釉は底部の外側以外に施されている。643は642の少しだ形版である。644はこれらのタイプの底部である。疊付は外側が上がっている。

645は高台を削り4本の脚を作っている底部を持つ小皿である。施釉は底以外に施されている。見込みには線がみられる。646は同じ底のタイプで、脚端に砂目跡がみられる。

647は見込みに砂目跡がみられる小皿である。見込みには施釉があるが、底外面にはない。

648は高台に4か所切り込みを入れた小碗の底部である。見込みには施釉があるが、底外面にはない。

649は凹んだ底部で基筒底と言われるタイプである。器形は丸味のある小皿である。施釉は底以外に施されている。

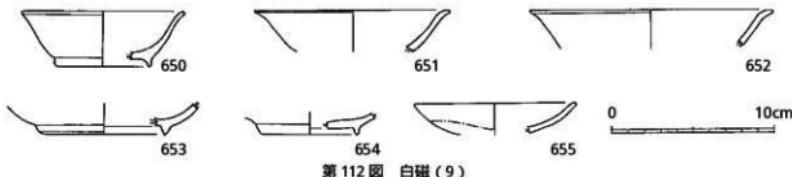


第111図 白磁（8）

⑨ 白磁 (9) (第112図 650~655)

この類は白磁E類である。

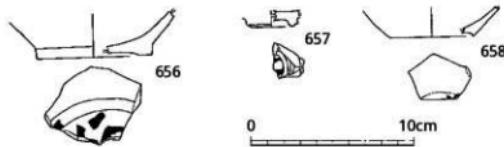
650は高台の疊付が尖り、体部は口縁部にかけて外反している。底径は広めである。651は体部から口縁部にかけて外反している。652も体部は口縁部にかけて外反している。653は高台の疊付が尖り、体部が張っている。654も高台の疊付が尖り、体部が張っている。655は丸味をもった器形の小皿である。施釉は見込みが全面で、外面が体部までである。



第112図 白磁 (9)

⑩ 墨書き器 (第113図 656~658)

656は白磁IV類の底部の外面に書かれたもので、内容は不明である。657は小皿か小碗の底部の外面に書かれたもので、内容は不明である。658は幕筈底様の底部の外面に書かれたもので、内容は不明である。



第113図 墨書き器

イ 青磁

① 青磁 (1) (第114図 659~684)

この類は龍泉Iに比定している。器形は張る底部から口縁部に立ち上がり体部は直線状で外向し、底部は低い高台をもつ碗である。ここでは659~673の見込み有文と674~684の無文の二種類ある。

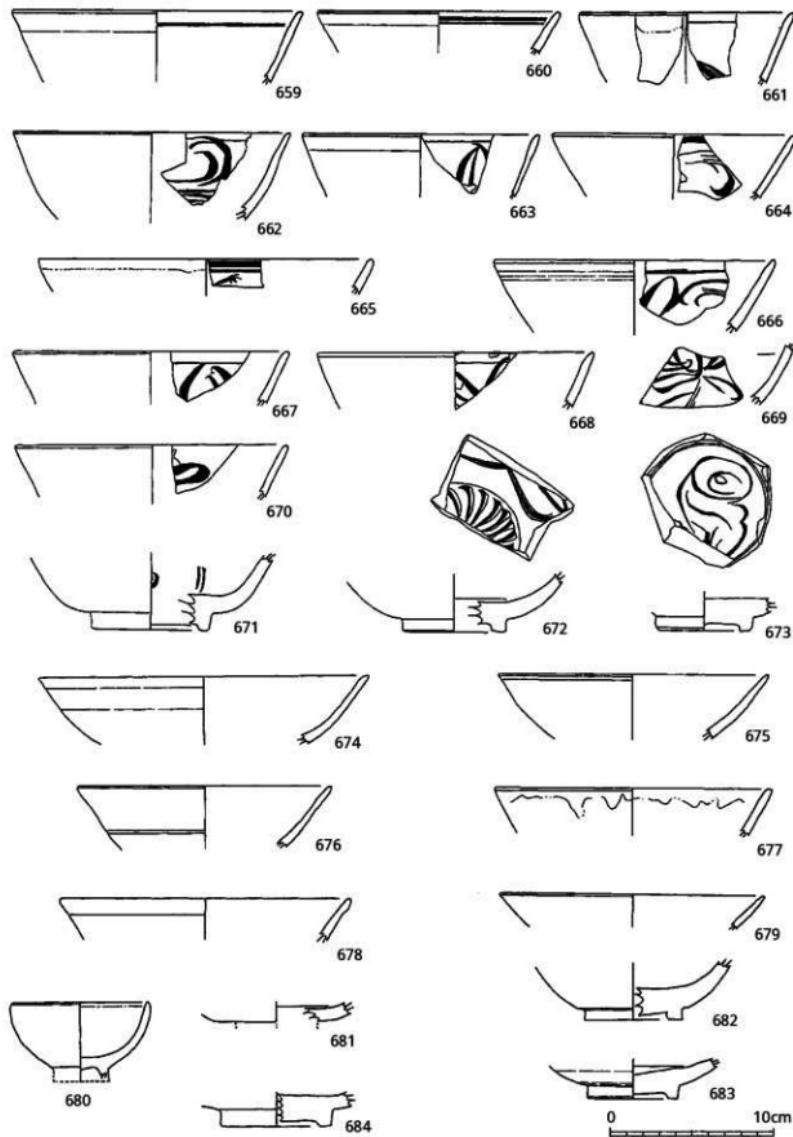
659・660は口縁部に横位の沈線、661~673は沈線と草花文を見込みに施している。施釉は見込みが全面施釉で、底部が露胎である。

674~684は無文で、施釉は見込みが全面施釉で、底部が露胎である。なお、この中の680は小碗である。

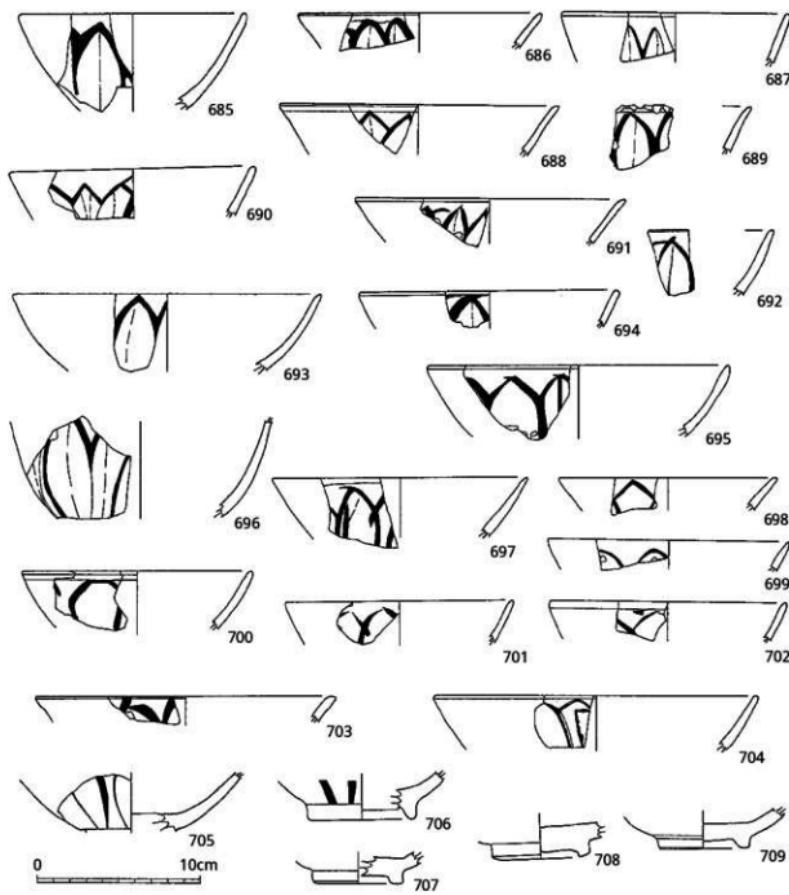
② 青磁 (2) (第115図 685~709)

この類は龍泉IIに比定している。器形は張らない底部から彎曲状に立ち上がり、口縁部は内湾ないし、直線状にあがる碗である。そして、高台は低い。

施釉は見込みが全面で、底部の高台内が露胎である。文様は体部から口縁部に稜がはっきりしている広い錦蓮弁文がみられるものと幅広の蓮弁文を構成するが、稜がはっきりしないものがある。その錦蓮弁文は崩れているのが多い。



第114図 青磁(1)



第 115 図 青磁 (2)

稜のある施文は 685・686・693 の錦蓮弁文が頂点でしっかりと重なっているが、691・692・694・695・697 は片方が上に乗るようにはみ出して描いている。

稜のない施文は 698～704 であるが、全体として錦蓮弁文は雑に描かれており、700・703・704 の様に大きく崩れているのが特徴である。

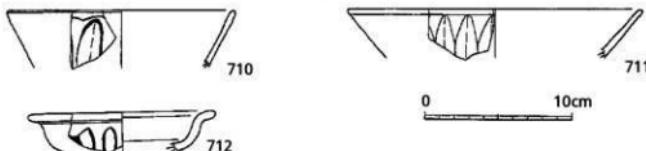
なお、696 は口縁部がないが整った錦蓮弁文である。また、705・706 は底部近くの錦蓮弁文でしきり高台の基部まで描かれている。

高台の畳付は外側が切られ、内側で接している。

③ 青磁（3）（第116図 710・711・712）

この類は龍泉IIIに比定する。

710は器形としては体部から口縁部まで直線状に外向している碗である。外面の鶴蓮弁文はやや細く、口縁部に二重の鶴蓮弁文を施し、若干稜がみられる。711は器形としては体部から口縁部まで直線状に大きく外向している碗である。外面の鶴蓮弁文はやや細く、若干稜がみられる。712は口縁部で大きく曲がり開いた皿である。外面は鶴蓮弁文が縦に描かれている。この鶴蓮弁文は龍泉IIに類似しているため前の類でも差し支えはない。



第116図 青磁（3）

④ 青磁（4）（第117図 713～723）

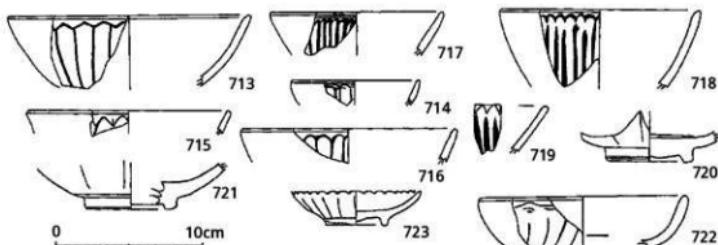
この類は龍線Bに比定している。器形は体部から口縁部にかけて若干内湾し、全体的に開く碗と皿がある。底部は幅広く低い高台をもっている。文様は鶴蓮弁文が簡略化されたものを体部外面に施している。

碗は713～721である。この碗は文様が大きく713～716、717～719、720・721の3種に分けられる。713～716は蓮弁文上部が口縁部で鋸齒状になり、蓮弁が簡略化され縦線は直線に変化している。この中では、713・716等の鶴蓮弁文が広い。

717～719は全体的に鶴蓮弁文の幅が狭く、蓮弁上部と縦線が離れて別々に施されている。その縦線は太くみられる。

720・721は底部近くである体部に細い線で鶴蓮弁文の縦線を施している。これらは、このように蓮弁の縦線を簡略化により細い線で表している。

722は体部で丸味を持つ皿で723は稜花皿の類である。2つとも鶴蓮弁文を縦線で表すタイプである。722は蓮弁上部の文様と斜位の縦線で組み合っている。



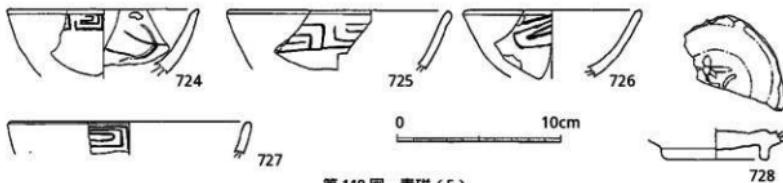
第117図 青磁（4）

また、722は皿の口縁部を稜花状に作ったことは、鶴蓮弁文の上部を口唇部に表し、縦筋が蓮弁の縦線を意味していることも考えられる。

⑤ 青磁（5）(第118図 724～728)

この類は龍泉Cに比定している。器形は体部が若干内湾している碗である。底部の高台はやや高めである。文様は外面口縁部に方形を重ねた雷文を廻らし、見込みには草花のスタンプがみられる。

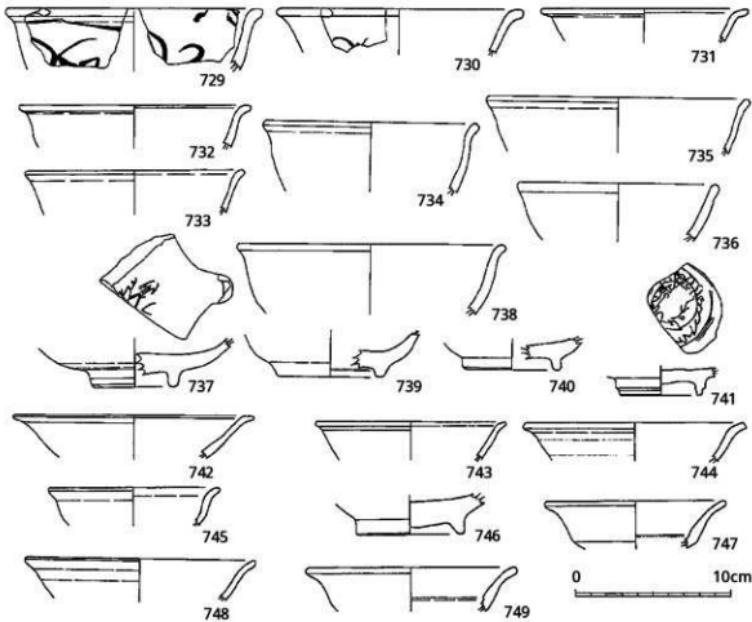
724・727の雷文はしっかりとした長方形で、725・726の雷文は崩れている。また、728の見込みには草花文のスタンプの周囲を丸く釉描きして露胎がのぞいている蛇の目見込みになっている。



第118図 青磁（5）

⑥ 青磁（6）(第119図 729～749)

この類は龍泉Dに比定している。器形は体部が直状に立ち上がり、厚みのある口縁部を外側に曲げ広げたものが基本で碗と皿がある。碗は729～741、皿が742～749である。文様は草花文を内外面に施す729と外面だけに施す730がある。その他見込みに草花文のスタンプがあるものが737・741である。また、無文もみられる。



第119図 青磁（6）

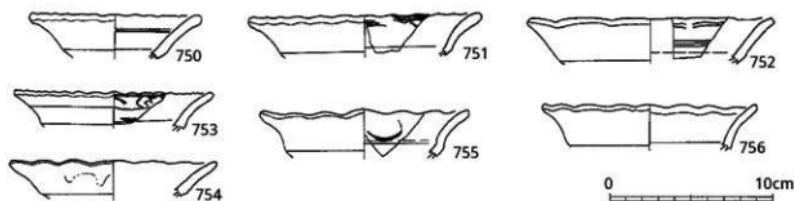
碗の底部は厚みがあり、体部で張り、高台が高い。また、714は高台の外面を削り、疊付を細くしている。

皿は口縁部が「く」字状に折れて外反する742～745と、若干折れて外反する747～749がある。また、746は厚みのある底部で盤の可能性がある。

⑦ 青磁(7) (第120図 750～756)

ここにまとめた稜花皿は各類のものである。750は外反する見込みに横位の直線、751・752は波状線、753・755は草花文を施している。なお、754・756は無文である。

器形は、口唇部が波状で、体部で「く」の字じょうに折れるものである。



第120図 青磁(7)

⑧ 青磁(8) (第121図 757・758)

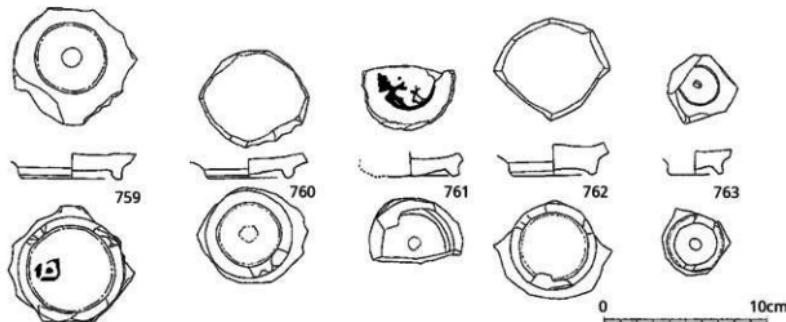
この類は壺である。757は小壺で頸部から口縁部までの長さが短い。頸部の径は広めで、胸部が丸く張る肩部である。758は口縁部が長く大きく外反するもので、頸部の径が狭いものである。



第121図 青磁(8)

⑨ 青磁(9) (第122図)

ここは底部の高台や体部を打ち欠いた二次製品「メンコ」である



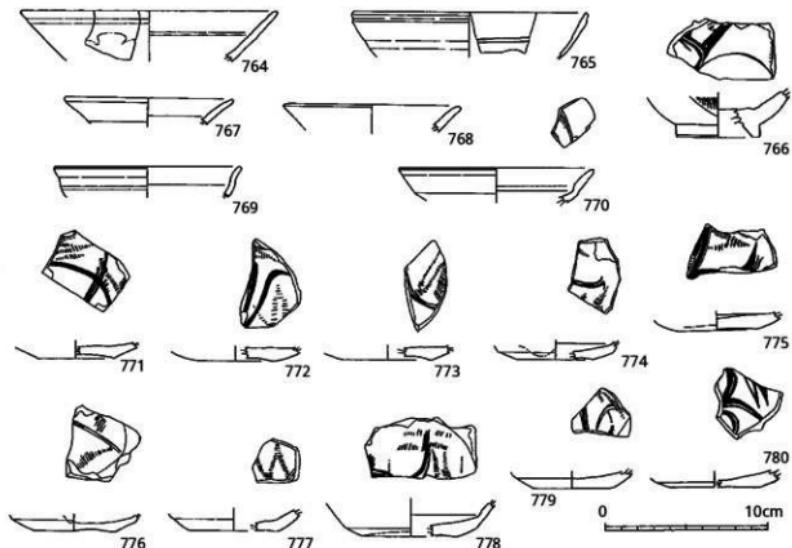
第122図 青磁(9)

⑩ 青磁 (10) (第 123 図 764~780)

この類は同安窯系の青磁である。器形は碗と皿がある。

764 は体部から口縁部にかけて直線状に外向する碗である。施釉は見込みが全面で、外面は体部までである。色調は同安窯系独特の暗黄茶褐色である。765 は口縁部で若干厚みがあり、器形は少し内湾する碗である。文様は見込みに 2 条の線がみられる。766 はやや高い高台と丸味をもつ体部が付く厚手の底部である。見込みには草花文と猫描文がある。外面体部にも猫描文がみられる。767・768 は外反する口縁部で、器形は皿である。文様はない。769 は脚部が張り、頸部で締まり口縁部は外反する皿である。釉色が同安窯系の暗黄茶褐色である。770 は 769 と器形は類似しているが内側は段がみられる皿である。見込みには猫描文がみられる。

771~780 は皿の底部である。この中で、778 が体部まである。底部の作りは上げ底で疊付けは体部の削りのため稜になっている 771~778 と平底の 779・780 がある。見込みの文様は猫描文と曲線を組み合わせた草花文である。なお、780 には猫描文はみられない草花文である。

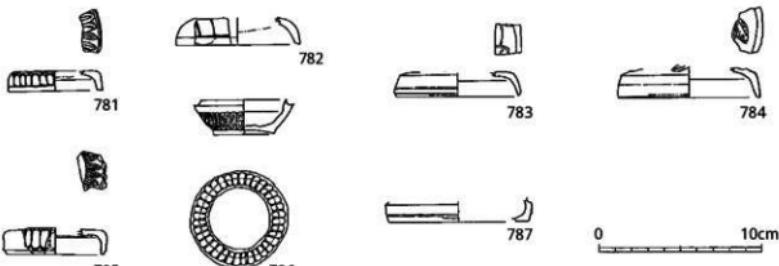


第 123 図 青磁 (10)

⑪ 青磁 (11) (第 124 図 781~787)

この類は青白磁の合子である。

781 は合子の蓋で角張っている器形である。上面は二重の稜を幅広の蓮弁状に廻らし、横面は隅丸円を廻らしている。施釉は上面だけで内面はない。782 は合子の蓋で丸味のある器形である。上面は蓮弁が線状に簡略化されたものを施している。施釉は上面だけで内面はない。783 は合子の蓋で角張っている器形である。上面は稜を草花文状に施し、横面は無文である。施釉は上面だけで内



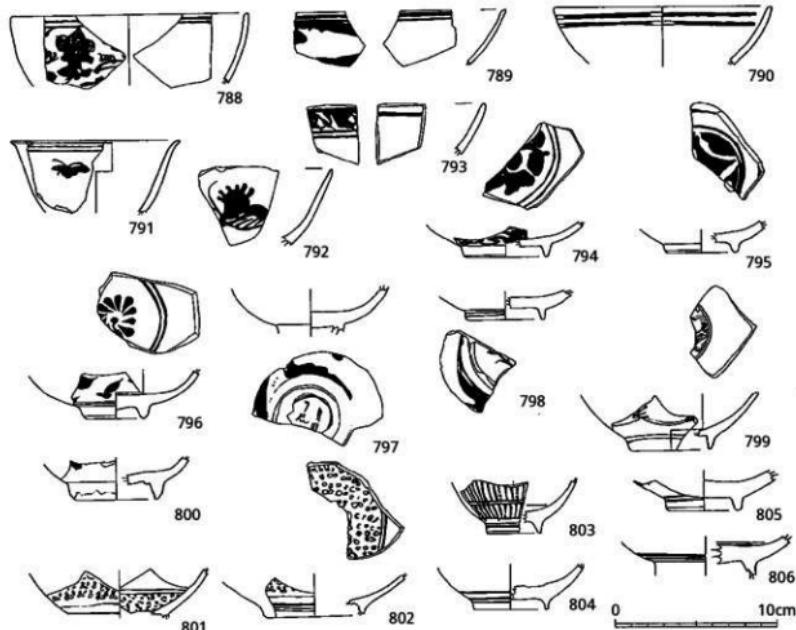
第124図 青磁(11)

面はない。784は合子の蓋で角張っている器形である。上面は草葉文を施しているが横面は無文である。施釉は上面だけで内面はない。785は合子の蓋で角張っている器形である。上面は二重の稜を幅広の連弁状に廻らし、横面は隅丸円を廻らしている。施釉は上面だけで内面はない。786は合子の受け身である。受け口は窪んだ段になり合わせるように作られている。底部は上げ底になり、釉は施されていない。横面は隅丸円を廻らし施釉されている。なお、見込みは施釉されていない。787は合子の受け身である。受け口は狭い段に作られている。施釉は横面の途中までで他は露胎である。

ウ 染付

① 碗 (第125図 788~806)

788は口縁部が直行するものである。内面は横位の2本線を口縁部に廻らせ、外面には横位の2本線と牡丹を描いている。789は口縁部が直行するものである。内面は横位の2本線を口縁部に廻らせ、外面には横位の2本線と岩・雲を描いている。790は口縁部が直行するものである。内・外は横位の2本線を口縁部に廻らせている。791は口縁部が外反するものである。内面は無文で、外面には横位の2本線と蝶を描いている。792は口縁部が直行するものである。内面は無文で、外面には池と岩苔を描いている。793は口縁部が直行するものである。内面は横位の1本線を口縁部に廻らせ、外面には横位の2本線と唐草を描いている。794は底部から体部である。高台は疊付けが尖り、高い。見込みの文様は牡丹で外面は不詳不明である。795は底部から体部である。高台はやや低く、疊付けは広い。見込みの文様は不詳不明である。796は底部から丸味のある体部である。高台は疊付けが尖り、高い。見込みの文様は菊で外面は葉文である。797は底部から体部である。高台は欠損している。外面は池の岩で、裏銘は「大明年製」である。798は底部から体部である。高台は疊付けが尖り、高い。見込みの文様はなく、外面は池と草である。799は底部から張りのない体部である。高台は疊付けが尖り、高い。見込みの文様は葉文で外面は梅花である。800は底部から体部である。高台は疊付けが尖り、高い。外面文様は唐草崩文と考えられる。801は底部から体部である。高台は疊付けが欠損しているが尖っている。見込み・外面文様は唐草崩文と思われる。802は底部から体部である。高台は疊付けが尖り、高い。見込みの文様は横線で外面は唇文である。804は底部から体部である。高台は疊付けが尖り、高い。外面の文様は2本の横線である。805は底部から体部である。高台

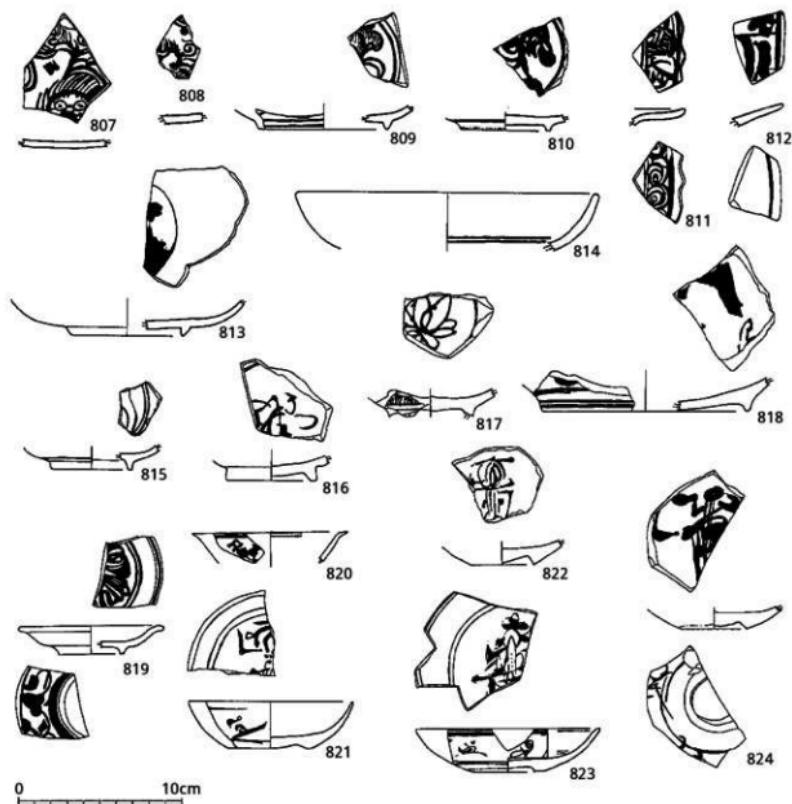


第 125 図 染付碗

疊付けが尖り、高い。外面の文様は2本の横線である。806は底部から体部である。高台は疊付けが欠損している。外面の文様は2本の横線である。

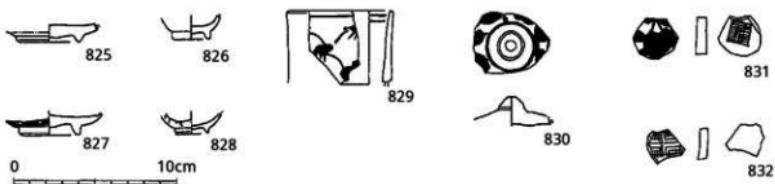
② 皿 (第 126 図 807~824)

807 は皿の見込み中央部で文様は獅子文の頭部である。808 は皿の見込み中央部で文様は獅子文の足部である。809 は皿の見込み周縁部で文様は獅子文の後部と2本の線である。器形は低い高台で、疊付けが尖っている。810 は器形が低い高台の底部で、疊付けが尖っている。見込みの文様は草文である。811 は稜花皿である。器形は頭部で大きく曲線状に外反するものである。口縁部の文様は唐草文である。812 は稜花皿である。器形は頭部で大きく直線状に外反するタイプである。口縁部の文様は花文である。813 は器形が低い高台の底部で、疊付けが尖っている。見込みの文様は草花文である。814 は器形が体部で丸く立ち上がるもので、見込みに2本の横線がみられる。815 は器形が低い高台の底部で、疊付けが平である。見込みの文様は草文と2本の線である。816 は器形が低い高台の底部で、疊付けが平である。見込みの文様は寿文と1本の線である。817 は器形が低い高台の底部である。見込みの文様は菊花文で、体部外面は草文である。818 は高台の低い盤の底部である。見込みの文様は風景画の一部と思われる。外面は3本の横線である。819 は口縁部が大きく外反し、低い高台の底部をもち、疊付けが平である。見込みの文様は菊文と3本の線である。820 は口縁部が端反りになる皿である。外面の文様は横線と梅花である。なお、見込みにも横線がみら



第126図 染付皿

れる。821・822・823・824は基筈底をもつ皿である。見込みの文様は横線3本と寿文である。



第127図 染付小碗・蓋・メンコ

外面体部は821が草文、823が横線3本と草花文、824が唐草文である。これらの器形は丸味のある体部である。

③ 染付小碗・蓋・二次加工品（第127図825～832）

小碗は825から829である。この中で底部が825～828で、体部が829である。825～828は疊付けが尖り、826・827は平である。文様は827・828にあるが詳細不明である。829は体部が円筒状に立ち上がる器形のものである。文様は残雪と竹である。なお、口縁部内面に2本の横線、外面に1本の横線がある。

830は蓋である。摘部は円錐に尖る。文様は葉文を廻らしている。

831・832は御界状に二次加工したものである。831は底部の中央部で、見込みの草花文と裏鉢の福がみられる。832は体部で二重四角を描いた文がみられる。

工 陶器

① 貿易陶器（第128図833～862）

この類は中国陶器である。全体で4種に分けられた。

第1種は833～836の縦筋陶器である。833は壺の口縁部で釉の色調は青黒色である。釉は両面にかけている。834は壺の肩部で、外面にかけた釉の色調は濃緑色である。沈線もみられる。835は壺の肩部で、外面にかけた釉の色調は緑色である。沈線もみられる。836は「T」字形の口縁部で、外面にかけた釉の色調は青緑色である。器形は小鉢である。

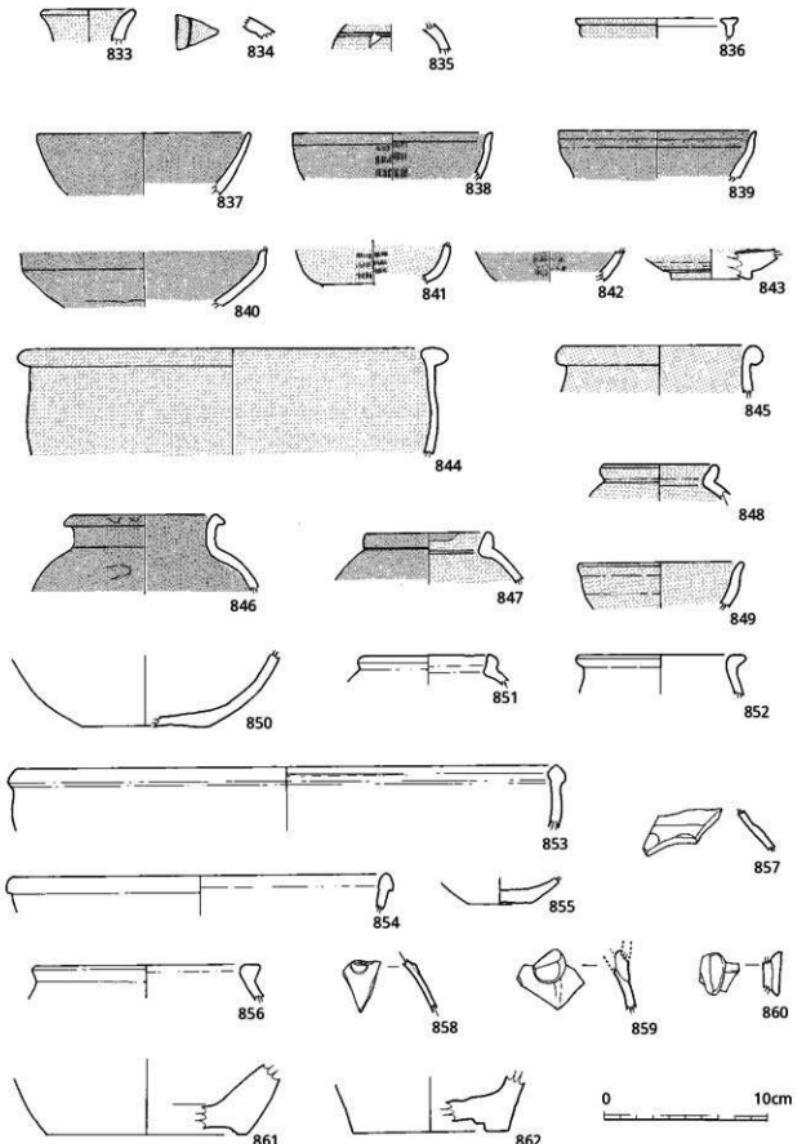
第2種は837～843の天目碗である。837は口縁部が内溝するもので黒茶褐色の釉が両面にかかっている。838は口縁部が直行するもので黒茶褐色の釉が両面にかかっている。天目特有の黄茶色の縦筋がみられる。839は口縁部が体部で直行するもので、黒茶褐色の釉が両面にかかっている。840は口縁部が体部で直行するもので、黒茶褐色の釉が両面にかかっている。841は底部から体部にかけての立ち上がりが丸味をもつ碗である。842は底部から体部にかけての立ち上がりが直線をもつ碗である。843は低い高台をもつ底部で、疊付けは平である。見込み、外面とも黒茶褐色の釉がかかる。

第3種は844～849で、茶褐色をした褐釉のかかった陶器である。

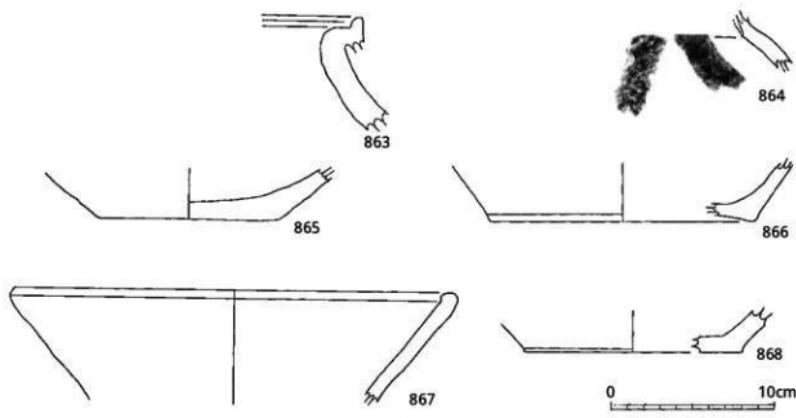
844は口縁部が玉縁に作られ、体部が直行する器形の大鉢である。釉は両面に褐釉がかけてある。845は口縁部が玉縁に作られ、頸部が直行する器形の壺である。釉は両面に褐釉がかけてある。846は口縁部が断面三角に作られ、頸部が直行する器形の壺である。肩部は球状になっている。釉は両面に褐釉がかけてある。847は口唇部が尖状に作られ、頸部が直行する器形の壺である。肩部は撫で肩の丸味をもつ。釉は両面に褐釉がかけてある。848は口唇部が平に作られ、頸部が外向する器形の壺である。肩部は球状を呈する。釉は両面に褐釉がかけてある。849は碗である。口縁部は2段の曲線である。釉は両面にみられる。

第4種は850～862の灰釉のかかったものである。850は鉢で直行する体部と平底をもつ底部である。851は口縁部の立ち上がりが短く直行する壺の器形である。852は平坦口唇部を持つ内向する壺の口縁部である。853は玉縁状の口縁部を持ち、直行する体部を持つ大鉢である。854は玉縁状の口縁部を持ち、外向する体部を持つ鉢である。855は壺の底部である。

856～861は四耳壺の部位である。856は平坦口唇部をもつ内向する口縁部である。857～860は



第 128 図 貿易陶器



第129図 常滑

四耳壺の取っ手部である。橋状取っ手の付け根で円盤状を呈する。861は低い高台の底部で立ち上がり丸味をもつ。862は高い高台の底部で直行の立ち上がりをもつ。

② 常滑 (第129図 863~868)

863は壺の口縁部である。断面は鉗子の形態で「L」字状に曲がっている。器形は肩部に向かって拡がっている。色調は灰茶褐色で灰釉がみられる。864は壺の肩部と思われる。色調は灰茶褐色で灰釉がみられる。865は壺の底部で平底である。色調は灰茶褐色で灰釉がみられる。866は壺の底部で上げ底である。色調は灰茶褐色で灰釉がみられる。867は捏鉢である。体部は大きく外向し、口縁部は丸味を持ちながら立っている。色調は灰茶褐色で灰釉がみられる。868は捏鉢の底部で平底である。内面に櫛歯状沈線がみられる。色調は灰茶褐色で灰釉がみられる。

才 中世須恵器 (第130・131図 869~905)

この類は、権万丈系と東播磨系と下り山系が出土している。

権万丈系は869~888である。これらは全体的に焼成がやや悪く、器面に剥がれた部分がみられる。色調は灰茶色である。器種は壺と捏鉢と摺鉢がみられる。

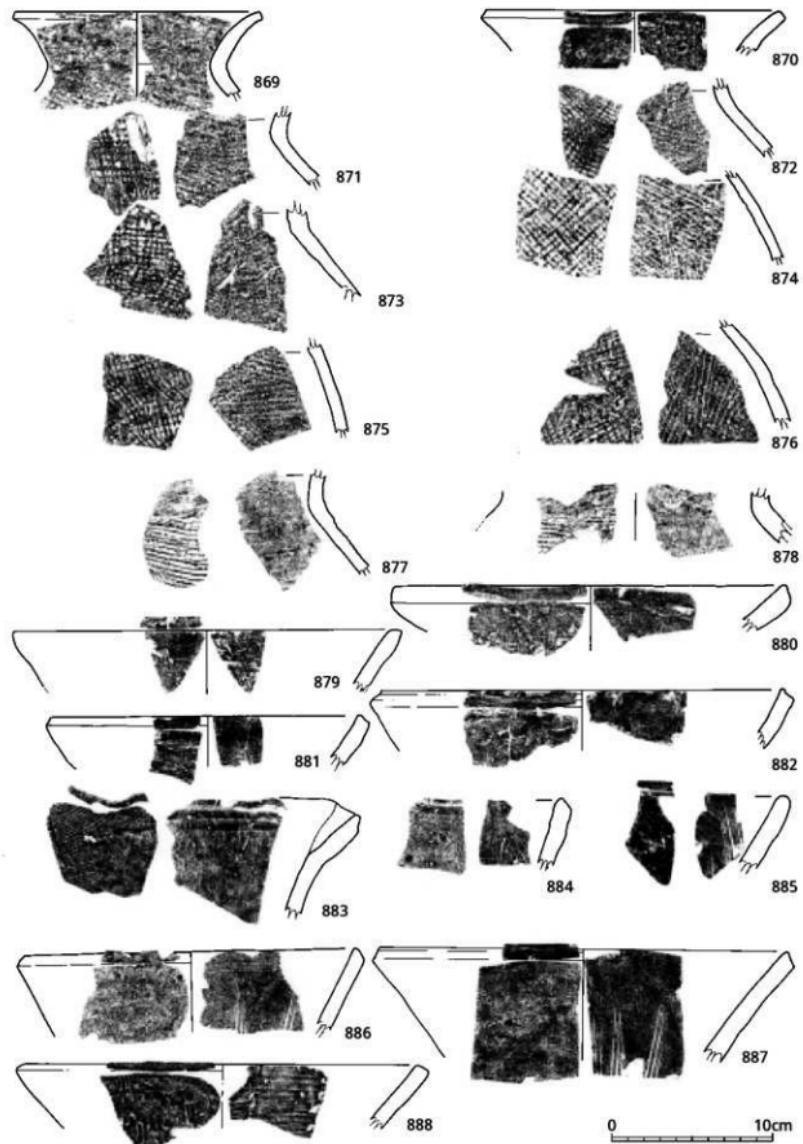
869~878が叩き目のある壺である。869・870は大きく開く口縁部である。871~873・877・878は締まる頸部である。この中の後の2つは焼成が良い。874~876は肩部である。

879~883が捏鉢である。器形は体部が大きく外向し、883でみられるように注ぎ口がある。口唇部は平坦が883で他は尖りの断面である。

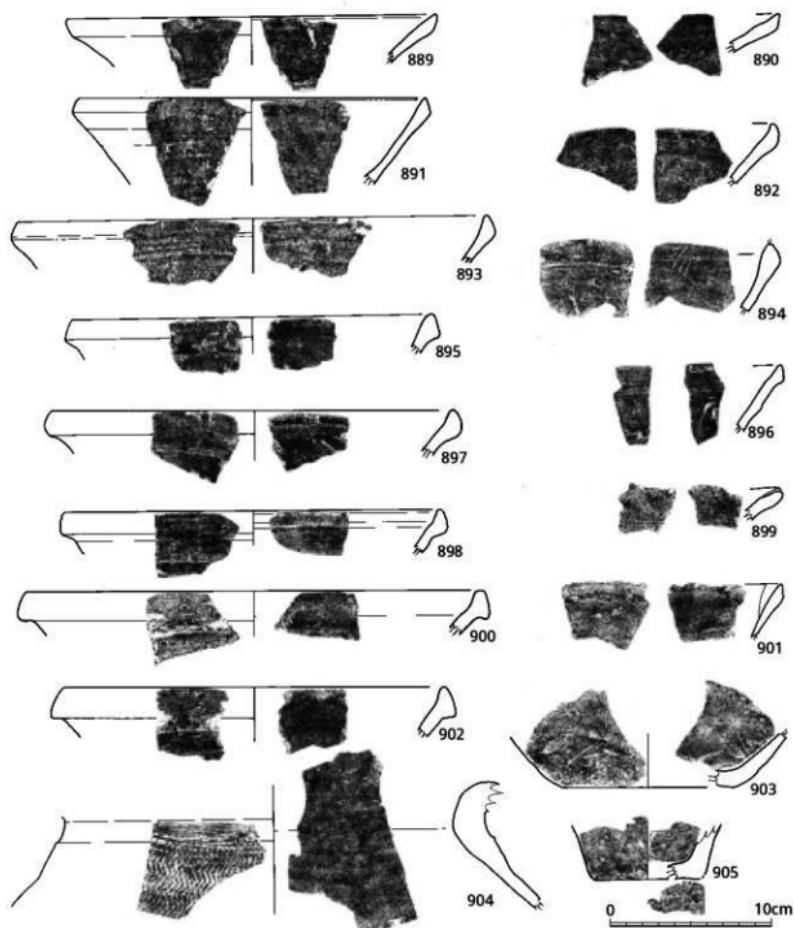
884から888が摺鉢である。器形は体部が大きく外向し、内面に櫛歯状沈線がみられる。

889~903は東播磨系の捏鉢である。全体的に色調は青灰色で灰釉がみられる。器形は大きく外向し、口縁部は薄手で断面が三角形になるもの(889・894等)と垂れ下がるもの(900)が出土している。899・901は注ぎ口である。903は平底の底部である。

904・905は下り山系と思われる。青灰色が強く、焼きが良い。904は壺の口・頸部である。器形は頸部が締まり口縁部は大きく開く。外面に叩きがみられる。905は壺の底部で、平底である。



第 130 図 中世須恵器 (1)

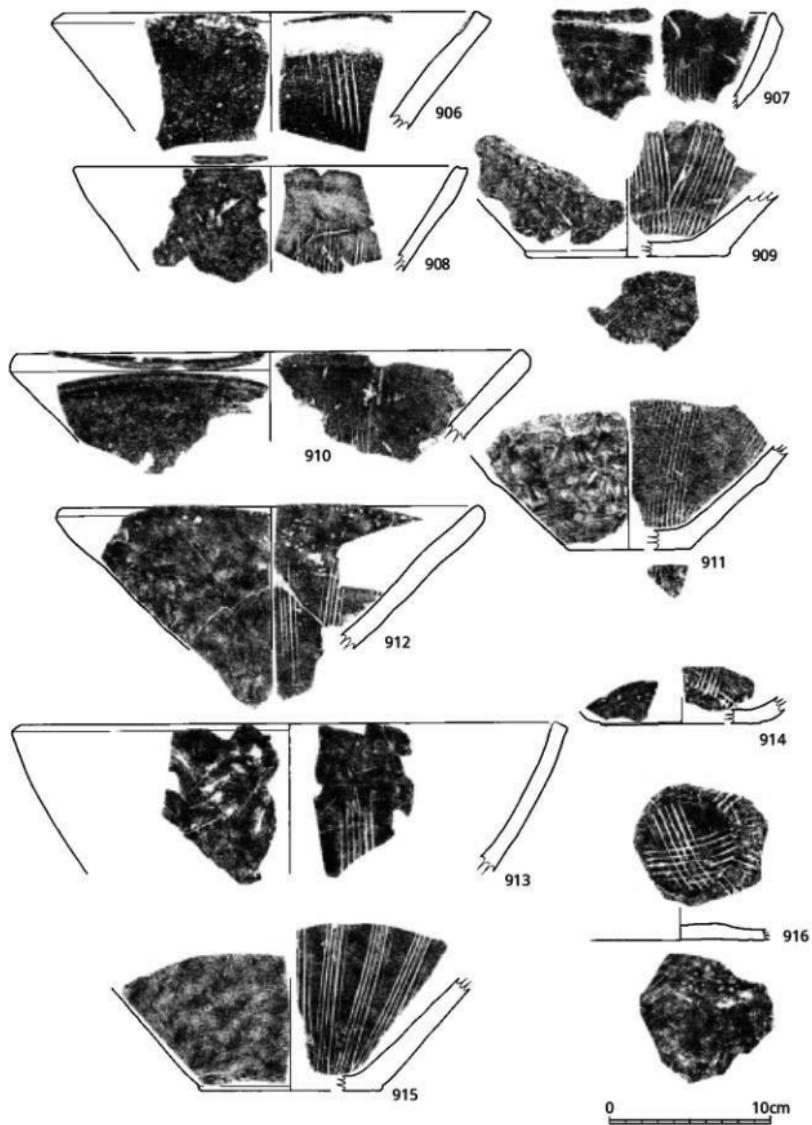


第131図 中世須恵器(2)

カ 瓦器質土器 (第132・133・134図 906~931)

この類は瓦器質の土器で、擂鉢・捏鉢・火舎・羽釜・碗が出土している。

擂鉢は906~919である。器形は外向した胴部である。口縁部は中世須恵器と類似しているが厚みのある口縁部はない。906・907・913は口唇部を斜めに切り口縁部は角張っている。櫛歯状沈線は間隔をあけて施している。908は口唇部を平坦に切り口縁部は角張っている。櫛歯状沈線は間隔を詰めて施している。910・912・917・918は口唇部を斜めに切り口縁部は丸まっている。櫛

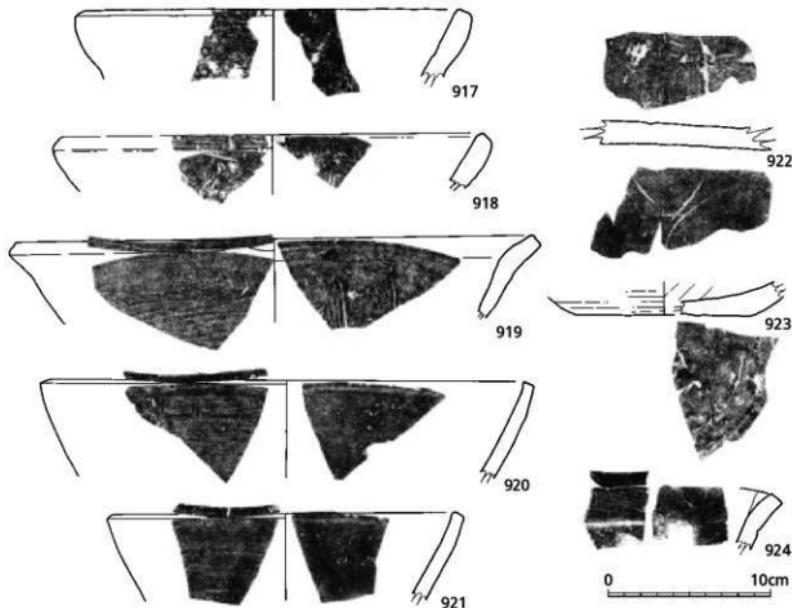


第132図 瓦器質土器(1)

歯状沈線は間隔をあけて施している。909・911・914・915・916は平底であるが914だけが角が丸味をもち他は角張っている。916は底部の見込みで、櫛歯状沈線を十字に施している。これらの櫛歯状沈線は5本(912・915)、7本(906・914・916)、10本(907・909・911)がある。なお、919は他のものと器形が異なり、口縁部で外反する。胎土は灰茶褐色で焼成もやや硬く中世須恵器に類しているが、ここでは瓦器質が強いのでこの類に入れている。

捏鉤は920～924である。920・921は口唇部を斜めに切り、口縁部は角張っている。胴部の立ち上がりは若干丸味をもち外向している。調整は内面を横位に丁寧なヘラナデである。922・923は底部が平底である。底部の外面はヘラ切り離しの跡が残っている。内面調整は良い。924は片口の注口である。内面調整は良い。

火舎は925・926である。925は平坦な広い口唇部を作りやや外向する口縁部をもつ瓦器質土器である。色調は明茶褐色である。器面は丁寧なヨコナデで、外面の上部には2重6角形の中に米印の刻印を施している。焼成は良い。926は器形が若干外開きで、円筒状である。外面には2本の突帯を施している。器面は火使用跡のため剥げて凹凸がある。焼成は良くない。色調は二次使用のため黒色斑点がみられる。よって、ここでは火舎の中に入れた。

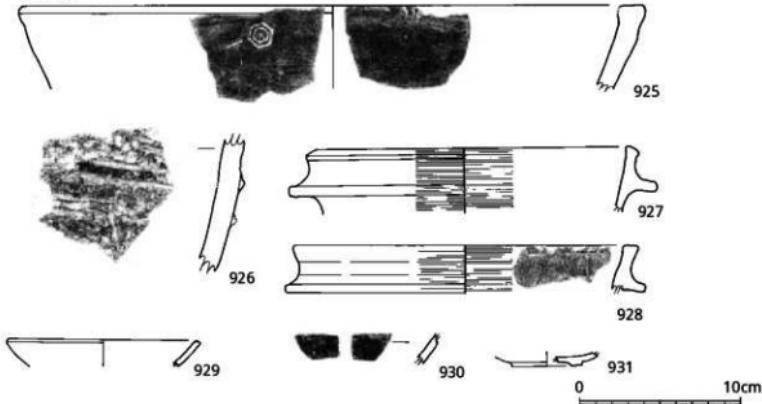


第133図 瓦器質土器(2)

927・928は瓦器質土器の羽釜である。927は口唇部が外側に切られ、口縁部が直線でやや外向する器形である。外面には水平に近い鈎が巻く。器面調整はロクロ調整痕が横位にみられる。928は口唇部が水平に切られ、口縁部が直線で外向する器形である。外面には下がり気味の鈎が巻く。器面調整はロクロ調整痕が横位にみられる。

929～931は瓦器質土器の碗である。929は体部から口縁部の立ち上がりは直線で大きく開く器形である。器の厚さは薄手で、色調は青灰色である。なお、器面調整はロクロ調整痕が残らない。

930は体部である。口唇部は欠損しているが929と同じ器形と調整である。931は瓦器質土器の底部である。低い高台をもつた付けは平坦に作っている。体部の立ち上がりは外に張り、丸味がある。器の厚さは薄手で、色調は青灰色である。なお、見込みはロクロ調整痕が残らないが丁寧な仕上げである。



第134図 瓦器質土器(3)

キ 土師器

① 土師器塊 (第135図 932～962)

この類は内赤が932・933・936・959・961・962で他は無色の土師器塊である。932～936は半球状の塊で、体部から口縁部である。934～936が口縁部で外反する。

937～962は底部である。937～951は高台が長く高い。952・954～956・958～962は高台が短く低い。

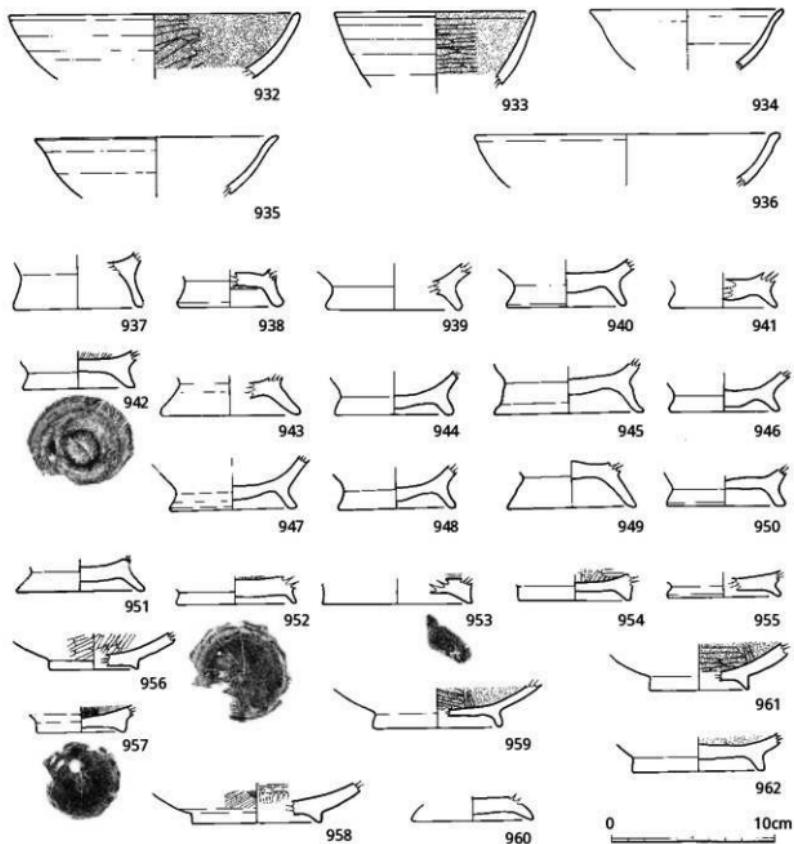
内面の研磨調整があるのは932・933・942・952・953・954・956・967・959・961である。この研磨調整は952が広めのヘラで、他は細めのヘラである。調整方法は見込みの中央を縱位と横位に組み合わせて、体部は横位に施している。

底部の裏には二次線刻があるものもある。942は中央部「-」があり、952は直角の中に30°位に斜線を入れている。957は葉脈状に線がみられる。

② 黒色土器A塊 (第135～138図 953・957・963～1068)

この類は内側を黒色研磨している塊で、内黒土師とも言われる。963～990は口縁・体部である。

これらの器形は969でみるとように基本的に半球状である。この中で、直線的なものは963・964で、口縁部が外反するのは982・984・985～987である。また、浅手は989・990である。



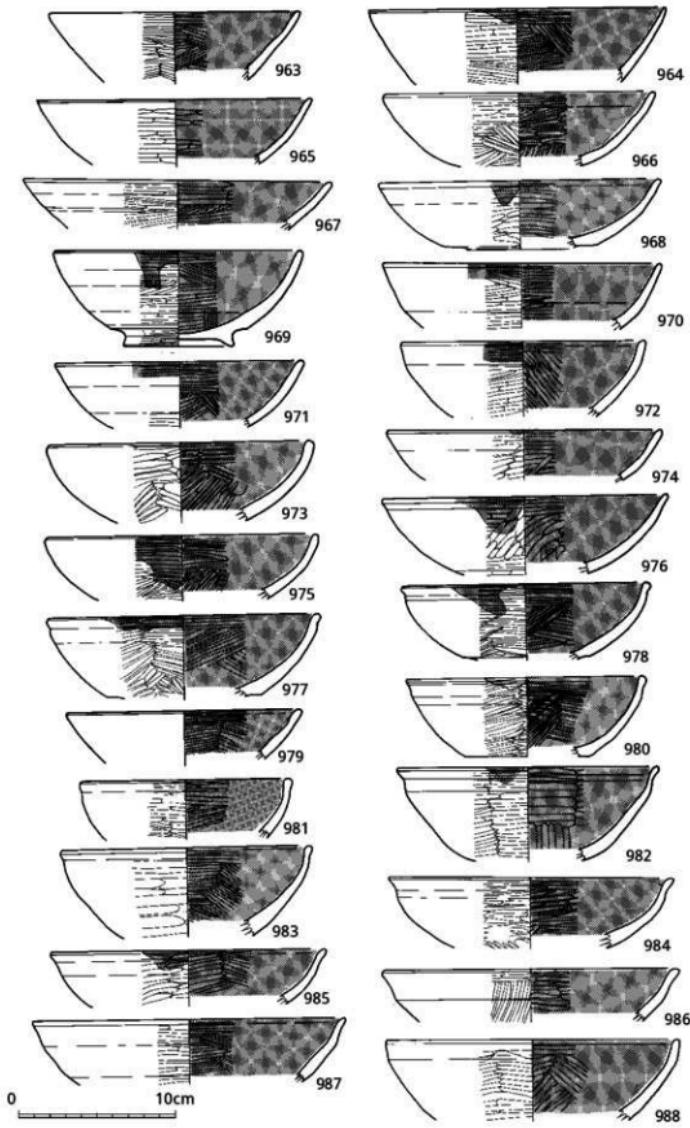
第135図 土師器塊

口径は16cm位が多く、大きなものは20cmを越える967・987がある。黒色は内側が主であるが968・975・976・985・989でみると外側にも及んでいるものもある。

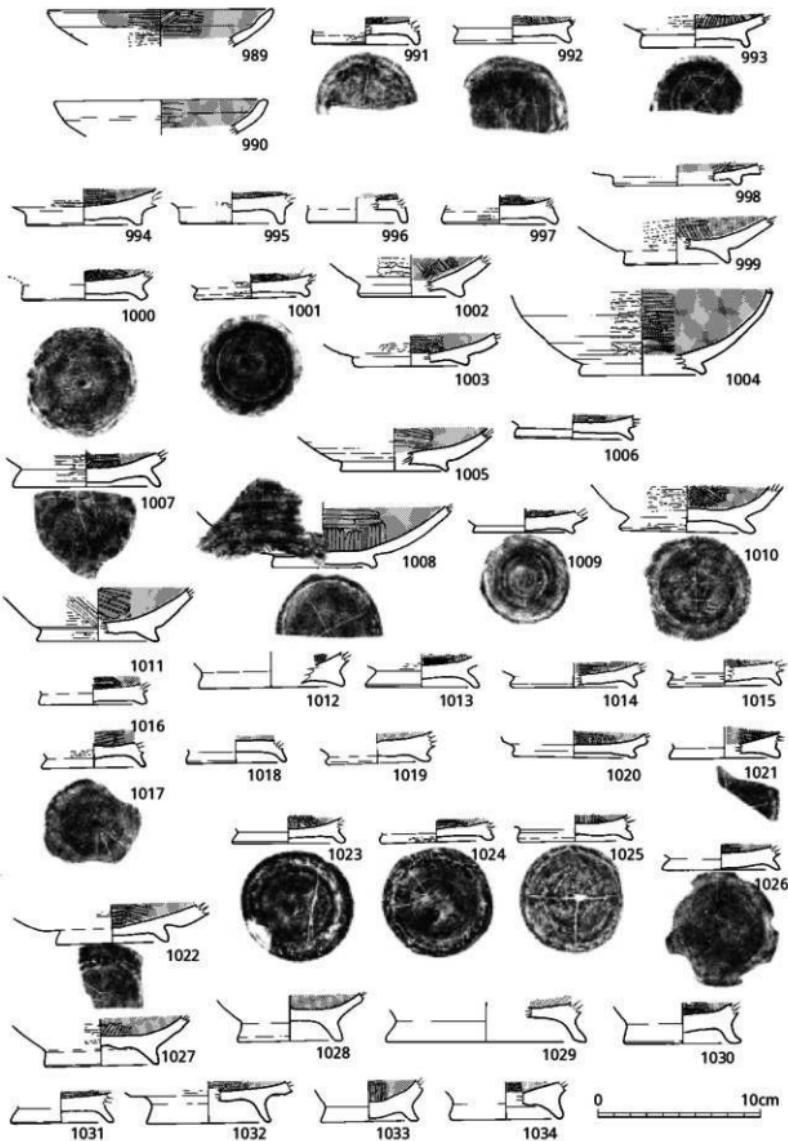
器面調整は内外面丁寧な研磨が施されている。研磨の方法は、見込みが縦横の研磨で体部外側が斜位で、口縁部は横位である。これは、水漏れ防止のために施したと思われる。

991～1068は体部・底部である。器形は半球状の中央部に高台は付いている状態である。高台は低くて立っているもの(991～996)、低くて開いているもの(997～1026)、高いもの(1027～1053)、高台が極端に細く尖り低いもの(1054～1068)がある。

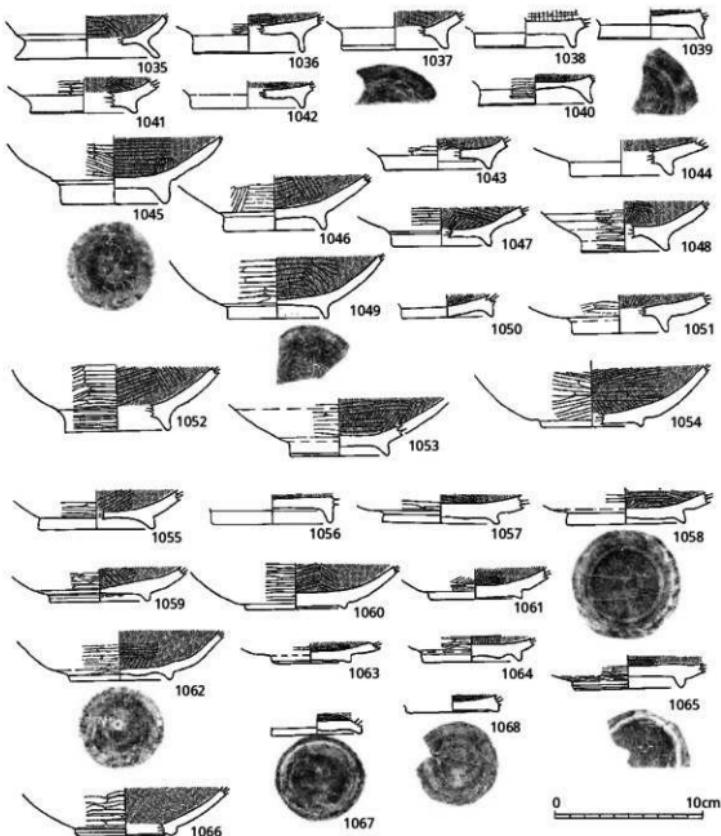
研磨調整は、見込み中央が縦位と横位を組み合わせ、退部内面は横位で丁寧に研磨している。これは、水漏れ防止に施したと思われる。



第136図 黒色土器A塊(1)



第137図 黒色土器A塊(2)



第138図 黒色土器A塊(3)

底部裏面に二次線刻があるものが多数あり、次のようにみられる。

第40表 二次線刻土器

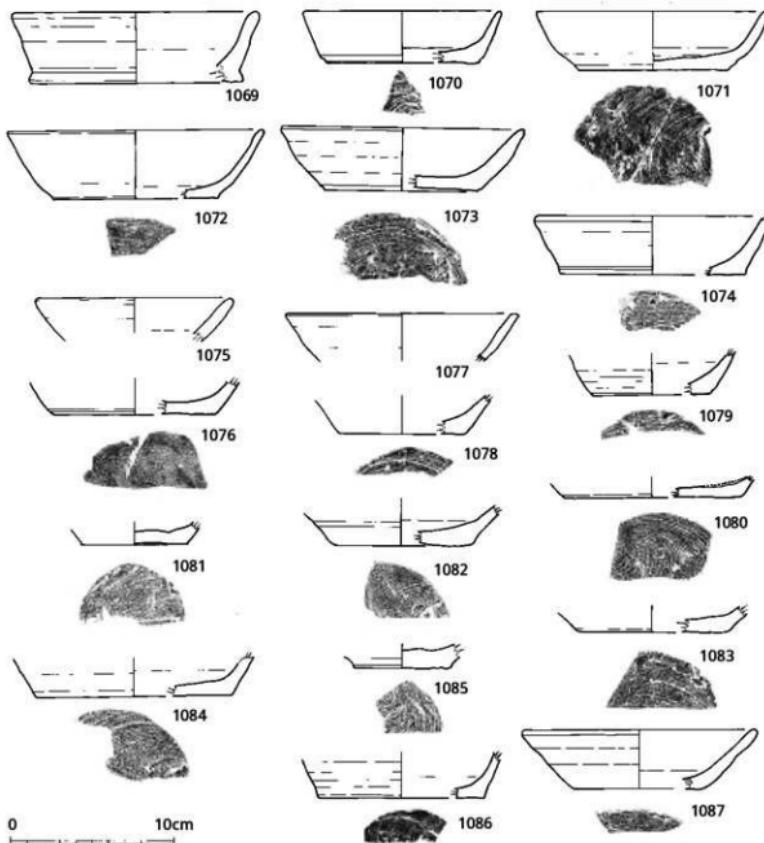
No.	二次線刻	No.	二次線刻	No.	二次線刻
991	「く」の字線と縦線の組み合わせ	1017	三角形の一角に斜線	1039	曲線と直線の組み合わせ
992	×に二の組み合わせ	1021	十か	1045	「わか」に読める線
993	×に斜線の組み合わせ	1022	三角形の一角に斜線	1049	2本の曲線
1001	○に一の組み合わせ	1023	1本の直線	1058	斜線と横線
1007	二ヒーの組み合わせ	1024	三角形の一角に斜線	1062	縦線と横線の網目
1008	二ヒーの組み合わせ	1025	1本の直線と縦線の組み合わせ	1065	三角形の一角
1009	十	1026	1本の直線	1067	直角に斜線
1010	二ヒーの組み合わせ	1037	文字らしき曲線	1068	×に一の組み合わせ

③ 坯 (第 139~142 図 1069~1137)

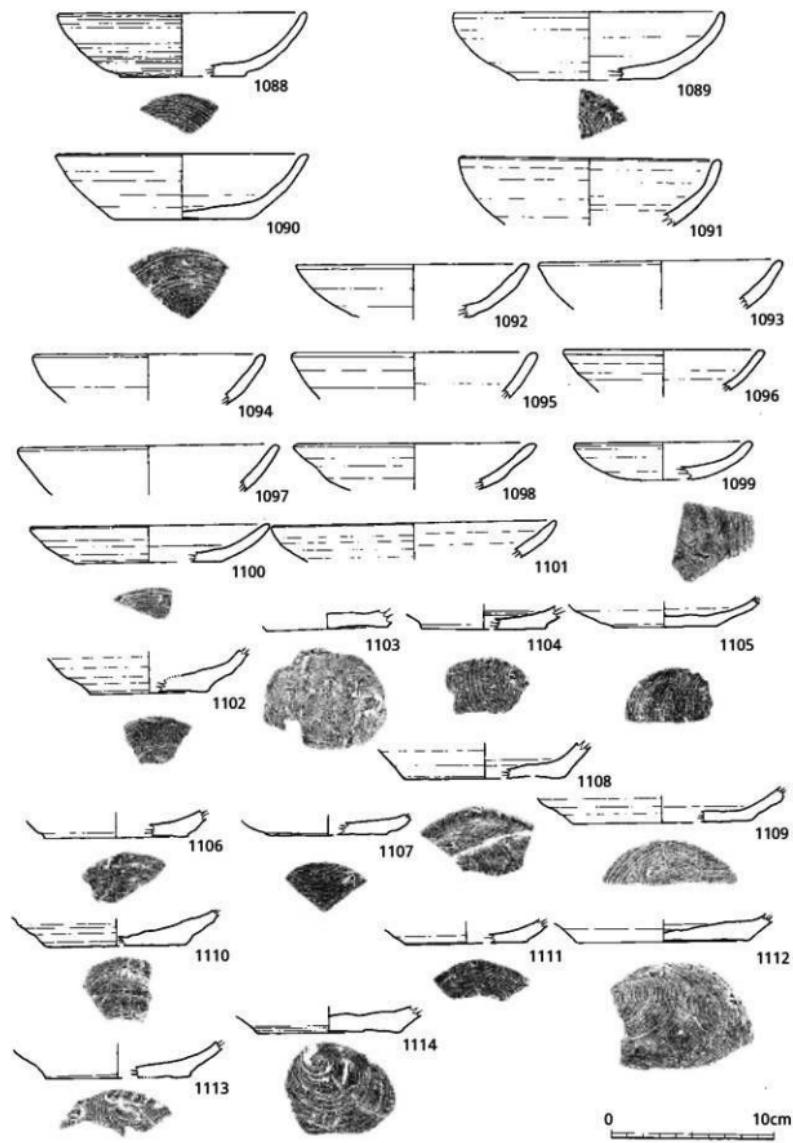
坯は大きく 3 つに分けられる。それは 1069~1087 と 1088~1114 と 1115~1137 である。

1069~1087 は体部・口縁部が直線的で底部が厚いグループである。底部は平底で糸切り離しの跡が残っている。このグループで特徴的は 1069・1072・1074・1084 でみられるように底部の端がはみ出し、底部から直ぐか短い間隔で立ち上がる器形である。器面は水挽きがみられる。

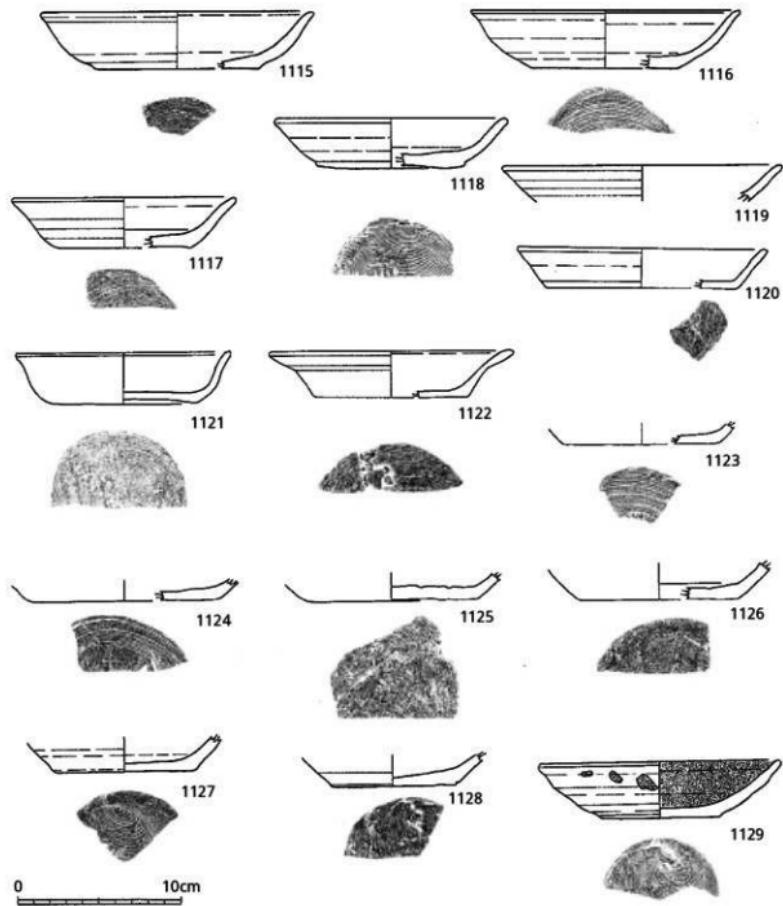
1088~1114 は前のグループの底部と類似し、厚手の底部である。体部・口縁部は半球状になり、底部からの立ち上がりは丸味をもつ器形である。底部の切り離し方法は糸切り離しである。器面は



第 139 図 土師器坯 (1)



第140図 土器器坏(2)

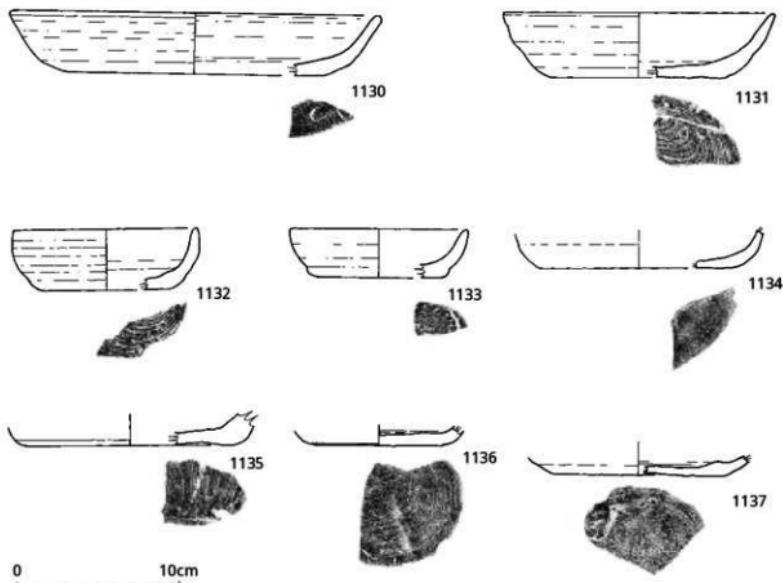


第141図 土師器壊(3)

水挽きがみられる。

1115～1137は底部に厚みがないグループである。体部・口縁部は球状になるもの(1115・1116・1129)と外反するもの(1117～1122)がみられる。この中の1122でみられるように大きく外反するものがある。これらは糸切り離しで、器面には水挽きがみられる。

1129は朱塗りの壊である。朱は見込みには全て塗られているが、外面にも所々あり全面の可能性がある。そのため特殊なものと考えられる。



第142図 土器器坏(4)

④ 小皿 (第143~144図 1138~1218)

この類は1138~1218である。

土器器小皿

このグループは1138~1179と1180~1218に分けられる。

1138~1179は底部が厚いもの(1153~1170等)と体部・口縁部の立ち上がりが直に立つもの(1138~1145・1148等)である。この中で口縁部が寝ているものは底部の厚いものの中にいれている。口径は8~9cmで高さは2~1.5cmである。底部の切り離しは糸切り離して、体部・口縁部は水挽きがみられる。

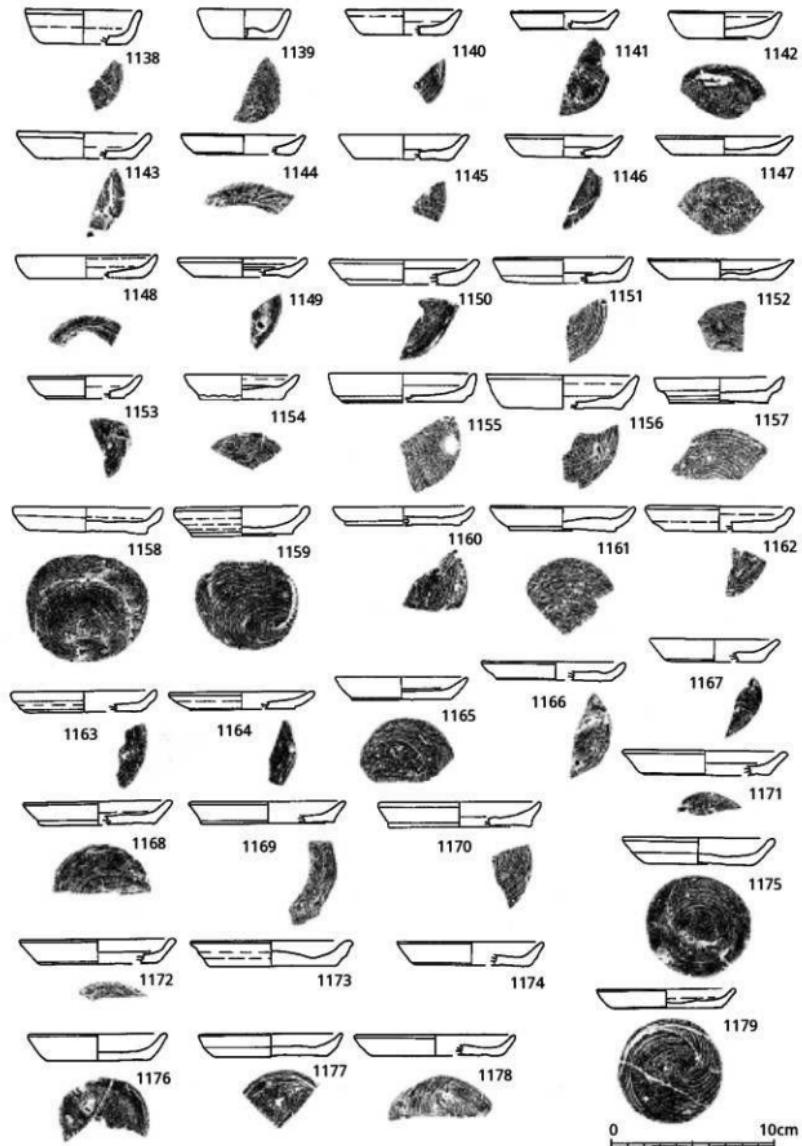
1180~1218は底部が薄く、体部・口縁部への立ち上がりは丸味を持って立ち上がる器形である。基本的に体部・口縁部は寝ている。口径は8~9cmで高さは2~1.5cmのものが多いが11cmのものもあり全体的に大きい。底部の切り離しは糸切り離して、体部・口縁部は水挽きがみられる。

⑤ 黒色土器B (第145図 1219~1239)

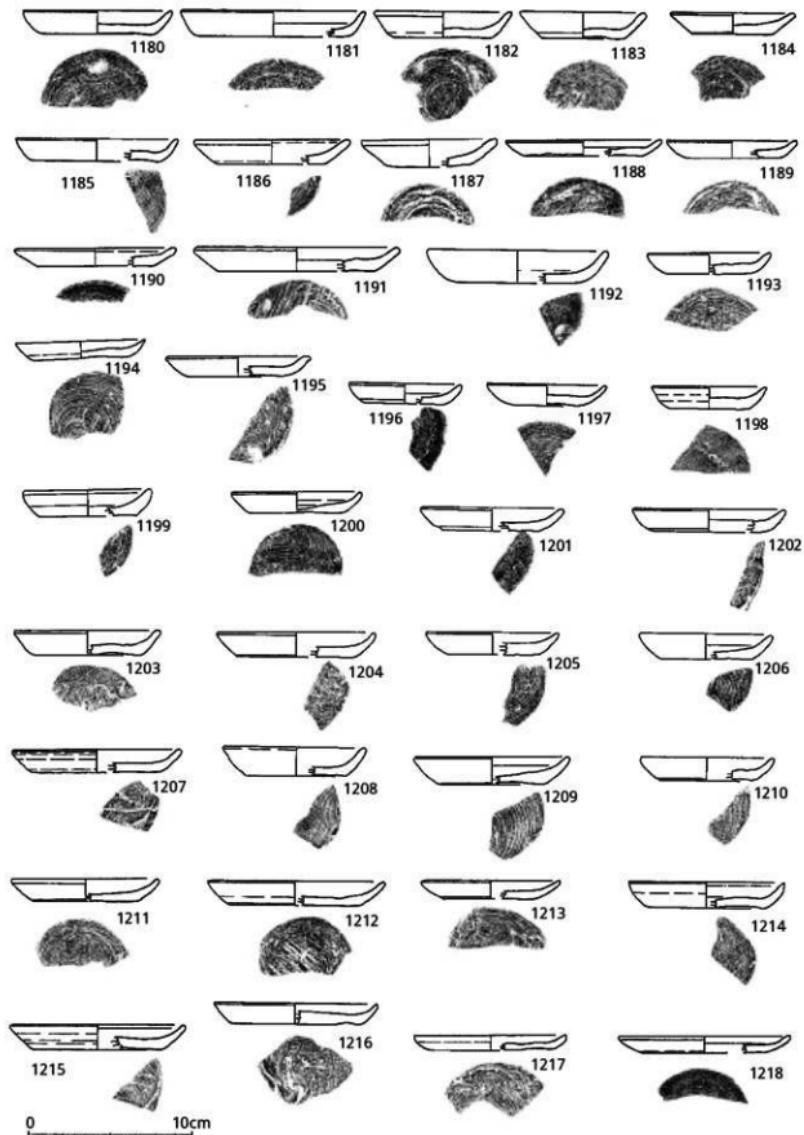
1219~1239の黒色土器Bは両面黒色である。

1219~1221は口径17~19cmの坏である。両面とも黒色研磨がされている。1222~1227は口径9~10cmの小皿である。1225・1226は底部から直に立ち上がるタイプである。底部の切り離しは糸切り離してあるが上から研磨している。両面とも黒色研磨がされている。

1228は底部が厚手の土器である。両面とも黒色研磨がされている。

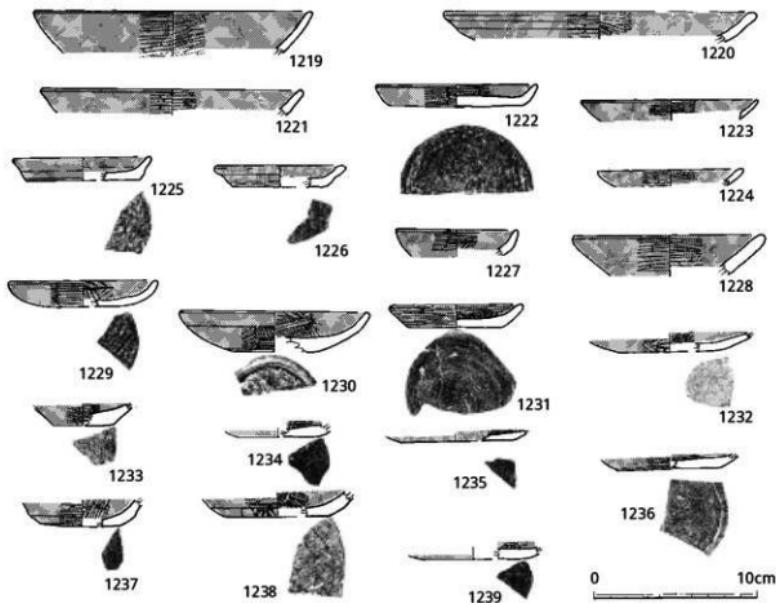


第143図 土師器小皿(1)



第144図 土器 小皿(2)

1229・1230は丸底に近い底部をもつ小皿である。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。1231は小皿であるが丸味をもって立ち上がる器形である。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。1232は丸味を持って立ち上がる器形である。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。1233は厚く狭い底部である。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。1234～1236は薄い底部である。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。1237・1238は底部の角を切っている。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。1239は立ち上がりが丸味をもっている。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。



第145図 黒色土器B・坯・小皿

⑥ 土師特殊品（第146図 1240～1251）

1240・1241は円筒状のふいごの羽口である。炉との付け口は鉄分が熔けた状態で付着している。

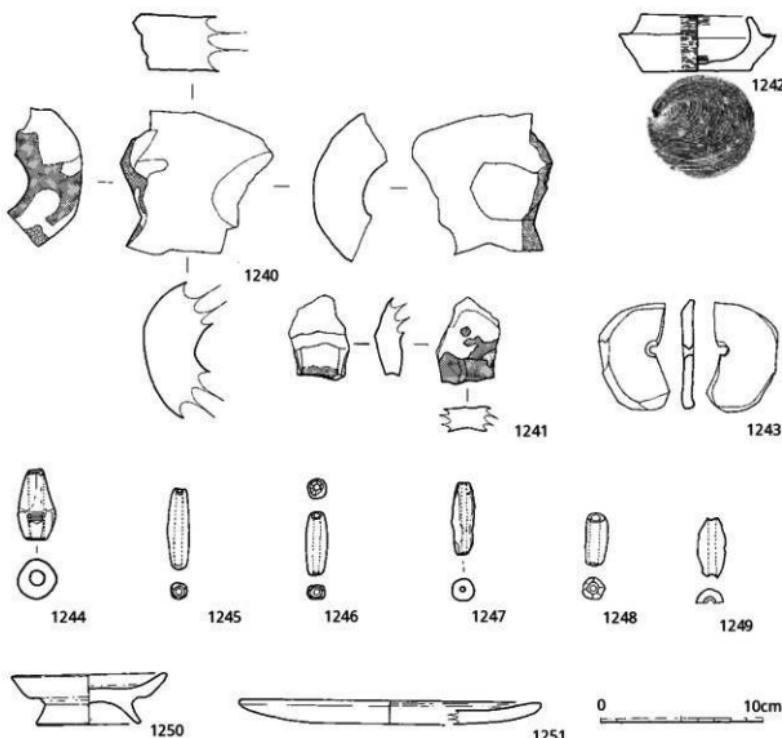
1242は合子の土師製品である。合子の受け身の方で底部は糸切り離しである。青白磁の合子のまねをして製作したと考えられる。

1243は土師器の底部を再利用した鍤錐車と思われる。穴は少しづれてあけている。

1244～1249 土鍤である。

1250は高台付き皿のものである。高台付き皿とも言えよう。

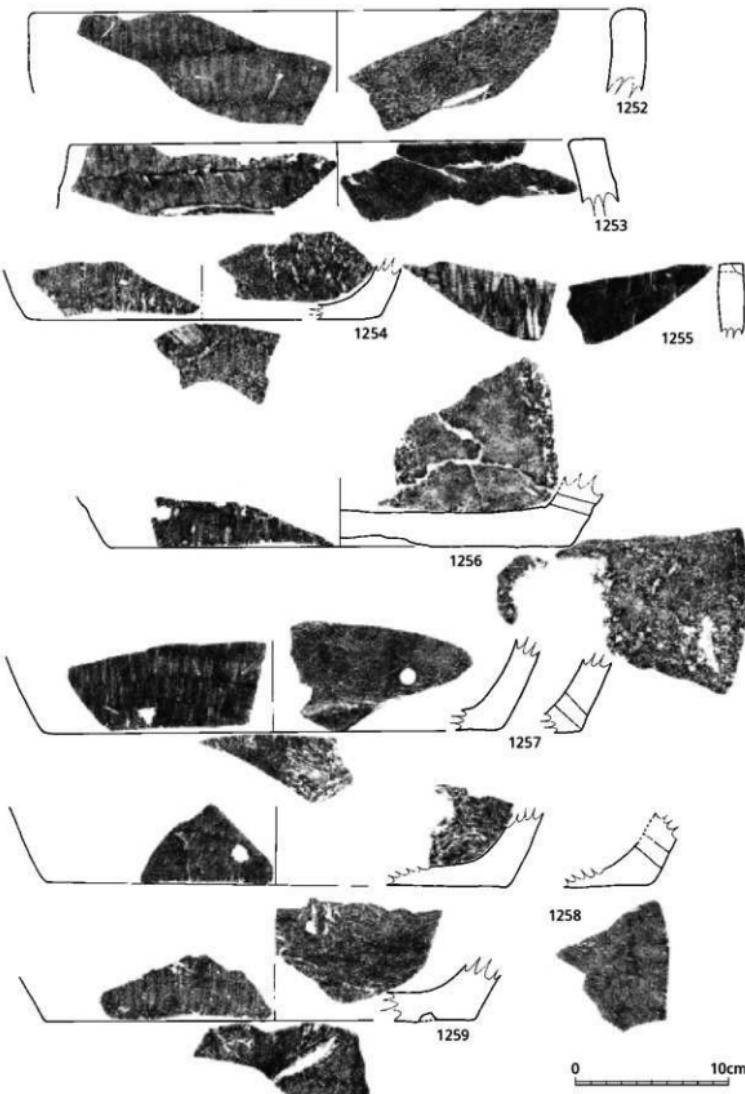
1251は底部が丸い皿である。糸切り底ではなく特殊品と考えられる。



第 146 図 土師特殊品

ク 石鍋 (第 147 図 1252~1259)

1252 は滑石製石鍋の口縁部である。断面はやや厚みのあるもので、口縁部の形は直行である。外
面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。1253 は滑石製石鍋の口縁
部である。断面はやや厚みのあるもので、口縁部の形は内湾ぎみである。外面は縦位に短く削りな
がら横位に廻らした調整面を段々に構成している。1254 は滑石製石鍋の底部である。断面は薄手で、
胴部への立ち上がりは外反である。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構
成している。1255 は滑石製石鍋の口縁部である。断面はやや薄手で、口縁部の形は直行である。外
面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。1256 は滑石製石鍋の底部
である。断面はやや厚みのあるもので、胴部への立ち上がりは外張りである。外面は縦位に短く削
りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。底面は削り跡を研磨している。また、円孔
が施され、鍋的要素が薄れる感がある。1257 は滑石製石鍋の底部である。断面はやや薄手である。

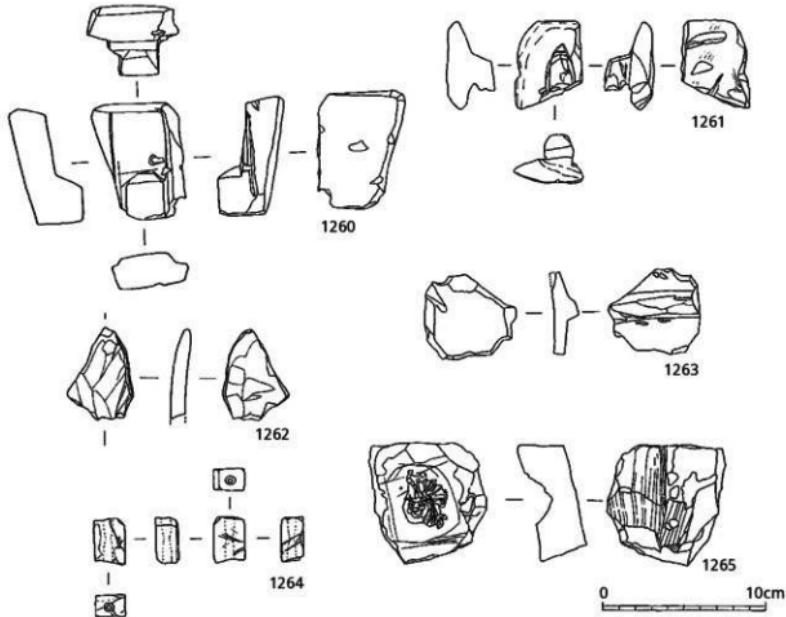


第147図 石器

胴部への立ち上がりは外張りである。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。底面は削り跡を研磨している。また、円孔もある。1258は滑石製石鍋の底部である。断面はやや厚みのあるもので、胴部への立ち上がりは外張りである。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。底面は削り跡を研磨している。また、円孔が施され、鍋的要素が薄れる感がある。1259は滑石製石鍋の底部である。断面はやや厚みのあるもので、胴部への立ち上がりは外張りである。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。底面は削り跡を研磨している。

ケ 滑石製品 (第148図 1260~1265)

1260は方形に面をとり方形の突起を作っている製品である。これは目的不明である。1261は丸味のある面と細穴がある紐状突起を作っている。用途ははっきりしないが、滑石製鏡模造品も考えられる。1262は薄手の製品で、丸味をもつもので用途不明である。1263は石鍋の一部をメンコにしたものと考えられる。1264は角柱に円孔がみられるものである。目的不明の製品である。1265は石鍋をメンコ状に割り、中央を抉っているものである。用途不明。



第148図 滑石製品

コ 砥石 (第149図 1266~1276)

砥石の石材は軟質白色頁岩と硬質頁岩の2種類である。

1266は、軟質白色頁岩で天草砥石と言われる石材である。主に片面が使用され、上位の使用残部



第149図 砥石

盛り上がりがみられる。裏面は若干丸味をおびている。1267 は硬質頁岩の石材である。砥石に使用した主な面は 1 面で、大半が剥がれており一部研面が残っている。側面の研面は若干残っている。1268 は軟質白色頁岩で天草砥石と言われる石材である。4 面が使用され中央部が細くなっている。1269 は硬質頁岩の石材である。砥石に使用した主な面は 1 面で、撲理部で大半が剥がれており、使用面は一部研ぎ面が残っている。1270 は小形の扁平な硬質頁岩で中央部に凹面の研ぎ跡がみられる。1272 は硬質頁岩を使用し、形は扁平で小形である。使用面は中央部である。1271 は軟質白色頁岩で 4 面を使用している。中央部は細くなり、折れている。そして、これは焼けたため砂粒が落ちてくる。1273 は硬質頁岩で扁平である。使用面は 2 面であるが、使用された痕跡は少ない。1274 は軟質白色頁岩で天草砥石と言われる石材である。小形で折れ 4 面が使用され中央部が細くなっている。なお、半分に欠損している。1275 は軟質白色頁岩で主に片面が使用されている。裏面は深い溝があり、若干丸味をおびている。なお、半分に欠損している。1276 は主に片面が使用されている。形は三角形で、裏面は凸凹があり使用されていない。

サ 石製品（第 150 図 1277～1283）

1277 は扁平状の滑石製品である。形は短冊状で加工は四角を丸くしたものである。使用目的は不明である。1278 は扁平状の滑石製品である。形は台形で加工は四角を丸くしたものである。片面は段差のある面を作り、片面は三角断面の縦筋を中央に入れている。使用目的は不明である。

1279 は石を縦剥ぎにしたものである。剥いた面は 4 面みられ、自然面も残っている。断面は蒲鉾形である。使用目的は不明である。

1280 は石球である。表面は漬した状態になっている。1281 は小形の石球である。これは自然面だけである。1282 は軽石加工品である。丸い軽石を片方から何回も削り込んだものである。使用目的は不明である。1283 は軽石製品である。形は亀の甲羅状に作っている。各面はすり切り調整で丁寧に作っている。

シ 金属製品（第 151～153 図 1284～1345）

1284～1299 は全て角釘である。頭部を曲げているものは 1284・1286・1291・1292・1294・1299 があり、他は見あたらない。前者は完全に近く、後者は頭部が欠損していると思われる。

1300 は半円球の傘に釘が組み込まれた傘釘と思われる。1301 は傘釘の傘部と思われる。

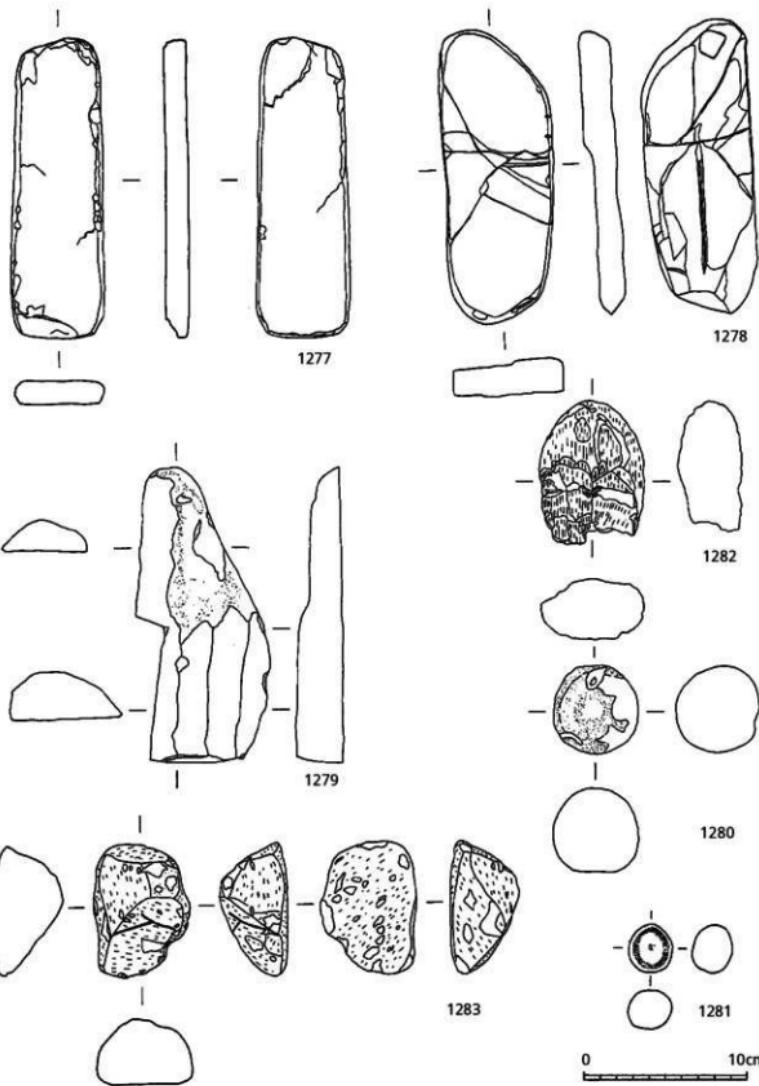
1302～1307 は板状にした板金の製品である。1303・1306 は板鉄を「コ」の字にした曲物状にし、1304 は板鉄が 2 枚重なり、1305 は「D」字状に折り曲げ、1307 は「9」字状に曲げている。これらは、道具等の柄に差し込んだ部分を絞める金具と考えられる。

1308 は板金を加工したもので、用途不明である。

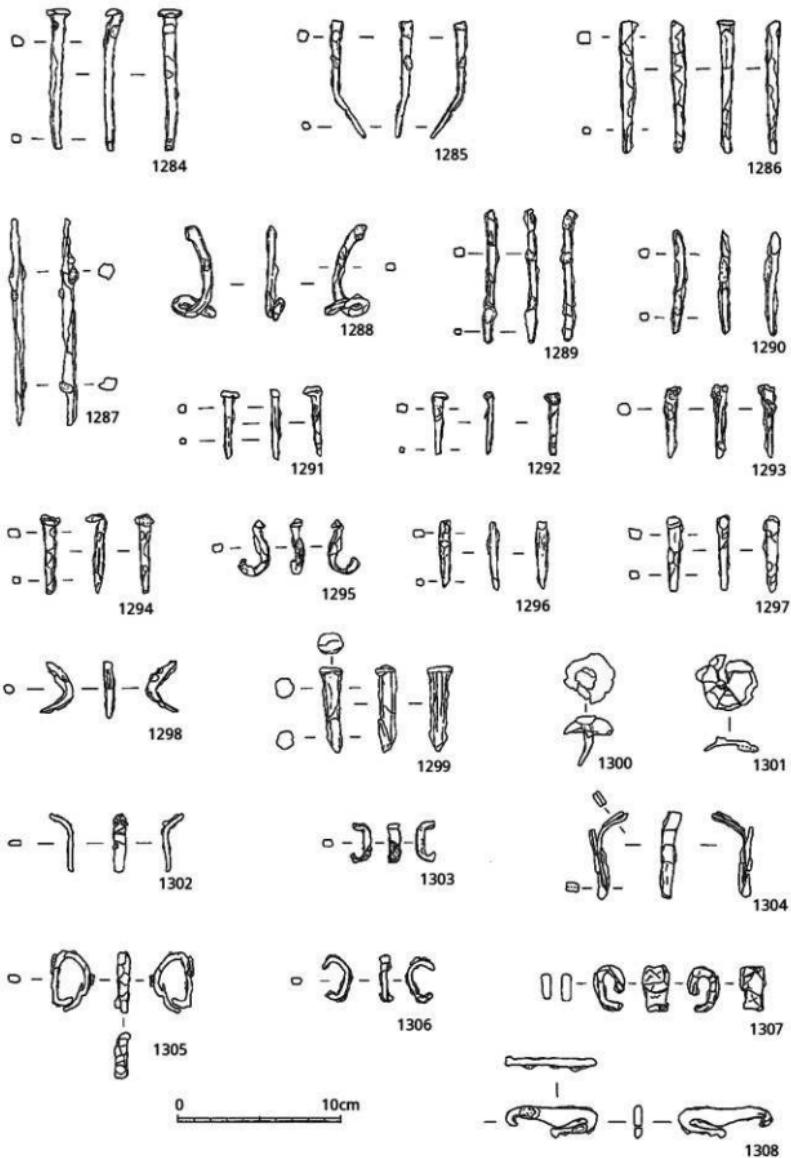
1309～1311 は刀子である。1309・1311 は刀子の刃部で、1310 は柄の差し込み部である。

1312～1318 は幅広板金製品の類である。1312・1313・1317 は厚手で三角形と長方形をなしている。用途としては楔が考えられる。1314・1316・1318 は用途不明。1315 は穴がみられるが用途不明である。

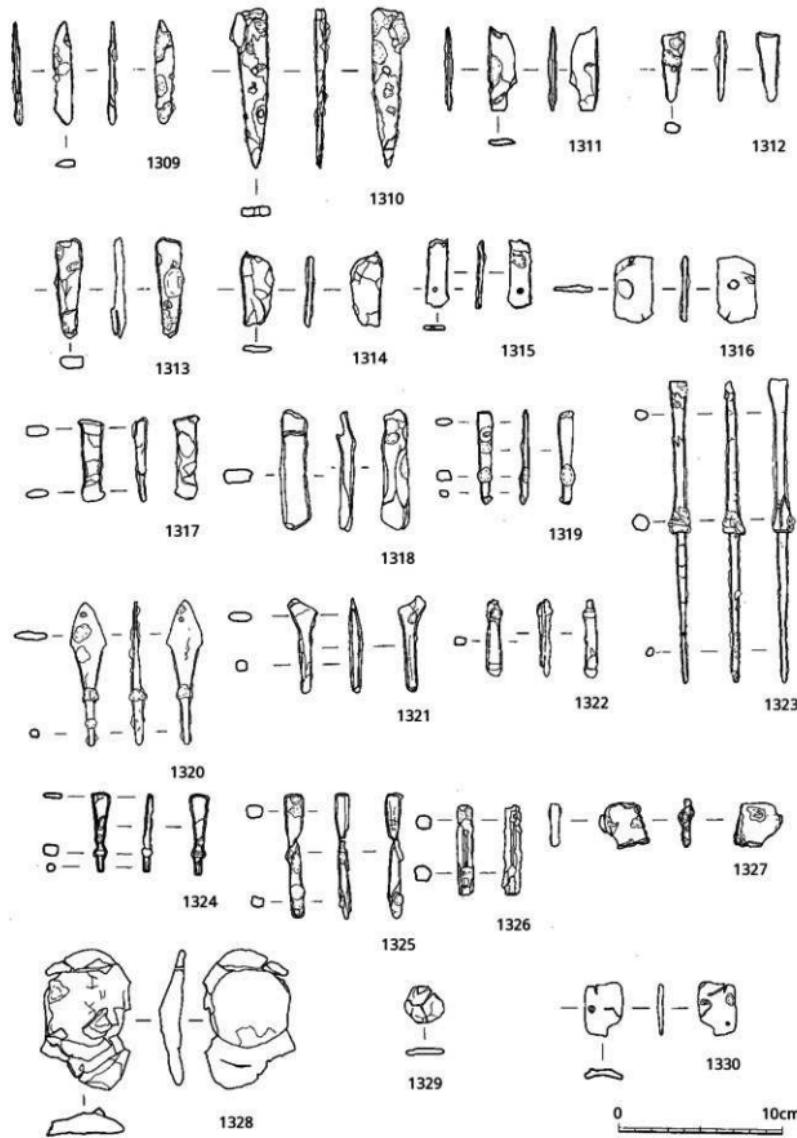
1319～1326 は鉄鎌の類である。1320・1322 は幅広鉄鎌である。これは鎌の刃部が菱形をなしていないものである。1319・1323・1324 は鎌の刃部が逆台形をなしているものである。この中では 1323



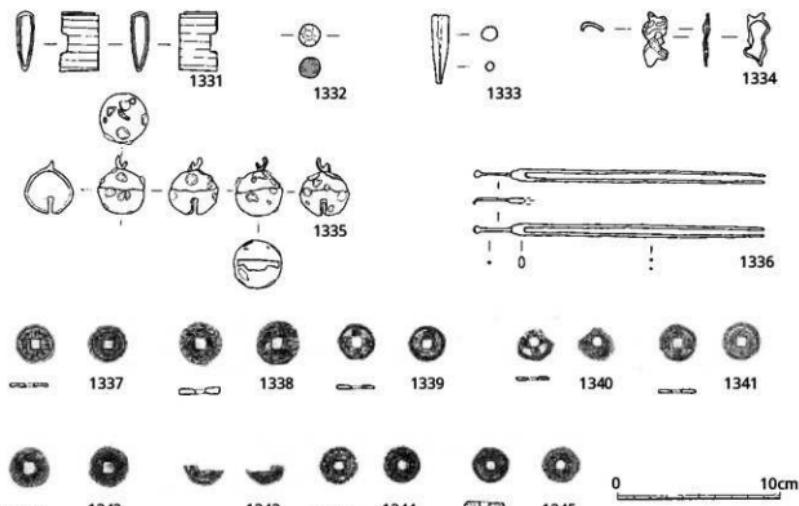
第150図 石製品



第151図 鉄製品(1)



第152図 鉄製品(2)



第153図 鉄製品(3)と銅・鉛製品

が完形品である。これは逆台形の幅広辺が先端部になり、長めの刃部である。柄部は長く差し込み端は尖っている。中間は装着部が表に出るところで、植物表皮で巻いた部分である。1319・1324はその小型である。なお、1322・1326はこのタイプの一部と考えられる。

1327は鉄板状の製品で形不明である。1329・1330は丸味のある鉄板で使用不明の製品である。

1331は青銅製品である。形は三角柱に中は空洞である。外面は狭い面切りがあり、内面は細工がない。用途は刀の鈎止め金具を考えられる。1332は鉛製の鉄砲玉である。1333は青銅製のキセルの吸口である。1334は青銅製の飾り金具と考えられる。1335は、鉄製の鉤である。製法は上半分と下半分の半球を接合して、穴の開いた吊り部を接合している。1336は青銅製品で、簪である。耳掛け部が付いている。

1337～1345は古銭である。この中には表層出土もあり中世・近世がみられる。1337・1339・1341が洪武通寶である。1339は元祐通寶である。1343は近世の寛永通寶の可能性がある。1334は2枚、1335は3枚重なって剥がれない状態である。なお、1338・1344は鉄錢で他は青銅錢である。

6 近世

(1) 遺構

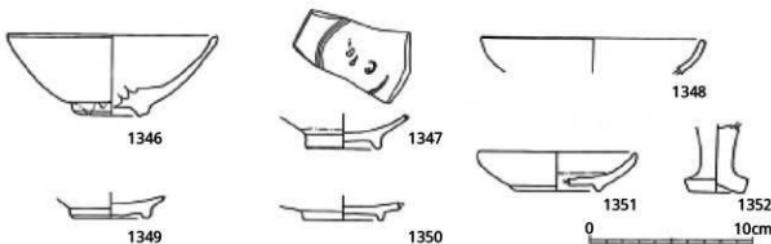
遺構は確実に確認されなかつたが建物跡の柱穴が数多く検出しているので、これらの中にあると考えられる。また、掘立柱建物跡26・31・32が3重にあるので、掘立柱建物跡27はその後建てられた可能性がつよい。この建物は2間×2間で西側の梁間柱が外側に張り出している。

他の土坑は性格不明である。

(2) 遺物 (第 154・155 図 1346~1376)

ア 磁器 (第 154 図 1346~1352)

1346 は白磁の碗である。中世にない器形や白色であるため近世とした。1347 も白磁の碗である。見込みに線がみられる。1348~1351 は皿である。1348 は口縁部で彎曲している。1349・1350 は高台である。1351 は口縁部が内湾し、見込みに少し稜がみえるものである。高台は低い。



第 154 図 近世白磁

1352 は上げ底で筒部が絞られた白磁である。底面には釉薬が施されていないロクロの水挽き痕がみられる。用途不明である。

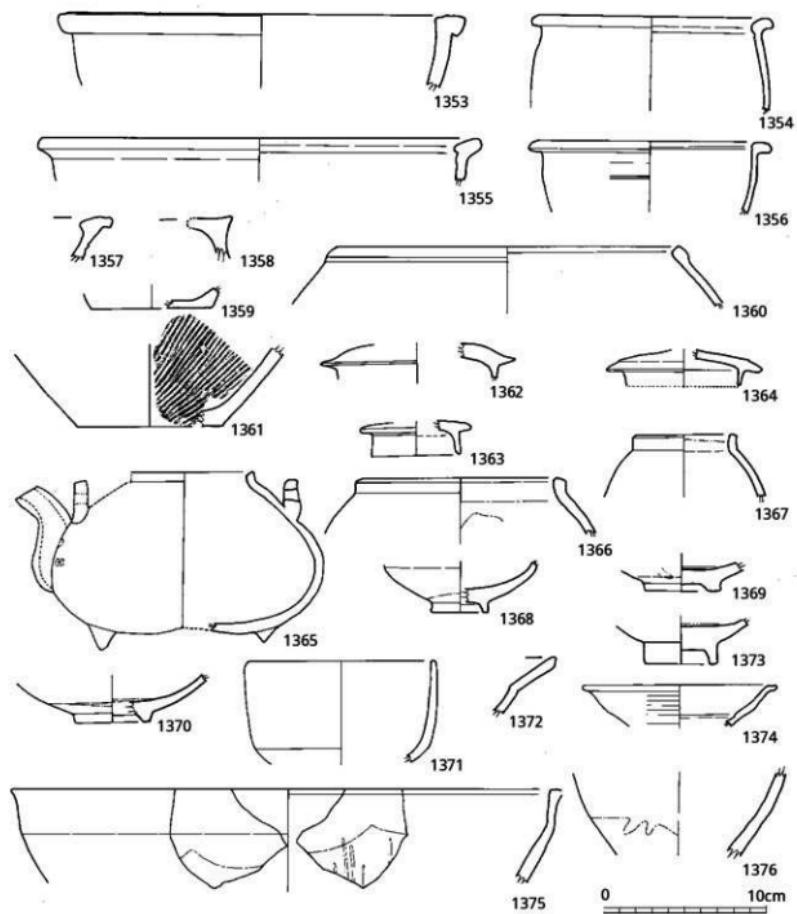
イ 陶器 (第 155 図 1353~1376)

1353~1368・1372 はさつま焼の類である。

1353 は「L」字口縁部をもつわゆる半胴甕である。釉は鉄釉の薄いものである。器面はロクロの水挽き痕が残る。1354 は小形の甕である。口縁部は厚く「く」の字に折れ、内面に段がみられる。1355 は半胴甕である。口縁部は厚く「く」の字に折れ、内面に舌状の段がみられる。1356 は小形の甕である。口縁部は厚く「L」の字に折れ、内面に段がみられる。1357 は擂鉢の口縁部である。口縁部は広い平坦面があり、内面は舌状になっている。1358 は半胴甕の口縁部である。内側に広い舌状の口唇部をもつ。1359 は甕の底部である。1360 は口縁部が内向した甕である。口縁部は厚みがある。1361 は擂鉢である。底部は平底で洞部は外側に立ち上がる。内面は櫛歯状筋をほどこしている。1362 は茶家の蓋である。これは厚みのある大形のものである。薄い褐色がかかる。1363 は茶家の蓋である。これは薄手で小形のものである。厚い鉄釉がかかる。1364 は茶家の蓋である。これは薄い中形のものである。薄い褐色がかかる。1365 は茶家である。脚は 3 本あり若干上げ底で、丸味をもった洞部である。洞から注ぎ口へは円孔が 3 つ作られている。口縁部直に立っている。釉は薄い褐色である。1366 は茶家の大形の口縁部である。1367 は小型の茶家の口縁部である。これらは苗代川焼の範疇に入る。

1368・1371・1373 は碗である。3 つともそば鉢である。系統としては白薩摩の類に入る。

1369~1376 は他の産地である。1369 は白色釉を使った志野焼に類している。1370・1371 は京焼の碗である。1372・1374 は大皿と小皿である。産地は不明である。1375 は擂鉢である。産地は不明である。1376 は琉球焼の蓋である。



第155図 近世陶器

第41表 石器一覧

番号	遺物番号	出土区	層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材
1	E-3		Ⅵ	剥片尖頭器	9.7	2.9	1.7	48.46	頁岩
2	14-F-4		Ⅵ	ナイフ形石器	4.7	2.6	1.1	10.95	玉緑(灰)
3	17-F-3		Ⅵ	フレイク	8.6	3.6	2.2	70.11	黑曜石
4	13-F-3		Ⅵ	スクレイパー	5.5	5.2	1.4	39.16	黑曜石
5	10-E-3		Ⅵ	フレイク	2.4	2.1	0.6	3.72	黑曜石
6	798-C-12		Ⅵ	フレイク	3.9	2.4	1.0	9.50	黑曜石
7	800-D-10		Ⅵ	フレイク	1.9	1.4	0.4	1.22	黑曜石
8	27-F-3		Ⅵ	フレイク	2.1	2.2	0.7	3.24	黑曜石
9	18-F-3		Ⅵ	フレイク	4.8	3.8	1.7	22.36	黑曜石
10	802-D-10		ドリル		1.7	0.9	0.7	0.55	黑曜石
11	E-7		I b	フレイク	2.0	4.0	0.7	7.01	黑曜石
12		表	スクリーパー		3.4	3.1	1.2	12.32	玉緑(灰)
13	E-8		I c	ナイフ形石器	3.7	1.8	0.5	3.05	黑曜石
14		表	スクリーパー		8.2	3.8	0.9	28.34	頁岩
15	C-8		II	スクリーパー	5.4	2.3	1.6	22.25	玉緑(灰)
16	E-3		I b	スクリーパー	3.3	2.2	1.0	7.20	玉緑(白)
17	D-5		I b	スクリーパー	2.6	2.4	0.8	5.71	玉緑(赤)
18	E-10		I b	UF	4.4	2.4	1.3	11.30	玉緑(灰)
40	溝2		石壁		3.3	2.5	0.4	2.12	黑曜石
41	28-C-9		石壁		2.6	1.4	0.4	1.01	黑曜石
42	E-9		V	石壁	3.0	1.8	0.4	1.69	黑曜石
43	D-10溝3		I	石壁	2.6	1.8	0.3	0.86	黑曜石
44			石壁		2.3	1.4	0.5	0.93	黑曜石
45	4-T		III b	石壁	2.6	1.6	0.4	0.98	黑曜石
46	D-10		III	石壁	2.4	1.7	0.3	0.67	頁岩
47	C-4-5方形堅穴1		石壁		2.6	1.8	0.6	1.38	黑曜石
48	D-5		III	石壁	1.9	1.3	0.3	0.38	黑曜石
49	32-F-16		II	石壁	1.8	1.3	0.3	0.46	頁岩
50	117-G-17		III	石壁	1.9	1.4	0.4	0.59	玉緑(灰)
51	D-8		II	石壁	2.3	1.9	0.3	1.26	黑曜石
52	F-4		III s	石壁	2.2	2.0	0.4	1.04	頁岩
53	258-F-18		II	石壁	2.3	1.3	0.3	1.14	頁岩
54	溝3		I	石壁	2.2	2.0	0.3	1.01	玉緑(白)
55	E-6		石壁		2.4	1.9	0.5	1.99	頁岩
56	796-C-11		V	石壁	1.8	1.2	0.5	0.89	玉緑(白)
57	F-7		I a	石壁	1.5	1.6	0.3	0.44	頁岩
58	372-G-16		II	石壁	1.5	1.4	0.4	0.45	黑曜石
59	C-9		II	石壁	1.5	1.4	0.2	0.31	黑曜石
60	5-T		II b	石壁	1.4	1.8	0.4	0.56	頁岩
61	E-7		I b	石壁	1.2	1.1	0.3	0.38	黑曜石
62	F-4		V	石壁	1.1	1.5	0.3	0.42	黑曜石
63	D-3		I b	石壁	1.9	1.5	0.4	1.34	黑曜石
64	E-8		I b	石壁	1.7	0.9	0.3	0.38	黑曜石
65	C-7		I b	スクリーパー	4.9	7.0	1.4	37.29	頁岩
66	E-8		V	スクリーパー	3.2	2.5	1.1	8.77	黑曜石
67	29-F-9		VE	スクリーパー	5.7	2.9	0.9	13.43	頁岩
68	719-D-6		II	磨削石斧	11.1	5.8	2.6	282.18	カシナ・ズ(花崗岩質)
69	山崩6-T	表	磨削石斧		5.8	5.7	2.5	62.71	頁岩
70	280-山崩6-T		II	打鍛石斧	12.6	5.2	2.6	247.84	頁岩
71	B-6		II	打鍛石斧	14.8	8.5	3.6	550	安山岩
72	D-7		凹石、敲石		15.9	10.5	4.8	1090	安山岩
73	C-7撲土		凹石、敲石		10.9	8.3	5.2	725	安山岩
74	818-B-4		III e	凹石、敲石	10.1	8.9	4.9	872	砂岩
75			磨石		9.0	8.0	6.1	617	安山岩
76			石皿		12.3	9.8	4.3	716	安山岩
77	C-7		石皿		13.8	10.3	5.8	1450	頁岩
78	D-6		II	石皿	18.0	16.3	5.0	2059	頁岩
260	C-8撲立柱26		砥石		9.5	3.5	2.5	161.49	砂岩
1266	D-5		I a	天草礁石	11.5	7.4	4.4	422	軟質白色頁岩
1267	746-C-7		II	礁石	8.5	2.2	1.9	76.69	頁岩
1268	749-C-7		II	天草礁石	8.9	6.4	5.6	590	軟質白色頁岩
1269			礁石		7.1	3.5	1.3	54.76	頁岩
1270	F-5		II	礁石	6.4	3.3	0.7	28.46	頁岩
1271	D-7		II	天草礁石	10.7	5.6	5.4	325	軟質白色頁岩
1272	B-4		I	礁石	4.9	2.1	0.6	9.73	頁岩
1273	E-5		II	礁石	4.9	3.2	0.6	14.95	頁岩
1274	E-4		I b	天草礁石	5.2	4.0	1.9	57.78	軟質白色頁岩
1275	C-10溝3		I	天草礁石	7.7	5.6	4.0	220	軟質白色頁岩
1276	C-4-5		天草礁石		11.7	6.7	5.7	340	軟質白色頁岩
1277	769-C-7		II	滑石製品	18.5	5.7	1.4	317	滑石
1278	F-5		滑石製品		18.3	6.6	2.0	430	滑石
1279	B-10		II	石製品	18.2	7.5	2.9	489	頁岩
1280	C-6		石球		5.3	5.2	5.2	148	安山岩
1281	C-4-5方形堅穴1		石球		3.0	2.7	2.4	29.25	安山岩
1282	D-7		砾石		8.5	6.4	3.9	49.72	鰐石
1283	C-6		II	砾石	8.4	5.9	4.2	47.77	鰐石

第42表 繩文時代出土遺物一覧

番号	遺物名	時期	器種	新都	出土区	層	色調		調査結果		文様等	
							外層	内面	外面	内面		
19	環状土器	早期	口縁部	D10	尾根部	山都G1	美	灰褐色	「に」字彫刻	明鏡色 明鏡色 明鏡色	○ ○ ○	丸
20	早期	環状土器	周部	G17	I	明鏡部	美	明鏡色	「に」字彫刻	明鏡色 明鏡色 明鏡色	○ ○ ○	丸
21	629年頃	環状土器	周部	G17	I	明鏡部	美	明鏡色	「に」字彫刻	明鏡色 明鏡色 明鏡色	○ ○ ○	丸
22	264年頃	環状土器	周部	山都G1	II	端部	美	端部	「に」字彫刻 「に」字彫刻 「に」字彫刻	端部 端部 端部	○ ○ ○	丸
23	217年頃	環状土器	周部	G18	III	端部	美	端部	「に」字彫刻	端部 端部 端部	○ ○ ○	圓
24	222年頃	環状土器	周部	G18	III	端部	美	端部	「に」字彫刻	端部 端部 端部	○ ○ ○	圓
25	55年頃	環状土器	周部	F17	IV	端部	美	端部	「に」字彫刻	端部 端部 端部	○ ○ ○	圓
26	早期	環状土器	周部	山都G1	V	端部	美	端部	「に」字彫刻	端部 端部 端部	○ ○ ○	圓
27	13年頃	環状土器	周部	山都G1	VI	端部	美	端部	「に」字彫刻	端部 端部 端部	○ ○ ○	圓
28	248年頃	環状土器	周部	G18	III	新断端部	美	新断端部	「に」字彫刻	新断端部 新断端部 新断端部	○ ○ ○	圓
29	中期	環状土器	口縁部	E6	II	新断端部	美	新断端部	「に」字彫刻	新断端部 新断端部 新断端部	○ ○ ○	圓
30	794年頃	環状土器	周部	C8	III	新断端部	美	新断端部	「に」字彫刻	新断端部 新断端部 新断端部	○ ○ ○	圓
31	794年中期	環状土器	周部	C8	III	新断端部	美	新断端部	「に」字彫刻	新断端部 新断端部 新断端部	○ ○ ○	圓
32	794年中期	環状土器	周部	C8	III	新断端部	美	新断端部	「に」字彫刻	新断端部 新断端部 新断端部	○ ○ ○	圓
33	994年中期	環状土器	周部	C8	III	新断端部	美	新断端部	「に」字彫刻	新断端部 新断端部 新断端部	○ ○ ○	圓
34	中期	環状土器	口縁部	F7	I	端部	美	端部	「に」字彫刻	端部 端部 端部	○ ○ ○	圓
35	中期	環状土器	周部	B5	II	端部	美	端部	「に」字彫刻	端部 端部 端部	○ ○ ○	圓
36	中期	環状土器	周部	D7	II	端部	美	端部	「に」字彫刻	端部 端部 端部	○ ○ ○	圓
37	838年頃	環状土器	口縁部	B4	IV	端部	美	端部	「に」字彫刻	端部 端部 端部	○ ○ ○	圓
38	後期	環状土器	周部	G18	V	端部	美	端部	「に」字彫刻	端部 端部 端部	○ ○ ○	圓
39	218年頃	環状土器	周部	G18	VI	端部	美	端部	「に」字彫刻	端部 端部 端部	○ ○ ○	圓

第43表 古墳・古代出土遺物一覧

番号	種類	種類	部位	法寸	出土寸	層	外面色	内面色	外面部質	内面部質	胎土色	胎土色質	胎土特質	
79	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	25.0	B-4	茶灰褐色	茶灰褐色	ナガハツ	ヨコヨリ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
80	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	21.2	B-3	二つない黄褐色	二つない黄褐色	ナカハタ	ナカハタ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
81	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	18.4	B-3	二つない黄褐色	二つない黄褐色	ナカハタ	ナカハタ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
82	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	28.0		二つない黄褐色	二つない黄褐色	ナカハタ	ナカハタ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
83	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	19.0	D-9	三	二つない黄褐色	二つない黄褐色	ナカハタ	ナカハタ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
84	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	29.4	C-2	三	二つない黄褐色	二つない黄褐色	ナカハタ	ナカハタ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
85	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	F-5	II	茶褐色	茶褐色	ヨコハツ	ヨコハツ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
86	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	26.8	III	茶褐色	茶褐色	ヨコハツ	ヨコハツ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
87	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	19.4	B-3	II~III	二つない黄褐色	二つない黄褐色	ナカハタ	ナカハタ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
88	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	22.0	E-3	茶褐色	茶褐色	ナカハタ	ナカハタ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
89	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	23.4	B-3	II~III	明黄褐色	明黄褐色	ヨコハツ	ヨコハツ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
90	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	12.0	B-3	II	茶褐色	二つない黄褐色	ナカハタ	ナカハタ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
91	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	26.4	B-3	II	明赤褐色	明赤褐色	ヨコハツ	ヨコハツ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
92	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	24.2	E-3	III	茶褐色	茶褐色	ヨコハツ	ヨコハツ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
93	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	18.0	F-5	II	茶褐色	明黄褐色	ヨコハツ	ヨコハツ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
94	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	9.3		II	二つない黄褐色	二つない黄褐色	ヨコハツ	ヨコハツ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
95	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	D-8	II	茶褐色	茶褐色	ヨコハツ	ヨコハツ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
96	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	D-3	I	二つない茶褐色	二つない茶褐色	ヨコハツ	ヨコハツ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
97	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	B-3	II	茶褐色	茶褐色	ヨコハツ	ヨコハツ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
98	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	D-6	II	茶褐色	茶褐色	ヨコハツ	ヨコハツ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
99	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	11.0	B-4	III	茶褐色	茶褐色	ヨコハツ	ヨコハツ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
100	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	9.0	B-3	III	茶褐色	茶褐色	ヨコハツ	ヨコハツ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
101	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	9.0	B-5	III	明黄褐色	明黄褐色	ヨコハツ	ヨコハツ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
102	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	11.6	II	茶褐色	二つない黄褐色	ハサハシリ	ハサハシリ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
103	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	9.5	D-6	II	茶褐色	明黄褐色	ハサハシリ	ハサハシリ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
104	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	9.6	F-4	III	二つない黄褐色	二つない黄褐色	ハサハシリ	ハサハシリ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
105	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	22.6	B-3	II	明赤褐色	明赤褐色	ヨコハツ	ヨコハツ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
106	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	11.4	B-3	II~III	茶褐色	茶褐色	ヨコハツ	ヨコハツ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
107	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	30.0	C-6	III	茶褐色	茶褐色	ヨコハツ	ヨコハツ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
108	先河内式土器	口縁部	口縁部	口径	32.0	D-11	II	二つない黄褐色	二つない黄褐色	ハサハシリ	ハサハシリ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
109	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	E-5	II	茶褐色	茶褐色	ハサハシリ	ハサハシリ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
110	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	20.0	B-3	茶褐色	茶褐色	ハサハシリ	ハサハシリ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
111	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	27.0	B-4	III	二つない黄褐色	二つない黄褐色	ヨコハツ	ヨコハツ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
112	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	28.8	D-5	II	二つない黄褐色	二つない黄褐色	ヨコハツ	ヨコハツ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
113	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	33.8	C-3	III	茶褐色	茶褐色	ハサハシリ	ハサハシリ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色
114	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	B-4	III	茶褐色	二つない黄褐色	ハサハシリ	ハサハシリ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
115	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	B-3	III	茶褐色	茶褐色	ハサハシリ	ハサハシリ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
116	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	C-12	III	茶褐色	茶褐色	ハサハシリ	ハサハシリ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
117	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	E-3	III	明赤褐色	明赤褐色	ハサハシリ	ハサハシリ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
118	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	E-4	II	明赤褐色	二つない茶褐色	ハサハシリ	ハサハシリ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
119	成川式土器	口縁部	口縁部	口径	B-3	II	二つない茶褐色	二つない茶褐色	ハサハシリ	ハサハシリ	角灰石	茶灰褐色	茶灰褐色	
120	成川式土器	口縁部	口縁部	口径										

番号	種類	部位	法量(gm)	出土区	層	外面色調		内面色調		地土色調	地土特徴	
						外面上色	外下面色	内上面色	内下面色			
121	成川式土器	甕	底盤	底盤	B-5	II	二小い黒褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石、赤玉、赤色質		
122	成川式土器	甕	底盤	底盤	3.0	III	褐灰色	II	灰黑色	石英質角閃石、長石		
123	成川式土器	甕	底盤	底盤	3.4	C-2	黄色	II	灰黑色	石英質角閃石、赤色質		
124	成川式土器	甕	底盤	底盤	7.0	II	褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石		
125	成川式土器	甕	底盤	底盤	9.4	C-11	褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石		
126	成川式土器	甕	底盤	底盤	4.0	K-3	II	褐色	II	灰褐色	石英質角閃石、長石	
127	成川式土器	甕	底盤	底盤	8.0	C-6	I-C	褐色	II	灰褐色	石英質角閃石、赤色質	
128	成川式土器	甕	底盤	底盤	7.0	F-5	II	二小い黄褐色	II	明黄褐色	石英質角閃石、長石、赤色質	
129	成川式土器	甕	口盤	口盤	15.4	II	褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石		
130	成川式土器	甕	口盤	口盤	18.0	F-5	IIIa	二小い黒褐色	II	深黄褐色	石英質角閃石、長石	
131	成川式土器	甕	口盤	口盤	5.4	E-3	IIIa	褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石	
132	成川式土器	甕	底盤	底盤	4.0	C-6	III	二小い黒褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石	
133	成川式土器	甕	底盤	底盤	4.0	C-6	III	二小い黒褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石	
134	成川式土器	甕	口盤	口盤	23.0	D-7	II	二小い黒褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石	
135	成川式土器	甕	口盤	口盤	B-4	II	褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石		
136	成川式土器	甕	口盤	口盤	B-4	II	褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石		
137	成川式土器	甕	口盤	口盤	D-3	II	二小い黒褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石		
138	成川式土器	甕	口盤	口盤	14.0	B-4	II	褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石	
139	成川式土器	甕	口盤	口盤	9.0	C-12	II	褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石	
140	成川式土器	甕	口盤	口盤	C-6	II	褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石		
141	成川式土器	甕	口盤	口盤	12.0	E-6	II	明黄褐色	II	明黄褐色	石英質角閃石	
142	成川式土器	甕	口盤	口盤	D-5	I-C	黄色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石		
143	成川式土器	甕	口盤	口盤	B-6	II	二小い黒褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石		
144	成川式土器	甕	口盤	口盤	36.6	D-11	II	二小い黒褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石	
145	土師器	甕	口盤	口盤	D-11	II	二小い黒褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石		
146	土師器	甕	口盤	口盤	B-4	II	二小い黒褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石		
147	土師器	甕	口盤	口盤	29.6	F-8	II	二小い黒褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石	
148	土師器	甕	口盤	口盤	24.0	D-11	II	暗赤褐色	II	暗赤褐色	石英質角閃石	
149	土師器	甕	口盤	口盤	19.6	B-4	II	二小い黒褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石	
150	土師器	甕	口盤	口盤	33.8	B-5	II	二小い黒褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石	
151	土師器	甕	口盤	口盤	33.6	B-5	II	二小い黒褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石	
152	土師器	甕	口盤	口盤	30.8	C-12	II	二小い黒褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石	
153	土師器	甕	口盤	口盤	28.2	D-11	II	褐色	II	褐色	石英質角閃石	
154	土師器	甕	口盤	口盤	II	褐色	II	褐色	II	褐色	石英質角閃石	
155	土師器	甕	口盤	口盤	C-12	II	灰褐色	II	灰褐色	石英質角閃石		
156	土師器	甕	口盤	口盤	24.4	C-12	II	二小い黒褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石	
157	土師器	甕	口盤	口盤	23.0	D-3	II	褐色	II	褐色	石英質角閃石	
158	土師器	甕	口盤	口盤	24.0	E-4	II	二小い黒褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石	
159	土師器	甕	口盤	口盤	19.2	F-7	II	二小い黒褐色	II	二小い黒褐色	石英質角閃石	
160	土師器	甕	口盤	口盤	28.0	D-11	II	明褐色	II	明褐色	石英質角閃石	
161	土師器	甕	口盤	口盤	8.0	B-5	II	深褐色	II	深褐色	石英質角閃石	
162	土師器	甕	底盤	底盤	底盤						水洗色	

番号	種類	部位	剖面	法線(cm)	出土区	層	外面色調		内面色調		胎土色調	胎土特質	
							外	内	外	内			
163	土師器	外 内	腰部 体部	底径	6.2	C-12	II	二分の黄褐色	反覆褐色	水洗き	水洗き	二分の黄褐色	粗粒
164	土師器	外 内	体部 体～颈部	底径	6.0	B-5	II	二分の黄褐色	反覆褐色	水洗き	水洗き	二分の黄褐色	粗粒
165	土師器	外 内	体部 体～颈部	底径	6.4	B-3	I c	淡黄色	淡黄色	水洗き	水洗き	淡黄色	粗粒
166	土師器	外 内	腰部 体部	底径	5.2	E-6	II	二分の黄褐色	反覆褐色	水洗き	水洗き	二分の黄褐色	粗粒
167	土師器	外 内	腰部 体部	底径	7.0	B-5	II	二分の黄褐色	反覆褐色	水洗き	水洗き	二分の黄褐色	粗粒
168	土師器	外 内	腰部 体～颈部	底径	6.6	D-11	I b	二分の黄褐色	反覆褐色	水洗き	水洗き	二分の黄褐色	粗粒
169	土師器	外 内	体～颈部 体～颈部	底径	5.2	B-3	II	二分の黄褐色	反覆褐色	水洗き	水洗き	二分の黄褐色	粗粒
170	土師器	外 内	腰部 体部	底径	6.0	B-4	III	淡黄色	淡黄色	水洗き	水洗き	淡黄色	粗粒
171	土師器	外 内	腰部 体部	底径	6.0	D-12	III a	淡黄色	淡黄色	水洗き	水洗き	淡黄色	粗粒
172	土師器	外 内	腰部 体部	底径	7.5	F-7	I b	二分の黄褐色	反覆褐色	水洗き	水洗き	二分の黄褐色	粗粒
173	土師器	陶 灰	口縁～窓部 口縁～窓部	口径	13.0	C-12	II	二分の黄褐色	反覆褐色	水洗き	水洗き	二分の黄褐色	粗粒
174	黑色土器A	灰 灰灰	口縁～手品 口縁～手品	口径	12.2	C-12	E-8	明黄褐色	墨色	水洗き	水洗き	明黄褐色	粗粒
175	須恵器	包体	口縁～肩部 口縁～肩部	口径	14.2	D-10	I a	墨色	反りつ褐色	水洗き	水洗き	反りつ褐色	粗粒
176	須恵器	蓋	口縁～肩部 口縁～肩部	口径	12.4	E-6	I c	反りつ褐色	反覆褐色	水洗き	水洗き	反覆褐色	粗粒
177	須恵器	蓋	腰部 腰部	腰径	15.4	H-4	II	灰色	灰色	反覆水洗き	反覆水洗き	反覆水洗き	粗粒
178	須恵器	蓋	腰部 腰部	腰径	21.4	C-4	I c	反りつ褐色	反色	反覆水洗き	反覆水洗き	反覆水洗き	粗粒
179	須恵器	蓋	腰部 腰部	腰径	D-5	I c	灰色	灰色	灰色	反覆水洗き	反覆水洗き	反覆水洗き	粗粒
180	須恵器	蓋	腰部 腰部	腰径	20.5	D-10	I b	反覆灰色	二分の黄褐色	反覆水洗き	反覆水洗き	二分の黄褐色	粗粒
181	須恵器	蓋	腰部 腰部	腰径	D-9	I b	反覆灰色	二分の黄褐色	反覆水洗き	反覆水洗き	二分の黄褐色	粗粒	
182	須恵器	蓋	腰部 腰部	腰径	C-11	I b	反覆灰色	反覆灰色	反覆水洗き	反覆水洗き	反覆灰色	粗粒	
183	須恵器	蓋	腰部 腰部	腰径	D-3	I c	反覆灰色	反覆灰色	反覆水洗き	反覆水洗き	反覆灰色	粗粒	
184	須恵器	蓋	腰部 腰部	腰径	D-7	I c	二分の黄褐色	反りつ褐色	反覆水洗き	反覆水洗き	反覆灰色	粗粒	
185	須恵器	蓋	腰部 腰部	腰径	B-4	I c	二分の黄褐色	反りつ褐色	反覆水洗き	反覆水洗き	反覆灰色	粗粒	
186	須恵器	蓋	腰部 腰部	腰径	C-6	I c	反りつ褐色	反覆褐色	反覆水洗き	反覆水洗き	反りつ褐色	粗粒	
187	須恵器	蓋	腰部 腰部	腰径	C-10	II	二分の黄褐色	反覆褐色	反覆水洗き	反覆水洗き	二分の黄褐色	粗粒	
188	須恵器	蓋	腰部 腰部	腰径	11.2	C-2	I b	反りつ褐色	反覆褐色	反覆水洗き	反覆水洗き	反覆灰色	粗粒
189	須恵器	蓋	腰部 腰部	腰径	10.6	E-6	I c	反覆灰色	反覆灰色	反覆水洗き	反覆水洗き	反覆灰色	粗粒
190	須恵器	蓋	腰部 腰部	腰径	8.0	C-11	I c	反覆灰色	反覆灰色	反覆水洗き	反覆水洗き	反覆灰色	粗粒
191	須恵器	蓋	腰部 腰部	腰径	7.0	D-10	I b	反覆灰色	反覆灰色	反覆水洗き	反覆水洗き	反覆灰色	粗粒
192	須恵器	蓋	腰部 腰部	腰径	25.0	D-10	I b	反覆灰色	反覆灰色	反覆水洗き	反覆水洗き	反覆灰色	粗粒
193	須恵器	外 内	口縁～体部 口縁～体部	口径	11.0	B-3	II	反覆灰色	反覆灰色	反覆水洗き	反覆水洗き	反覆灰色	粗粒
194	須恵器	外 内	口縁～体部 口縁～体部	口径	6.8	C-0	II	反覆灰色	反覆灰色	反覆水洗き	反覆水洗き	反覆灰色	粗粒
195	須恵器	蓋	腰部 腰部	腰径	B-5	II	反覆灰色	反覆灰色	反覆水洗き	反覆水洗き	反覆灰色	粗粒	

参考書

第44表 中世・近世出土遺物一覽

番号	種類	器種	部位	底径	出土区	法量(cm)	層	外面色調	内面色調	施物	内面調査	胎土色調	胎土特徴	文書等
197	白磁	三	体～底部	口径	3.4	底立生	I	灰白色	灰白色	施物	研磨	白	白	その他
198	土師器	碗	口縁～体部	口径	15.0	底立生		利手褐色	灰白色	施物	研磨	灰白色	白	白
199	土師器	碗	口縁～体部	口径	15.0	底立生		灰白色	灰白色	研磨	研磨	灰白色	白	白
200	土師器	碗	口縁～高台	口径	7.0	底立生		灰白色	灰白色	研磨	研磨	灰白色	白	白
201	土師器	碗	口縁～体部	口径	12.0	底立生		灰白色	灰白色	水洗き	研磨	灰白色	白	白
202	土師器	杯	口縁～底部	口径	14.2	底立生		灰褐色	灰褐色	水洗き、糸切り	研磨	灰褐色	白	白
203	土師器	杯	口縁～底部	口径	17.8	底立生		灰褐色	灰褐色	水洗き、糸切り	研磨	灰褐色	白	白
204	黒色土器A	碗	体～底部	口径	7.4	底立生		褐色	褐色	研磨	研磨	褐色	白	白
205	赤色土器B	碗	体～底部	口径	16.8	底立生		灰褐色	灰褐色	研磨	研磨	灰褐色	白	白
206	黒色土器A	碗	体～底部	口径	7.0	底立生		褐色	褐色	研磨	研磨	褐色	白	白
207	土師器	杯	口縁～高台	口径	17.0	底立生		灰褐色	灰褐色	研磨	研磨	灰褐色	白	白
208	土師器	杯	口縁～底部	口径	16.0	底立生		明黄褐色	明黄褐色	水洗き、糸切り	研磨	明黄褐色	白	白
209	土師器	杯	口縁～底部	口径	12.8	底立生		灰褐色	灰褐色	水洗き	研磨	灰褐色	白	白
210	土師器	杯	口縁～底部	口径	16.0	底立生		明黄褐色	明黄褐色	水洗き、糸切り	研磨	明黄褐色	白	白
211	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径	16.0	底立生		灰褐色	灰褐色	研磨	研磨	灰褐色	白	白
212	土師器	小皿	口縁～底部	口径	8.4	底立生		浅黄色	浅黄色	研磨	研磨	浅黄色	白	白
213	土師器	小皿	口縁～底部	口径	8.4	底立生		浅黄色	浅黄色	研磨	研磨	浅黄色	白	白
214	土師器	小皿	口縁～底部	口径	8.4	底立生		浅黄色	浅黄色	研磨	研磨	浅黄色	白	白
215	土師器	小皿	口縁～底部	口径	8.0	底立生		浅黄色	浅黄色	研磨	研磨	浅黄色	白	白
216	土師器	小皿	底部	直径	5.0	底立生		明黄褐色	明黄褐色	水洗き、糸切り	研磨	明黄褐色	白	白
217	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径	12.6	底立生		明黄褐色	明黄褐色	研磨	研磨	明黄褐色	白	白
218	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径	12.6	底立生		黑色	黑色	研磨	研磨	黑色	白	白
219	土師器	杯	口縁～体部	口径	14.4	底立生	10	灰褐色	灰褐色	研磨	研磨	灰褐色	白	白
220	土師器	杯	口縁～体部	口径	12.0	底立生	10	灰褐色	灰褐色	研磨	研磨	灰褐色	白	白
221	土師器	杯	底部	直径	9.0	底立生	10	灰褐色	灰褐色	水洗き、糸切り	研磨	灰褐色	白	白
222	土師器	杯	底部	直径	15.6	底立生	11	灰褐色	灰褐色	水洗き、糸切り	研磨	灰褐色	白	白
223	土師器	杯	口縁～体部	口径	10.0	底立生	11	灰褐色	灰褐色	水洗き	研磨	灰褐色	白	白
224	青磁	碗	口縁～高台	口径	12.0	底立生	13	灰手abra	灰手abra	研磨	研磨	灰褐色	白	白
225	白田IV頭	碗	口縁～体部	口径	15.6	底立生	16	灰白色	灰白色	研磨	研磨	灰白色	白	白
226	白磁	碗	口縁～体部	口径	15.6	底立生	16	灰白色	灰白色	研磨	研磨	灰白色	白	白
227	土師器	杯	口縁～体部	口径	17.0	底立生	16	灰褐色	灰褐色	水洗き	研磨	灰褐色	白	白
228	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径	18.6	底立生	16	灰白色	灰白色	研磨	研磨	灰白色	白	白
229	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径	17.0	底立生	16	灰白色	灰白色	研磨	研磨	灰白色	白	白
230	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径	13.0	底立生	16	灰白色	灰白色	研磨	研磨	灰白色	白	白
231	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径	9.4	底立生	16	灰白色	灰白色	研磨	研磨	灰白色	白	白
232	黒色土器A	碗	口縁～高台	口径	9.5	底立生	16	灰白色	灰白色	研磨	研磨	灰白色	白	白
233	土師器	碗	口縁～底部	口径	8.0	底立生	16	灰白色	灰白色	研磨	研磨	灰白色	白	白
234	土師器	小皿	口縁～底部	口径	9.2	底立生	16	灰褐色	灰褐色	研磨	研磨	灰褐色	白	白
235	土師器	小皿	口縁～底部	口径	9.8	底立生	16	灰褐色	灰褐色	研磨	研磨	灰褐色	白	白
236	土師器	小皿	口縁～底部	口径	10.0	底立生	16	灰褐色	灰褐色	研磨	研磨	灰褐色	白	白
237	土師器	杯	口縁～底部	口径	9.0	底立生	16	灰褐色	灰褐色	水洗き	研磨	灰褐色	白	白
238	黒色土器B	碗	口縁～体部	口径	10.0	底立生	16	黑色	黑色	研磨	研磨	黑色	白	白
239	黒色土器B	碗	体部	直径	12.1	底立生	17	灰褐色	灰褐色	水洗き、糸切り	研磨	灰褐色	白	白
240	土師器	小皿	口縁～底部	口径	6.6	底立生	17	灰褐色	灰褐色	研磨	研磨	灰褐色	白	白
241	土師器	小皿	底部	直径	7.0	底立生	18	灰褐色	灰褐色	水洗き、糸切り	研磨	灰褐色	白	白
242	土師器	小皿	底部	直径	15.8	底立生	19	灰褐色	灰褐色	水洗き、糸切り	研磨	灰褐色	白	白
243	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径	10.0	底立生	19	灰褐色	灰褐色	研磨	研磨	灰褐色	白	白
244	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径	16.6	底立生	21	灰褐色	灰褐色	研磨	研磨	灰褐色	白	白

番号	測量	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外表面調	内面調査	胎土色調	胎土特徴	文書等
248 黒色 土器A	塊	口縁～体部	口径	18.0	標立221	一二灰褐色	褐色	研磨	研磨	二灰褐色	無粒	
249 黒色 土器A	塊	体部～高台	基盤	7.4	標立221	一二灰褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二灰褐色	無粒	
250 土器B	块	体～底盤	基盤	8.0	標立221	浅褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	浅褐色	無粒	
251 土器B	小皿	口縁～体部	基盤	7.4	標立221	黄褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	黄褐色	無粒	
252 白磁	塊	口縁～体部	基盤	18.2	標立222	灰リゾーブ	褐色	研磨、削除	研磨	灰白色	無粒	圓反り
253 土器B	坏	体～底盤	基盤	10.0	標立222	褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二灰褐色	無粒	
254 土器B	小皿	口縁～体部	基盤	10.0	標立222	一二灰褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二灰褐色	無粒	
255 黒色 土器A	塊	口縁～体部	基盤	16.6	標立222	褐色	褐色	研磨、△切	△切	灰褐色	無粒	
256 黒色 土器A	塊	口縁～体部	基盤	16.0	標立222	一二灰褐色	褐色	研磨	研磨	灰褐色	無粒	
257 土器B	坏	体～底盤	基盤	9.0	標立224	褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二灰褐色	無粒	
258 白磁	塊	口縁～体部	口縁	11.0	標立225	灰白色	褐色	研磨、削除	研磨	灰白色	無粒	
259 土器B	塊	口縁～体部	口縁	16.0	標立225	褐色	褐色	水洗き	水洗き	褐色	無粒	
260 白磁	塊	体部	口縁	13.0	標立230	灰白色	褐色	研磨、削除	研磨	灰白色	無粒	
262 土器B	坏	口縁～底盤	口縁	17.4	方形穴1	褐色	褐色	水洗き、丁子	水洗き	二灰褐色	無粒	
263 白磁	塊	口縁～体部	口縁	16.4	方形穴1	明リゾーブ	褐色	研磨、削除	研磨	灰白色	無粒	圓反り
264 白磁	塊	口縁～体部	口縁	18.4	方形穴1	灰リゾーブ	褐色	研磨	研磨	灰白色	無粒	
265 青磁	塊	口縁～体部	口縁	14.0	方形穴1	リゾーブ	褐色	研磨、質入	研磨	灰白色	無粒	
266 土器B	坏	口縁～体部	口縁	14.0	方形穴1	一二灰褐色	褐色	水洗き	水洗き	浅灰色	無粒	
267 土器B	坏	口縁～体部	口縁	15.0	方形穴1	一二灰褐色	褐色	研磨	研磨	二灰褐色	無粒	
268 土器B	坏	口縁～体部	口縁	14.0	方形穴1	黑褐色	褐色	研磨	研磨	灰褐色	無粒	
269 黒色 土器A	塊	口縁部	口縁	18.8	方形穴1	黑褐色	褐色	研磨	研磨	灰褐色	無粒	
270 黒色 土器A	塊	体部～高台	基盤	6.6	方形穴1	一二灰褐色	褐色	研磨	研磨	黄灰色	無粒	
271 黒色 土器A	塊	体部～高台	基盤	10.2	方形穴1	一二灰褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二灰褐色	無粒	
272 土器B	坏	体部～高台	基盤	10.2	方形穴1	一二灰褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二灰褐色	無粒	
273 土器B	坏	体～底盤	基盤	10.4	方形穴1	一二灰褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二灰褐色	無粒	
274 土器B	坏	口縁～底盤	口縁	11.0	方形穴1	一二灰褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二灰褐色	無粒	
275 土器B	小皿	口縁～底盤	口縁	9.0	方形穴1	褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二灰褐色	無粒	
276 土器B	小皿	口縁～底盤	口縁	8.0	方形穴1	褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二灰褐色	無粒	
277 土器B	小皿	口縁～底盤	口縁	6.6	方形穴1	一二灰褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二灰褐色	無粒	
278 土器B	小皿	口縁～底盤	口縁	6.6	方形穴1	褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二灰褐色	無粒	
280 土器B	坏	口縁～体部	口縁	19.8	方形穴2	灰白色	褐色	研磨、削除	研磨	灰白色	無粒	
281 白磁	塊	口縁～体部	口縁	16.2	方形穴2	褐色	褐色	研磨、削除	研磨	灰白色	無粒	
282 黒色 土器A	塊	口縁～体部	口縁	15.0	方形穴2	褐色	褐色	研磨	研磨	二灰褐色	無粒	圓反り
283 黒色 土器A	塊	口縁～体部	口縁	17.0	方形穴2	褐色	褐色	水洗き、研磨	研磨	二灰褐色	無粒	
284 黒色 土器A	塊	口縁～体部	口縁	16.0	方形穴2	褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二灰褐色	無粒	
285 黒色 土器A	塊	口縁～体部	口縁	6.8	方形穴2	褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二灰褐色	無粒	
286 黒色 土器A	塊	口縁～体部	口縁	7.4	方形穴2	褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	浅灰色	無粒	
287 黒色 土器A	塊	口縁～体部	口縁	6.0	方形穴2	一二灰褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二灰褐色	無粒	
288 土器B	外	体～底盤	基盤	10.6	方形穴2	一二灰褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二灰褐色	無粒	
289 土器B	小皿	口縁～底盤	口縁	4.4	方形穴2	一二灰褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二灰褐色	無粒	
290 土器B	小皿	口縁～底盤	口縁	4.0	方形穴2	一二灰褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	浅灰色	滑石	
291 土器B	石柄	口縁	下部	0.0	方形穴3	灰白色	褐色	研磨、削除	研磨	明灰色	滑石	
292 寶白磁	合子	口縁	底盤	6.2	方形穴3	一二灰褐色	褐色	水洗き、糸切り	研磨	明灰色	滑石	
293 黒色 土器A	塊	底盤	底盤	7.4	方形穴3	一二灰褐色	褐色	水洗き、糸切り	研磨	二灰褐色	無粒	
294 黒色 土器A	塊	底盤	底盤	12.6	方形穴3	一二灰褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二灰褐色	無粒	
295 土器B	坏	口縁～底盤	口縁									

番号	種類	部位	法量(cm)	出土区 層	外面色調	内面色調	外面調査	内面調査	胎土色調	胎土特徴	文書等
297	土瓶	外 口縁～体部	口径 13.4 方形容穴3	透黄色	透黄色	透黄色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生	二分い青紫色	細粒	
298	土瓶	外 口縁～体部	口径 11.6 方形容穴3	透黄色	透黄色	透黄色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生	二分い青紫色	細粒	
299	土瓶	外 口縁～体部	口径 4.6 方形容穴3	透黄色	透黄色	透黄色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生	二分い青紫色	細粒	
300	土瓶	外 口縁～体部	口径 0.8 方形容穴3	透黄色	透黄色	透黄色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生	二分い青紫色	細粒	
301	黒土器A	外 口縁～体部	口径 12.0 方形容穴3	黒褐色	黒褐色	黒褐色	研磨	研磨	二分い青紫色	細粒	
302	白磁	外 口縁～体部	口径 16.0 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	蒸煮、煮沸	蒸煮、煮沸	明リツ灰色	玉ね	
303	白磁	外 口縁～体部	口径 17.2 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	蒸煮、煮沸	蒸煮、煮沸	明リツ灰色	玉ね	
304	白磁	外 口縁～体部	口径 15.0 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	蒸煮、煮沸	蒸煮、煮沸	明リツ灰色	玉ね	
305	白磁	外 口縁～体部	口径 18.0 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	蒸煮、煮沸、煮入	蒸煮、煮沸、煮入	淡黄色	球反り	
306	黄磁	外 口縁～体部	口径 14.0 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	蒸煮	蒸煮	灰白色	球反り	
307	白磁	外 口縁～高台 底	口径 6.0 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	蒸煮、煮沸	蒸煮、煮沸	灰黄色		
308	白磁	外 口縁～高台 底	口径 3.4 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	蒸煮、煮沸	蒸煮、煮沸	灰黄色		
309	青色土器	外 口縁～体部	口径 12.0 方形容穴4	棕色	棕色	棕色	研磨	研磨	浅黄色		
310	黑色土器A	外 口縁～体部	口径 14.2 方形容穴4	二分い青紫色	二分い青紫色	二分い青紫色	研磨	研磨	浅灰色		
311	黑色土器A	外 口縁～体部	口径 17.4 方形容穴4	二分い青紫色	二分い青紫色	二分い青紫色	研磨	研磨	浅灰色		
312	黑色土器A	外 口縁～体部	口径 9.8 方形容穴4	二分い青紫色	二分い青紫色	二分い青紫色	研磨	研磨	二分い青紫色		
313	土瓶	外 口縁～体部	口径 4.5 方形容穴4	透明青灰色	透明青灰色	透明青灰色	水浸き	水浸き	水浸生		
314	土瓶	外 口縁～体部	口径 4.5 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	水浸き	水浸き	水浸生		
315	土瓶	外 口縁～体部	口径 13.4 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
316	土瓶	外 口縁～体部	口径 9.4 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
317	土瓶	外 口縁～体部	口径 9.4 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
318	土瓶	外 口縁～体部	口径 6.0 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
319	土瓶	外 口縁～体部	口径 8.8 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
320	土瓶	外 口縁～体部	口径 8.1 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
321	土瓶	外 口縁～体部	口径 9.2 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
322	土瓶	外 口縁～体部	口径 9.2 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
323	土瓶	外 口縁～体部	口径 9.0 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
324	土瓶	外 口縁～体部	口径 7.6 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	浅色		
325	土瓶	外 口縁～体部	口径 8.4 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
326	土瓶	外 口縁～体部	口径 9.4 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
327	土瓶	外 口縁～体部	口径 9.0 方形容穴4	透白色	透白色	透白色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
328	白磁	外 口縁～体部	口径 16.0 方形容穴5	透白色	透白色	透白色	蒸煮、煮沸	蒸煮、煮沸	明リツ灰色	口剥げ	
329	青磁	外 口縁～体部	口径 17.0 方形容穴5	二分い青紫色	二分い青紫色	二分い青紫色	蒸煮、煮沸	蒸煮、煮沸	二分い青紫色	口剥げ	
330	青磁	外 口縁～体部	口径 4.0 方形容穴5	明リツ灰色	明リツ灰色	明リツ灰色	研磨	研磨	灰白色	口剥げ	
331	土瓶	外 口縁～体部	口径 14.0 方形容穴5	黑色	黑色	黑色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
332	黑色土器A	外 口縁～体部	口径 17.6 方形容穴5	黑色	黑色	黑色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
333	黑色土器A	外 口縁～体部	口径 15.0 方形容穴5	黑色	黑色	黑色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
334	黑色土器A	外 口縁～体部	口径 7.0 方形容穴5	黑色	黑色	黑色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
335	黑色土器A	外 口縁～体部	口径 7.4 方形容穴5	黑色	黑色	黑色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
336	黑色土器A	外 口縁～高台 底	口径 16.5 方形容穴5	二分い青紫色	二分い青紫色	二分い青紫色	研磨	研磨	浅黄色		
337	黑色土器A	外 口縁～体部	口径 11.4 方形容穴5	黄色	黄色	黄色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
338	土瓶	外 口縁～体部	口径 9.4 方形容穴5	黄色	黄色	黄色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	明黄褐色		
339	土瓶	外 口縁～体部	口径 9.0 方形容穴5	黄色	黄色	黄色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	明黄褐色		
340	土瓶	外 口縁～体部	口径 8.3 方形容穴5	黄色	黄色	黄色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	明黄褐色		
341	土瓶	外 口縁～体部	口径 8.8 方形容穴5	二分い青紫色	二分い青紫色	二分い青紫色	研磨	研磨	灰白色		
342	土瓶	外 口縁～体部	口径 7.0 方形容穴5	透黄色	透黄色	透黄色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
343	土瓶	外 口縁～体部	口径 10.6 方形容穴5	透黄色	透黄色	透黄色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		
344	土瓶	外 口縁～体部	口径 7.0 方形容穴5	透黄色	透黄色	透黄色	水浸生、未切り 水浸生	水浸生、未切り 水浸生	二分い青紫色		

器物名	種類	基準	部位	法量(cm)	出土区	外面圖面		内面圖面		胎土特質	文様その他
						横	縦	横	縦		
345 土師器	小皿	口縁一部	口径	8.0	万葉室6	にぶい青色	水焼き、糸切り	水焼き	にぶい青色	玉縁	縁反り
346 白磁	碗	口縁一部	口径	18.6	C-5	皮白色	水焼き、糸切り	水焼き	皮白色	白	
347 白磁	碗	口縁一部	口径	18.6	C-5	皮白色	水焼き、糸切り	水焼き	皮白色	白	
348 土師器	碗	口縁一部	口径	15.9	C-6	褐色	水焼き、糸切り	水焼き	褐色	褐色	
349 土師器	碗	口縁一部	口径	13.8	C-6	褐色	水焼き、糸切り	水焼き	褐色	褐色	
350 土師器	碗	口縁一部	口径	9.2	C-6	褐色	水焼き、糸切り	水焼き	褐色	褐色	
351 土師器	碗	口縁一部	口径	9.1	C-6	褐色	水焼き、糸切り	水焼き	褐色	褐色	
352 土師器	小皿	口縁一部	口径	9.2	C-6	褐色	水焼き、糸切り	水焼き	褐色	褐色	
353 土師器	小皿	口縁一部	口径	8.8	C-6	褐色	水焼き、糸切り	水焼き	褐色	褐色	
354 土師器	小皿	口縁一部	口径	9.2	C-6	褐色	水焼き、糸切り	水焼き	褐色	褐色	
355 土師器	小皿	口縁一部	口径	8.8	C-6	褐色	水焼き、糸切り	水焼き	褐色	褐色	
356 土師器	小皿	口縁一部	口径	7.2	C-6	褐色	水焼き、糸切り	水焼き	褐色	褐色	
357 土師器	小皿	口縁一部	口径	8.5	C-6	褐色	水焼き、糸切り	水焼き	褐色	褐色	
358 土師器	小皿	口縁一部	口径	10.0	C-6	褐色	水焼き、糸切り	水焼き	褐色	褐色	
359 土師器	小皿	口縁一部	口径	7.6	C-6	褐色	水焼き、糸切り	水焼き	褐色	褐色	
360 土師器	小皿	口縁一部	口径	8.4	C-6	褐色	水焼き、糸切り	水焼き	褐色	褐色	
361 土師器	小皿	口縁一部	口径	8.6	C-6	褐色	水焼き、糸切り	水焼き	褐色	褐色	
362 土師器	小皿	口縁一部	口径	9.0	C-6	褐色	水焼き、糸切り	水焼き	褐色	褐色	
363 黒色土器	碗	底	底径	7.0	C-6	黒色	水焼き、糸切り	水焼き	黒色	黒色	
364 白磁	碗	口縁一部	口径	17.0	C-5	白磁	水焼き、糸切り	水焼き	白磁	白	
365 白磁	碗	口縁一部	口径	16.0	C-9	白磁	水焼き、糸切り	水焼き	白磁	白	
366 白磁	碗	口縁一部	口径	17.2	C-7	白磁	水焼き、糸切り	水焼き	白磁	白	
367 白磁	碗	口縁一部	口径	16.0	C-11	白磁	水焼き、糸切り	水焼き	白磁	白	
368 黑色土器	碗	口縁一部	口径	17.0	C-11	黒色	水焼き、糸切り	水焼き	黒色	黒色	
369 黑色土器	碗	口縁一部	口径	11.0	C-11	黒色	水焼き、糸切り	水焼き	黒色	黒色	
370 黑色土器	碗	口縁一部	口径	14.0	C-11	黒色	水焼き、糸切り	水焼き	黒色	黒色	
371 黑色土器	碗	口縁一部	口径	13.0	C-11	黒色	水焼き、糸切り	水焼き	黒色	黒色	
372 土師器	碗	口縁一部	口径	12.0	C-11	黒色	水焼き、糸切り	水焼き	黒色	黒色	
373 土師器	小皿	口縁一部	口径	5.7	C-11	にぶい青色	水焼き、糸切り	水焼き	にぶい青色	白	
374 土師器	小皿	口縁一部	口径	14.4	E-4	灰褐色	水焼き、糸切り	水焼き	灰褐色	灰褐色	
375 土師器	小皿	口縁一部	口径	9.6	E-4	灰褐色	水焼き、糸切り	水焼き	灰褐色	灰褐色	
376 黑色土器	碗	口縁一部	口径	9.2	D-12	黒色	水焼き、糸切り	水焼き	黒色	黒色	
377 土師器	碗	口縁一部	口径	6.4	D-5	黒色	水焼き、糸切り	水焼き	黒色	黒色	
378 土師器	碗	口縁一部	口径	7.0	C-7	黒色	水焼き、糸切り	水焼き	黒色	黒色	
379 土師器	碗	口縁一部	口径	14.4	C-12	にぶい青色	水焼き、糸切り	水焼き	にぶい青色	白	
380 土師器	碗	口縁一部	口径	7.6	C-12	黒色	水焼き、糸切り	水焼き	黒色	黒色	
381 黑色土器	碗	口縁一部	口径	18.6	C-12	黒色	水焼き、糸切り	水焼き	黒色	黒色	
382 黑色土器	碗	口縁一部	口径	15.6	C-12	黒色	水焼き、糸切り	水焼き	黒色	黒色	
383 土師器	碗	口縁一部	口径	13.2	C-12	黒色	水焼き、糸切り	水焼き	黒色	黒色	
384 土師器	小皿	口縁一部	口径	8.0	C-12	にぶい青色	水焼き、糸切り	水焼き	にぶい青色	白	
385 土師器	小皿	口縁一部	口径	7.0	C-12	にぶい青色	水焼き、糸切り	水焼き	にぶい青色	白	
386 土師器	小皿	口縁一部	口径	7.5	C-12	にぶい青色	水焼き、糸切り	水焼き	にぶい青色	白	
387 土師器	碗	口縁一部	口径	14.7	C-4-5	黒褐色	水焼き、糸切り	水焼き	黒褐色	黒褐色	
388 黑色土器	碗	口縁一部	口径	14.3	C-4-5	黒褐色	水焼き、糸切り	水焼き	黒褐色	黒褐色	
389 黑色土器	碗	口縁一部	口径	15.2	C-4-5	黒褐色	水焼き、糸切り	水焼き	黒褐色	黒褐色	
390 黑色土器	碗	口縁一部	口径	13.4	C-4-5	黒褐色	水焼き、糸切り	水焼き	黒褐色	黒褐色	
391 黑色土器	碗	口縁一部	口径	16.0	C-4-5	黒褐色	水焼き、糸切り	水焼き	黒褐色	黒褐色	
392 黑色土器	碗	口縁一部	口径	12.0	C-4-5	黒褐色	水焼き、糸切り	水焼き	黒褐色	黒褐色	
393 土師器	碗	口縁一部	口径	14.0	C-4-5	黒褐色	水焼き、糸切り	水焼き	黒褐色	黒褐色	

番号	測定	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調		内面色調		胎土特徴	文書-その他
						明黄褐色	明黄褐色	水浸き、未切り	水浸き、未切り		
424 土師器	外	体～底部	口径	B.0	F-5	二分之一青褐色	二分之一青褐色	水浸き、未切り	水浸き、未切り	浅黄色	
425 土師器	小皿	口縁～底部	口径	B.4	C-4.5	二分之一青褐色	二分之一青褐色	水浸き、未切り	水浸き、未切り	浅黄色	
426 土師器	小皿	口縁～底部	口径	B.0	C-5	二分之一青褐色	二分之一青褐色	水浸き、未切り	水浸き、未切り	浅黄色	
427 土師器	小皿	口縁～底部	口径	B.0	C-5	二分之一青褐色	二分之一青褐色	水浸き、未切り	水浸き、未切り	浅黄色	
428 土師器	小皿	口縁～底部	口径	9.6	C-4.5	二分之一青褐色	二分之一青褐色	水浸き、未切り	水浸き、未切り	浅黄色	
429 白磁玉瓶	壺	口縁～全体	口径	16.0	D-7	利手灰色	利手灰色	研磨	研磨	玉壁	
430 黒色土師器A	壺	口縁～全体	口径	12.0	D-7	深青色	深青色	研磨	研磨		
431 黒色土師器B	壺	口縁～全体	口径	12.0	D-6	深青色	深青色	研磨	研磨		
432 黒色土師器	壺	口縁～全体	口径	15.0	D-7	深青色	深青色	研磨	研磨		
433 黒色土師器	壺	口縁～全体	口径	14.0	D-6	深青色	深青色	研磨	研磨		
434 土師器	外	全体	口径	4.0	D-6	明黄褐色	明黄褐色	水浸き、未切り	水浸き、未切り	浅黄色	
435 土師器	外	全体	口径	6.0	D-6	二分之一青褐色	二分之一青褐色	水浸き、未切り	水浸き、未切り	浅黄色	
436 黒色土師器A	壺	口縁～全体	口径	19.0	D-7	黑色	黑色	研磨	研磨		
437 黒色土師器B	壺	口縁～全体	口径	17.0	D-7	黑色	黑色	研磨	研磨		
438 黒色土師器A	壺	全体	口径	6.4	D-7	深青色	深青色	研磨	研磨		
439 黒色土師器	壺	全体	口径	7.0	D-7	深青色	深青色	研磨	研磨		
440 土師器	外	全体	口径	8.6	D-7	二分之一青褐色	二分之一青褐色	水浸き、未切り	水浸き、未切り	浅黄色	
441 土師器	外	全体	口径	11.0	D-7	增加	增加	水浸き、未切り	水浸き、未切り	浅黄色	
442 土師器	小皿	口縁～全体	口径	9.0	D-7	增加	增加	水浸き、未切り	水浸き、未切り	浅黄色	
443 土師器	小皿	口縁～全体	口径	11.0	D-6	灰白色	灰白色	研磨	研磨	研磨	
444 土師器	壺	口縁～全体	口径	D-9	I-b	二分之一青褐色	二分之一青褐色	研磨	研磨	研磨	
445 土師器	壺	全体	口径	7.2	D-6	二分之一青褐色	二分之一青褐色	研磨	研磨	研磨	
446 黒色土師器A	壺	全体	口径	5.4	C-D-9	明黄褐色	明黄褐色	水浸き、研磨	水浸き、研磨	浅黄色	
447 黒色土師器A	壺	全体	口径	7.7	D-8	二分之一青褐色	二分之一青褐色	水浸き、研磨	水浸き、研磨	浅黄色	
448 黒色土師器A	壺	全体	口径	6.3	D-9	增加	增加	水浸き、研磨	水浸き、研磨	浅黄色	
449 土師器	外	全体	口径	7.0	D-9	增加	增加	水浸き、未切り	水浸き、未切り	浅黄色	
450 土師器	外	全体	口径	12.0	D-3	增加	增加	水浸き、未切り	水浸き、未切り	浅黄色	
451 土師器	外	全体	口径	18.0	D-12	深青色	利手灰色	研磨	研磨	研磨	研磨
452 土師器	外	全体	口径	5.0	C-13	深青色	深青色	研磨	研磨	研磨	研磨
453 土師器	外	全体	口径	7.3	C-13	深青色	深青色	研磨	研磨	研磨	研磨
454 土師器	外	全体	口径	6.3	D-12	深青色	深青色	研磨	研磨	研磨	研磨
455 土師器	外	全体	口径	7.4	C-13	深青色	深青色	研磨	研磨	研磨	研磨
456 土師器	外	全体	口径	10.0	C-13	深青色	深青色	研磨	研磨	研磨	研磨
457 土師器	外	全体	口径	7.2	D-12	深青色	深青色	研磨	研磨	研磨	研磨
458 土師器	外	全体	口径	9.0	C-13	深青色	深青色	研磨	研磨	研磨	研磨
459 土師器	外	全体	口径	7.2	D-12	深青色	深青色	研磨	研磨	研磨	研磨
460 貴賤	壺	全体	口径	7.2	D-12	深青色	深青色	研磨	研磨	研磨	研磨
461 滑石器	壺	全体	口径	9.6	D-4	增加	增加	研磨	研磨	研磨	研磨
462 土師器	外	全体	口径	10.0	D-2	增加	增加	研磨	研磨	研磨	研磨
463 黒色土師器A	壺	全体	口径	6.6	D-11	深青色	二分之一青褐色	研磨	研磨	研磨	研磨
464 黒色土師器A	壺	全体	口径	6.6	D-11	深青色	二分之一青褐色	研磨	研磨	研磨	研磨
465 白磁	壺	全体	口径	15.0	N-3	利手灰色	利手灰色	研磨	研磨	花文	花文
466 土師器	小皿	口縁～全体	口径	7.2	N-3	增加	增加	研磨	研磨	光素高台	
467 貴賤	壺	全体	口径	9.6	N-4	增加	增加	研磨	研磨	研磨	研磨
468 中国陶器	外	全体	口径	14.0	N-4	二分之一青褐色	二分之一青褐色	研磨	研磨	研磨	研磨
469 土師器	外	全体	口径	10.0	C-6	二分之一青褐色	二分之一青褐色	研磨	研磨	研磨	研磨
470 土師器	外	全体	口径	10.0	C-6	二分之一青褐色	二分之一青褐色	研磨	研磨	研磨	研磨

番号	測定	部位	法量(cm)	出土区	外面色調		内面色調		内面調査	胎土特徴	文書等
					層	底	層	底			
452	黑色土器B	小皿	口縁~底部	口径	10.8	層4	黒色	黒色	研磨		
453	黑色土器A	小皿	口縁~底部	口径	9.0	D-6	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
454	土瓶	小皿	口縁~底部	口径	8.8	D-6	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
455	土瓶	小皿	底部	底径	6.0	層4	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
456	碗	底	底部~高台	底径	7.6	C-D-7	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
457	青色土器	碗	口縁~底部	口径	14.0	B-3	黒色	黒色	研磨	研磨	二~三、黒色
458	黒色土器A	碗	口縁~底部	口径	16.0	C-D-7	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
459	土瓶	碗	口縁~底部	口径	18.0	B-3	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
460	土瓶	碗	底部	底径	8.0	B-3	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
461	白磁IV類	碗	口縁~底部	口径	19.2	-12	白	白	研磨	研磨	白
462	白磁IV類	碗	口縁~底部	口径	15.8	C-12	白	白	研磨	研磨	白
463	白磁IV類	碗	口縁~底部	口径	15.0	C-12	白	白	研磨	研磨	白
464	白磁IV類	碗	口縁~底部	口径	16.2	C-12	二~三、黒色	明黄褐色	研磨	研磨	二~三、黒色
465	黒色土器A	碗	口縁~底部	口径	16.8	C-12	黒色	黒色	研磨	研磨	黒
466	土瓶	碗	口縁~底部	口径	9.8	C-12	二~三、黒色	白	研磨	研磨	黒
467	土瓶	碗	底部	底径	9.6	-12	白	白	水洗き、糸切り	水洗き	白
468	土瓶	碗	底部	底径	8.4	-12	白	白	水洗き、糸切り	水洗き	白
469	土瓶	碗	口縁~底部	口径	8.6	C-12	白	白	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
470	黒色土器B	小皿	口縁~底部	口径	8.4	C-12	黒褐色	黒褐色	水洗き	水洗き	二~三、黒色
471	白磁IV類	碗	口縁~底部	口径	16.0	C-6	白	白	水洗き、糸切り	水洗き	白
472	白磁IV類	碗	口縁~底部	口径	15.4	D-7	白	白	水洗き、糸切り	水洗き	白
473	白磁IV類	碗	底部	底径	5.8	-12	白	白	水洗き、糸切り	水洗き	白
474	白磁IV類	碗	底部	底径	17.0	C-7	白	白	水洗き、糸切り	水洗き	白
475	白磁IV類	碗	口縁~底部	口径	14.2	F-5	白	白	水洗き、糸切り	水洗き	白
476	白磁IV類	碗	底部	底径	8.8	E-4	白	白	水洗き、糸切り	水洗き	白
477	青磁	碗	口縁~底部	口径	18.0	C-4	白	白	水洗き、糸切り	水洗き	白
478	青磁	盤	底部	底径	10.4	D-4	白	白	水洗き、糸切り	水洗き	白
479	白磁IV類	碗	底部	底径	8.4	-4	白	白	水洗き、糸切り	水洗き	白
480	中国陶器	四耳壺	胴部	底径	6.8	C-12	白	白	水洗き、糸切り	水洗き	白
481	青磁	碗	口縁~底部	口径	16.0	C-12	二~三、黒色	黒褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
482	土瓶	碗	口縁~底部	口径	16.0	C-12	二~三、黒色	黒褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
483	土瓶	碗	口縁~底部	口径	16.0	C-12	二~三、黒色	黒褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
484	土瓶	碗	口縁~底部	口径	16.0	C-12	二~三、黒色	黒褐色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
485	黒色土器A	碗	口縁~底部	口径	9.4	E-4	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
486	黒色土器A	碗	口縁~底部	口径	16.0	D-6	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
487	黒色土器A	碗	口縁~底部	口径	6.8	C-8	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
488	黒色土器A	碗	口縁~底部	口径	7.6	D-4	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
489	黒色土器A	碗	口縁~底部	口径	16.0	E-7	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
490	黒色土器A	碗	口縁~底部	口径	17.0	C-2	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
491	黒色土器A	碗	口縁~底部	口径	8.6	E-4	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
492	黒色土器A	碗	口縁~底部	口径	16.0	C-6	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
493	黒色土器A	碗	口縁~底部	口径	7.0	C-6	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
494	黒色土器A	碗	口縁~底部	口径	6.0	D-7	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
495	黒色土器A	碗	口縁~底部	口径	7.2	C-7	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
496	黒色土器A	碗	底部	底径	7.4	E-4	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
497	黒色土器A	碗	底部	底径	6.6	F-5	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
498	黒色土器A	碗	底部	底径	7.2	D-7	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色
499	黒色土器A	碗	底部	底径	6.4	C-11	黒色	黒色	水洗き、糸切り	水洗き	二~三、黒色

番号	測量	部位	法量(cm)	出土区	外面色調		内面色調		出土特徴	文書-その他
					周灰色	周灰黒色	水枯き	水枯き、小穴		
500 土瓶	环	口縁～底部	口径	14.4 D-5	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
501 土瓶	环	口縁～底部	口径	17.4 C-4	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
502 土瓶	环	口縁～底部	口径	8.4 C-4	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
503 土瓶	环	底部	底径	10.0 D-6	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
504 土瓶	环	底部	底径	10.0 C-5	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
505 土瓶	环	底部	底径	10.0 E-3	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
506 土瓶	环	底部	底径	8.2 F-6	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
507 土瓶	环	体～底部	口径	7.8 D-7	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
508 土瓶	环	体～底部	口径	7.8 E-3	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
509 土瓶	小皿	口縁～底部	口径	10.6 D-6	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
510 土瓶	小皿	口縁～底部	口径	9.0 E-4	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
511 土瓶	小皿	口縁～底部	口径	9.0 C-8	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
512 土瓶	小皿	口縁～底部	口径	9.0 C-6	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
513 土瓶	小皿	口縁～底部	口径	9.0 C-5	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
514 土瓶	小皿	口縁～底部	口径	7.5 C-6	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
515 土瓶	小皿	口縁～底部	口径	7.5 C-5	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
516 土瓶	小皿	口縁～底部	口径	9.2 C-12	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
517 土瓶	小皿	口縁～底部	口径	9.6 C-5	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
518 土瓶	小皿	口縁～底部	口径	8.4 C-5	明黄褐色	明黄褐色	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き、小穴	浅黄色
519 土瓶	小皿	口縁～底部	口径	9.0 E-4	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
520 土瓶	皿	底部	底径	8.0 C-6	水枯き	水枯き、糸切り	水枯き	水枯き、小穴	浅黄色	無
521 黑土器A	直杯	口縁部	口径	13.4 F-5	黑色	黑色	黑色	黑色	深褐色	無
522 直杯	直杯	口縁部	口径	24.6 C-5	反白色	反白色	水枯き	水枯き、小穴	反白色	無
523 平直	平直	口縁部	口径	F-6	反白色	反白色	水枯き	水枯き、小穴	反白色	無
526 白罐	罐	口縁～底部	口径	12.4 D-10	1.b	浅黄色	浅黄色	浅黄色	浅黄色	無
527 白罐	罐	口縁部	口径	12.6 D-5	1.b	浅黄色	浅黄色	浅黄色	浅黄色	無
528 白罐	罐	口縁部	口径	16.0 D-5	1.b	浅黄色	浅黄色	浅黄色	浅黄色	無
529 白罐IV類	罐	口縁～体部	口径	15.6 C-6	反白色	反白色	反白色	反白色	反白色	無
530 白罐IV類	罐	口縁～体部	口径	13.8 F-5	II	反白色	反白色	反白色	反白色	無
531 白罐IV類	罐	口縁～体部	口径	19.0 C-8	II	反白色	反白色	反白色	反白色	無
532 白罐IV類	罐	口縁～体部	口径	16.4 B-5	II	反白色	反白色	反白色	反白色	無
533 白罐IV類	罐	口縁～体部	口径	17.6 D-7	II	反白色	反白色	反白色	反白色	無
534 白罐IV類	罐	口縁～体部	口径	19.6 G-5	II	反白色	反白色	反白色	反白色	無
535 白罐IV類	罐	口縁～体部	口径	17.0 D-10	II	反白色	反白色	反白色	反白色	無
536 白罐IV類	罐	口縁～体部	口径	14.4 F-4	II	浅黄色	浅黄色	浅黄色	浅黄色	無
537 白罐IV類	罐	口縁～体部	口径	18.0 C-11	II	反白色	反白色	反白色	反白色	無
538 白罐IV類	罐	口縁～体部	口径	17.0 E-4	II	反白色	反白色	反白色	反白色	無
539 白罐IV類	罐	口縁～体部	口径	17.0 C-6	II	反白色	反白色	反白色	反白色	無
540 白罐IV類	罐	口縁～体部	口径	16.0 C-7	I.c	反白色	反白色	反白色	反白色	無
541 白罐IV類	罐	口縁～体部	口径	16.0 C-7	I.c	反白色	反白色	反白色	反白色	無
542 白罐IV類	罐	口縁～体部	口径	16.0 D-7	II	浅黄色	浅黄色	浅黄色	浅黄色	無
543 白罐IV類	罐	口縁～体部	口径	16.0 C-7	II	浅黄色	浅黄色	浅黄色	浅黄色	無
544 白罐	直杯	口縁部	口径	19.0 E-5	II	反白色	反白色	反白色	反白色	無
545 白罐	直杯	口縁部	口径	16.0 F-5	II	反白色	反白色	反白色	反白色	無
546 白罐	直杯	口縁部	口径	16.0 F-4	II	反白色	反白色	反白色	反白色	無
547 白罐IV類	罐	口縁～体部	口径	14.2 C-6	II	反白色	反白色	反白色	反白色	無
548 白罐IV類	罐	口縁～体部	口径	17.6 D-6	II	反白色	反白色	反白色	反白色	無
549 白罐IV類	罐	口縁～体部	口径	15.0 C-8	II	反白色	反白色	反白色	反白色	無

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調査	内面調査	胎土色調	胎土特徴	文書・その他
550	白磁	碗	口縁～本部	口径 17.2	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑		
551	白磁	碗	口縁～本部	口径 14.4	C-8	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
552	白磁	碗	口縁～本部	口径 13.0	C-9	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
553	白磁	碗	口縁～本部	口径 16.0	E-6	I.c	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
554	白磁	碗	口縁～本部	口径 14.0	D-6	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
555	白磁	碗	口縁～本部	口径 20.8	D-4	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
556	白磁	碗	口縁～本部	口径 17.2	E-7	I.c	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
557	白磁	碗	口縁～本部	口径 22.0	C-9	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
558	白磁	碗	口縁～本部	口径 16.8	C-5	I.c	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
559	白磁	碗	口縁～本部	口径 16.0	C-5	I.c	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
560	白磁	碗	口縁～本部	口径 18.2	D-6	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
561	白磁	碗	口縁～本部	口径 16.8	F-6	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
562	白磁	碗	口縁～本部	口径 17.6		II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
563	白磁	碗	口縁～本部	口径 18.4	C-11	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
564	白磁	碗	口縁～本部	口径 17.0	E-7	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
565	白磁	碗	口縁～本部	口径 18.0	A-7	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
566	白磁	碗	口縁～本部	口径 16.2	E-9	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
567	白磁	碗	口縁～本部	口径 14.6	F-5	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
568	白磁	碗	口縁～本部	口径 15.8	C-8	I.c	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
569	白磁	碗	口縁～本部	口径 15.0	C-8	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
570	白磁	碗	口縁～本部	口径 16.2	B-3	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
571	白磁	碗	口縁～本部	口径 15.0	D-7	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
572	白磁	碗	口縁～本部	口径 15.0	B-4	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
573	白磁	碗	口縁～本部	口径 6.8	D-11	I	灰白色	灰白色	施釉、VY 目跡	施釉	灰白色	玉緑	
574	白磁	碗	口縁～本部	口径 6.8	E-4	I.b	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色	玉緑	
575	白磁	碗	口縁～本部	口径 6.6	D-7	I.b	灰白色	灰白色	施釉、VY 目跡	施釉	灰白色	玉緑	
576	白磁	碗	口縁～本部	口径 6.0	D-6	II	深黄色	深黄色	施釉、VY 目跡	施釉	深黄色	玉緑	
577	白磁	碗	口縁～本部	口径 7.8	E-4	I.c	灰白色	灰白色	施釉、VY 目跡	施釉	灰白色	玉緑	
578	白磁	碗	口縁～本部	口径 7.2	E-4	II	灰白色	灰白色	施釉、VY 目跡	施釉	灰白色	玉緑	
579	白磁	碗	口縁～本部	口径 6.2	D-8	II	灰白色	灰白色	施釉、VY 目跡	施釉	灰白色	玉緑	
580	白磁	碗	口縁～本部	口径 8.2	C-6	II	灰白色	灰白色	施釉、VY 目跡	施釉	灰白色	玉緑	
581	白磁	碗	口縁～本部	口径 8.0	D-6	II	灰白色	灰白色	施釉、VY 目跡	施釉	灰白色	玉緑	
582	白磁	碗	口縁～本部	口径 6.0	C-3	I.c	灰白色	灰白色	施釉、VY 目跡	施釉	灰白色	玉緑	
583	白磁	碗	口縁～本部	口径 6.8	C-5	I.b	灰白色	灰白色	施釉、VY 目跡	施釉	灰白色	玉緑	
584	白磁	碗	口縁～本部	口径 7.6	D-11	I.b	灰白色	灰白色	施釉、VY 目跡	施釉	灰白色	玉緑	
585	白磁	碗	口縁～本部	口径 7.8	C-10	II	灰白色	灰白色	施釉、VY 目跡	施釉	灰白色	玉緑	
586	白磁	碗	口縁～本部	口径 7.0	C-7	II	灰白色	灰白色	施釉、VY 目跡	施釉	灰白色	玉緑	
587	白磁	碗	口縁～本部	口径 10.0	C-6	I.c	深黄色	深黄色	施釉、VY 目跡	施釉	深黄色	玉緑	
588	白磁	碗	口縁～本部	口径 14.0	C-5	II	灰白色	灰白色	施釉、VY 目跡	施釉	灰白色	玉緑	
589	白磁	碗	口縁～本部	口径 3.8	V	I.b	砂利ア色	砂利ア色	砂利ア色	砂利ア色	灰白色	玉緑	
590	白磁	碗	口縁～本部	口径 18.4	D-4	I.c	砂利ア色	砂利ア色	砂利ア色	砂利ア色	灰白色	玉緑	
591	白磁	碗	口縁～本部	口径 17.0	D-6	II	灰白色	灰白色	砂利ア色	砂利ア色	灰白色	玉緑	
592	白磁	碗	口縁～本部	口径 18.0	D-5	I.c	砂利ア色	砂利ア色	砂利ア色	砂利ア色	灰白色	玉緑	
593	白磁	碗	口縁～本部	口径 16.0	E-7	I.a	砂利ア色	砂利ア色	砂利ア色	砂利ア色	灰白色	玉緑	
594	白磁	碗	口縁～本部	口径 11.6	E-7	I.c	灰白色	灰白色	砂利ア色	砂利ア色	灰白色	玉緑	
595	白磁	碗	口縁～本部	口径 18.0	D-6	I.a	灰白色	灰白色	砂利ア色	砂利ア色	灰白色	玉緑	
596	白磁	碗	口縁～本部	口径 6.6	D-4	I.I	深黄色	深黄色	砂利ア色	砂利ア色	深黄色	玉緑	
597	白磁	碗	口縁～本部	口径 6.2	B-3	I.I	深黄色	深黄色	砂利ア色	砂利ア色	深黄色	玉緑	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外表面質	内面質	胎土色調	胎土特徴	文様・その他	
588	白磁	碗	底部	5.8	C-8	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
589	白磁	碗	底部	6.0	B-4	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色	滑り		
600	白磁	碗	口縁～外部	15.0	B-5	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色	滑り		
601	白磁	碗	口縁～外部	7.0	F-7	1b	オリーブ色	オリーブ色	滑物	滑物	灰白色	滑り	花文	
602	白磁	碗	口縁	14.8	D-7	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
603	白磁	碗	体～底部	7.8	B-3	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
604	白磁	小皿	底部	5.5	D-2	1c	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
605	白磁	小皿	底部	3.8	E-7	1c	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
606	白磁	小皿	底部	2.9	D-3	1c	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
607	白磁	碗	体部～高台	6.6	C-4	1b	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
608	白磁	碗	体部～高台	6.6	F-4	1b	オリーブ色	オリーブ色	滑物	滑物	灰白色			
609	白磁	碗	体部～高台	6.6	G-4	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
610	白磁	碗	体～底部	6.4	D-2	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
611	白磁	碗	体～底部	6.4	E-2	II	オリーブ色	オリーブ色	滑物	滑物	灰白色			
612	白磁	碗	口縁	10.8	D-6	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
613	白磁	碗	口縁～外部	11.0	C-4	1c	オリーブ色	オリーブ色	滑物	滑物	灰白色			
614	白磁	碗	口縁～外部	10.0	D-6	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
615	白磁	碗	口縁～外部	9.8	B-5	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
616	白磁	碗	口縁～外部	9.8	C-4	III	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
617	白磁	碗	口縁～外部	9.5	D-7	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
618	白磁	碗	口縁～外部	12.4	D-6	II	オリーブ色	オリーブ色	滑物	滑物	灰白色			
619	白磁	碗	口縁～外部	12.6	F-5	II	浅黄色	浅黄色	滑物	滑物	灰白色			
620	白磁	碗	口縁～外部	14.6	B-10	1b	オリーブ色	オリーブ色	滑物	滑物	灰白色			
621	白磁	碗	口縁～外部	14.0	D-11	1b	オリーブ色	オリーブ色	滑物	滑物	灰白色			
622	白磁	碗	口縁～外部	14.0	F-4	1b	オリーブ色	オリーブ色	滑物	滑物	灰白色			
623	白磁	碗	口縁～外部	10.6	C-11	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
624	白磁	碗	口縁～外部	14.0	B-3	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
625	白磁	碗	口縁～外部	18.0	A-12	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
626	白磁	碗	口縁～外部	11.2	C-5	1b	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
627	白磁	碗	口縁～外部	12.2	F-7	1a	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
628	白磁	碗	口縁～外部	12.8	C-7	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
629	白磁	碗	口縁～外部	11.0	D-5	1b	オリーブ色	オリーブ色	滑物	滑物	灰白色			
630	白磁	碗	口縁～外部	6.6	C-10	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
631	白磁	碗	口縁～外部	6.0	B-3	1b	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
632	白磁	碗	口縁～外部	5.8	E-7	1b	灰白色	灰白色	滑物	滑物	灰白色			
633	白磁	碗	底部	5.6	D-8	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	浅黄色			
634	白磁	碗	底部	4.2	D-10	I	灰白色	灰白色	滑物	滑物	浅黄色			
635	白磁	碗	底部	6.0	3T	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	浅黄色			
636	白磁	碗	底部	6.6	C-9	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	浅黄色			
637	白磁	碗	底部	6.2	E-5	1b	灰白色	灰白色	滑物	滑物	浅黄色			
638	白磁	碗	底部	6.0	C-11	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	浅黄色			
639	白磁	碗	底部	4.6	D-5	1b	灰白色	灰白色	滑物	滑物	浅黄色			
640	白磁	碗	体部～高台	4.0	D-7	1b	オリーブ色	オリーブ色	滑物	滑物	浅黄色		花文	
641	白磁	碗	口縁～外部	18.0	C-5	1c	灰白色	灰白色	滑物	滑物	浅黄色			
642	白磁	碗	八角小碗	7.4	C-3	1c	灰白色	灰白色	滑物	滑物	浅黄色			
643	白磁	碗	八角小碗	9.3	D-2	II	灰白色	灰白色	滑物	滑物	浅黄色			
644	白磁	碗	体部～高台	4.0	D-7	0	1b	灰白色	灰白色	滑物	滑物	浅黄色		
645	白磁	碗	口縁～高台	9.0	D-7	0	1b	灰白色	灰白色	滑物	滑物	浅黄色		

番号	種類	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	施土色調	施土特徴	文書・その他
646 白銀D類 小皿	体部～蓋部	底盤	5.0	E-4	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	
647 白銀D類 小皿	体部～蓋部	底盤	4.0	F-5	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	
648 白銀D類 小皿	体部～蓋部	底盤	3.0	C-5	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	
649 白銀D類 小皿	体部～蓋部	底盤	2.0	C-4	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	施土無
650 白銀E類 皿	口縁～蓋部	口縁	10.0	D-3	1.a	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	
651 白銀E類 皿	口縁～蓋部	口縁	12.0	F-4	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	
652 白銀E類 皿	口縁～蓋部	口縁	15.0	C-3	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	
653 白銀E類 皿	口縁～蓋部	口縁	7.4	C-2	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	
654 白銀E類 皿	口縁～蓋部	口縁	8.0	C-3	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	
655 白銀E類 小皿	口縁～蓋部	口縁	10.0	D-7	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	
656 白銀E類 深	体部～蓋部	底盤	7.2	E-9	1.b	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	白銀器
657 白銀D類 深	体部～蓋部	底盤	3.2	D-8	1.b	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	白銀器
658 白銀E類 皿	体部～蓋部	底盤	5.0	D-7	1.b	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	白銀器
659 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	17.0	E-5	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
660 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	15.0	F-5	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
661 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	13.2	D-7	1.a	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
662 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	17.0	F-5	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
663 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	14.6	E-7	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
664 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	15.0	E-7	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
665 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	20.6	B-5	1.c	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
666 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	17.2	B-3	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
667 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	17.0	D-5	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
668 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	17.0	D-4	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
669 青銅鏡東I類 鏡	体部	口縁	8.3	II	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
670 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	17.0	F-7	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
671 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	12.2	E-5	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
672 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	9.4	D-7	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
673 青銅鏡東I類 小鏡	口縁～柄部	口縁	8.0	B-3	1.b-c	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
674 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	20.4	E-4	1.c	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
675 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	16.6	C-7	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
676 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	15.6	C-7	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
677 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	17.0	C-7	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
678 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	19.0	E-7	1.a	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
679 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	11.2	C-4	1.c	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
680 青銅鏡東I類 小鏡	口縁～柄部	口縁	8.6	E-7	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
681 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	17.0	D-8	1.c	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
682 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	17.2	E-9	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
683 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	19.2	C-11	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
684 青銅鏡東I類 鏡	口縁～柄部	口縁	16.8	D-5	1.c	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
685 青銅鏡東II類 鏡	口縁～柄部	口縁	14.0	E-4	1.c	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
686 青銅鏡東II類 鏡	口縁～柄部	口縁	15.0	E-3	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
687 青銅鏡東II類 鏡	口縁～柄部	口縁	14.2	D-5	1.c	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
688 青銅鏡東II類 鏡	口縁～柄部	口縁	17.0	C-5	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
689 青銅鏡東II類 鏡	口縁～柄部	口縁	19.2	B-5	1.c	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
690 青銅鏡東II類 鏡	口縁～柄部	口縁	16.8	D-5	1.b	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
691 青銅鏡東II類 鏡	口縁～柄部	口縁	18.2	D-6	1.c	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
692 青銅鏡東II類 鏡	口縁～柄部	口縁	18.2	D-6	1.c	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色
693 青銅鏡東II類 鏡	口縁～柄部	口縁	18.2	D-6	1.c	皮白色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色

番号	種類	器種	部位	口径	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外表面要	内表面要	胎土色調	胎土特徴	文様	その他
694	青磁	直筒	口縁部	口径	16.0	1b	明褐色	明褐色	無地	無地	無地	無地	無地	無地	無地
695	青磁	直筒	口縁～体部	口径	18.6	D-5	1b	赤褐色	赤褐色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
696	青磁	直筒	体部	口径	15.5	E-4	1c	無地	無地	無地	無地	無地	無地	無地	無地
697	青磁	直筒	口縁～体部	口径	13.4	D-7	II	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
698	青磁	直筒	口縁～体部	口径	14.8	E-5	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
699	青磁	直筒	口縁～体部	口径	14.2	F-5	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
700	青磁	直筒	口縁～体部	口径	14.0	D-8	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
701	青磁	直筒	口縁～体部	口径	14.6	C-7	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
702	青磁	直筒	口縁～体部	口径	18.4	B-3	II	無地	無地	無地	無地	無地	無地	無地	無地
703	青磁	直筒	口縁～体部	口径	20.0	D-7	II	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
704	青磁	直筒	口縁～体部	口径	6.8	C-3	II	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
705	青磁	直筒	口縁～体部	口径	5.4	D-10	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
706	青磁	直筒	口縁～高台	口径	6.0	B-6	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
707	青磁	直筒	口縁～高台	口径	5.4	C-5	1a	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
708	青磁	直筒	口縁～高台	口径	15.6	E-5	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
709	青磁	直筒	口縁～高台	口径	12.8	D-5	1c	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
710	青磁	直筒	口縁～高台	口径	14.8	C-3	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
711	青磁	直筒	口縁～高台	口径	14.0	B-5	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
712	青磁	直筒	口縁～高台	口径	16.6	B-3	1c	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
713	青磁	直筒	口縁～高台	口径	8.9	D-9	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
714	青磁	直筒	口縁～高台	口径	14.0	C-5	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
715	青磁	直筒	口縁～高台	口径	14.8	C-3	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
716	青磁	直筒	口縁～高台	口径	12.0	D-5	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
717	青磁	直筒	口縁～高台	口径	13.8	C-5	1a	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
718	青磁	直筒	口縁～高台	口径	13.0	D-7	II	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
719	青磁	直筒	口縁～高台	口径	9.0	B-4	II	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
720	青磁	直筒	口縁～高台	口径	11.0	D-3	II	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
721	青磁	直筒	口縁～高台	口径	14.8	B-4	1b	明褐色	明褐色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
722	青磁	直筒	口縁～高台	口径	8.8	B-3	1b	明褐色	明褐色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
723	青磁	直筒	口縁～高台	口径	9.4	C-6	1b	明褐色	明褐色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
724	青磁	直筒	口縁～高台	口径	13.8	D-9	1a	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
725	青磁	直筒	口縁～高台	口径	17.0	D-2	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
726	青磁	直筒	口縁～高台	口径	14.0	D-5	1c	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
727	青磁	直筒	口縁～高台	口径	6.6	D-7	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
728	青磁	直筒	口縁～高台	口径	16.6	C-4	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
729	青磁	直筒	口縁～高台	口径	16.0	B-2	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
730	青磁	直筒	口縁～高台	口径	13.4	E-4	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
731	青磁	直筒	口縁～高台	口径	19.0	C-4	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
732	青磁	直筒	口縁～高台	口径	14.0	D-9	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
733	青磁	直筒	口縁～高台	口径	17.0	B-4	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
734	青磁	直筒	口縁～高台	口径	6.8	B-6	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
735	青磁	直筒	口縁～高台	口径	17.0	D-1	1b	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
736	青磁	直筒	口縁～高台	口径	17.4	D-1	1c	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
737	青磁	直筒	口縁～高台	口径	7.0	D-6	1c	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
738	青磁	直筒	口縁～高台	口径	6.2	D-7	1	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
739	青磁	直筒	口縁～高台	口径	6.0	D-10	1	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
740	青磁	直筒	口縁～高台	口径	6.0	D-10	1	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地
741	青磁	直筒	口縁～高台	口径	6.0	D-10	1	皮ナフ色	オオリーブ色	無地	無地	無地	無地	無地	無地

番号	種類	器種	部位	口径	法量(cm)	出土区	層	外面色調		内面色調		胎土特徴	文様・その他
								明褐色	明褐色	明褐色	明褐色		
742	青磁	碗	口縁～本體	口径	15.6	D-9	I	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	灰白色	
743	青磁	碗	口縁～本體	口径	12.2	D-9	I-c	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
744	青磁	碗	口縁～本體	口径	14.4	E-1	I-c	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
745	青磁	碗	口縁～本體	口径	11.2	D-4	I-b	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
746	青磁	碗	底部	底径	7.0	B-5	I-c	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	灰白色	
747	青磁	碗	口縁～本體	口径	11.8	D-7	I-c	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
748	青磁	碗	口縁～本體	口径	15.0	E-7	I-b	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
749	青磁	碗	口縁～本體	口径	13.6	D-8	I-b	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
750	青磁	碗	口縁～本體	口径	10.0	D-7	I-a	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
751	青磁	碗	口縁～本體	口径	14.4	B-4	I-b	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
752	青磁	碗	口縁～本體	口径	15.2	C-3	I-b	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
753	青磁	碗	口縁～本體	口径	12.2	D-9	I-a	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
754	青磁	碗	口縁～本體	口径	12.8	D-9	I-b	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
755	青磁	碗	口縁～本體	口径	13.0	B-4	I-b	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
756	青磁	碗	口縁～本體	口径	13.2	D-10	I-b	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	灰白色	
757	青磁	碗	口縁～本體	口径	3.8	-	I-c	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
758	青磁	碗	口縁～本體	口径	8.0	D-4	I-b	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
759	青磁	碗	底部	底径	6.2	D-6	I-b	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	灰白色	
760	青磁	碗	底部	底径	5.3	D-3	I-b	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
761	青磁	碗	底部	底径	6.0	C-13	I-a	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
762	青磁	碗	底部	底径	5.3	D-4	I-b	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
763	青磁	碗	底部	底径	3.5	-	I-b	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
764	青磁同安	碗	口縁～本體	口径	15.8	E-7	II	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	灰白色	
765	青磁同安	碗	口縁～本體	口径	14.6	B-6	I-b	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
766	青磁同安	碗	体～高台	底径	5.2	C-4	I-b	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
767	青磁同安	碗	口縁～本體	口径	10.4	E-4	I-c	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
768	青磁同安	碗	口縁	口径	11.0	C-3	I-b	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	灰白色	
769	青磁同安	碗	口縁～本體	口径	11.8	E-8	I-b	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
770	青磁同安	碗	口縁～本體	口径	12.0	D-7	II	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
771	青磁同安	碗	体～底部	底径	5.0	C-11	I-b	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
772	青磁同安	碗	体～底部	底径	4.8	D-6	I-c	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
773	青磁同安	碗	体～底部	底径	5.6	C-4	I-c	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
774	青磁同安	碗	体～底部	底径	4.8	E-10	I-a	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	灰白色	
775	青磁同安	碗	体～底部	底径	5.0	D-7	I-b	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	灰白色	
776	青磁同安	碗	底部	底径	5.6	C-7	I-c	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	オリーブ色	灰白色	
777	青磁同安	碗	体～底部	底径	6.0	F-4	I-b	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	灰白色	
778	青磁同安	碗	底部	底径	4.8	D-9	I-c	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	灰白色	
779	青磁同安	碗	底部	底径	5.4	E-10	II	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	灰白色	
780	青磁同安	碗	底部	底径	4.8	F-10	I-b	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	灰白色	
781	白磁	合子	口縁	口径	5.0	D-10	I-b	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	灰白色	
782	白磁	合子	口縁	口径	7.8	F-4	I-b	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	灰白色	
783	白磁	合子	口縁	口径	8.0	C-11	I-c	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	灰白色	
784	白磁	合子	口縁	口径	8.8	B-6	II	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	灰白色	
785	白磁	合子	口縁	口径	6.2	C-7	I-c	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	灰白色	
786	白磁	合子	受け舟	底径	4.0	D-3	II	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	灰白色	
787	白磁	合子	受け舟	底径	9.0	B-7	I	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	灰白色	
788	青磁付	碗	口縁部	口径	14.6	C-D-4	I-b	牡丹	牡丹	牡丹	牡丹	灰白色	
789	青磁付	碗	口縁部	口径	14.6	B-3	I-b	牡丹	牡丹	牡丹	牡丹	灰白色	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
780	漆付竹	漆	口縁～体部	口径	13.4	D-9	2本継	2本継			
781	漆付竹	漆	口縁～体部	口径	10.4	D-9	1a	緑	2本継		
782	漆付竹	漆	口縁～体部	口径	9.5	B-5	1a	緑	2本継		
783	漆付竹	漆	口縁～体部	口径	9.5	F-7	1a	赤	2本継	1木綿	
784	漆付竹	漆	体部～高台	底径	5.2	B-2	1b	黒		17片	
785	漆付竹	漆	体部	底径	4.6	B-7	1b	黒			
786	漆付竹	漆	体部～高台	底径	3.6	C-2	1b	黒		細	
787	漆付竹	漆	体部～高台	底径	4.2	B-5	1c	黒		60枚	
788	漆付竹	漆	体部～高台	底径	5.0	E-7	1a	赤		2枚	
789	漆付竹	漆	体部～高台	底径	5.0	D-4	1b	黒		黒文	
800	漆付竹	漆	体部～高台	底径	5.2	C-3	1b	黒			
801	漆付竹	漆	体部～高台	底径	6.2	D-5	1c	黒		唐草彫文	
802	漆付竹	漆	体部～高台	底径	6.2	D-4	1b	黒		唐草彫文	
803	漆付竹	漆	体部～高台	底径	3.4	F-3	1b	黒		1木綿	
804	漆付竹	漆	体部～高台	底径	4.5	D-7	1a	2本継			
805	漆付竹	漆	体部～高台	底径	4.4	B-4	1a	2本継			
806	漆付竹	漆	体部	底径	D-3	1a	2本継		2木綿		
807	漆付竹	漆	体部	底径	B-6	II				鶴子文	
808	漆付竹	漆	体部	底径	C-5	I				鶴子文	
809	漆付竹	漆	体部	底径	7.8	D-4	1b			鶴子文、2木綿	
810	漆付竹	漆	体部	底径	5.4	D-10				鶴文	
811	漆付竹	漆花皿	口縁		E-9		1a	黒		唐草文	
812	漆付竹	漆花皿	口縁		D-6		1b			花文	
813	漆付竹	漆	体部～高台	底径	7.0	B-3	1c			黒文	
814	漆付竹	漆	体部～高台	底径	18.8	B-2-3	1c			2本継	
815	漆付竹	漆	体部～高台	底径	5.0	B-4	1c			2木綿	
816	漆付竹	漆	体部	底径	5.6	C-4	1b			黒文、2木綿	
817	漆付竹	漆	体部	底径	D-5	C-3	1b			黒文、2木綿	
818	漆付竹	漆	体部	底径	12.6	C-3	1a			唐花文	
819	漆付竹	漆	口縁～高台	底径	9.4		1c			唐花文、2木綿	
820	漆付竹	漆	口縁～体部	底径	9.4	B-5	1c			唐文、2木綿	
821	漆付竹	漆	口縁～体部	底径	10.1	E-9	1a			唐文、2木綿	
822	漆付竹	漆	口縁～体部	底径	3.8	B-5	1b			唐文	
823	漆付竹	漆	口縁～体部	底径	11.4	D-E-4	1b			唐文、3木綿	
824	漆付竹	漆	二次加工高台	底径	2.2	C-7	1a	黒		唐花文、1木綿	
825	漆付竹	漆	底径	底径	5.9	C-7	1c	青黒色			
826	漆付竹	漆	底径	底径	3.8	D-9	1a	黒			
827	漆付竹	漆	底径	底径	2.2	B-7	1a	黒			
828	漆付竹	漆	底径	底径	3.8	B-2	1b	黒			
829	漆付竹	漆	底径	底径	2.8	B-2	1a	黒			
830	漆付竹	漆	口縁～体部	底径	C-7	E-5	1c	黒	2本継	2木綿	
831	漆付竹	漆	口縁	底径	2.6	F-8	1a	黒		葉花文	
832	漆付竹	漆	口縁	底径	2.2	C-7	1c	一三四角			
833	中国陶器	壺	口縁	底径	5.9	C-7	1c	青黒色			
834	中国陶器	壺	口縁	底径	C-3		1b	黒			
835	中国陶器	壺	口縁	底径	C-10		1b	黒			
836	中国陶器	小鉢	口縁	底径	10.0	F-3	1b	青黒色			
837	中国陶器	天目碗	口縁	底径	13.2	C-4	1a	黒			

番号	種類	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調		内面色調		胎土調査	胎土特徴	文書等
						横	縦	横	縦			
838	中国陶器	天目碗	口縁～外底	口径	12.4	C-10	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
839	中国陶器	天目碗	口縁～外底	口径	12.2	E-3	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
840	中国陶器	天目碗	外底			E-3	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
841	中国陶器	天目碗	外底			E-3	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
842	中国陶器	天目碗	体			D-11	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
843	中国陶器	天目碗	体～底部	口径	5.0	B-3	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
844	中国陶器	杯	口縁～底部	口径	25.0	ST	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
845	中国陶器	杯	口縁～底部	口径	12.8	D-2	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
846	中国陶器	壺	口縁～底部	口径	9.0	G-7	黒褐色	オーブル黒色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
847	中国陶器	壺	口縁～底部	口径	7.8	D-8	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
848	中国陶器	壺	口縁～底部	口径	6.8	C-9	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
849	中国陶器	壺	口縁～底部	口径	10.0	D-3	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
850	中国陶器	杯	底部	底径	8.0	E-8	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
851	中国陶器	杯	底部	底径	8.6	D-5	黒褐色	オーブル黒色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
852	中国陶器	壺	口縁～底部	口径	10.4	B-3	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
853	中国陶器	壺	口縁～底部	口径	9.3	D-4	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
854	中国陶器	杯	口縁～底部	口径	23.0	C-5	黒褐色	リブ付黒色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
855	中国陶器	杯	口縁～底部	口径	3.9	D-7	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
856	中国陶器	四耳壺	口縁～底部	口径	14.0	E-4	黒褐色	オーブル黒色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
857	中国陶器	四耳壺	口縁～底部	口径	11.0	D-3	黒褐色	オーブル黒色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
858	中国陶器	四耳壺	口縁～底部	口径	10.6	C-3	黒褐色	オーブル黒色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
859	中国陶器	四耳壺	口縁～底部	口径	10.7	D-7	黒褐色	オーブル黒色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
860	中国陶器	四耳壺	口縁～底部	口径	10.4	D-4	黒褐色	オーブル黒色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
861	中国陶器	四耳壺	口縁～底部	口径	12.4	E-10	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
862	中国陶器	壺	底部	底径	9.6	B-4	黒褐色	オーブル黒色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
863	陶器	壺	口縁～底部	口径	9.0	C-10	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
864	陶器	壺	口縁		D-7		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
865	陶器	壺	底部	底径	11.0	C-13	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
866	陶器	壺	底部	底径	16.6	B-3	黒褐色	オーブル黒色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
867	陶器	壺	口縁		ST	27.0	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
868	陶器	壺	口縁～底部	口径	13.4	E-9	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
869	陶器	壺	口縁～底部	口径	15.6	C-8	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
870	陶器	壺	口縁		20.6		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
871	須恵器	壺	口縁～底部	口径	11.0	D-9	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
872	須恵器	壺	口縁		D-7		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
873	須恵器	壺	口縁		C-8		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
874	須恵器	壺	口縁		D-8		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
875	須恵器	壺	口縁		C-7		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
876	須恵器	壺	口縁		E-3		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
877	須恵器	壺	口縁～底部	口径	16.6	C-5	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
878	須恵器	壺	口縁		B-2		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
879	須恵器	壺	口縁		B-2		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
880	須恵器	壺	口縁		B-10		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
881	須恵器	壺	口縁		C-9		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
882	須恵器	壺	口縁		D-4		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
883	須恵器	壺	注連口		C-10		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
884	須恵器	壺	注連口		C-6		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無
885	須恵器	壺	注連口		C-6		黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	無

番号	測定箇所	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外表面調	内面調査	胎土色調	胎土特徴	文書-その他
886 桶裏唇	筒状	口縁部	口径	20.6	B-2	1.c	灰白色	灰白色	ハラダ	ハケ目	灰色	無
887 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	24.0	C-10	1.a	灰白色	灰白色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
888 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	25.4	D-11	1	灰白色	灰白色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
889 桶裏唇	筒状	口縁部	口径	23.0	D-5	1.c	灰白色	暗青灰色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
890 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	27.0	F-7	II	灰白色	暗青灰色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
891 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	22.0	C-10	II	灰白色	暗青灰色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
892 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	26.0	C-12	III	灰白色	暗青灰色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
893 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	29.0	E-7	1.b	灰白色	暗青灰色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
894 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	27.0	E-7	1.b	灰白色	暗青灰色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
895 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	22.0	C-7	II	灰白色	暗青灰色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
896 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	24.0	E-4	II	灰白色	暗青灰色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
897 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	24.0	E-5	6	1~4=1.c	灰白色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
898 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	22.4	C-8	1.b	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
899 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	24.0	C-9	II	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
900 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	29.4	C-11	II	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
901 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	24.0	D-5	1.b	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
902 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	25.0	B-8	1.b	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
903 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	21.0	F-7	II	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
904 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	26.0	C-7	1.c	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
905 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	24.0	E-10	II	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
906 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	27.0	C-8	1.c	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
907 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	24.2	B-7	1.a	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
908 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	24.2	B-5	1.b	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
909 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	24.0	B-3	1.b	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
910 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	31.8	B-3	II	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
911 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	24.0	B-4	II	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
912 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	29.4	E-10	1.b	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
913 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	34.2	C-2	II	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
914 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	30.0	E-9	1.b	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
915 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	31.0	E-9	II	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
916 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	24.0	B-4	II	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
917 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	22.4	B-6	1.c	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
918 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	26.0	D-6	1.b	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
919 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	31.6	E	II	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
920 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	30.2	C-10	1.c	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
921 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	22.0	D-7	II	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
922 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	24.0	B-5	1.c	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
923 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	21.0	D-7	1.b	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
924 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	22.4	B-6	1.c	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
925 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	26.0	C-6	1.b	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
926 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	31.6	D-3	II	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
927 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	21.4	C-7	1.c	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
928 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	22.6	E	II	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
929 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	24.0	B-6	II	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
930 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	24.0	C-6	II	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
931 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	18.0	D-9	II	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
932 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径	12.4	E-9	II	灰白色	明黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色	無
933 桶裏唇	筒状	口縁～肩部	口径						研磨	研磨		

番号	種類	部位	法量(cm)	出土区	外面色調		内面調査		出土物類	出土特徴	文書等
					層	底質	水浸性	水浸性			
934 土師器	塊	口縁～体部	口径	12.0	B-3	黄褐色	水浸性	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
935 土師器	塊	口縁～体部	口径	18.8	C-11	明黄色	水浸性	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
936 素色土器	塊	口縁～体部	口径	7.2	F-7	1b	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
937 土師器	塊	底部	底径	6.6	F-8	1c	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
938 土師器	塊	底部	底径	6.6	F-8	1a	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
939 土師器	塊	底部	底径	9.0	D-12	3	浅色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
940 土師器	塊	底部	底径	7.4	B-3	3	浅色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
941 土師器	塊	底部	底径	6.6	E-6	1	明黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
942 土師器	塊	底部	底径	7.0	D-1	1	明黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
943 土師器	塊	底部	底径	8.8	C-4	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
944 土師器	塊	底部	底径	7.4	D-5	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
945 土師器	塊	底部	底径	9.1	C-6	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
946 土師器	塊	底部	底径	6.6	B-4	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
947 土師器	塊	底部	底径	7.8	D-11	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
948 土師器	塊	底部	底径	7.2	B-3	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
949 土師器	塊	底部	底径	8.0	D-7	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
950 土師器	塊	底部	底径	7.4	C-10	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
951 土師器	塊	底部	底径	7.0	B-3	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
952 土師器	塊	底部	底径	7.4	D-8	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
953 黑色土器A	塊	底部	底径	9.2	F-8	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
954 黑色土器B	塊	底部	底径	7.0	B-6	1	浅色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
955 黑色土器C	塊	底部	底径	7.0	B-3	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
956 黑色土器D	塊	底部	底径	5.6	F-5	1	明黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
957 黑色土器A	塊	底部	底径	5.6	E-5	1	明黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
958 黑色土器	塊	底部	底径	8.0	D-6	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
959 黑色土器	塊	底部	底径	8.0	E-9	1	浅白色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
960 土師器	塊	底部	底径	7.4	C-7	1c	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
961 系土器	塊	底部～臺	底径	6.0	D-3	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
962 系土器	塊	底部	底径	8.0	E-9	1c	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
963 黑色土器A	塊	口縁～体部	口径	18.0	D-6	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
964 黑色土器A	塊	口縁～体部	口径	19.0	D-6	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
965 黑色土器A	塊	口縁～体部	口径	17.5	D-7	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
966 黑色土器A	塊	口縁～体部	口径	17.4	D-5	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
967 黑色土器A	塊	口縁～体部	口径	20.0	C-7	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
968 黑色土器A	塊	口縁～体部	口径	18.0	B-4	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
969 黑色土器A	塊	口縁～体部	口径	15.9		1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
970 黑色土器A	塊	口縁～体部	口径	18.0	C-11	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
971 黑色土器A	塊	口縁～体部	口径	16.0	B-6	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
972 黑色土器A	塊	口縁～体部	口径	19.6	D-6	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
973 黑色土器A	塊	口縁～体部	口径	17.0	E-9	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
974 黑色土器A	塊	口縁～体部	口径	17.8	D-6	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
975 黑色土器A	塊	口縁～体部	口径	17.6	D-6	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
976 黑色土器A	塊	口縁～体部	口径	18.6	C-8	1c	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
977 黑色土器A	塊	口縁～体部	口径	17.6	E-7	1	浅灰色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
978 黑色土器A	塊	口縁～体部	口径	16.0	D-7	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
979 黑色土器A	塊	口縁～体部	口径	15.0	E-9	1c	明黄色	水浸性	水浸性	丁寧な仕上げ	
980 黑色土器A	塊	口縁～体部	口径	15.4	D-6	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	
981 黑色土器A	塊	口縁～体部	口径	13.6	D-7	1	浅黄色	水浸性	水浸性	無鉄石更年(?)	

番号	種類	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調		内面色調		出土特徴	文書等・その他
						(一) 水性地色	(二) 油性地色	(一) 水性地色	(二) 油性地色		
982 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	17.0	D-7	I	二(一) 水性地色	黒色	水性地	研磨	褐色	
983 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	16.0	D-6	I	二(一) 水性地色	黒色	水性地	研磨	二(一) 水性地色	
984 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	18.2	D-5	I	二(一) 水性地色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
985 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	17.6	D-4	I	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	黄褐色	
986 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	18.0	D-6	I	二(一) 黄褐色	黒褐色	水性地	研磨	灰系色	褐色
987 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	20.0	F-5	II	二(一) 黄褐色	黒色	研磨	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
988 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	18.8	D-6	II	二(一) 黄褐色	黒色	研磨	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
989 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	14.0	C-11	II	二(一) 黄褐色	黒色	研磨	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
990 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	13.2	E-9	II	二(一) 黄褐色	黒褐色	水性地	丁寧な仕上げ	二(一) 黄褐色	
991 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	9.8	D-6	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	水性地	褐色
992 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	7.3	D-7	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
993 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	6.4	D-7	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
994 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	7.2	D-6	II	二(一) 黄褐色	黒色	研磨	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
995 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	6.4	D-6	II	二(一) 黄褐色	黒色	丁寧仕上げ	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
996 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	6.2	D-6	II	二(一) 黄褐色	黒色	丁寧仕上げ	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
997 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	7.2	D-6	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 白色	褐色
998 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	8.0	D-11	II	二(一) 黄褐色	黒色	丁寧仕上げ	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
999 黒色 土器A 池	口縁～高台	口縁	6.4	D-7	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1000 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	7.4	B-4	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1001 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	7.2	D-6	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1002 黒色 土器A 池	口縁～高台	口縁	6.6	D-6	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1003 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	7.0	D-7	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1004 黒色 土器A 池	口縁～高台	口縁	7.6	E-7	II	二(一) 黄褐色	黒色	研磨	丁寧な仕上げ	二(一) 黄褐色	褐色
1005 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	6.0	C-8	II	二(一) 黄褐色	黒色	研磨	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1006 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	7.2	D-7	II	二(一) 黄褐色	黒色	研磨	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1007 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	9.0	B-4	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1008 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	9.2	C-6	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1009 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	9.2	S-5	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1010 黒色 土器A 池	口縁～高台	口縁	8.4	B-10	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1011 黒色 土器A 池	口縁～高台	口縁	7.6	D-6	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1012 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	9.0	D-6	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1013 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	7.0	E-5	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	丁寧な仕上げ	二(一) 黄褐色	褐色
1014 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	7.6	C-10	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1015 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	7.0	C-7	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1016 黒色 土器A 池	口縁～高台	口縁	6.7	B-5	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1017 黒色 土器A 池	口縁～高台	口縁	6.4	C-8	II	二(一) 黄褐色	黒色	研磨	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1018 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	6.2	E-9	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1019 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	6.4	C-11	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	丁寧仕上げ	二(一) 黄褐色	褐色
1020 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	7.6	E-5	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1021 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	6.8	D-8	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1022 黒色 土器A 池	口縁～高台	口縁	7.0	F-7	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1023 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	7.0	C-5	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1024 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	6.8	D-6	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1025 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	7.0	D-4	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1026 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	7.2	D-7	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1027 黒色 土器A 池	口縁～高台	口縁	6.0	D-12	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1028 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	12.4	E-9	II	二(一) 黄褐色	黒色	水性地	研磨	二(一) 黄褐色	褐色
1029 黒色 土器A 池	口縁～本部	口縁	1.1								

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調		内面調査		胎土色調	胎土特徴	文書等
							裏面	表面	裏面	表面			
1030 黒色 土器A 沖	底部	底部	底部	7.2	II	褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1031 黒色 土器A 沖	底部	底部	底部	6.4	C-7	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き T字仕上げ	研磨	にぶい褐色	無鉄	
1032 黒色 土器A 沖	底部	底部	底部	7.5	C-9	褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1033 黒色 土器A 沖	底部	底部	底部	6.0	D-12	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1034 黒色 土器A 沖	底部	底部	底部	7.0	D-12	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	にぶい褐色	無鉄	
1035 黒色 土器A 沖	底部	底部	底部	8.6	B-5	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	にぶい褐色	無鉄	
1036 黒色 土器A 沖	底部	底部	底部	7.6	B-5	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	にぶい褐色	無鉄	
1037 黒色 土器A 沖	底部	底部	底部	7.4	B-5	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1038 黒色 土器A 沖	底部	底部	底部	7.0	C-5	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1039 黒色 土器A 沖	底部	底部	底部	7.4	D-4	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1040 黒色 土器A 沖	底部	底部	底部	7.8	D-6	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	にぶい褐色	無鉄	
1041 黒色 土器A 沖	底部	底部	底部	7.4	D-9	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き ハリツ	研磨	にぶい褐色	無鉄	
1042 黒色 土器A 沖	底部	底部	底部	7.6	B-4	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1043 黒色 土器A 沖	底部	底部	底部	7.4	B-4	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1044 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	7.0	E-10	にぶい褐色	褐色	褐色	丁字仕上げ	研磨	黑色	無鉄	
1045 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	7.4	E-10	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き ハリツ	研磨	白色	無鉄	
1046 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	6.6	B-5	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	にぶい褐色	無鉄	
1047 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	7.0	B-4	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	由灰色	無鉄	
1048 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	6.0	D-3	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	由灰色	無鉄	
1049 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	6.8	B-4	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	にぶい褐色	無鉄	
1050 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	6.2	D-6	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	黑色	無鉄	
1051 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	6.8	B-7	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1052 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	7.0	B-4	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1053 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	7.0	D-2	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	由灰色	無鉄	
1054 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	6.8	C-8	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	にぶい褐色	無鉄	
1055 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	8.0	B-4	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	にぶい褐色	無鉄	
1056 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	8.4	C-6	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1057 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	8.0	B-8	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1058 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	8.0	D-7	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1059 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	6.8	E-5	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1060 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	7.0	D-8	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1061 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	6.0	E-6	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1062 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	6.8	C-6	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1063 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	5.6	E-6	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	にぶい褐色	無鉄	
1064 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	12.2	B-5	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1071 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	14.2	C-11	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1072 黒色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	15.8	D-7	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	にぶい褐色	無鉄	
1073 黑色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	15.0	C-12	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1074 黑色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	14.6	D-5	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1075 黑色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	12.2	C-5	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	にぶい褐色	無鉄	
1076 黑色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	10.0	C-3	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	淡黄色	無鉄	
1077 黑色 土器A 沖	底部~高台	底部	底部~高台	14.4	C-7	にぶい褐色	褐色	褐色	水洗き	研磨	にぶい褐色	無鉄	

器物名	種類	器種	部位	量(㌘)	出土区	層	外面調整		内部調整		出土特徴	文様等の 特徴その他の 事項
							外面部	内面部	外面部	内面部		
10701 土師器	环	休部	休部	8.0	D-8	層	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	
10719 土師器	环	休部	休部	7.2	E-1	層	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	
10800 土師器	环	休部	休部	11.0	E-7	Ⅰ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
10801 土師器	环	休部	休部	6.6	D-4	Ⅱ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
10802 土師器	环	休部	休部	6.8	B-5	Ⅲ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
10803 土師器	环	休部	休部	9.0	D-7	Ⅳ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
10804 土師器	环	休部	休部	12.0	D-7	Ⅴ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
10805 土师器	环	休部	休部	6.0	F-5	Ⅵ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
10806 土师器	环	休部	休部	10.2	C-11	Ⅶ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
10807 土师器	环	休部	休部	14.4	C-5	Ⅷ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
10808 土师器	环	休部	休部	15.6	B-6	Ⅸ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
10809 土师器	环	休部	休部	16.8	C-5	Ⅹ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
10900 土师器	环	休部	休部	15.6	D-7	Ⅺ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
10901 土师器	环	休部	休部	16.2	C-5	Ⅻ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
10902 土师器	环	休部	休部	14.4	B-3	Ⅼ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
10903 土师器	环	休部	休部	15.0	E-6	Ⅽ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
10904 土师器	环	休部	休部	14.4	E-6	Ⅾ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
10905 土师器	环	休部	休部	15.2	C-7	Ⅿ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
10906 土师器	环	休部	休部	12.4	D-2	ⅰ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
10907 土师器	环	休部	休部	16.2	D-7	ⅱ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
10908 土师器	环	休部	休部	15.0	E-6	ⅲ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
10909 土师器	环	休部	休部	11.2	C-5	ⅳ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11000 土师器	环	休部	休部	15.0	E-9	ⅴ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11101 土师器	环	休部	休部	17.6	D-8	ⅵ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11102 土师器	环	休部	休部	7.4	B-6	ⅶ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11103 土师器	环	休部	休部	7.8	D-6	ⅷ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11104 土师器	环	休部	休部	6.4	B-5	ⅸ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11105 土师器	环	休部	休部	8.6	E-6	ⅹ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11106 土师器	环	休部	休部	7.4	D-3	Ⅺ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11107 土师器	环	休部	休部	10.0	D-6	Ⅻ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11108 土师器	环	休部	休部	10.8	C-11	Ⅼ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11109 土师器	环	休部	休部	9.4	E-7	Ⅽ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11110 土师器	环	休部	休部	7.4	C-5	Ⅾ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11111 土师器	环	休部	休部	11.8	E-6	Ⅿ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11112 土师器	环	休部	休部	9.0	E-5	ⅰ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11113 土师器	环	休部	休部	13.2	E-7	ⅱ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11114 土师器	环	休部	休部	9.2	D-10	ⅲ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11115 土师器	环	休部	休部	16.8	D-7	ⅳ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11116 土师器	环	休部	休部	11.6	B-6	ⅴ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11117 土师器	环	休部	休部	12.8	C-8	ⅶ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11118 土师器	环	休部	休部	14.4	C-12	ⅷ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11119 土师器	环	休部	休部	17.2	E-6	ⅸ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11120 土师器	环	休部	休部	15.6	E-6	ⅹ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11121 土师器	环	休部	休部	13.2	E-7	Ⅺ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11122 土师器	环	休部	休部	15.0	C-7	Ⅻ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11123 土师器	环	休部	休部	9.4	C-12	Ⅼ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11124 土师器	环	休部	休部	11.2	C-7	ⅷ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色
11125 土师器	环	休部	休部	9.6	B-6	ⅸ	二つの黄褐色	水滴巻き切り	水滴巻き	手形	無	青色

番号	測定	部位	法量(cm)	出土区	外面色調		内面調査		胎土色調	胎土特徴	文書等	
					9.6	9.6	II	II				
1126 土師器	外	体部～足部	底径	6.6	C-11	I	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い黄褐色	無鉄	
1127 土師器	外	体部～足部	底径	7.5	E-9	II	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	褐色	無鉄	
1128 土師器	外	底径	15.0	C-11	III	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い黄褐色	無鉄	丹波り	
1129 土師器	外	口縁～足部	口径	25.0	C-8	I c	二分い黃褐色	二分い黄褐色	水浸色、赤切り	水浸色	無鉄(石英有り)	
1130 土師器	外	口縁～足部	口径	16.6	D-7	II	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い黄褐色	無鉄	
1131 土師器	外	口縁～足部	口径	11.4	C-5	I c	二分い褐色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い黄褐色	無鉄	
1132 土師器	外	口縁～足部	口径	11.0	D-11	I b	二分い褐色	水浸色、赤切り	水浸色	水浸色	無鉄	
1133 土師器	外	口縁～足部	口径	12.4	C-3	I a	二分い黄褐色	明黄色	水浸色、赤切り	水浸色	無鉄	
1134 土師器	外	口縁～足部	口径	12.0	B-5	I b	二分い褐色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い黄褐色	無鉄	
1135 土師器	外	口縁～足部	口径	8.0	C-5	I c	浅黄褐色	水浸色、赤切り	水浸色	浅黄褐色	無鉄(石英有り)	
1136 土師器	外	底径	10.8	C-8	I c	浅黄褐色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い黄褐色	無鉄		
1137 土師器	外	口縁～足部	口径	7.0	D-7	I b	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	水浸色	無鉄	
1138 土師器	小皿	口縁～足部	口径	5.6	D-7	I	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	水浸色	無鉄	
1139 土師器	小皿	口縁～足部	口径	7.0	C-6	II	明黄色	水浸色、赤切り	水浸色	明黄色	無鉄	
1140 土師器	小皿	口縁～足部	口径	6.8	E-4	II	浅黄褐色	水浸色、赤切り	水浸色	浅黄褐色	無鉄	
1141 土師器	小皿	口縁～足部	口径	7.0	D-6	II	浅黄褐色	二分い褐色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い黄褐色	無鉄
1142 土師器	小皿	口縁～足部	口径	8.4	C-8	II	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	水浸色	無鉄	
1143 土師器	小皿	口縁～足部	口径	7.7	D-9	II	二分い褐色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い黄褐色	無鉄(石英有り)	
1144 土師器	小皿	口縁～足部	口径	8.0	D-7	II	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い褐色	無鉄	
1145 土師器	小皿	口縁～足部	口径	7.2	D-6	II	明黄色	水浸色、赤切り	水浸色	明黄色	無鉄	
1146 土師器	小皿	口縁～足部	口径	8.0	D-4	II	浅黄褐色	水浸色、赤切り	水浸色	浅黄褐色	無鉄	
1147 土師器	小皿	口縁～足部	口径	8.8	E-5	II	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	褐色	無鉄	
1148 土師器	小皿	口縁～足部	口径	8.0	D-7	II	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	褐色	無鉄	
1149 土師器	小皿	口縁～足部	口径	9.2	D-6	II	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	褐色	無鉄	
1150 土師器	小皿	口縁～足部	口径	8.5	C-8	II	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	水浸色	無鉄	
1151 土師器	小皿	口縁～足部	口径	9.0	C-8	II	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	褐色	無鉄	
1152 土師器	小皿	口縁～足部	口径	9.0	D-7	II	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	水浸色	無鉄(石英有り)	
1153 土師器	小皿	口縁～足部	口径	7.0	C-7	II	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	褐色	無鉄	
1154 土師器	小皿	口縁～足部	口径	7.0	F-5	II	浅黄褐色	水浸色、赤切り	水浸色	浅黄褐色	無鉄	
1155 土師器	小皿	口縁～足部	口径	9.0	D-7	II	二分い褐色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い褐色	無鉄	
1156 土師器	小皿	口縁～足部	口径	9.4	F-4	I c	二分い黄褐色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い黄褐色	無鉄	
1157 土師器	小皿	口縁～足部	口径	8.0	C-6	II	浅黄褐色	二分い褐色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い褐色	無鉄
1158 土師器	小皿	口縁～足部	口径	9.4	E-4	I c	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	褐色	無鉄	
1159 土師器	小皿	口縁～足部	口径	8.5	D-6	II	二分い褐色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い褐色	無鉄	
1160 土師器	小皿	口縁～足部	口径	8.6	E-0	II	二分い褐色	二分い褐色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い褐色	無鉄
1161 土師器	小皿	口縁～足部	口径	9.0	C-8	I c	二分い褐色	二分い褐色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い褐色	無鉄
1162 土師器	小皿	口縁～足部	口径	9.4	C-6	I c	浅黄褐色	水浸色、赤切り	水浸色	浅黄褐色	無鉄	
1163 土師器	小皿	口縁～足部	口径	9.0	D-6	I c	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	褐色	無鉄	
1164 土師器	小皿	口縁～足部	口径	9.0	E-6	I c	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	褐色	無鉄	
1165 土師器	小皿	口縁～足部	口径	8.2	E-3	II	二分い褐色	二分い褐色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い褐色	無鉄
1166 土師器	小皿	口縁～足部	口径	9.0	D-6	II	二分い褐色	二分い褐色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い褐色	無鉄
1167 土師器	小皿	口縁～足部	口径	8.0	E-8	I c	二分い褐色	二分い褐色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い褐色	無鉄
1168 土師器	小皿	口縁～足部	口径	9.2	C-8	II	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	褐色	無鉄	
1169 土師器	小皿	口縁～足部	口径	9.6	D-8	II	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	褐色	無鉄	
1170 土師器	小皿	口縁～足部	口径	10.0	E-4	II	二分い褐色	明黄色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い褐色	無鉄
1171 土師器	小皿	口縁～足部	口径	10.2	F-5	I b	浅黄褐色	二分い褐色	水浸色、赤切り	水浸色	二分い褐色	無鉄
1172 土師器	小皿	口縁～足部	口径	9.6	C-7	I b	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	褐色	無鉄(石英有り)	
1173 土師器	小皿	口縫	口径	10.0	D-7	II	褐色	水浸色、赤切り	水浸色	褐色	無鉄(石英有り)	

番号	測定	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調		内面調査		胎土色調	胎土特徴	文書-その他	
						黒色	褐色	黒色	褐色				
1222 黒色 土器部 小皿	口縁~全体	口径	10.0	D-6	II	黒色	褐色	研磨	研磨	黒色	細粒		
1223 黒色 土器部 小皿	口縁~全体	口径	10.0	D-6	II	黒色	褐色	研磨	研磨	黒色	細粒		
1224 黒色 土器部 小皿	口縁~全体	口径	9.0	D-6	II	黒色	褐色	研磨	研磨	黒色	細粒		
1225 黒色 土器部 小皿	口縁~全体	口径	8.0	D-6	II	黒色	褐色	研磨	研磨	黒色	細粒		
1226 黒色 土器部 小皿	口縁~全体	口径	8.2	D-7	II	黒色	褐色	研磨	研磨	黒色	細粒		
1227 黒色 土器部 小皿	口縁~全体	口径	7.6	D-6	II	黒色	褐色	研磨	研磨	黒色	細粒		
1228 黒色 土器部 小皿	口縁~全体	口径	11.9	D-6	II	黒色	褐色	研磨	研磨	黒色	細粒		
1229 黒色 土器部 小皿	口縁~全体	口径	9.4	D-6	II	黒色	褐色	研磨	研磨	黒色	細粒		
1230 黒色 土器部 小皿	口縁~全体	口径	11.9	D-6	II	黒色	褐色	研磨	研磨	火灰褐色	細粒		
1231 黒色 土器部 小皿	口縁~全体	口径	8.4	D-4	I-b	黒色	褐色	研磨	研磨	黒色	細粒		
1232 黒色 土器部 小皿	全体	全体	6.0	E-5	II	黒色	褐色	研磨	研磨	黒色	細粒		
1233 黒色 土器部 小皿	全体	全体	3.8	C-11	II	黒色	褐色	研磨	研磨	黒色	細粒		
1234 黒色 土器部 小皿	全体	全体	5.0	C-9	II	黒色	褐色	研磨	研磨	黒色	細粒		
1235 黒色 土器部 小皿	全体	全体	6.5	D-6	II	黒色	褐色	研磨	研磨	黒色	細粒		
1236 黒色 土器部 小皿	全体	全体	6.0	E-5	II	黒色	褐色	研磨	研磨	黒色	細粒		
1237 黒色 土器部 小皿	全体	全体	5.0	D-6	II	黒色	褐色	研磨	研磨	黒色	細粒		
1238 黒色 土器部 小皿	全体	全体	6.2	E-6	II	黒色	褐色	研磨	研磨	黒色	細粒		
1239 黒色 土器部 小皿	全体	全体	6.0	C-12	II	黒色	褐色	研磨	研磨	黒色	細粒		
1240 心一二二 心一二二	羽口		B-4							フタ			
1241 心一二二 合子	羽口		C-7							ハコ			
1242 土師器	受身舟	口径	6.8	C-6	II	黒褐色	褐色	水焼き	水焼き	褐色	板付型		
1243 土師器	折腰車									一孔			
1244 土師器	土舟			F-5	II	一二孔	褐色	水焼き	水焼き	褐色	板付型		
1245 土師器	土舟			B-6	I-b	反白色				一孔			
1246 土師器	土舟			B-2	I-b	黑褐色				一孔			
1247 土師器	土舟			C-9	I-b	一二孔				一孔			
1248 土師器	土舟			D-7	I-b	一二孔				一孔			
1249 土師器	高台付皿	口縁部~高台	口径	9.6	D-7	II	褐色	褐色	水焼き	水焼き	褐色	板付型(石夷型)	
1250 土師器	高台付皿	口縁~全体	口径	18.0	D-4	I-c	浅黄褐色	にせい	水焼き	水焼き	褐色	板付型(石夷型)	
1251 土師器	环	口縁部	口径	40.0	C-8	II	褐色	褐色	水焼き	水焼き	褐色	板付型(石夷型)	
1252 石鍋	石鍋	口縁部	口径	34.6	B-11	褐色	褐色	水焼き	水焼き	褐色	板付型(石夷型)		
1253 石鍋	石鍋	全体	23.0	C-9	II	褐色	褐色	水焼き	水焼き	褐色	板付型(石夷型)		
1254 石鍋	石鍋	全体	23.0	C-4	II	褐色	褐色	水焼き	水焼き	褐色	板付型(石夷型)		
1255 石鍋	石鍋	全体	30.0	D-7	II	褐色	褐色	水焼き	水焼き	褐色	板付型(石夷型)		
1256 石鍋	石鍋	全体	30.0	C-D-7	II	褐色	褐色	水焼き	水焼き	褐色	板付型(石夷型)		
1257 石鍋	石鍋	全体	30.0	C-7	II	褐色	褐色	水焼き	水焼き	褐色	板付型(石夷型)		
1258 石鍋	石鍋	全体	25.0	D-7	II	褐色	褐色	水焼き	水焼き	褐色	板付型(石夷型)		
1259 石鍋	石鍋	全体	25.0	C-6	II	褐色	褐色	水焼き	水焼き	褐色	板付型(石夷型)		
1260 清石製品	清石製品	口縁~高台	口径	12.0	C-10	I-a	反白色	反白色	清石	清石	褐色	板付型(石夷型)	
1261 清石製品	清石製品	口縁~高台	口径	4.6	E-5	I-b	反白色	反白色	清石	清石	褐色	板付型(石夷型)	
1262 清石製品	清石製品	口縁~高台	口径	13.8	C-9	I-b	反白色	反白色	清石	清石	褐色	板付型(石夷型)	
1263 清石製品	清石製品	口縁~高台	口径	5.0	C-3	I-b	反白色	反白色	清石	清石	褐色	板付型(石夷型)	
1264 清石製品	清石製品	口縁~高台	口径										
1265 清石製品	清石製品	口縁~高台	口径										
1266 白磁	白磁	全体											
1267 白磁	白磁	全体											
1268 白磁	白磁	全体											
1269 白磁	白磁	全体											

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外側調査	内面調査	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
1350	白磁	三	体部～高台	5.0 C-5		1.b	灰白色	灰白色	灰褐色	灰褐色	灰白色		
1351	白磁	三	口縁～高台	口径 9.8	B-3	1.b	灰白色	灰白色	灰褐色	灰褐色	灰白色		
1352	白磁	三	口縁～高台	口径 25.4	F-7	1.a	灰黄色	灰黄色	水生色	水生色	浅黄色		
1353	陶器	半周要	口縁～体部	口径 15.0	37	1.a	灰黄色	灰黄色	灰褐色	灰褐色	浅黄色		
1354	陶器	小要	口縁～体部	口径 15.0	37	1.a	灰黄色	灰黄色	灰褐色	灰褐色	浅黄色		
1355	陶器	半周要	口縁～体部	口径 15.0	D-3	1.a	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	浅黄色		
1356	陶器	小要	口縁～体部	口径 15.0	B-6	1.a	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	浅黄色		
1357	陶器	半周要	口縁～体部	口径 15.0	B-4	1.a	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	浅黄色		
1358	陶器	半周要	口縁～体部	口径 15.0	B-5	1.a	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	浅黄色		
1359	陶器	要	口縁～体部	口径 7.4	C-3	1.a	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色		
1360	陶器	要	口縁～体部	口径 21.4	C-13	1.a	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色		
1361	陶器	要	口縁～体部	口径 9.0	B-4	1.b	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色		
1362	陶器	要	口縁～体部	口径 12.0	B-3	1.c	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	浅黄色		
1363	陶器	茶	口縁～体部	口径 6.8	E-10	1.a	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	浅黄色		
1364	陶器	茶	口縁～体部	口径 9.6	C-1	1.b	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	浅黄色		
1365	陶器	茶	口縁～体部	口径 17.4	C-15	1	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	浅黄色		
1366	陶器	茶	口縁～体部	口径 11.6	B-6	1.b	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	浅黄色		
1367	陶器	茶	口縁～体部	口径 5.6	C-10	1	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	浅黄色		
1368	陶器	茶	口縁～高台	口径 3.6	C-2	1.b	二重灰褐色	二重灰褐色	子母輪、裏入	子母輪、裏入	浅黄色		
1369	陶器	茶	口縁～高台	口径 4.6	C-10	1.b	二重灰褐色	二重灰褐色	白輪、裏入	白輪、裏入	浅黄色		
1370	陶器	茶	口縁～高台	口径 4.6	D-7	1.a	灰白色	灰白色	白輪、裏入	白輪、裏入	浅黄色		
1371	陶器	大	口縁～体部	口径 11.4	D-9	1.a	灰白色	灰白色	子母輪、裏入	子母輪、裏入	浅黄色		
1372	陶器	大	口縁～体部	口径 11.4	B-2	1.b	灰黄色	灰黄色	透明物	透明物	浅黄色		
1373	陶器	大	口縁～体部	口径 4.8	B-3	1.b	灰褐色	灰褐色	子母輪、裏入	子母輪、裏入	浅黄色		
1374	陶器	小要	口縁～体部	口径 12.0	C-10	1.a	灰白色	灰白色	透明物	透明物	浅黄色		
1375	陶器	小要	口縁～体部	口径 3.4	C-3	1.b	墨褐色	墨褐色	透明物	透明物	浅黄色		
1376	陶器	茶	口縁～体部	口径 3.4	C-3	1.b	墨褐色	墨褐色	水生色	水生色	浅灰色		

第45表 金属器出土遺物一覧

番号	種類	部類	部位	出土区	層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
225	鉄製品	金具		櫛立柱13		3.4	1.1	0.5	16.07
240	鉄製品	釘		櫛立柱16		10.3	1.1	0.9	22.50
246	青銅製品	飾		櫛立柱20		2.8	2.3	2.2	16.10
346	青銅製品	飾		方形堅穴5		4.1	2.2	1.3	35.03
347	鉄製品	板繩		方形堅穴5		6.5	2.5	0.7	17.46
364	鉄製品	板繩	柄部	C-6		5.5	1.2	1.1	8.72
387	古銅(青銅)	洪武通寶		D-12	E	2.5	2.6	0.2	2.48
388	古銅(青銅)	洪武通寶		D-12	E	2.3	2.3	0.2	1.65
389	古銅(青銅)	洪武通寶		D-12	E	2.5	2.5	0.15	3.28
390	古銅(青銅)	洪武通寶		D-12	E	2.3	2.4	0.2	1.97
391	古銅(青銅)	洪武通寶		D-12	E	2.6	2.5	0.1	2.31
392	古銅(青銅)	洪武通寶		D-12	E	2.4	2.4	0.15	2.42
393	古銅(青銅)	洪武通寶		D-12	E	2.3	2.3	0.15	3.06
394	古銅(青銅)	洪武通寶		D-12	E	2.4	2.4	0.5	9.91
523	鉄製品	小刀	柄部	D-7		5.5	1.3	0.8	7.60
524	古銅(青銅)	開元通寶		D-6		2.5	2.5	0.15	2.65
1284	鉄製品	釘		E-3	lb	8.6	0.7	0.6	15.54
1285	鉄製品	釘		D-6	E	7.2	0.7	0.7	6.35
1286	鉄製品	釘		E-4	lb	8.2	0.8	0.7	14.78
1287	鉄製品	釘		C-5	lb	12.7	1.1	1.0	15.35
1288	鉄製品	釘		D-7	lc	5.2	0.6	0.4	9.79
1289	鉄製品	釘		漏3	l	8.2	0.8	0.6	8.44
1290	鉄製品	釘		F-7	la	6.3	0.6	0.4	6.45
1291	鉄製品	釘		D-7	la	4.3	1.1	0.6	2.89
1292	鉄製品	釘		D-4	lc	3.9	1.0	0.6	2.87
1293	鉄製品	釘		D-8	lb	4.4	0.7	0.7	4.05
1294	鉄製品	釘		E-7	lc	5.8	0.7	0.4	6.55
1295	鉄製品	釘		C-7	lb	3.3	0.6	0.4	3.15
1296	鉄製品	釘		D-8	lc	4.2	0.6	0.4	3.92
1297	鉄製品	釘		B-9	E	4.6	0.8	0.6	6.03
1298	鉄製品	釘		C-9	la	3.6	0.6	0.6	3.28
1299	鉄製品	釘		D-7	lb	5.4	1.5	1.2	6.65
1300	鉄製品	半釘		D-4	lb	2.9	3.0	0.4	10.95
1301	鉄製品	半釘		E-3	la	3.5	3.3	0.6	8.60
1302	鉄製品	板金製品		E-6	E	3.65	0.7	0.2	2.76
1303	鉄製品	板金製品				2.4	0.8	0.4	3.50
1304	鉄製品	板金製品		B-4	la	5.3	0.9	0.6	5.43
1305	鉄製品	板金製品		C-11	E	3.8	0.8	0.4	8.41
1306	鉄製品	板金製品		F-4	E	2.9	1.8	0.4	2.82
1307	鉄製品	板金製品		F-4	E	2.9	1.8	0.6	13.15
1308	鉄製品	板金製品		D-9	la	5.7	1.8	0.7	9.05
1309	鉄製品	刀子	刃部	E-5	E	6.3	1.2	0.5	7.50
1310	鉄製品	刀子	差し込み部	F-5		9.7	2.3	0.8	28.63
1311	鉄製品	刀子	刃部	D-4	lb	5.1	1.7	0.4	6.31
1312	鉄製品	板金製品		E-4	lb	4.1	1.3	0.6	5.07
1313	鉄製品	板金製品		D-6	lb	6.0	0.9	0.9	13.03
1314	鉄製品	板金製品		E-4	lb	4.5	2.0	0.5	7.00
1315	鉄製品	板金製品		D-9	la	4.1	1.4	0.2	5.60
1316	鉄製品	板金製品		D-9	la	4.1	2.3	0.4	7.20
1317	鉄製品	板金製品				5.1	1.3	0.6	13.28
1318	鉄製品	板金製品		D-7	la	7.2	1.6	0.8	31.00
1319	鉄製品	板繩		F-7	E	5.6	0.9	0.6	6.36
1320	鉄製品	板繩		D-6	E	8.8	2.2	1.1	16.36
1321	鉄製品	板繩		D-7	la	5.8	1.5	0.7	9.06
1322	鉄製品	板繩		D-8	lb	4.6	0.7	0.5	5.34
1323	鉄製品	板繩		D-8	lc	16.5	1.3	1.3	31.13
1324	鉄製品	板繩		D-8	E	5.8	1.1	0.6	15.27
1325	鉄製品	板繩		D-5	lb	7.5	1.2	0.8	11.34
1326	鉄製品	板繩		B-4	lb	5.45	1.1	0.9	9.05
1327	鉄製品	板繩		C-9	la	2.6	2.4	0.4	11.46
1328	鉄製品	板繩		B-3	lb	8.6	5.3	1.2	111.15
1329	鉄製品	板繩		E-7	la	2.3	2.4	0.3	2.56
1330	鉄製品	板繩		E-9	la	3.2	2.3	0.4	4.44
1331	青銅製品	櫛止め		C-9	la	3.65	2.4	0.1	13.86
1332	青銅製品	嵌泡玉		C-9	la	1.4	1.4	1.3	8.22
1333	青銅製品	ハイフ		C-3	la	4.3	1.0	0.9	2.65
1334	青銅製品	飾り金具		D-7	la	3.4	1.5	0.2	3.02
1335	鉄製品	釘		C-6		3.6	3.0	3.0	14.29
1336	青銅製品	コウガイ		F-17	l	17.9	0.6	0.3	7.67
1337	古銅(青銅)	洪武通寶		D-7		2.4	2.4	0.15	3.11
1338	古銅(青銅)			F-3		2.5	2.5	0.4	2.82
1339	古銅(青銅)	洪武通寶		3T		2.4	2.4	0.15	1.74
1340	古銅(青銅)			C-10	la	2.5	2.5	0.15	1.55
1341	古銅(青銅)	洪武通寶		C-3		2.4	2.4	0.15	2.39
1342	古銅(青銅)			C-3		2.4	2.4	0.15	2.89
1343	古銅(青銅)	○永○寶		C-3	lb	1.3	2.5	0.1	0.95
1344	古銅(青銅)			C-2	la	2.5	2.5	0.4	5.77
1345	古銅(青銅)			D-12	E	2.5	2.5	0.5	7.66

第IV章 科学分析等の結果

第1節 川内市上野城跡出土のウマ遺体

西中川 駿・*久林朋憲

(鹿児島大学名誉教授・*鹿児島大学獣医学科)

はじめに

古代の遺跡から出土するウマの遺体は、わが国のウマの起源、系統ならびに渡来の時期を知る上に貴重な資料となっている。ウマがいつ頃、わが国に渡来してきたかは明らかでないが、林田によると小型馬は繩文時代に南から、中型馬は弥生時代に北部九州に渡来したことを論じている。しかし、これまで報告された繩文時代の出土例は、近藤らの科学的な分析により悉く時代が新しくなり、現在のところ福江市の大浜遺跡出土の弥生中期が最も古いとされている。

最近、全国各地の遺跡からウマ遺体の出土報告があるが、いずれも古墳時代以降のもので、特に中世のものが多い。鹿児島県内のウマ遺体の出土例は、橋幸礼川遺跡、上能野貝塚（古墳）、麦之浦貝塚（平安）、出水貝塚（中世）、中島ノ下遺跡および平松原遺跡（江戸）などにみられ、また、広田遺跡や宇宿貝塚などからの出土例は弥生時代と報告されているが、後世のものと思われる。

今回調査を依頼された上野城遺跡は、川内市百次上野にあり、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴い鹿児島県教育委員会が平成12年5月から13年3月まで発掘調査を行ったもので、ウマ遺体（臼歯）は、中世（12～13世紀）の土坑から出土したものである。検索方法は肉眼的に精査した後、ノギスを用いて計測し、林田らや筆者らの方法で、年齢や体高の推定を試みたので、その概要を報告する。

出土状況と出土量

調査時の写真や図面からみると、土坑の大きさはウマ1体分に入る大きさであり、頭部が土坑の端に位置し、吻側を下に向けて埋葬されており、上顎を上に下顎を下にして噛み合った状態の左右の上、下顎臼歯が検出されている。他の骨は全く検出されていないが、全身が埋葬されていたと思われる。

出土した臼歯は、左右、上下の第二、三、四前臼歯、第一、二、三後臼歯である。右の臼歯には歯槽の部分の下顎骨体が付着している。総重量は703.9gである。

出土歯の概要

出土した臼歯の各計測値は表1に示した。

左側の上顎臼歯の歯根は破損しているが、第二前臼歯から第二後臼歯はほぼ完全な形を残している（図版1の1）。下顎も同様で第三後臼歯のみが不完全である（図版1の2）。右側は上下ともに完全な形で残っており、下顎の臼歯は下顎骨体が付着しているため中心高を測定出来なかった（図版1の3、4）。臼歯の交合面にみられるエナメルヒダの形態は、現生の御崎ウマに類似しており、その大きさも近似している。

表1. 上野城出土の臼歯の計測値

歯の種類		P2	P3	P4	M1	M2	M3
上	歯冠長 L	35.09	25.85	25.07	23.55	23.99	
	R	34.94	26.11	25.3	23.42	23.62	23.61
歯冠幅 L	L	22.47	24.64	25.44	23.65	23.89	
	R	22.85	25.13	25.07	23.52	23.68	19.6
頸 中心高 L	L	39.4	48.14	45.98	44.76	50.63	
	R	36.72	46.84	44.74	44.58	50.57	46.71
下	歯冠長 L	34.43	27.11	26.37	24.36	24.23	
	R	33.67	27.41	26.33	25.1	24.7	
歯冠幅 L	L	12.8	814.9	15.81	14.04	13.33	
	R	13.98	14.19	15.61	14.93	13.12	
頸 中心高 L	L	32.64	47.5	54.75	48.89	51.92	
	R	34.47	46.09	52.22	51.58		

L : 左側、R:右側、P2~P4 : 第二～第四前臼歯、M1~M3 : 第一～三後臼歯

表1の計測値から、筆者らの方法で臼歯列長および頸蓋最大長、下顎全長を求め、林田らの方法で体高を求めるとき、 $125.88 \pm 2.49\text{cm}$ となる。これは現生の御崎ウマ(130cm)より少し小さい中型馬に属する。また、臼歯の中心高より筆者らの方法で年齢を推定すると、 7.91 ± 0.96 歳となる。なお、雌雄の判別は、犬歯の有無や寛骨の恥骨櫛の形状から可能であるが、犬歯や寛骨が検出されていないことから、雌雄の判別が出来なかった。

考 察

九州のウマの出土例は、熊本県の塚原古墳や上の原遺跡など数多くの遺跡(113箇所)から報告されている。鹿児島県下では前述したように、橘丸川遺跡や麦之浦貝塚など平安時代の出土例が最も古いが、しかし、未報告ではあるが橘丸川遺跡からは古墳時代のウマの下顎骨が出土している。長谷部は、轟貝塚や出水貝塚などから馬歯を発掘し、石器時代にウマありと報告し、林田も出水貝塚でウマの歯と骨を検出し、繩文後期にウマの存在を論じた。しかし最近、近藤らは出水や大崎貝塚出土のウマの骨をフッ素による年代測定を行い、13世紀頃のものであると報告している。わが国のウマの渡来時期として、前述の福江市の大浜遺跡出土の臼歯が、炭素年代測定により AD40 ± 90 年が報告されていることから、弥生中期以降と考えてよいであろう。また、わが国へ渡来経路として、野沢らは蒙古系統のウマが、朝鮮半島を経由して北部九州に入り、北上、南下して全国に広まったと考えており、筆者らもこれに賛同するものである。

本遺跡出土のウマは、年齢 7~8 歳で、体高 125cm 前後であり、これは現生のトカラウマより大きく、御崎ウマより少し小さいウマで、中型馬であり、全国各地から出土する中世のウマの大きさの範疇にあることがわかった。このウマの用途についてはわからないのが、乗馬、騎馬や運搬などに

使役されていたことが考えられる。

まとめ

- 川内市上野城遺跡（12～13世紀）から出土したウマの臼歯について検索した。
1. ウマの臼歯、左右、上下の第二前臼歯から第三後臼歯が噛み合って出土しており、その出土量は、703.9gである。
 2. 臼歯の形状は御崎ウマなど在来馬のものと類似しており、また、各計測値もよく似ている。各臼歯の歯冠長から体高を推定すると、125cm位であり、また、臼歯の中心高より年齢を推定すると、7～8歳である。
 3. このウマの用途についてはわからないが、上野城を造した人々によって、乗馬、騎馬や運搬などのために飼養されていたのであろう。

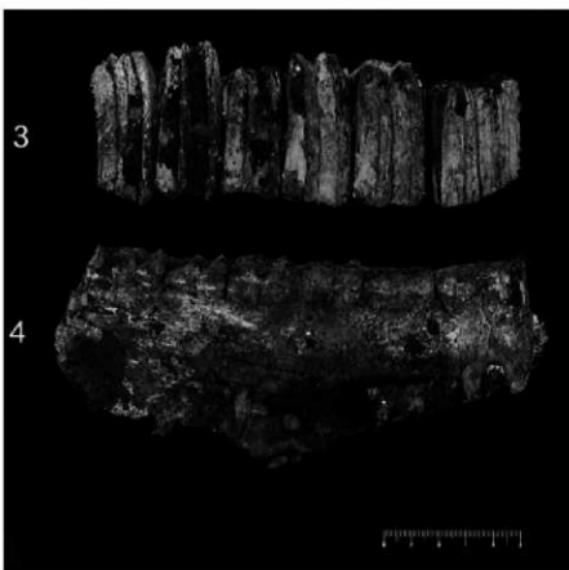
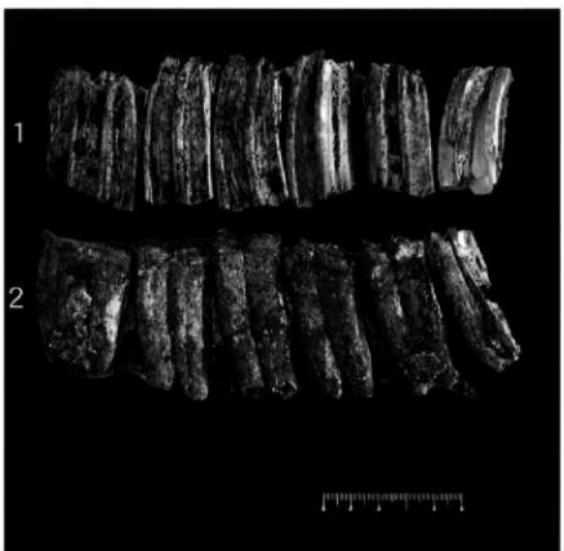
参考文献

1. 長谷部言人：石器時代の馬に関する、人類史、40(4)、31～135(1925)
2. 林田 重幸：日本在来馬の系統に関する研究、pp. 1～180、日本中央競馬会、東京(1978)
3. 指宿市教育委員会：中島ノ下遺跡、指宿市埋蔵文化財調査報告書、7. 119～123 (1990)
4. 鹿児島県教育委員会：平松遺跡、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書、58. 76～80 (1991)
5. 近藤 恵ら：野田市大崎貝塚縄文後期貝塚出土ウマ遺残のフッ素年代判定—縄文時代にウマはいたか—、人類学雑誌、99. 93～99(1991)
6. 直良 信夫：日本馬の考古学的研究、pp. 1～201、校倉書房、東京(1984)
7. 西中川駿ら：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路7に関する研究、平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書、pp. 1～197 (1991)
8. 野澤 謙：東亞と日本在来馬の起源と系統、日本ウマ学会誌、3(1)、1～18 (1992)
9. 芝田 清吾：日本古代家畜史の研究、pp. 100～189 (1969)
10. 吉倉 真：塚原古墳群出土の馬歯、熊本県文化財調査報告書、16. 323～337 (1975)

図版1の説明

ウマの臼歯

1. 左側上顎：左から第二前臼歯～第三後臼歯
2. 左側下顎：左から第二前臼歯～第三後臼歯
3. 右側上顎：右から第二前臼歯～第三後臼歯
4. 右側下顎：右から第二前臼歯～第三後臼歯



第2節 上野城跡出土種実の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査は、鹿児島県川内市に所在する上野城跡の中世（13～15世紀）の遺構と、京田遺跡の弥生時代中期の遺構について、覆土を水洗選別することによって得られた種実遺体の種類を明らかにし、当時の植物利用に関する資料を得る。

1. 上野城跡出土種実の同定

(1) 試料

試料は、E3区 P206、E4区 P105の土坑覆土の水洗選別によって得られた試料17点と、C8区 P1544の柱穴の底に集中する種実遺体1点の計18点である。同一遺構で箇目径別に複数試料が存在し、1試料に複数の種類が数点～数十点含まれている。各試料の詳細は、同定結果とともに表1に記す。

(2) 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察・分類し、その形態的特徴を現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川, 1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか, 2000）等と比較し、種類を同定・計数した。細片を含み個体数推定が困難である種類は、表中に+（プラス）表示し、重量を求めた。C8区 P1544は細片を多量に含むため1mmの筋を通して、残渣を同定し、筋を通った試料を残渣とした。分析後の植物遺体は、乾燥剤とともに種類毎にビンおよび袋に入れ、保存する。

(3) 結果

結果を表1に示す。植物遺体は全て完全に炭化した状態であった。木本種実ではアカガシ亜属イチイガシを含むコナラ属が、草本種実では栽培植物のイネ、オオムギ、コムギ、マメ類が同定された。その他に、炭化材、不明炭化物（木材組織が認められない、種類・部位とともに不明の炭化物を示す）などが検出された。以下に、同定された種実遺体の形態的特徴等を、木本、草本の順に記す。

<木本>

・イチイガシ (*Quercus gilva* Blume) ブナ科コナラ属アカガシ亜属

炭化した子葉が同定された。炭化子葉は黒色、完形個体が多く、梢円体で頂部は尖らない。長さ10～15mm、径5mm程度。2枚の子葉が極端に不揃いである個体が多く、子葉の合わせ目は球体表面を蛇行して一周する。幼根は頂端からはずれた位置にある。表面には1本の深い溝が基部から頂部に向かって2/3程度まで発達している。

岡本（1979）は、日本産ブナ科植物の子葉について、イチイガシには子葉の離れにくさ、著しい異形性、頂端が尖らず幼根の位置がずれていること、そして中軸の圧痕が確認できることなどの特異性があることから、イチイガシのみが種まで同定できる場合があることを述べている。試料には、このようなイチイガシの特異的特徴を典型的に示している個体が認められたため、イチイガシに同定することができた。なお、自然落下の場合、殻斗や幼果が成熟果実の落下数を上回るのが普通であるが、今回の試料からは、殻斗や幼果は確認されなかった。

・アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科コナラ属

炭化した果実破片が同定された。黒色、完形ならば卵形か。表面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。果実頂部の輪状紋が円柱状または円錐台状に突出する。おそらく上述のイチイガシであろうと思われるが、柱頭の遺存状態が悪いことから、アカガシ亜属にとどめた。

表1 上野城跡出土種実遺体同定結果

試料記載事項		部位		木本		草本			炭化材	不明炭化物	分析残渣				
				コナラ属		イネ	オオムギ	コムギ類							
				アカガシ亜属	イチイガシ										
		胚乳	果実	果実	胚乳	胚乳	胚乳	胚乳	胚乳	種子					
		炭化	炭化	炭化	炭化	炭化	炭化	炭化	炭化	炭化					
試料記載事項		箇所	直径(mm)	状態	状態	状態	状態	状態	状態	状態	状態				
E3区 P206	2	個体数		+	-	-	-	21	11	3	22	-	18	2	-
		重量(g)	11.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	0.425	個体数	-	-	-	-	6	5	-	3	-	6	10	-	
E4区 P105	2	個体数	-	-	-	-	32	10	1	20	6	10	11	-	
	0.425	個体数	-	-	-	-	3	-	-	-	-	6	2	-	
C8区 P1544		個体数	+	+	3	12	-	-	-	-	-	9	-	+	
		重量(g)	112.47	0.54	-	-	-	-	-	-	-	-	24.93		

注) 「+」は細片を含み個体数推定が困難であるため、重量を求めた。

・コナラ属 (*Quercus*)

炭化した子葉破片と果実破片が同定された。種まで同定できない破片をコナラ属にとどめた。子葉の合わせ目に沿って半分に割れている個体が多い。頂部は尖らず、上述のイチイガシの形態に類似する。イチイガシには異形性を表現しない場合もある(岡本, 1979)ことから、コナラ属とした破片の大半はイチイガシであろうと思われる。

<草本>

・イネ (*Oryza sativa L.*) イネ科イネ属

炭化した胚乳が同定された。黒色、胚乳は長楕円形でやや偏平。長さ4~5mm、幅2.5mm、厚さ1.5mm程度。基部には胚が脱落した凹部がある。表面はやや平滑で、2~3本の縦溝がある。焼け籠れて表面の遺存状態が悪いものや、胴切れた個体もみられる。

・オオムギ (*Hordeum vulgare L.*) イネ科オオムギ属

炭化した胚乳が同定された。黒色、紡錘状長楕円体で両端はやや尖る。長さ5~7mm、径3~4mm程度。腹面は1本のやや太く深い縦溝があり、背面基部には胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑で、穂が付着する個体がみられた。

・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

炭化した胚乳が同定された。黒色、楕円体で全体的に丸みを帯びている。長さ4~5mm、径3~3.5mm程度。腹面には1本のやや太く深い縱溝がある。背面基部には胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑。

なお、遺存状態が悪く、オオムギとの判別が難しいものはムギ類とした。

・マメ類 (Leguminosae) マメ科

炭化した種子が同定された。黒色、長楕円体。長さ3~5mm、幅2~3mm程度。焼け膨れて表面が崩れている等遺存状態は悪いが、腹面中央の子葉の合わせ目上に長楕円形状で隆起する臍がある、ササゲ属 (*Vigna*) と思われる個体もみられる。子葉の合わせ目に沿って半分に割れた個体がみられる。子葉の合わせ目は平滑で、中心部がやや凹む。表面はやや平滑で光沢があるが、焼け膨れのため種皮が剥けている。ササゲ属にはササゲ、アズキ、リョクトウなどが含まれるが、野生種との雑種も多いため、形態のみから現在の特定の種類に比定することは難しく、一括して示している。

(4) 審察

上野城跡から出土した種実の種類には、有用植物が認められる。有用植物には、大陸などから持ち込まれた栽培植物と、自生していたと考えられる種類がある。渡来した栽培植物は、イネ、オオムギ、コムギ、マメ類である。これらの穀類は、全て完全に炭化した状態であったため、火熱を受けたものと思われる。これらの栽培植物が、各遺構から出土した状況を考慮すると、上野城跡の近辺で栽培もしくは持ち込まれ利用されていたものが、生活残渣として破棄されたことが推定される。

イチイガシは、湿润、肥沃で深い土壤をもつ内陸平坦地と後傾斜に極相林として発達する種で、現在は、紀伊半島、四国、九州の山麓地に広く分布する。また、コナラ属の中でイチイガシのみが生食可能であることから、複数の種類が混在して貯蔵されていたとは考えにくい。おそらく、周辺の森林からイチイガシの成熟果実を選択的に採取し、貯蔵したことが推定される。そして、何らかの理由により火熱を受け子葉が残存したものと思われる。このように、イチイガシは利用価値が高いことから遺跡出土例も多い（岡本、1979など）。よって、上野城跡でも、イネ、オオムギ、コムギ、マメ類などの穀類とともに、イチイガシが重要な植物質食糧であったことが推定される。

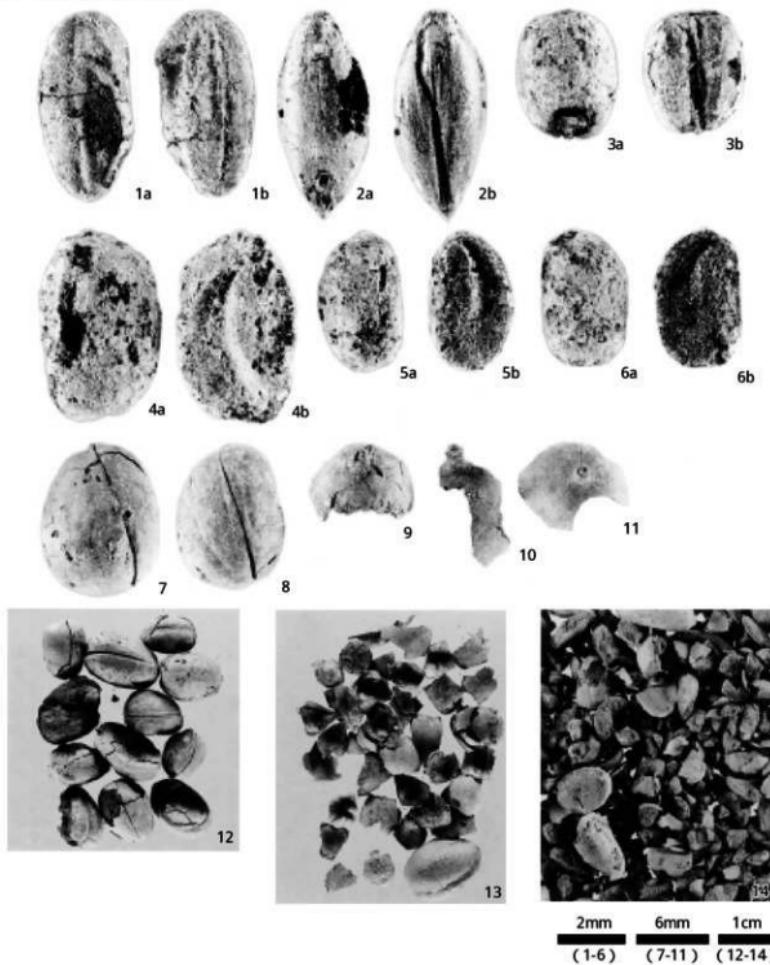
(5) 引用文献

石川茂雄（1994）原色日本植物種子写真図鑑。328p., 石川茂雄図鑑刊行委員会。

中山至大・井之口希秀・南谷忠志（2000）日本植物種子図鑑。642p., 東北大学出版会。

岡本素治（1979）遺跡から出土するイチイガシ。大阪市立自然史博物館業績、第230号、p. 31-39.

図版1 上野城跡出土炭化種実



- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1. イネ 胚乳 (E4区 P105層) | 2. オオムギ 胚乳 (E3区 P206層) |
| 3. コムギ 胚乳 (E3区 P206層) | 4. マメ類 種子 (E4区 P105層) |
| 5. マメ類 種子 (E4区 P105層) | 6. マメ類 種子 (E4区 P105層) |
| 7. イチイガシ 子葉 (C8区 P1544層) | 8. イチイガシ 子葉 (C8区 P1544層) |
| 9. コナラ属アカガシ亜属 果実 (C8区 P1544層) | 10. コナラ属アカガシ亜属 果実 (C8区 P1544層) |
| 11. コナラ属アカガシ亜属 果実 (C8区 P1544層) | 12. イチイガシ 子葉 (C8区 P1544層) |
| 13. コナラ属 果実 (C8区 P1544層) | 14. コナラ属 子葉 (C8区 P1544層) |

第3節 上野城跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

1. 上野城跡における放射性炭素年代測定

(1) 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	南北方向歴跡, 5	炭化物	酸-アカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.2	南北方向歴跡, 6	炭化物	酸-アカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.3	東西方向歴跡, 4	炭化物	酸-アカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.4	東西方向歴跡, 1	炭化物	酸-アカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法

(2) 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代(西暦)	測定No. (Beta-)
No.1	※炭素量不足のため測定不能				153018
No.2	※炭素量不足のため測定不能				153019
No.3	750 ± 40	-26.4	730 ± 40	交点: cal AD 1280 1 σ : cal AD 1270~1290 2 σ : cal AD 1240~1300	153020
No.4	※炭素量不足のため測定不能				153021

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は国際慣例に従って5568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代。較正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3))により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ (68%確率) および 2σ (95%確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

2. 上野城跡における植物珪酸体分析

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとで微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネを中心とするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。上野城跡遺跡の発掘調査では、13世紀頃とされる畠遺構が検出された。ここでは、同遺構におけるイネ科栽培植物の検討を主目的として分析を行った。

(2) 試料

分析試料は、基本土層断面、C・D-9区の南北方向歓跡、東西方向歓跡から採取された計14点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

(3) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに直径約40μmのガラスピーブを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が400以上になるまで行った。これはおもにプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーブ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5}g ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

(4) 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、イネ（頸の表皮細胞由来）、ヒエ属型、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、シバ属

[イネ科—タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

[イネ科—その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

[樹木]

ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属？）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、その他

(5) 考察

(1) 稲作跡の検討

稻作跡（水田跡・畑跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

ア) 基本土層断面

I b層（試料1）からIIIb層（試料11）までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、I c層（試料7）では密度が14,700個/gとなり高い値であり、I b層（試料1～3）、II層（試料7）でも7,400～9,900個/gと高い値である。また、IIIa層（試料9）でも、3,700個/gと比較的高い値である。したがって、これらの各層では、稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

IIIb層（試料11）では、密度が700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稻作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畠など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

イ) 南北方向歴跡

試料1～3の3点について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。密度は5,100～7,300個/gと高い値である。したがって、同遺構では稻作が行われていた可能性が高いと

考えられる。

ウ) 東西方向歯跡

試料4～6の4点について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、試料5'では密度が10,600個/gとかなり高い値であり、他の試料でも2,800～4,300個/gと比較的高い値である。したがって、同遺構では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはヒエ属型が検出された。

ヒエ属型は、基本土層断面のI c層（試料5）から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを識別することは困難である（杉山ほか、1988）。また、密度も700個/gと低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草である可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畠作物は分析の対象外となっている。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

ア) 植物珪酸体の検出状況

基本土層断面のIIIb層では、クスノキ科が多量に検出され、イネ、スキ属型、ウシクサ族A、クマザサ属型、ミヤコザサ節型、およびブナ科（シイ属）、マンサク科（イスノキ属）なども検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。IIIa層では、イネやクスノキ科が増加しており、スキ属型やウシクサ族Aも増加傾向を示している。II層では、イネ、スキ属型、ウシクサ族Aが増加しており、クスノキ科は減少している。I c層では、イネやスキ属型がさらに増加しており、マダケ属型も出現している。I b層でもおおむね同様の結果であるが、同層上部ではスキ属型やウシクサ族Aが減少している。おもな分類群の推定生産量によると、IIIa層より上位ではイネが優勢であり、II層より上位ではスキ属型も比較的多くなっていることが分かる。南北方向歯跡および東西方向歯跡における分析結果は、基本土層断面のI c層～II層とおおむね同様である。

イ) 植生と環境の推定

IIIb層の堆積当時は、クスノキ科を主体としてシイ属やイスノキ属なども見られる照葉樹林が分布

していたと考えられ、その林床植生などとしてササ類が生育していたと推定される。IIIa層の時期には稻作が開始されていたと考えられ、遺跡周辺にはIIIb層と同様の照葉樹林が分布していたと推定される。II層の時期には稻作が本格化したと考えられ、遺跡周辺ではススキ属やチガヤ属などが生育する草原的なところが増加し、照葉樹林が減少したと推定される。Ic層からIb層にかけては、継続的に稻作が行われていたと考えられる。タケ亜科植物のうちマダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用な物が多く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高いが、これらの植物が現れるのはIc層の堆積以降のことと考えられる。

6. まとめ

植物珪酸体分析の結果、13世紀頃とされる島遺構からはイネが多量に検出され、稻作が行われていた可能性が高いと判断された。IIIa層からIb層にかけては、継続的に稻作が行われていたと推定される。

島遺構の周辺は、ススキ属やチガヤ属などが生育する草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺にはクスノキ科を主体としてシイ属やイスノキ属なども見られる照葉樹林が分布していたと推定される。

文献

- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告, 第31号, p. 70-83.
- 杉山真二 (1999) 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究, 38(2), p. 109-123.
- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール)。考古学と植物学。同成社, p. 189-213.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) -数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-。考古学と自然科学, 9, p. 15-29.
- 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) -プラント・オパール分析による水田址の探査-。考古学と自然科学, 17, p. 73-85.

表 1 調査地島根、上野瀬崎における植物種群分析結果
地名別単位 : ×100個/1m²

分類群	学名	地点・試験					南北面積割合			東西面積割合		
		1	2	3	4	5	6	7	9	11	3	4
イネ科	Oryzaceae (Gramineae)	99	55	74	147	81	37	7	51	73	65	43
イネ科(原生/栽培の変化型)	Oryza sativa (domestic rice)											
ヒエ属型	Rice bran/Pennisetum											
キビ属型	Echinochloa type	7	7	7	7	7	7	7	59	7	58	7
ススキ属型	Panicum type	35	125	60	162	73	30	7	87	100	81	35
ミコマダラ属型	Micromelathus type	28	81	62	66	95	46	22	147	94	86	121
ウシクササ属A	Andropogoneae A type											
シソ属	Zizaniopsis											
タケ草属	Zizaniidae (Bambusoideae)											
メタクサ属型	Phlebotomata sect. Medikis	7	7	7	7	7	7	15	29	14	7	7
ネササ属型	Phlebotomata sect. Nesiotes	14	161	194	280	403	354	243	323	36	14	41
クマツサ属型	Sasa (except Miyakozane)	28	37	15	15	7	15	15	51	22	21	14
ミヤコクサ属型	Sasa sect. Miyakozane											
マタクサ属型	Phlebotomata	7	7	15	7	7	37	37	29	51	50	49
未分類等	Others	21	15	7	37	135	96	88	7	7	188	14
その他のイネ科	Others											
表皮毛起源	Husk hair origin	51	15	23	15	23	7	59	36	14	7	7
神社柱脚	Rod-shaped	127	161	194	280	403	354	243	323	278	256	386
茎葉基部	Stem origin	14	447	454	472	528	546	472	614	516	561	476
葉由来等	Others	281										
樹木群	Axes											
ブナ科(シイ属)	Castanopsis	35	22	7	15	29	22	44	22	29	22	43
クヌギ科	Quercus subg. Cyclobalanoides	56	37	97	44	103	244	170	129	51	7	62
マンサク科(イヌキ属)	Lauraceae	28	37	60	37	22	30	15	66	36	115	14
マンサク科(イヌキ属)	Dipteridaceae	35	29	15	22	44	11	52	68	58	65	71
その他の樹木	Others											
"(南洋分類)"	Springe											
総計	Total	803	1143	1132	1344	1493	1497	1194	1731	1416	1560	1115
地名別面積割合												
おもな分類群の推定生産量 (単位 : 塵/m ²)												
イネ科	Oryza sativa (domestic rice)	2.90	2.80	2.19	4.33	2.37	1.96	0.22	1.53	2.14	1.90	1.25
ヒエ属型	Echinochloa type											
ススキ属型	Micromelathus type	0.44	1.54	0.74	0.82	2.01	0.31	0.37	0.73	1.08	0.71	1.23
メタクサ属型	Phlebotomata sect. Medikis	0.08	0.09	0.04	0.09	0.39	0.09	0.17	0.34	0.17	0.08	0.08
ネササ属型	Phlebotomata sect. Nesiotes	0.07							0.21	0.10	0.10	0.03
クマツサ属型	Sasa (except Miyakozane)											
ミヤコクサ属型	Sasa sect. Miyakozane	0.06	0.11	0.04	0.06	0.06	0.11	0.11	0.09	0.15	0.09	0.11
タケ草属	Zizaniidae											
タケ草属型	Phlebotomata sect. Zizaniidae	35	44	52	150	29	36	36	82	40	31	22
ネササ属型	Phlebotomata sect. Nesiotes	29	44	44	34	31	50	45	10	25	38	9
クマツサ属型	Sasa (except Miyakozane)	36	34	56	14	49	50	19	23	36	32	100
ミヤコクサ属型	Sasa sect. Miyakozane											

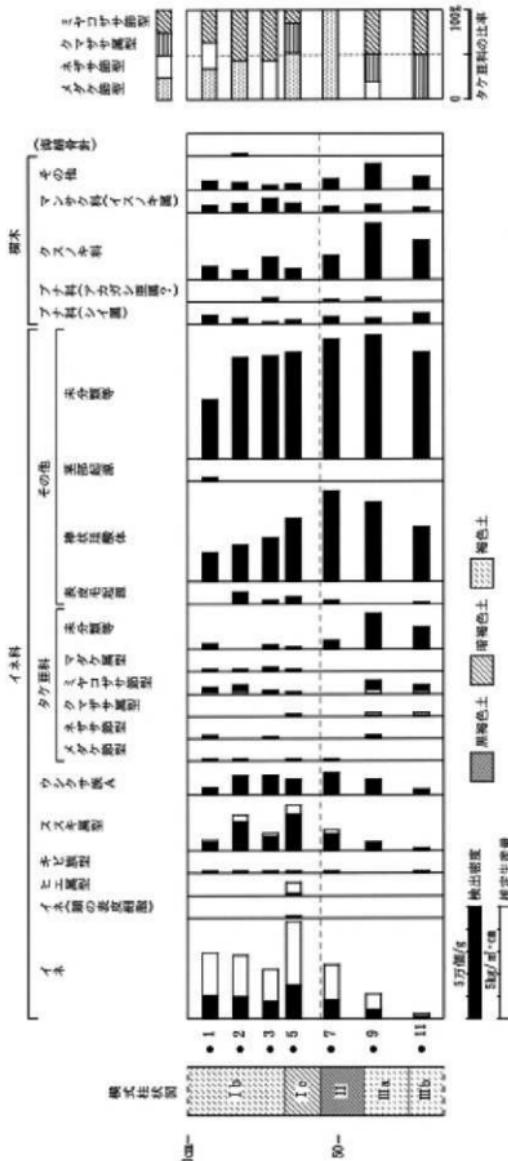


図1 上野城跡遺跡、基本土層断面における植物柱頭体分析結果

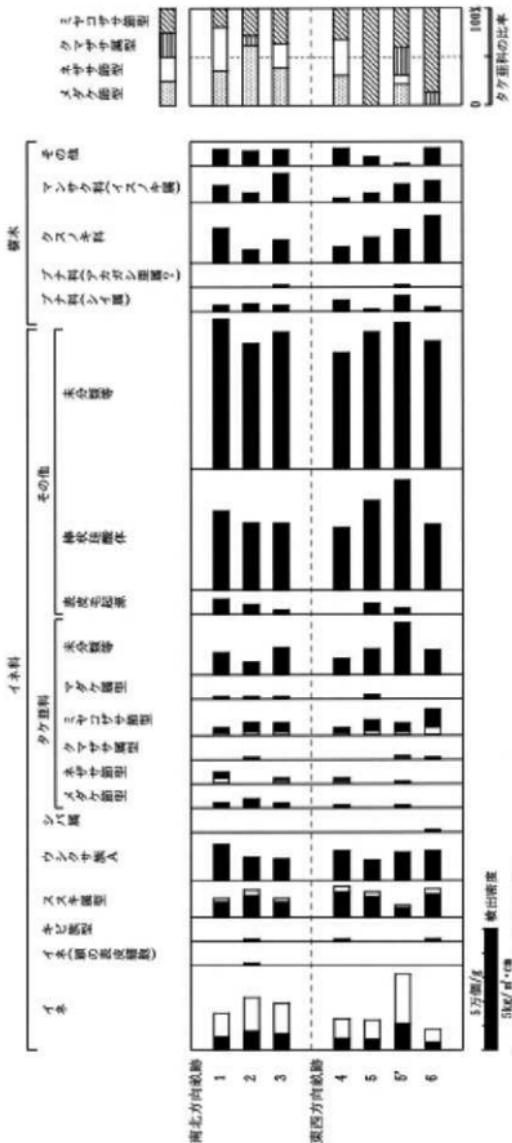
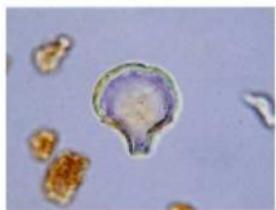


図2 上野坂路道路、苗ヶ谷土における植物性残体分析結果



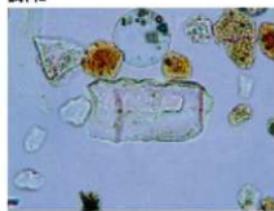
イネ
試料2



イネ
試料3



イネ
試料5



ヒエ属型
試料5



ススキ属型
試料3



メダケ属型
試料5



ミヤコササ属型
試料5



マダケ属型
試料3



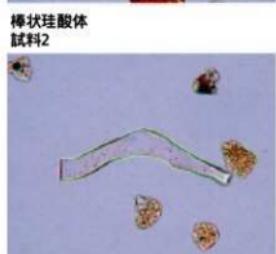
棒状珪酸体
試料2



シイ属
試料9



クスノキ科
試料9



マンサク科(イスノキ属)
試料11

植物珪酸体の顕微鏡写真 ————— 50 μ m

3. 上野城跡における花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、基本土層断面、C・D-9区の南北方向歓跡、東西方向歓跡から採取された計8点である。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリス処理を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。

4. 結果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉6、草本花粉5、シダ植物胞子2形態の計13である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、花粉数が100個以上計数された試料について、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亞属、スギ、クリ、シイ属?マテバシイ属、コナラ属コナラ亞属、コナラ属アカガシ亞属

〔草本花粉〕

イネ科、アカザ科ヒュ科、タンボボ亞科、キク亞科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条構胞子、三条構胞子

(2) 花粉群集の特徴

1) 南北方向歟跡（試料1～3）

ヨモギ属、タンボボ亜科、イネ科などが検出されたが、いずれも少量である。

2) 東西方向歟跡（試料4～6）

草本花粉のヨモギ属の占める割合が高く、イネ科、タンボボ亜科、キク亜科、アザ科ヒユ科が伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属などが検出されたが、いずれも少量である。

3) 基本土層（Ic層、試料6）

草本花粉のヨモギ属の占める割合が高く、タンボボ亜科、イネ科が伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が少量検出された。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、13世紀頃とされる畠造構の周辺は、ヨモギ属を主にイネ科やタンボボ亜科などが生育する陽当たりの良い比較的乾燥した環境であったと推定される。これらの植物は、人里植物ないし耕地雑草の性格をもっているが、明らかな栽培植物を含む分類群は検出されなかつた。また、遺跡周辺にはコナラ属アカガシ亜属（カシ類）などの照葉樹林が分布していたと推定される。なお、花粉分析では植物珪酸体分析で多産したクスノキ科が認められないが、クスノキ科は花粉壁が完全には保存されないことから、花粉分析では把握されないという問題がある。

花粉があまり検出されない原因としては、乾燥的な堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

文献

中村純（1973）花粉分析。古今書院。p. 82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法。角川書店。p. 248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集。60p.

中村純（1980）日本産花粉の標識。大阪自然史博物館収蔵目録第13集。91p.

表1 上野城跡における花粉分析結果

学名	分類群 和名	南北方向歌麿			東西方向歌麿			基本土層		
		1	2	3	4	5	6	6	6	6
ArboREAL pollen	樹木花粉									
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属復株管支葉属									
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	1	1	1			1			
<i>Castanea crenata</i>	クリ	1								
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイ属・マテベシイ属									
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ重属	3								
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ重属				1	1	1			
Nonarboreal pollen	草本花粉									
Gramineae	イネ科	1			2	9	5	2	1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカサ科・ヒユ科				1	1				
Lactucidae	タンボウ科	1	1			9	6	1	4	
Asteroidae	キク苗科				1					
Artemisia	ヨモギ属	21	12	9	15	102	97	121	110	
Fern spore	シダ植物胞子									
Monocolate type spore	单条微胞子	9	2	5	13	48	72	10	4	
Trilete type spore	三条微胞子	2	2	1	1	7	3	3	1	
ArboREAL pollen	樹木花粉	2	0	4	0	3	4	2	1	
Nonarboreal pollen	草本花粉	23	13	9	17	122	109	124	115	
Total pollen	花粉總数	25	13	13	17	125	113	126	116	
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	1	5	1	3	2	
Fern spore	シダ植物胞子	9	4	5	14	55	75	15	5	
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	
	明らかな消化塊	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	

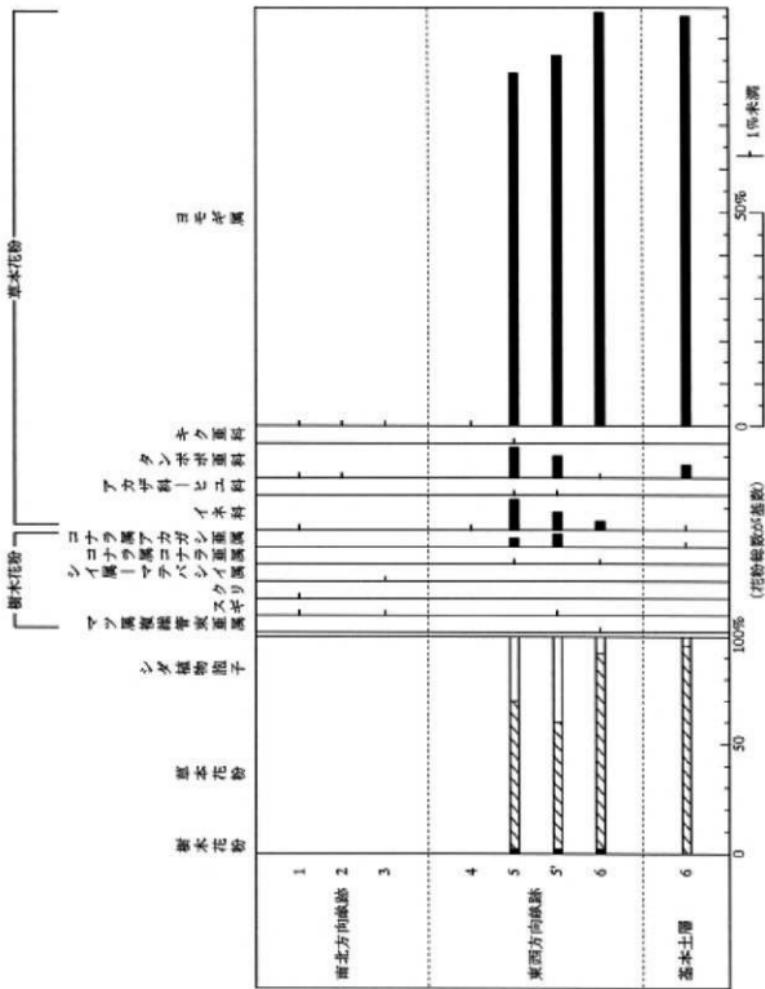


図1 上野城跡、C・D-9区における花粉ダイアグラム

上野城跡の花粉・胞子



1 スギ



2 コナラ属コナラ亜属



3 コナラ属アカガシ亜属



4 イネ科



5 アカザ科—ヒュ科



6 タンポポ科



7 ヨモギ属



8 シダ植物单条溝胞子

— 10 μ m

4. 上野城跡における種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

2. 試料

試料は、C・D-9区の東西方向歴跡から出土した種実とみられる炭化物（試料5）である。

3. 方法

肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

本試料は、長径約4mm、短径約2mm程度の炭化物である。表面は摩滅し、本来の形状と表面模様は不明である。木材細胞の構造はもたず種実の可能性があるが、摩滅により形態的特徴が不明であることから、同定には至らなかった。

文献

- 笠原安夫（1985）日本雑草図説。養賢堂。494p.
笠原安夫（1988）作物および田畠雑草種類。弥生文化の研究第2巻生業。雄山閣 出版。p. 131-139.
南木睦彦（1993）葉・果実・種子。日本第四紀学会編 第四紀試料分析法。東京大学出版会。p. 276-283.
吉崎昌一（1992）古代雜穀の検出。月刊考古学ジャーナルNo. 355。ニューサイエンス社。p. 2-14.

5. 上野城跡におけるリン・カルシウム分析

1. はじめに

上野城跡の発掘調査では、土坑墓とみられる土坑が複数検出された。ここでは、同遺構内の土壤について分析を行い、人骨などの生物遺体の有無について検討を試みた。

2. 試料

分析試料は、土坑SK-14、SK-19、SK-37、P875の4地点から採取された7点、および比較試料としてP875の遺構外から採取された1点の計8点である。

3. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム（日本電子機製、JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法(FP法)による定量分析を行った。試料の処理法は次のとおりである。

- 1) 試料を絶乾(105°C・24時間)
- 2) メノウ製乳鉢を用いて試料を粉碎
- 3) 試料を塩化ビニール製リング枠に入れ、圧力15t/cm²でプレスして錠剤試料を作成
- 4) 測定時間300秒、照射径20mm、電圧30keV、試料室内真空の条件で測定

なお、X線発生部の管球はロジウム(Rh)ターゲット、ベリリウム(Be)窓、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。

4. 分析結果

各元素の定量分析結果(wt%)を表1に示し、リン酸(P₂O₅)とカルシウム(CaO)の含量を図1に示す。

5. 考察

土壤中に含まれるリン酸やカルシウムの起源としては、土壤の母材、動物遺体、植物遺体などがあり、未耕地の土壤におけるリン酸含量は通常0.1～0.5%程度、耕地土壤でリン酸肥料が投入された場合は1.0%程度である。農耕地では施肥による影響が大きく、目的とする試料の分析結果のみから遺構内における生物遺体の存在を確認するのは困難である。このため、比較試料(遺構外の試料)との対比を行う必要がある。

土坑の埋土におけるリン酸含量は、SK-14で0.85%、SK-19で0.70%、SK-37で0.73～1.02%（平均0.91%）、P875で0.72～0.76%（平均0.74%）と比較的高い値であり、比較試料(遺構外の試料)の0.47%よりも明らかに高い値である。

カルシウム含量については、目的とする試料と比較試料との間にとくに明瞭な差異は認められなかつた。リンは土壤中の鉄やアルミニウムと強く結合して水に難溶性の化合物となるため、水の作用により流出することは考えにくいが、カルシウムは一般に溶解性が大きいことから(竹追、1993)、

土壤中でカルシウムが拡散・移動した可能性が考えられる。

以上のことから、各土坑の内部には、リン酸を多く含む何らかの生物遺体が存在していた可能性が考えられる。ただし、遺構埋土の上位層について分析が行われていないことから、後代の農耕に伴う施肥などの影響も否定できない。今後は、遺構の上位層についても分析を行い、今回の結果と比較検討する必要があろう。

文献

竹追紘 (1993) リン分析法. 日本第四紀学会編. 四紀試料分析法2, 研究対象別分析法. 東京大学出版会, p. 38-45.

表1 鹿児島県、上野城跡遺跡における蛍光X線分析結果

単位: wt (%)

原子No. 元素	試料 名	SK-14	SK-19	SK-37			P875		比較試料 名
				1	2	3	埋土	底	
11	Na ₂ O	0.80	0.72	0.95	0.88	0.80	0.76	0.81	0.75
12	MgO	0.85	0.83	1.03	0.73	0.73	1.06	0.99	0.90
13	Al ₂ O ₃	28.42	27.09	29.09	31.08	29.07	28.39	29.49	33.07
14	SiO ₂	57.28	59.50	55.01	55.63	56.11	55.74	55.43	50.88
15	Fe ₂ O ₃	0.85	0.70	1.02	0.73	0.97	0.76	0.72	0.47
16	SO ₃	0.22	0.15	0.42	0.33	0.37	0.27	0.12	0.31
19	K ₂ O	1.32	1.54	1.50	1.66	1.56	1.42	1.58	1.34
20	CaO	0.91	0.81	1.10	1.05	1.05	1.26	1.13	1.10
22	TiO ₂	1.03	0.91	1.02	0.84	0.98	1.06	1.01	1.28
23	V ₂ O ₅	0.02	0.01	0.04	0.02	0.03	0.02	0.04	0.01
25	MnO	0.33	0.29	0.36	0.22	0.34	0.39	0.19	0.35
26	Fe ₂ O ₃	7.91	7.40	8.42	6.80	7.94	8.83	8.43	9.47
30	ZnO	0.05	0.05	0.04	0.04	0.05	0.04	0.05	0.05

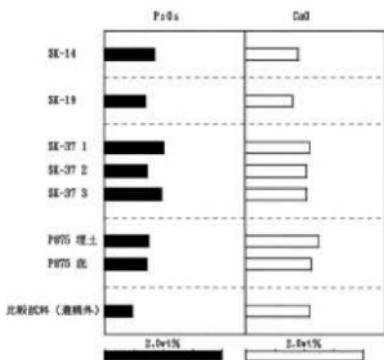


図1 上野城跡遺跡におけるリン・カルシウムの含量

第V章 まとめ

1 旧石器時代

この時代の主な出土地点と出土層は、E・F-3・4区で第VII層であった。この地点ではフレーク等が20点まとめて出土している。他の旧石器の遺物は散在状態であった。この20点は少ないとブロックの形態ととらえてよいだろう。この中には、ナイフ形石器1点、剥片尖頭器が1点出土している。これらの遺物は二次シラスの中から出土しているので後期旧石器と考えられる。このブロックの性格はフレークも出土しているので小規模の石器製作跡が考えられる。

また、土坑が第VII層に検出している。梢円形の土坑で用途は不明である。

2 繩文時代

この時代の遺構は埋土の状態から「落とし穴」と判断した。その遺構は1基が検出され、逆茂木ピットが2か所みられる。

この時代の遺物は早期と中期と晩期が出土している。

繩文早期は貝殻条痕と貝殻刺突組み合わせの特徴を持つ石板式土器系、短い貝殻条痕を鋸歯状に施す柔の丸タイプと山形押型文土器が出土している。これらは、主に山部にみられる。山部の地層堆積は岩盤のため風化層が薄く上下が不明確であった。よって、これらは同時期か前後するか判断はできなかった。

中期は阿高式土器を中心とする。出土状態は散在地程度で遺跡として取扱いにならない状況である。この阿高式土器は凹線文を顕著に表し、胎土には滑石も含んでいるものも多い。時期は阿高式土器の最盛期ととらえてよい。

晩期は、黒色研磨土器で黒川式土器の後半期と考えられる。これも散在程度が低く遺跡として取扱いにはならない状況である。

石器は、山部の表土中に磨製石斧・打製石斧が出土している。

平坦部での石器は、スクレイパーと石鏃が出土している。この中で石鏃は24本出土している。

石鏃の形状は正三角形や二等辺三角形が基本であり、抉りは深いものと浅いものがある。また、柳葉形類似のものも1点出土している。

3 古墳時代

この時代の遺構は土坑が25基検出している。これらは検出状況から古代との区別がつかない。

形状は、長方形、梢円形、円形が基本になっている。これらの性格は不明である。

この時代の遺物は、成川式土器であり、甕形土器・壺形土器・壇・高壙・匙の手づくね製品が出土している。甕の口縁部開き、壺の幅広突帯などから判断して、甕は東原期に近く、壺は笹貫期に近いちょうどこの中間期と考えられる。

4 古代

遺構は古墳時代と区別がつかない。

遺物は上記の様に甕形土器・壺・壇・須恵器が出土している。

甕形土器の口縁部は「L」・「く」・「C」の形がありまとまりがない。壺は体部・口縁部が外反し、切り離しはヘラで行っている。壇は黒色土器Aである。須恵器は甕形土器である。これらは器形か

らみると 10 世紀頃と考えられる。

5 中世

(1) 遺構

ア 墨立柱建物跡 (SB)

本遺構は 32 棟の建物跡が確認された。建物跡は平原側に C 列に大型建物跡が検出し、山裾側の D・E 列に小型の建物跡が検出している。

大型建物跡は C・D-3・4 区に 3 棟、C・D-4・5 区に 2 棟、C・D-6・7 区に 5 棟、C・D-8 区に 3 棟がみられる。これらは、各棟が重なったり隣接したりして建てられた跡である。

C・D-3・4 区は SB12・13・14 が重なり、2 間 × 3 間の上屋に SB12・14 が北側と西側に半間の下屋を造っている。この中の SB12 は下屋の角が狭められている。SB13 は下屋が北側・東側・南側にみられる。

C・D-4・5 区の 2 棟は 2 間 × 3 間の上屋に北側と西側に半間の下屋を造っている。

C・D-6・7 区では SB19 が 2 間 × 3 間の上屋に東側と南側に半間の下屋を造っている。その他の SB21・24・28 は隣接して南北に検出されている。これらが一連の建物と考えられる。また、SB22 は東西に建てられている。これは 1 間の間隔が長く、これらの建物とは性格が異なると考えられる。

C・D-8 区は SB26・31・32 が重なっている。SB31 は 2 間 × 3 間の上屋に南側と西側に半間の下屋を造っている。SB32 は 2 間 × 3 間の上屋に東側と南側に半間の下屋を造っている。SB26 は 2 間 × 3 間の上屋に四方に半間の下屋を造っている。これは、角が狭められた建物跡である。

小型建物跡は D～F-3～7 区にみられる。これらは規模の大小があるものの形態は類似している。類似した建物跡は SB2・4・6、SB3・25・30、SB8・10・11、SB17・18・29 等がある。

その他、小型に入る総柱の建物は SB5・15・23 がある。この中の SB5 の周りには列をなして円形の浅い土坑が検出されている。

イ 方形堅穴遺構

方形堅穴遺構は C-4・5 区に 2 基、D-5・6 区に 3 基検出している。

この遺構は遺構内に柱穴があり屋根があった建物と考えられる。また、昇降口の段もあるものもある。なお、床面には焼土や硬化面もある。この状況から作業内容としては、温度があまり変化しない堅穴内の作業、冬場の寒冷期でもできる作業が考えられる。

遺構は 5 基検出されている。それを規模で分類すると、大規模なものは方形堅穴遺構 4 で、小規模なものは方形堅穴遺構 1・2・3・5 である。作業量を考えると、大規模に対し小規模の 2 基が対応できる。よって、他の遺構との重なり合いや隣接で判断して、小規模の 2 基は、方形堅穴遺構 1 と方形堅穴遺構 2 が同時期で、方形堅穴遺構 3 と方形堅穴遺構 5 が同時期と考えられる。すなわち、これらは三時期が考えられる。

ウ 土坑

土坑は形態で大きく土坑 I と土坑 II に分類される。土坑 I 類は基本的に円形で浅く、土坑 II 類は梢円形と長方形で深い。さらに、土坑 II 類は A・B・C に分けられた。

土坑Ⅰ類

この類は円形で浅い形態をしているもので、145基がこれにあたる。

この遺構は、埋土の中に種子や木の実の炭化したものが混入して検出したものである。混入物は渡来した栽培植物のイネ、オオムギ、コムギ、マメ類が全て炭化した状態であったため、火熱を受けた状態であったことが分析で判明した。それは、生活残渣遺構としての推定をもらった。

遺構の検出状況は山手側に沿ってみられるのが特徴である。それらの土坑は4グループにわけられる。第Ⅰ区はD～F-3～5区、第Ⅱ区はD～F-6～8区、第Ⅲ区はC～F-8・9区、第Ⅳ区はC～E-10～14区である。

第Ⅰ区は64基検出している。ここは列をなしている特徴がある。その中には5基連續や3基連續に重なって検出している遺構もある。また、建物跡に沿って検出しているものもある。

第Ⅱ区は40基検出している。ここの特徴は遺構が散在して検出されている。また、溝4とも重なっている。土坑の重なりは1か所で2重である。他は単独に検出している。

第Ⅲ区は20基検出している。ここの特徴は散在して検出している。場所は溝5より南側に位置する。土坑の重なりは2重が1か所で他は単独に検出している。

第Ⅳ区は21基検出している。ここの特徴は散在して検出している。場所は溝3より南側に位置し、溝2・3の東西にある。土坑の重なりは2重が3か所で他は単独で間隔が広い。

これらの変化は、時期的なものが考えられる。

土坑Ⅱ類

これはA・B・Cの3種類に分けられた。

Aは5基検出し、特徴は焼土がみられるものである。これは、炉的な使われ方が考えられる。

Bは4基検出し、特徴は白磁や土師器や鉄器が床面にある。これは、埋葬関係が考えられる土壙墓と思われる。

Cは8基検出し、土坑の中に柱穴跡がみられる特徴がある。この中で、土坑Ⅱ17は馬の歯が出土しているので家畜の埋葬に使用された施設と考えられる。これらの遺構の中にはピットがあり、今後の検討課題として残したい。

エ 焼土

これは21基検出した。

これは検出状況から建物外での施設と考えられる。形態としては、土坑を伴うもの、柱穴を伴うもの、分散して検出されたものがある。今回の調査では性格を判断できなかった。今後の検討課題として残したい。

オ 嶋跡

嶋跡は、2面検出した。

嶋Ⅰは、中世遺構面と同じ面のC・D-9・10区検出した。その嶋跡は、畝間が南北の上に東西が重なって検出した。また、南北の畝間は溝2・3の堆積埋土の上にみられ、溝2・3より新しいことが確認できた。一つ一つの畝間の長さは4m、3m、2.8m等があり。当時の耕作状況の一部が判断できた。なお、畝間の植物珪酸体分析結果、イネが多量に検出され稻作が行われていた可能性が高いと判断された。これは、陸稻栽培が行われたことが考えられる。

また、イネ以外はオオムギ族、キビ族等が検出されており、土坑Iの生活残渣遺構との関連を強く判断できる。

島IIは中世面より若干下層に検出している。層で判断すると古代の可能性が高い。

カ 溝

溝は7本検出した。溝1～5は本調査区の中心遺構と同じ面に検出した。溝6・7は一段高い面に小規模で検出した。

溝1はC・D-11～14区に山裾と同じ方向で検出した。検出状況は直線状で大きな石から始まっている。規模は、溝4・5に比べ大きくて深い。

溝2・3はB～D-9～11区に重なって検出した。検出状況は溝3の上に溝2が重なっている。規模は、溝4・5に比べ大きくて深い。

溝4はC～E-6・7区に直線で検出した。溝2・3と比べ細くて浅い。これは、方形堅穴遺構5との切り合いと掘立柱建物跡2との隣接関係がある。

溝5はC～E-7・8区に直線で検出した。溝2・3と比べ細くて浅い。途中で切れている。これは、掘立柱建物跡26との隣接関係がある。

溝6は、B-3・4区も間が途切れで検出した。規模は細く短く浅い。この遺構は古道の内側にあり、上の段の排水坑と考えられる。

溝7は、B-3区に検出した。溝6の東側で調査範囲外に延びている。性格は溝6と同じで上の段の排水溝と考えられる。

他の遺構との切り合いでみると、溝1～5は溝4と溝3が同時期で、溝5と溝2が同時期で、溝1は山裾に沿って造られた単独時期が考えられる。

(2) 遺物

ア 白磁

白磁は太宰府跡分類の白磁III類、白磁IV類、白磁V類、白磁VI類、白磁VII類、白磁IX類、白磁B類、白磁C類、白磁D類、白磁E類が出土している。

この中で、出土の最も多い類は白磁IV類である。また、土坑IIに検出した完形品は白磁V類に比定している。これらは12世紀前半が中心と思われる。また、13・14世紀のものや、近世のものも出土している。

イ 青磁

青磁は龍泉窯系と同安窯系が出土している。

龍泉窯系は太宰府跡分類の龍泉I、龍泉II、龍泉III、龍泉B、龍泉C、龍泉Dの他、稜花皿、壺が出土している。また、同安窯系の皿等も出土している。

この中で、最も多いものは龍泉Iで、ついで龍泉IIである。これらは12世紀後半と思われる。

ウ 青白磁

青白磁は合子が出土している。この時期は12世紀前半と思われる。

エ 染付

染め付けは大半が貿易磁器の範疇である。時期的には14世紀後半から15世紀と思われる。

オ 中世陶器

この中には貿易陶器と国内陶器が出土している。

貿易陶器は、中世緑釉陶器、楕円の鉢、四耳壺、黒釉の天目が出土している。時期的には13世紀から14世紀と思われる。

国内陶器は常滑の甕と近世の薩摩焼の甕、茶家が出土している。

カ 中世須恵器

中世須恵器は椎万丈窯の甕や擂鉢、捏鉢が出土している。また、東播磨系窯では擂鉢、捏鉢が出土している。下り山窯では、甕と壺が出土している。

キ 瓦器質土器

瓦器質土器は擂鉢、捏鉢、坏、火舍が出土している。瓦器質土器の擂鉢、捏鉢が多く出土するのも珍しいが、瓦器質の坏の出土は南九州では珍しい。

ク 土師器

坏

土師器の中では出土量が少ない。皿と坏との区別がつかなかったので小皿の大型のものも範疇にいれた。製造は、回転ロクロからの糸切り離しである。器面調整は簡単で、細い調整のある研磨等はしていない。時期的なものは判断できなかった。

塊

この中には、内側に赤色顔料を付した内赤土師器（仮に赤色土器と呼ぶことにする）も含まれる。内外器面には丁寧な研磨が施されている。この研磨は水漏れがないようにされたと考えられる。器形は黒色土器Aの塊と同じで、口縁部が外反するものと、外反しない半球状のものがある。

小皿

土師器の中では出土量が多いもので、簡単に造っている。器形では、大きなもので坏の範疇に入る。糸切り離しの底部から体部・口縁部への立ち上がりは、大方、外向している。それは浅いものが中心で、深くて直行しているものもある。また、底面には糸切り離しの中に製造中に板状の所においた跡もみられ、大量生産されたことが考えられる。これらの器形の変化は層位的や遺構での時期的判断はできなかった。

黒色土器A塊

いわゆる内黒土師器の碗である。この土器も小皿と同様出土量が多い部類にはいる。内側を黒色にし、さらに研磨をして焼かれている土師器である。黒色は外面にも施されているものもある。器面は丁寧な研磨仕上げで、見込み中央は縱位と横位、口縁部近くは横位の研磨で水挽き面を貫している。また、外面の水挽き面を研磨している。器形は口縁部が外反するタイプ、半球状になるタイプがある。また、黒色土器A碗も高台が高いもの低いものがある。この土師器の目的は、器面の目詰めが考えられるため液体を入れる容器と考えられる。

これらの層位的や遺構での時期的判断はできなかった。しかし、白磁IV類は高台が低く、口縁部は玉縁であるが内湾気味で半球状である。白磁V・VI類は口縁部が外反し、高台が高くなる。この白磁の流れでみると、高台が低く口縁部から底部が球状のものから口縁部が外反し高台が高くなる傾向が考えられる。

これらの製作方法をみると、土師器の壺や皿は簡単に作れるが碗は丁寧な器面調整をする手間が必要である。よって、壺の使用方法から考えると、この地域では大量に手に入りにくい貿易磁器の壺の代わりに作られた可能性が高い。

黒色土器B小皿

いわゆる黒色土器と言われる土師器の皿で出土量は少ない。小皿の内外面を黒色にし、さらに丁寧な研磨を施している。用途としては出土量が少ないので、簡単に作った小皿とは違う使い方が考えられる。例えば祭祀関係などが考えられる。

これらの器形の変化は層位的や遺構での時期的判断はできなかった。

コ 石器

砥石

砥石は2種類出土している。軟質白色頁岩と硬質頁岩である。軟質白色頁岩は黄褐色や茶褐色で堆積層の筋目が見えるもので、通称天草石と言われるものである。粒子が細かく仕上げ砥石に最適である。

硬質は軟質に比べ小型である。使用方法は軟質が面研ぎであるが硬質は筋研ぎである。

滑石製品

石鍋、短冊形石製品、鏡の模造品等が出土している。この中の石鍋は円孔が底部にあり解釈が不明である。また、短冊形石製品は砥石の可能性がある。そして、鏡の模造品は紐に円孔があり、鏡面は凸面になっている。他の製品は用途や目的が不明である。

輕石製品

2点出土している。傷があるが用途不明である。

サ 金属製品

鉄製品、銅製品、鉛等が出土している。

鉄製品は釘、刀子、短刀、鐵、古錢、鈴、柄頭の固定金具等が出土している。この中の釘は横断面が四角で、頭部は少し叩き曲げている。短刀は土坑Ⅱに副葬品として出土した。また、鐵錢が出土して珍しい。鈴は飾り突起がついている。

青銅製品

刀の鍔止め、鈴、キセルの吸口部、古錢、簪が出土している。

鉛製品

火綱銃の弾と思われるものが1点出土している。

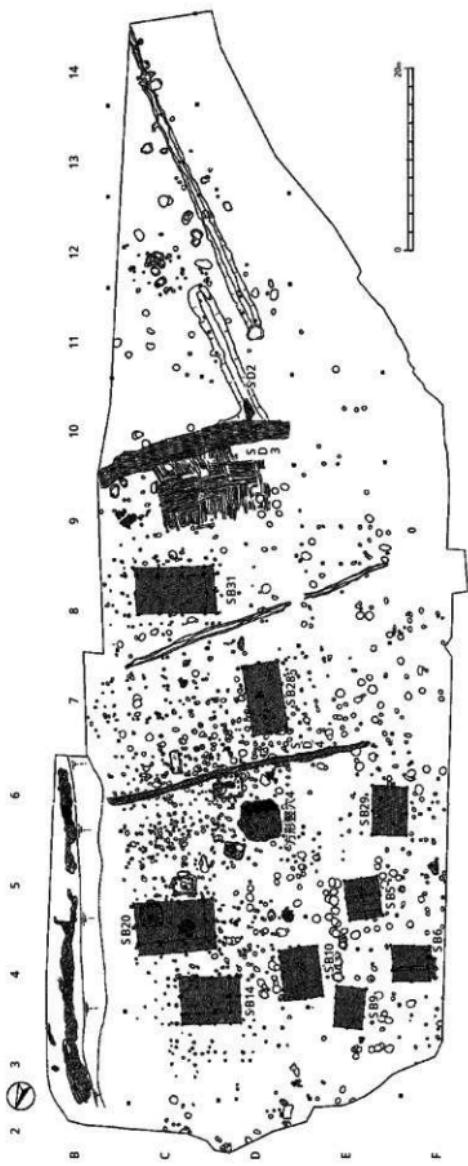
(3) 考察

以上で遺跡の性格をみると、本遺跡の旧石器時代、縄文時代、古墳・古代は長期的に住んだ形跡ではなく、中心は中世であることが判明した。

この項では、遺跡の中心である中世の考察を取り上げることにした。

(1) では遺構 (2) では遺物をまとめてきた。この項ではこの2つの項を組み合わせて、上野城跡の時間的な面で考察し、性格をまとめた。

まず、時間的なものは(2)の遺物でみると、白磁の遺物で古いものは、白磁III類からIV類で、この2つの中では、最も多いものは玉縁口縁部をもつ白磁IV類である。その後、数は少ないが、端



第156圖 中世遺構第A期想定配置

第157図 中世遺構第B明瞭化配置



第158図 中世遺構第C期想定配置



反りの櫛描文がみられる白磁V・VI類が続いている。そして、見込みに釉掻きがみられる白磁VII類と口唇部に釉剥ぎがみられるいわゆる口剥げである白磁IX類が出土している。これは13世紀前半に当たられている。よって、白磁からみると12世紀前半から13世紀前半が考えられる。

青磁は、龍泉窯系の龍泉I、龍泉II、龍泉III、龍泉B、龍泉C、龍泉Dの他、稜花皿、壺と同安窯系の皿が出土している。この中で、最も多いものは龍泉Iで、ついで龍泉IIで、そして、同安窯系である。よって、青磁からみると12世紀後半が中心で、13世紀前半までと考えられる。

貿易陶器でみると、13世紀の楕軸・黒釉陶器が出土している。

染付も出土している。これらは14後半～15世紀のものと考えられる。

また、16世紀の近世白磁や近世陶器である薩摩焼も出土している。

遺構である柱穴、方形竪穴遺構、土坑、土壙墓、溝の出土遺物をみると、白磁IV・V・VI類と青磁と貿易陶器が出土している。染付や近世白磁・陶器はみられない。

これらの条件で判断すると本遺跡の中心は、12世紀から13世紀前半が想定される。

次に、遺構の重なり合いをみると、大型建物跡である掘立柱建物跡の12・13・14、掘立柱建物跡の20・16、掘立柱建物跡の26・31・32は、同規模の2棟及び3棟の重なり合いである。

掘立柱建物跡の12・13・14は、下屋の付きが、12は北と西、13は北と東と南である。掘立柱建物跡の16・20は、下屋の付きが北と西である。これと同規模の建物跡は掘立柱建物跡19がある。19の下屋の付きは東と南である。掘立柱建物跡の26・31・32は、26の下屋が東西南北の四方に付き、31は西と南に付き、32は東と南に付いている。

小型の建物跡は、規模の大小がみられるが、遺構の項で述べたように南側や東側の棟柱がはみ出した建物跡、桁行柱の1本が大きくなっているもの、総柱のもの、大型でもみられたが角柱が内側に入っているものがある。

溝も重なり合いや隣接関係が時間差の重要な遺構になっている。溝は1～5が関わり合いになってくる。

溝4は方形竪穴遺構5と重なっている。この関係は溝の上に方形竪穴遺構を作っているので溝が古い。また、掘立柱建物跡の21・24は隣接しているので、溝4との時間差があることになる。

土坑II区の土坑と切り合いがあるので、これらのものと時間差があると考えられる。

溝5は掘立柱建物跡の26・27と隣接しているので、本遺構と時間差が認められる。

溝2・3は溝3の上から溝2を掘り直しているので、溝2と溝3は時間差が認められる。溝2・3の上に畠跡Iがあり、溝2・3と畠跡Iの時間差が認められる。

溝1は切り合いがないが、掘立柱建物跡の1との平行施設が考えられる。

方形竪穴遺構は5基検出されている。この中で方形竪穴遺構1・2が掘立柱建物跡の16・20と重複・隣接している。また、方形竪穴遺構3と4、方形竪穴遺構4と5はこの遺構に上屋が付いた場合は、屋根の端が重なる可能性がつよいので、方形竪穴遺構4と方形竪穴遺構3・5は時間差があることになる。

土坑はI区が建物に沿って作られたものが特徴で、II区は溝4と重なりがみられ、III区は溝5の南側に位置し、IV区は大半が畠Iと溝1の間にみられる。これらにも時間差が想定される。

焼土は建物と隣接ないし重複との関係で時間差を分析できなかった。

畠 I は溝 2・3 と重なっているため、畠としては最終期のものと考えて良い。

以上を総合して考察すると 3 期が考えられる。ここでは I 期、II 期、III 期とせずに、A 期、B 期、C 期とした。この理由は、中世の 12~13 世紀前半以外にも古代の畠跡と 10 世紀位の出土遺物、14・15 世紀や近世の 16 世紀の遺物が出土し、判断できなかった遺構が多くあるためであった。ここでは上野城跡全体の流れにせずに、12 世紀から 13 世紀前半に絞ったためである。よって、下記の案を設定した。

A 期（第 156 図）

掘立柱建物跡は北から 14・20・10・9・6・5・29・28・31 である。

方形竪穴遺構は方形竪穴遺構 4 である。

溝は溝 4 と溝 3 である。

土坑 I 類は第 1 区及び第 2 区である。

これは、主館が掘立柱建物跡 14・20・31 で、従者等の住居と考えられる棟が掘立柱建物跡 9・10・6・29・28 を想定できる。なお、掘立柱建物跡 5 は総柱のため倉庫と考えられる。

方形竪穴遺構は掘立柱建物跡の中心部にあり、1 基で大きい。共同の作業所にあたるとおもわれる。

土坑 I 類は生活残渣捨て場と考えれば、倉庫の周辺に設けたと思われる。

溝は溝 4 で中間仕切をし、そして、溝 3 は堀の役目をした南側防衛施設と考えられる。

B 期（第 157 図）

掘立柱建物跡は北から掘立柱建物跡 13・11・15・18・3・2・25・24・19・32 である。

方形竪穴遺構は方形竪穴遺構 1・2 である。

溝は溝 5 と溝 2 である。

土坑 I 類は第 1 区及び第 2 区である。

これは、主館が掘立柱建物跡 13・19・32 で、従者等の住居と考えられる棟が掘立柱建物跡 11・15・18・3・2・24・25 を想定できる。なお、掘立柱建物跡 15 は総柱のため倉庫と考えられる。

方形竪穴遺構は掘立柱建物跡の中心部にあり、2 基で方形竪穴遺構 1・2 である。小規模共同作業所を 2 基造ったと思われる。

土坑 I は生活残渣捨て場と考えれば、まばらになり第 1 区から第 2 区まで拡がったと考えられる。

溝は溝 5 で中間仕切をし、また、溝 2 は山部を含めた堀の役目をした南側防衛施設と考えられる。

C 期（第 158 図）

掘立柱建物跡は北から掘立柱建物跡 12・8・16・17・4・30・21・22・23・26・7・1 である。

方形竪穴遺構は方形竪穴遺構 3・5 である。

溝は溝 1 である。

土坑 I 類は第 1 区・第 2 区・第 3 区・第 4 区である。

これは、主館が掘立柱建物跡 12・16・26 で、従者等の住居と考えられる棟が掘立柱建物跡 8・17・4・30・21・22・7 を想定できる。なお、掘立柱建物跡 23 は倉庫と考えられる。

方形竪穴遺構は掘立柱建物跡の中心部にあり、2 基で方形竪穴遺構 3 と 5 である。小規模共同作業所を 2 基造ったとおもわれる。

土坑Ⅰは生活残査捨て場と考えれば、第1区から第4区まで拡がったと思われる。

畠跡は溝2・3が埋まつた後と考えられるが、A・B期もこの位置にあったと考えて良い。畠跡の南側が溝2・3の上に検出されたことはC期に拡張された可能性が高い。

溝は溝5の中間仕切がなくなり、そして、溝2・3も埋まつたため、山部との境に溝1を造つたと考えられる。溝1は堀の役目をした山部側防衛施設と考えられる。

以上3期の想定を述べた。よって、結論は、これらの遺構が配置された中世館跡である。その時間的想定図はA期が156図、B期が157図、C期が158図に示した。なお、土坑についても第73図の土坑配置図を参照すること。

中世遺構の配置の確認は最小限であり、まだ、掘立柱建物跡27等多くの柱穴や土坑が検出している。また、それらは近世遺構の可能性があることも考えられる。

上野城跡は中世から近世にかけて使われ、近世の百次城とも言われている。中世末期から近世に至るまでの遺物も出土していることから、隣接平坦面との関係が出てくることを考えなければならない。

遺構を形成している平坦面は中世末から近世にかけて曲輪とよばれる造成面に変わつたと思われる。よって、中世館跡で使用された本調査地域は平坦面として扱い、中世山城の表現である曲輪の名称は使用しなかつた。

参考文献

- 山本信夫 「太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編ー」 太宰府の文化財 第49集 2000 太宰府市教育委員会
- 大橋康二 「肥前陶磁器」 考古学ライブラー-55 1989 ニュー・サイエンス社
- 彌榮久志他 「苦辛城跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(27) 1983 鹿児島県教育委員会
- 諫助昭千代・彌榮久志 「鹿児島城二之丸跡(遺構編)」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(55) 1983 鹿児島県教育委員会
- 彌榮久志他 「鹿児島城二之丸跡(遺物編)」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(60) 1983 鹿児島県教育委員会
- 亀井明徳・山口謙治・加藤良彦 「博多遺跡」 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第396集 1995 福岡市教育委員会
- 八木澤一郎 「山ノ脇・石坂・西原遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(58) 2003

図 版



地層断面（斜から）



地層断面（正面 65）



地層断面（斜から）



旧石器時代の出土状況



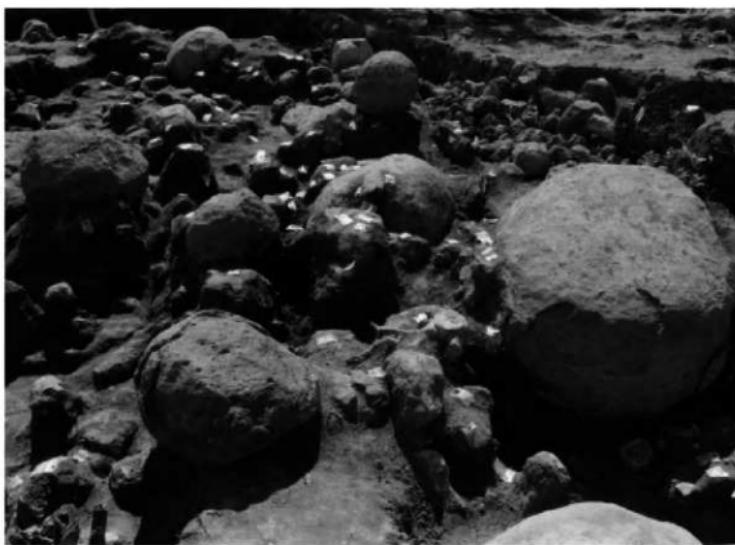
縄文時代の落とし穴



縄文時代の落とし穴断面



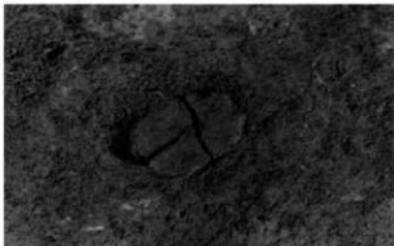
山部調査状況



山部出土状況



縄文土器出土状況



縄文土器出土状況



山部のトレンチ



山部のトレンチ



山部のトレンチ



山部のトレンチ



山部のトレンチ



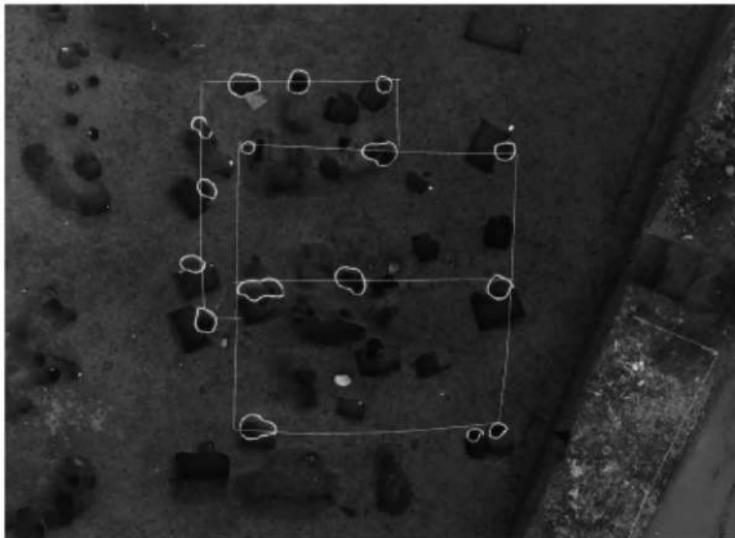
山部のトレンチ



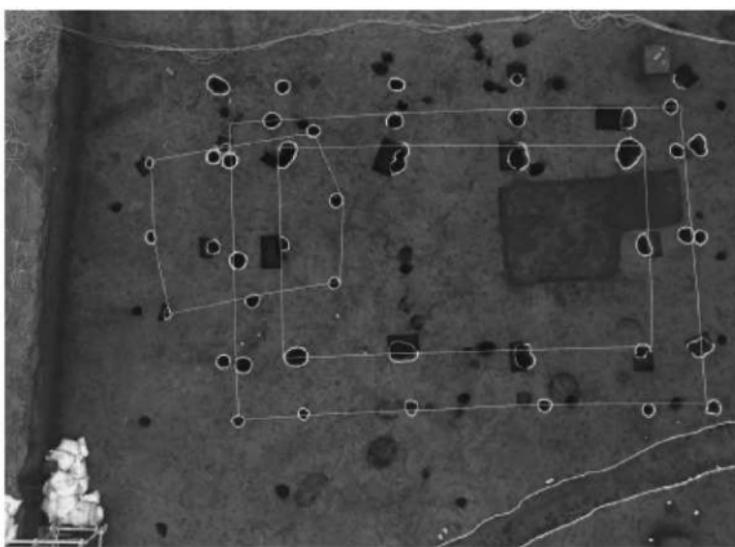
南部の遺構



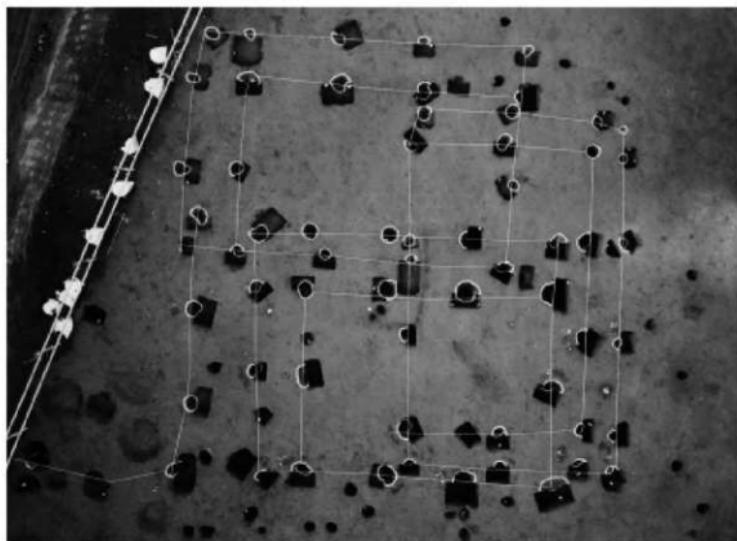
北部の遺構



掘立柱建物跡1



掘立柱建物跡26・27



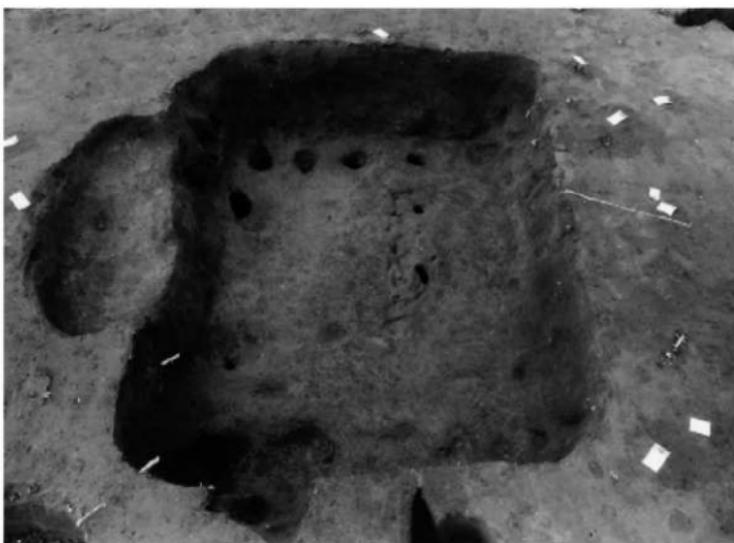
掘立柱建物跡12・13・14



方形竪穴遺構



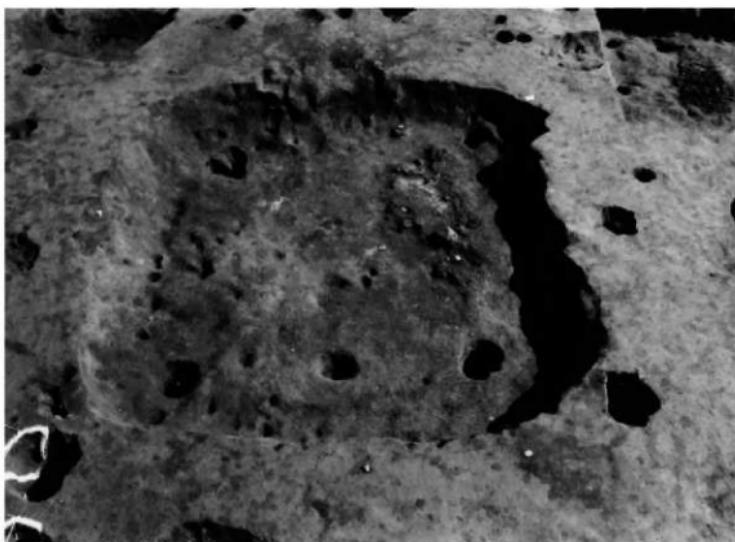
方形竪穴遺構1



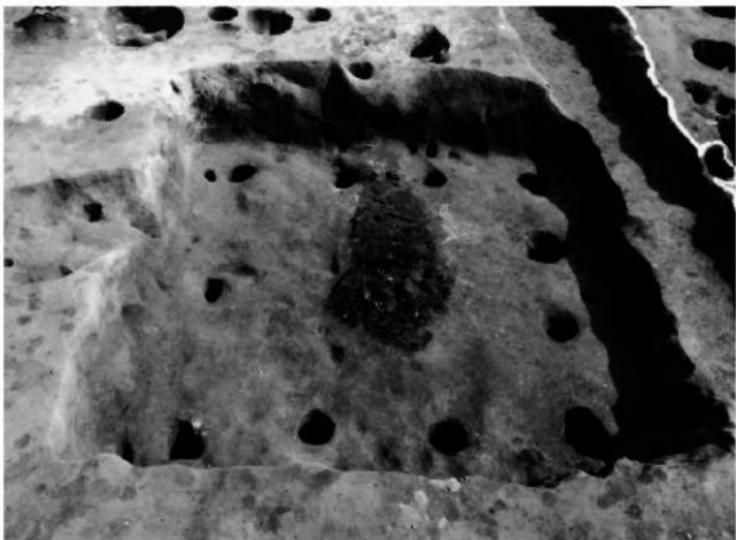
方形竪穴遺構2



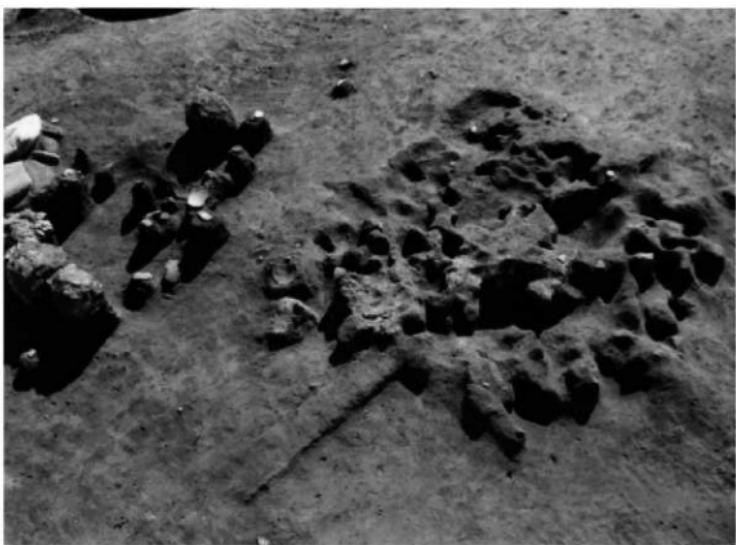
方形竪穴遺構3



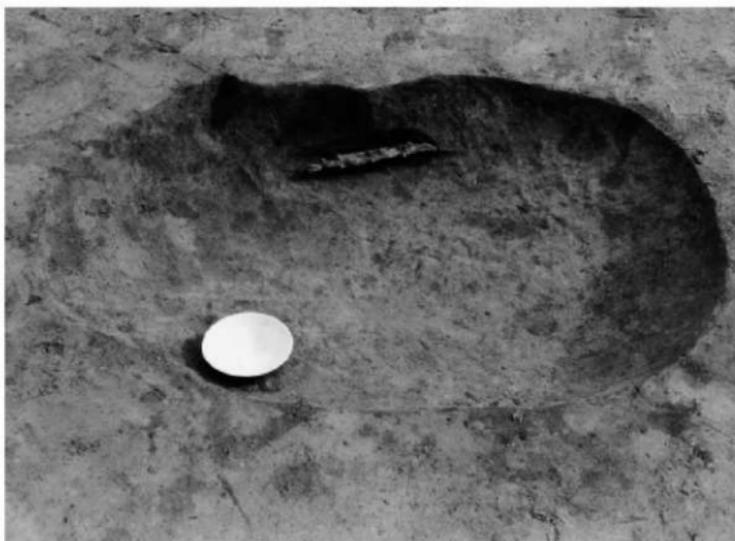
方形竪穴遺構4



方形豎穴遺構5



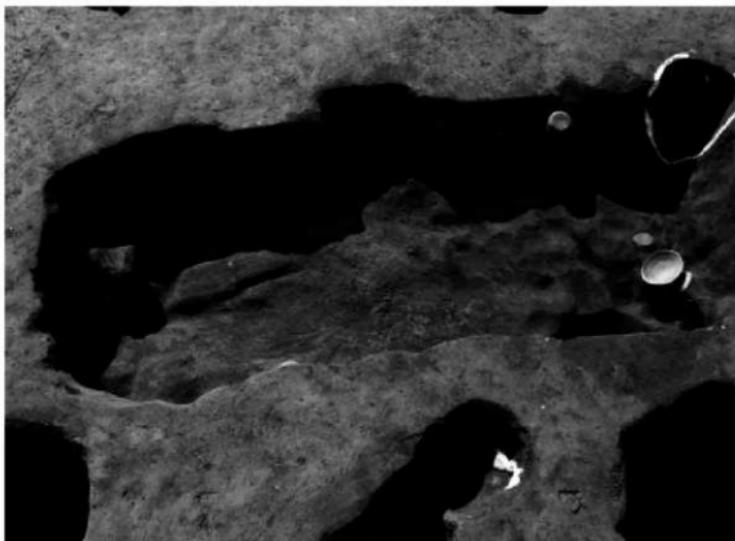
土坑Ⅱ



土坑 I- 7



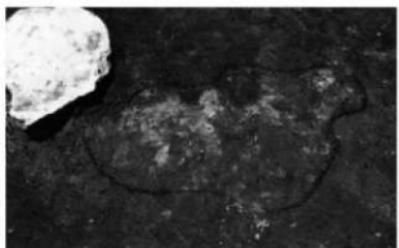
土坑 I- 6



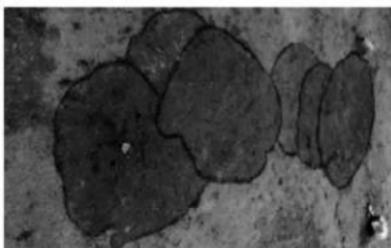
土坑 I - 8



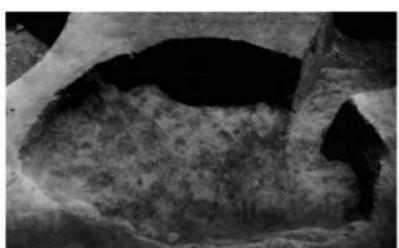
土坑 I - 17



土坑検出状況



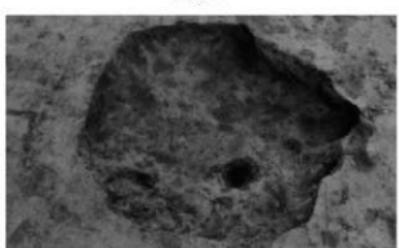
土坑検出状況



土坑 I



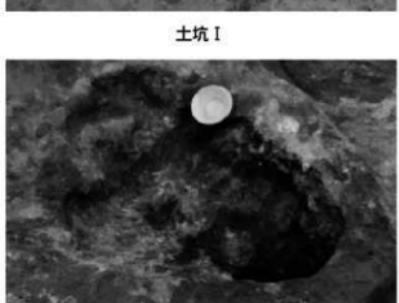
土坑 I



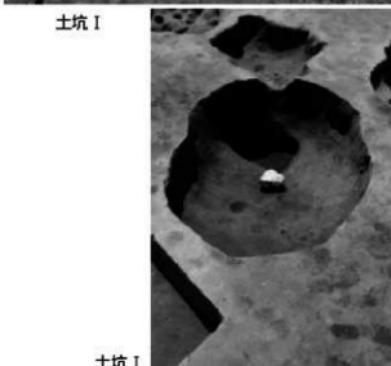
土坑 I



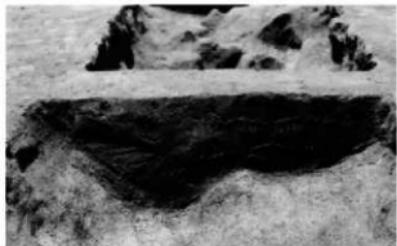
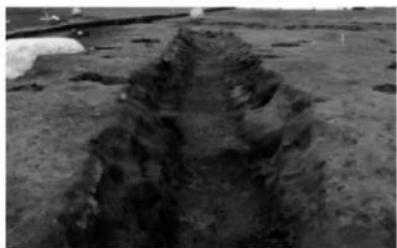
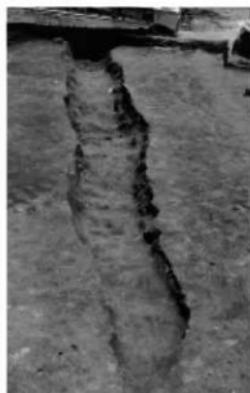
土坑 I



土坑 II



土坑 I

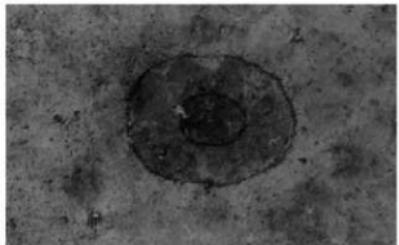




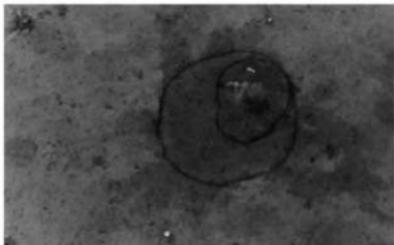
蟲跡 I



蟲跡 II



柱穴検出状況



柱穴検出状況



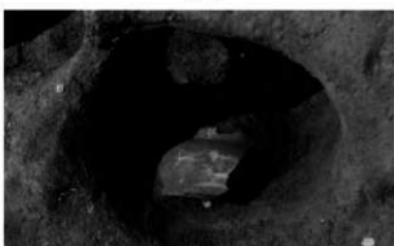
柱穴



柱穴



柱穴



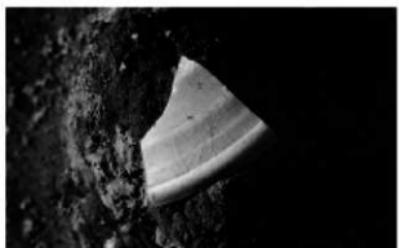
柱穴



遺跡出土状況



古墳時代の土器



白磁検出状況



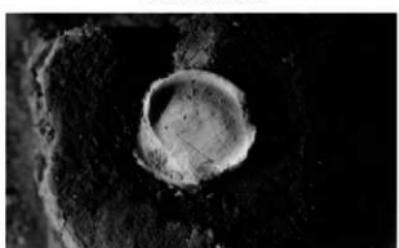
白磁検出状況



土師器検出状況



土師器検出状況



土師器検出状況



土師器検出状況



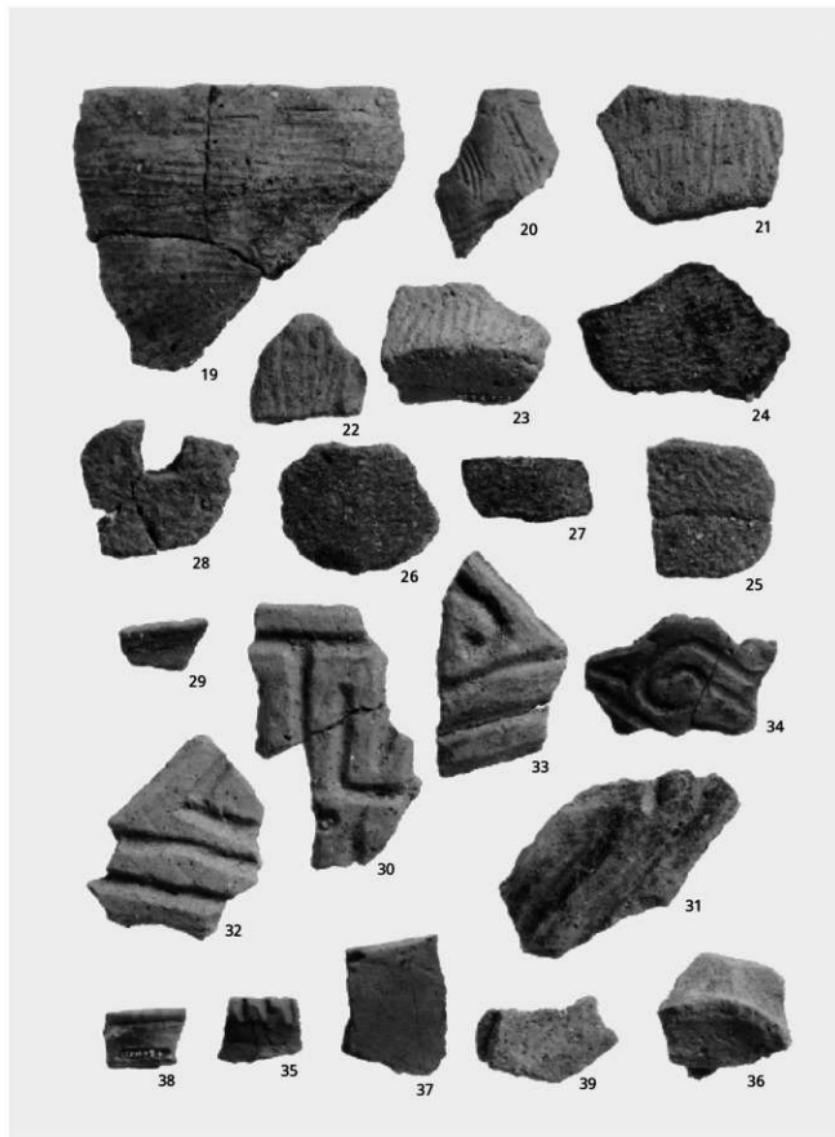
石製品検出状況



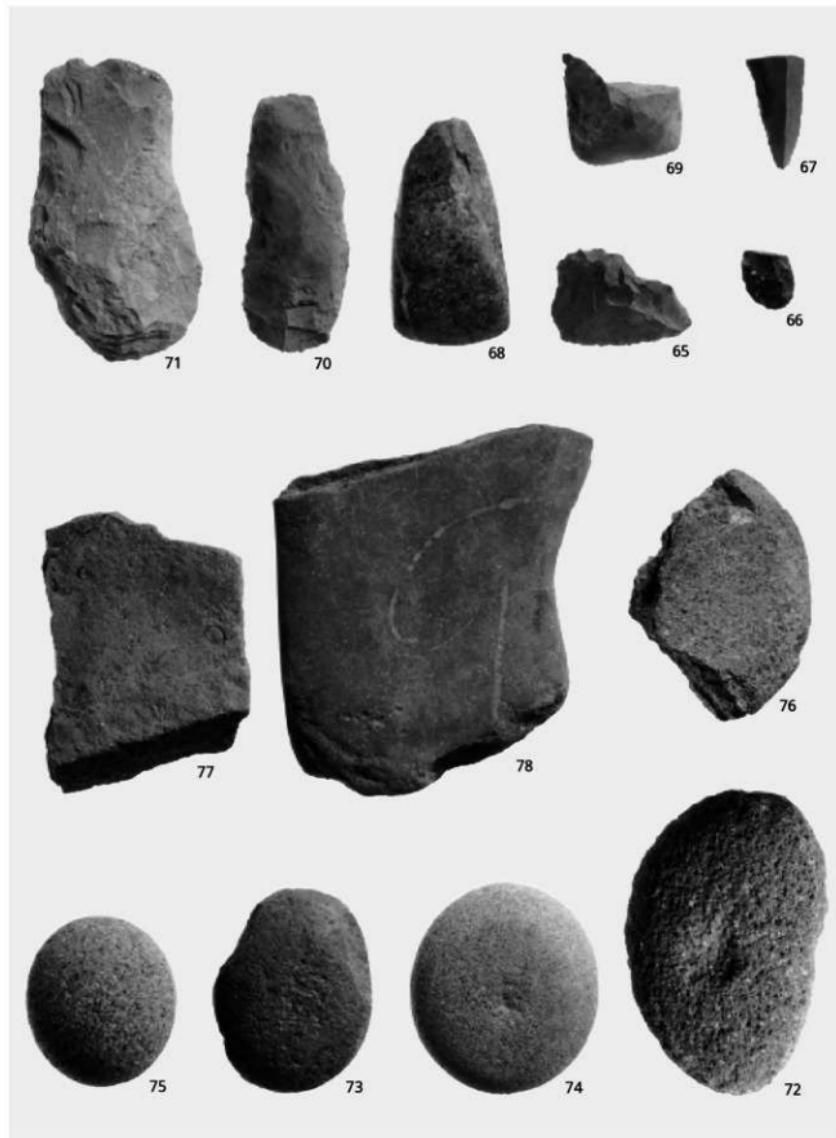
鐵製品検出状況



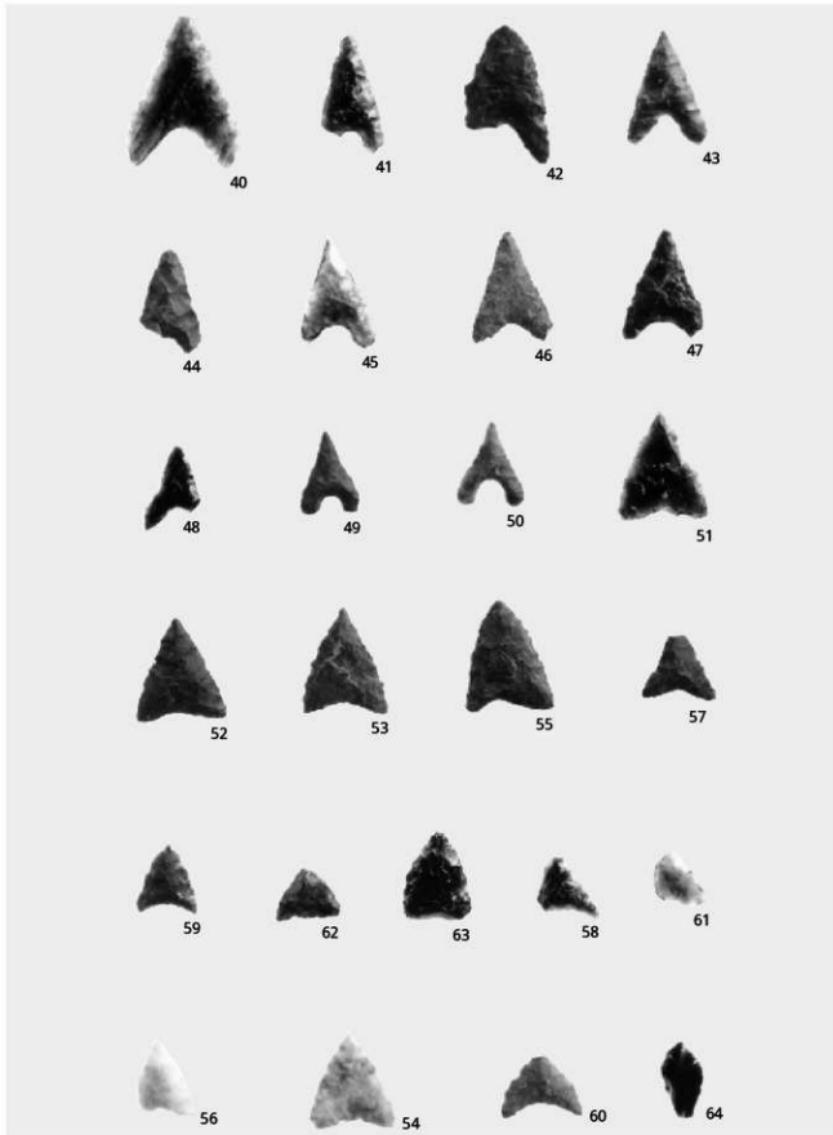
旧石器時代の出土遺物



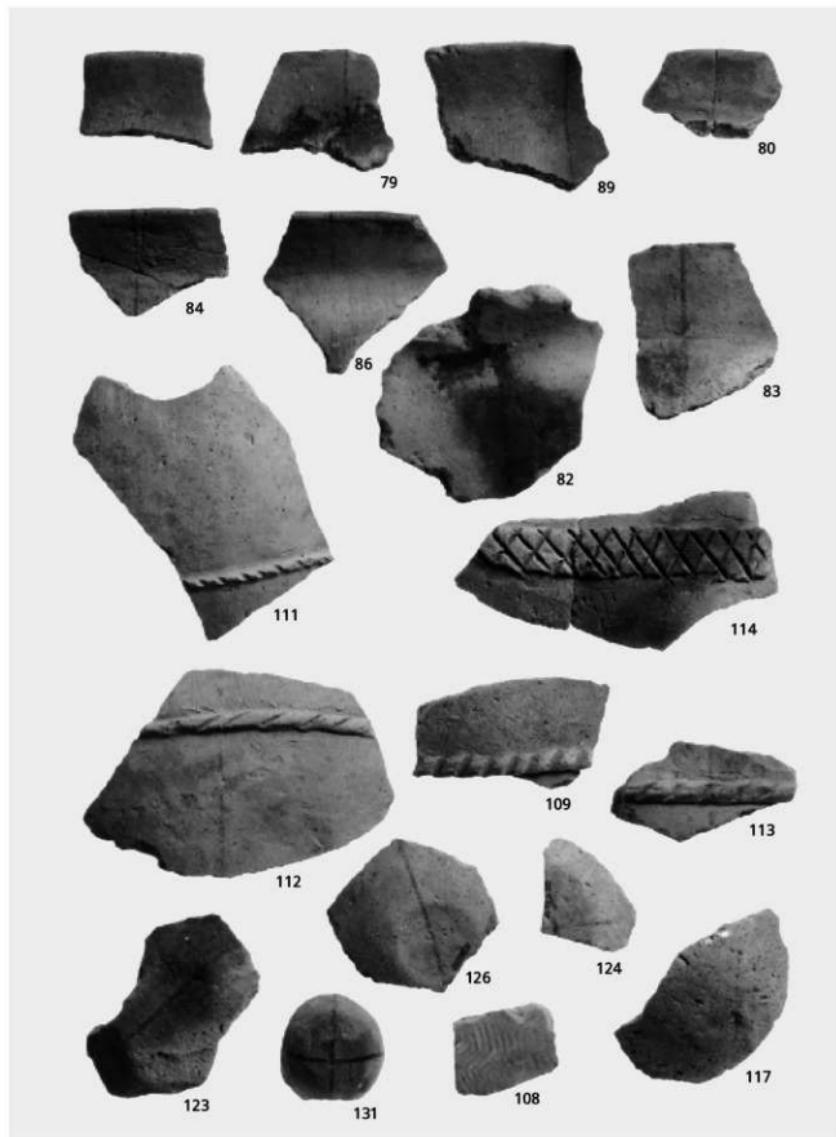
縄文時代の出土遺物（土器）



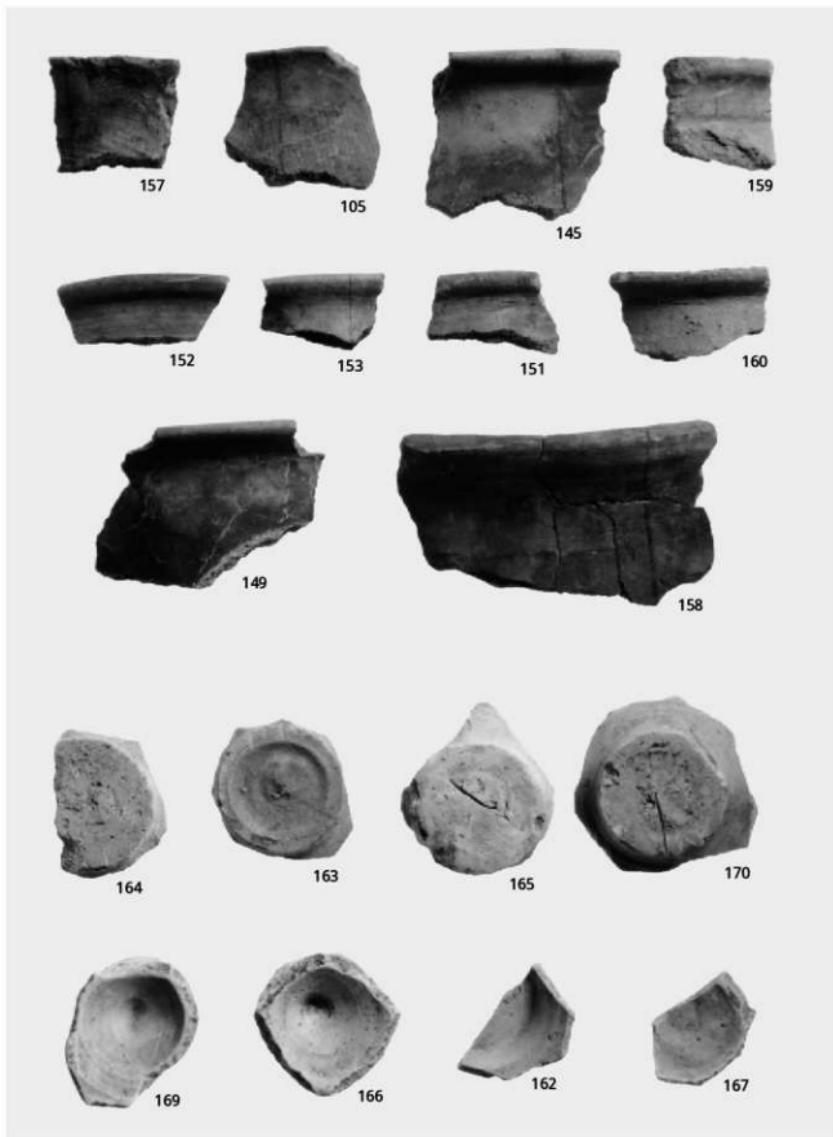
縄文時代の出土遺物（石器 1）



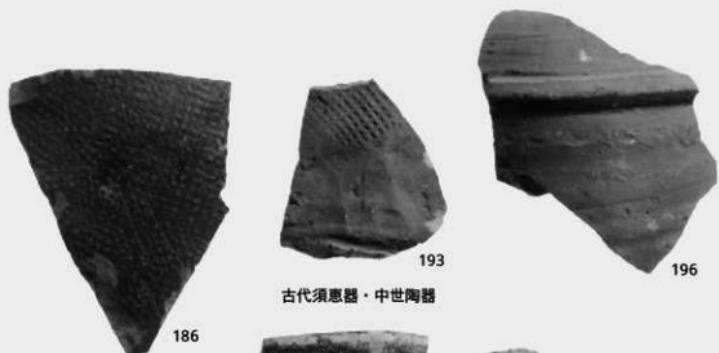
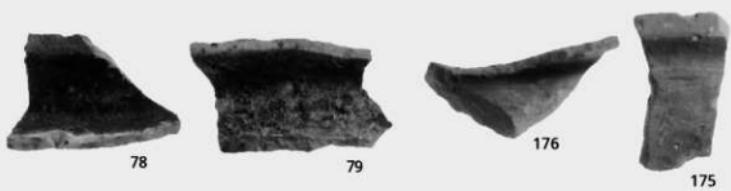
縄文時代の出土遺物（石器 2）



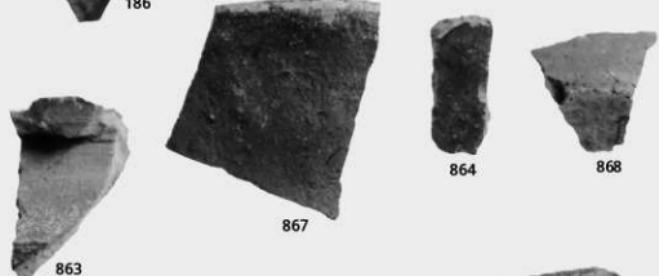
古墳時代の出土遺物



古代の出土遺物



古代須恵器・中世陶器



中世陶器（常滑）

古代の須恵器・中世陶器



366



366



367



365



1242

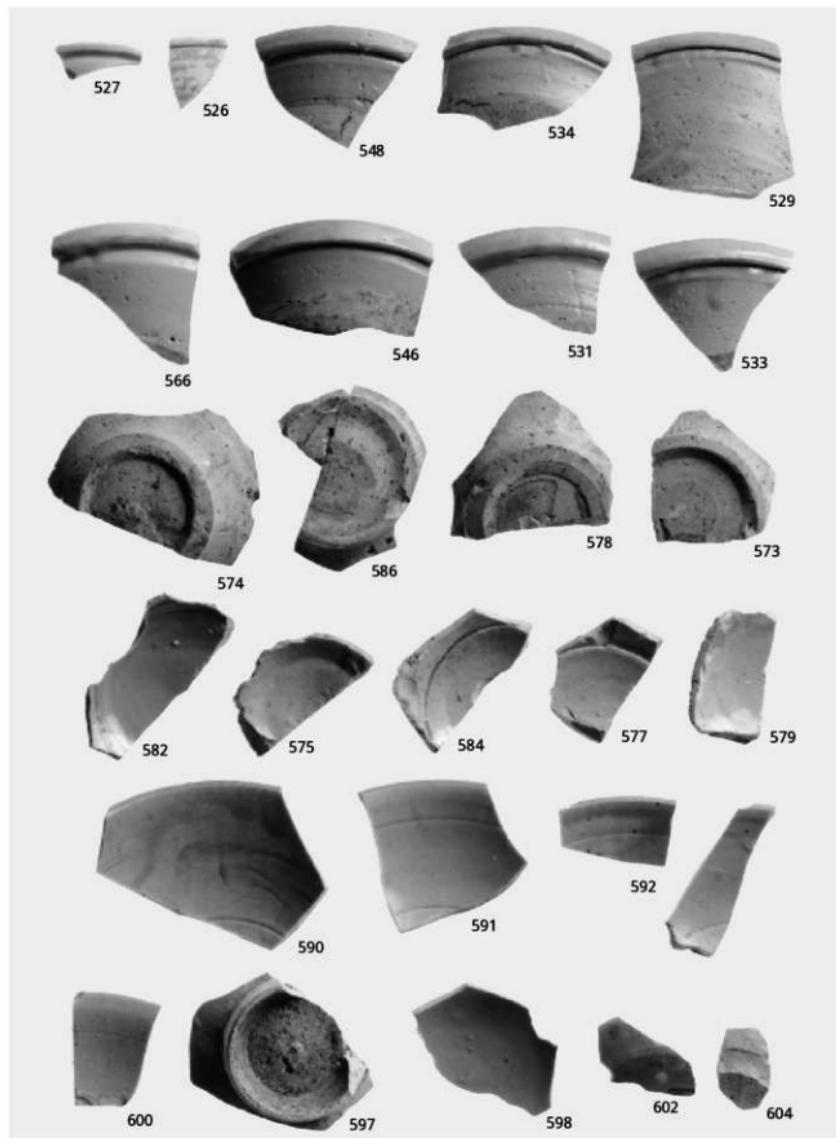
合子



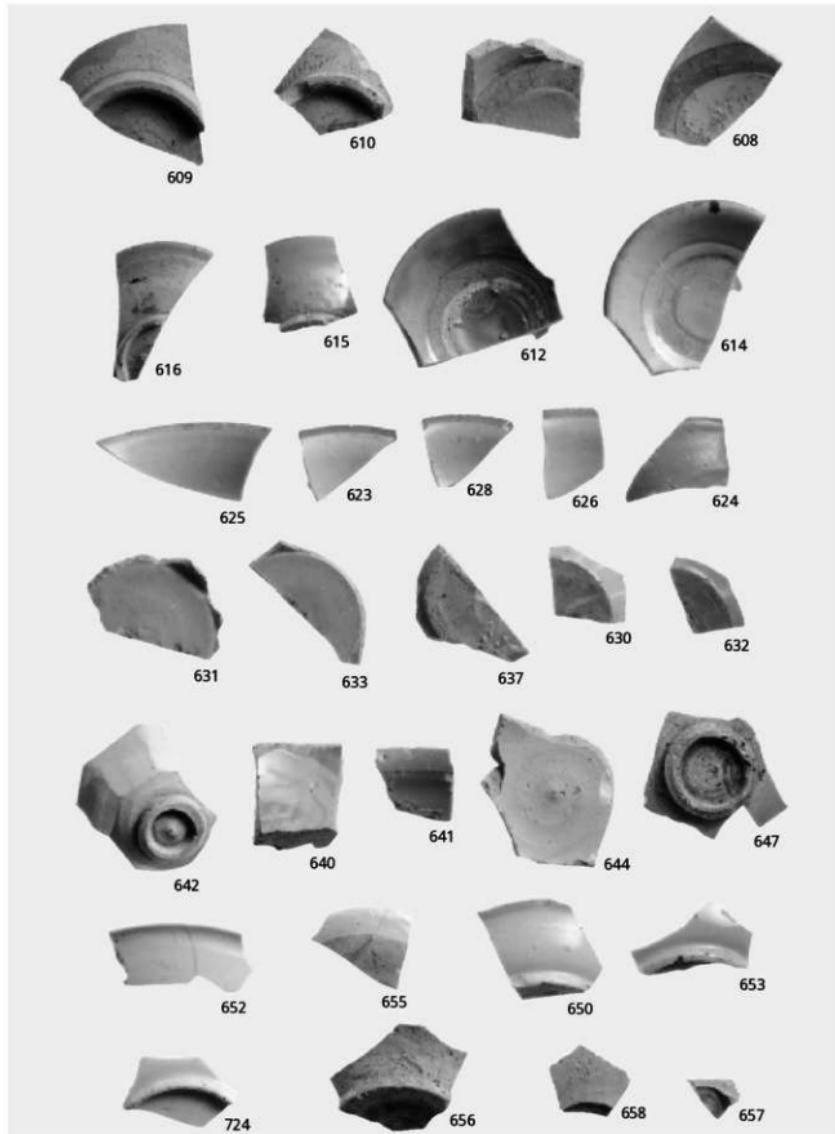
367

365

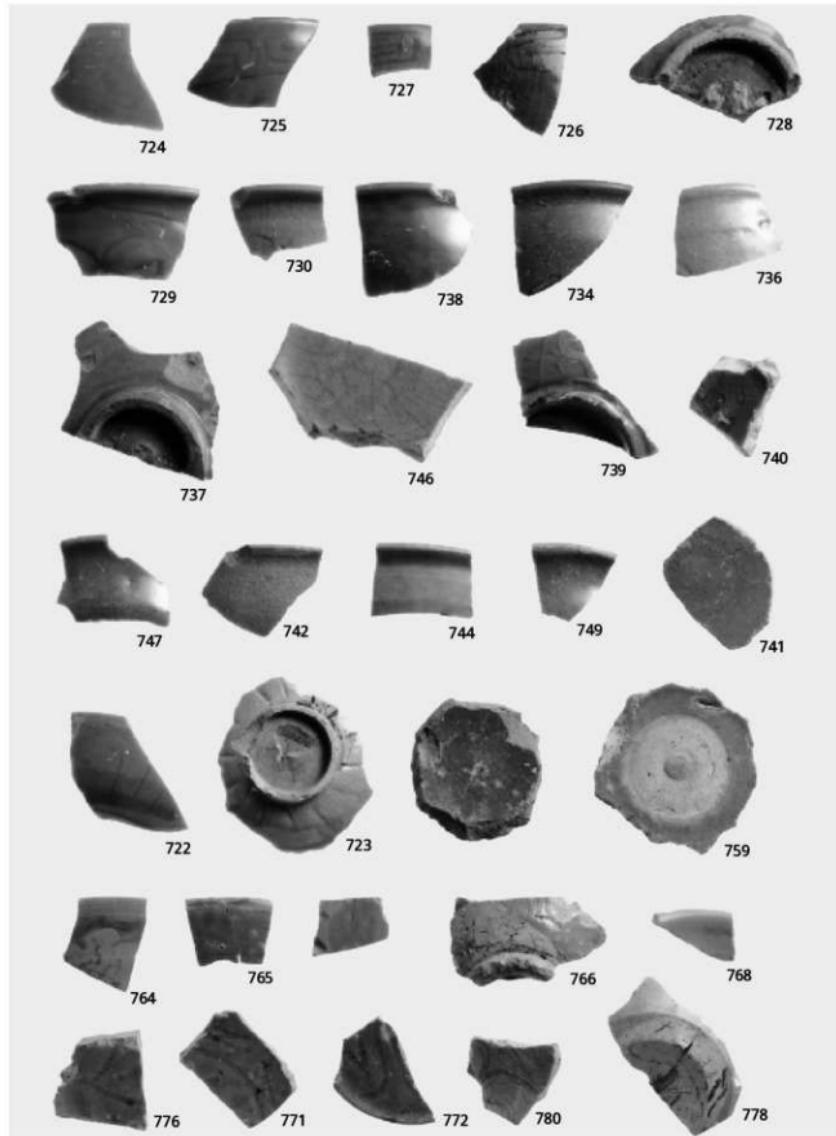
白磁・土師器(合子)



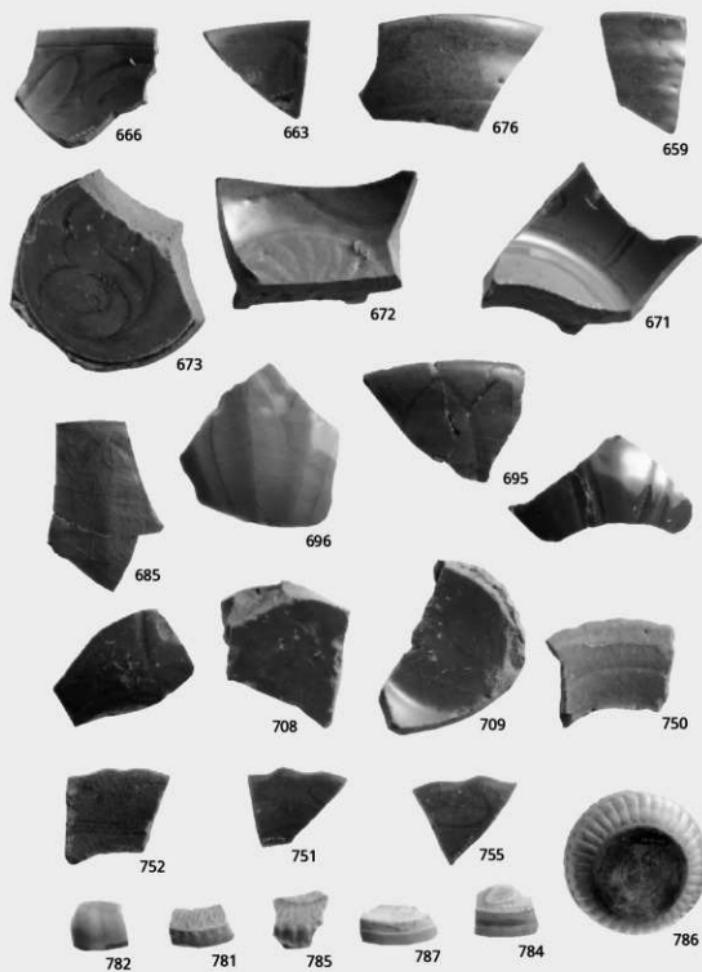
白磁(1)



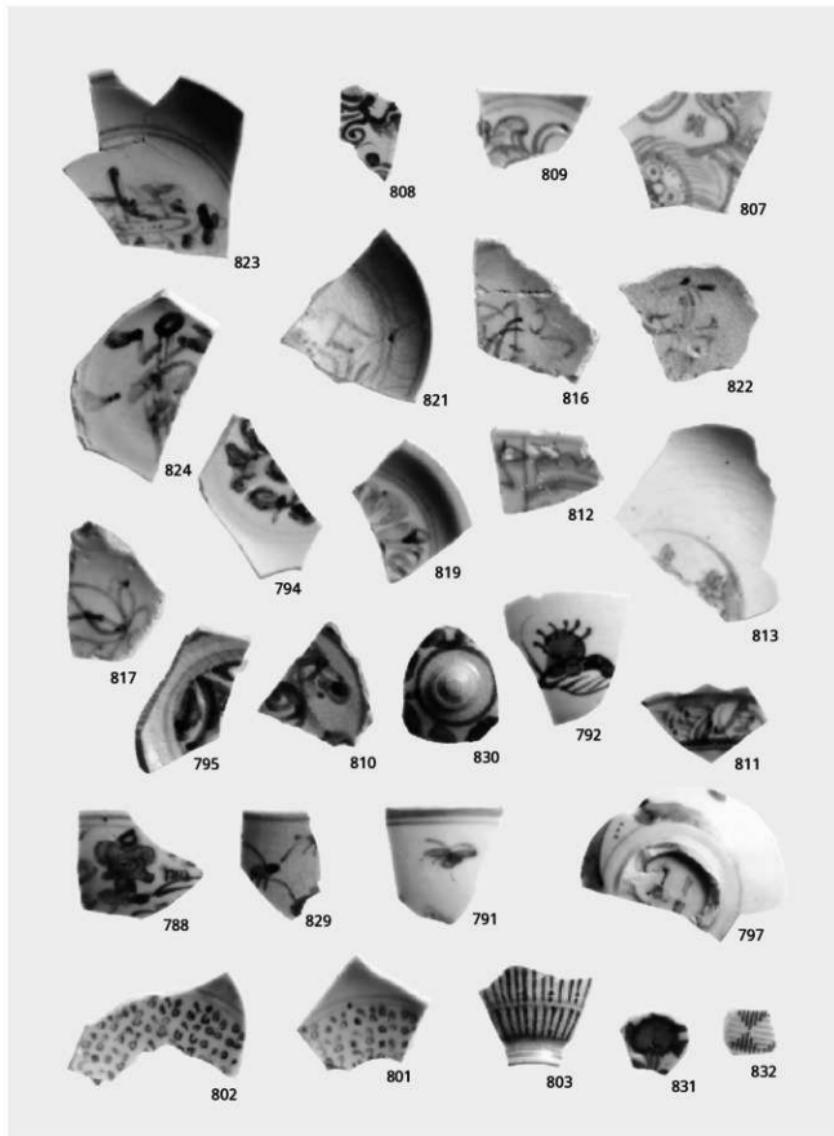
白磁(2)



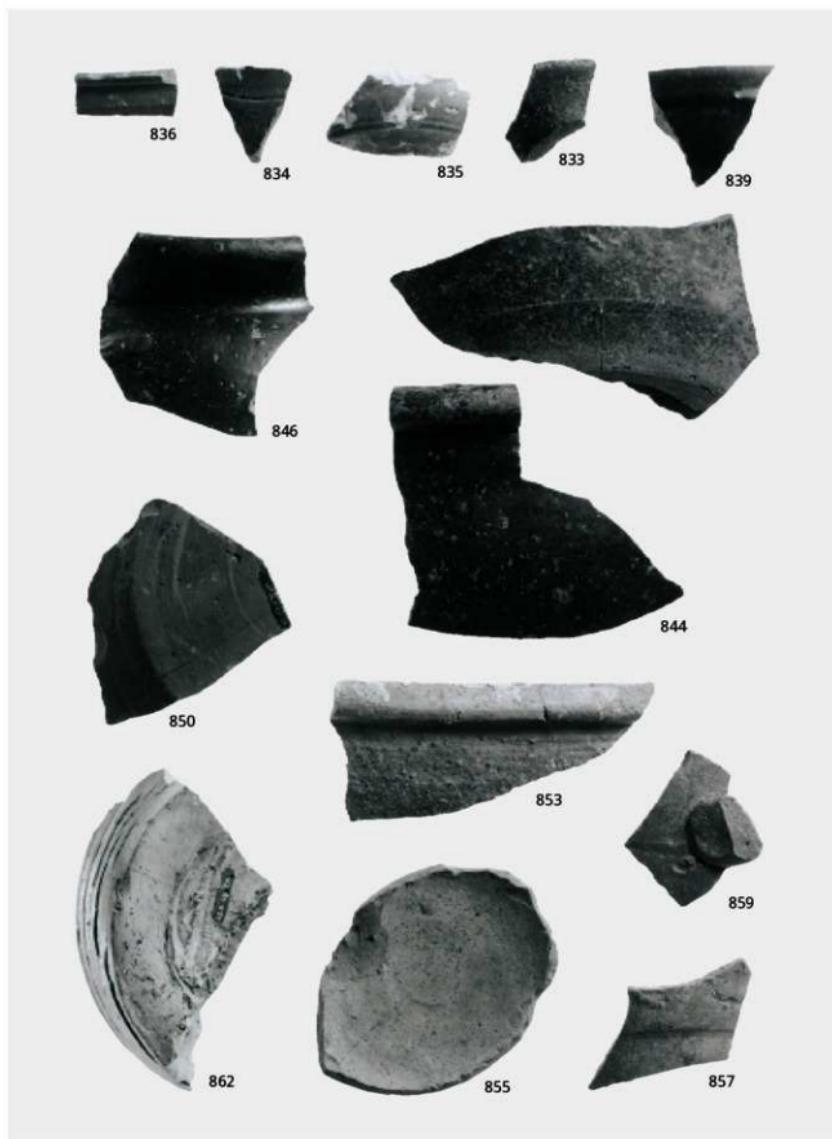
青磁(1)



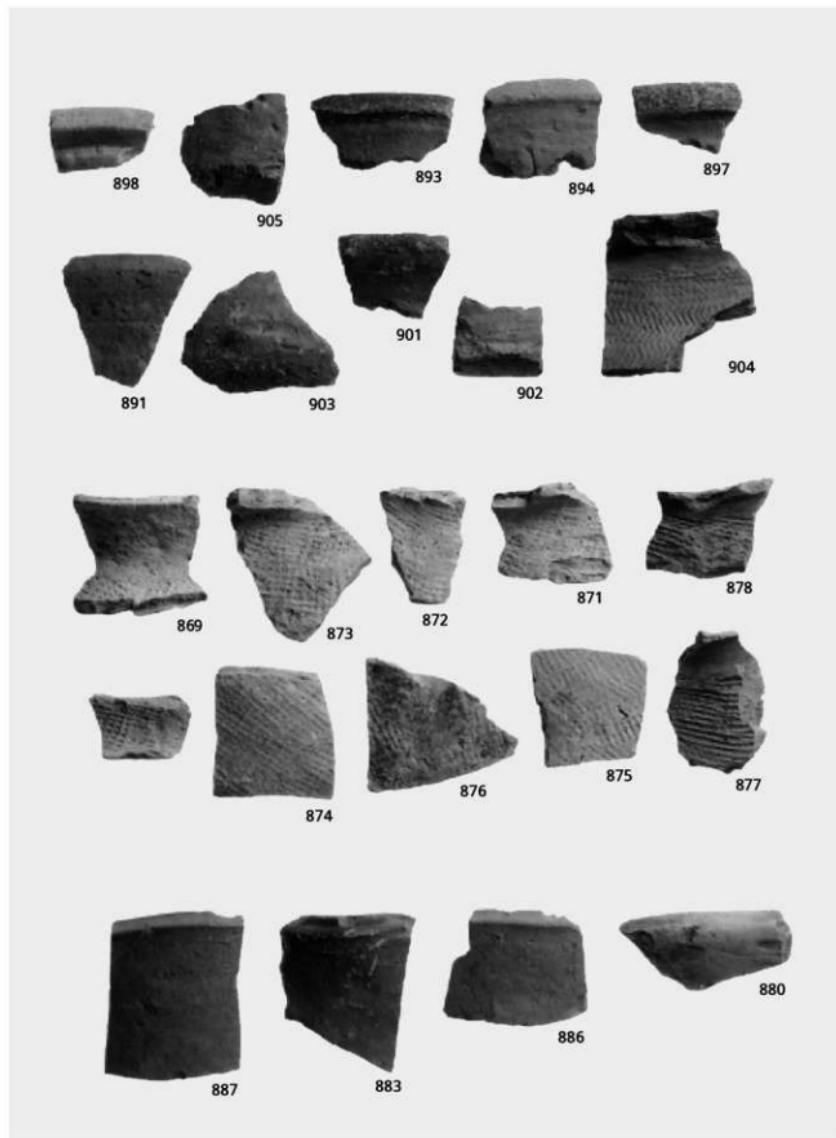
青磁(2)



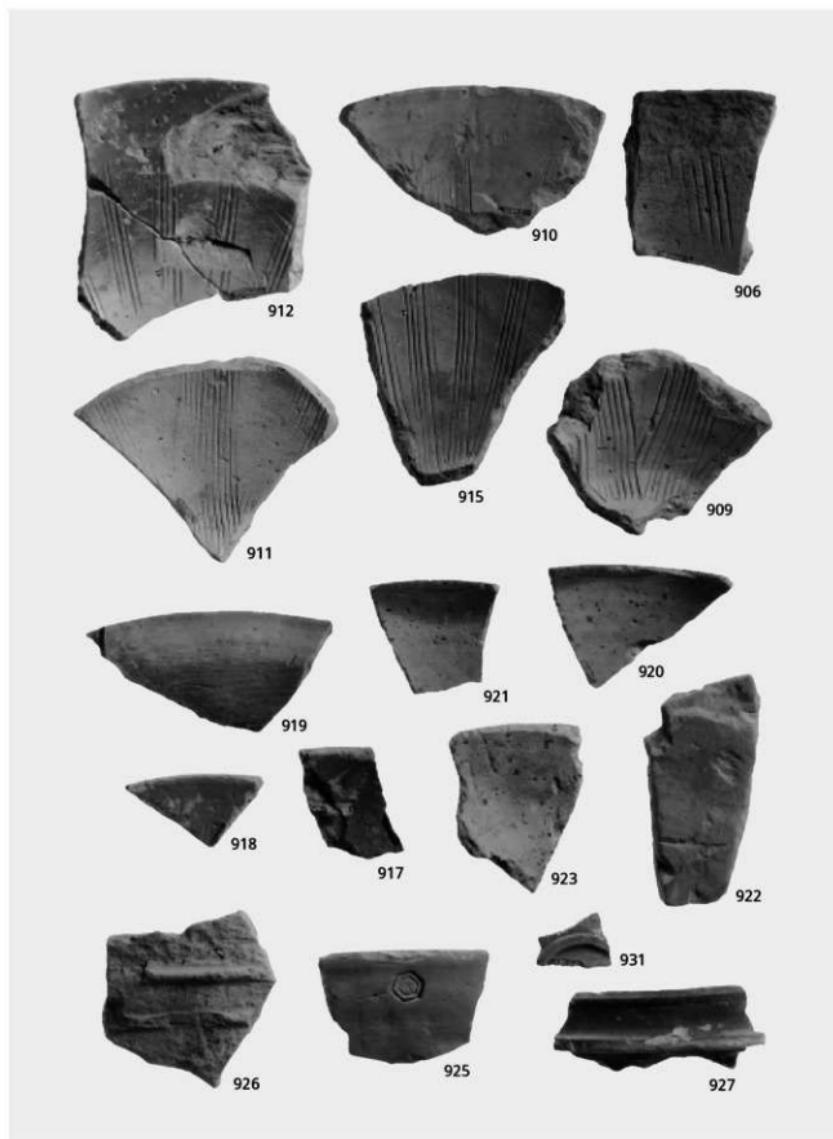
染付



貿易陶器



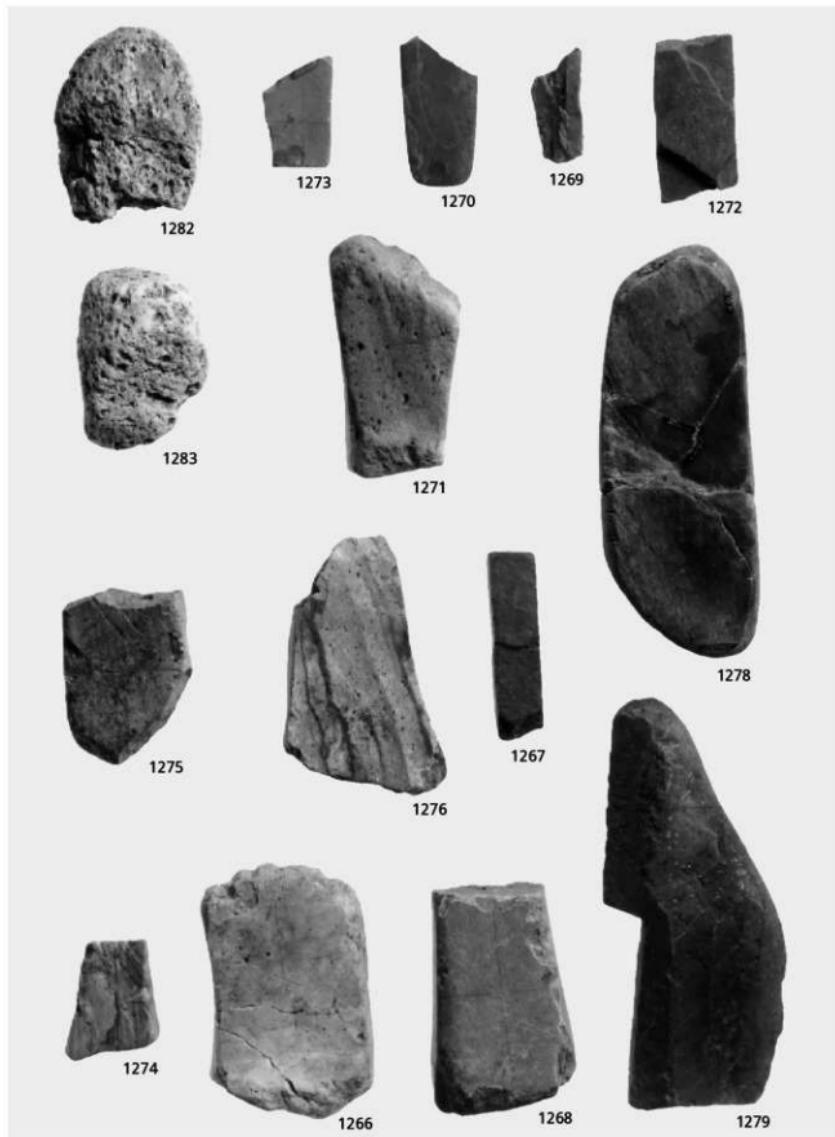
中世須恵器



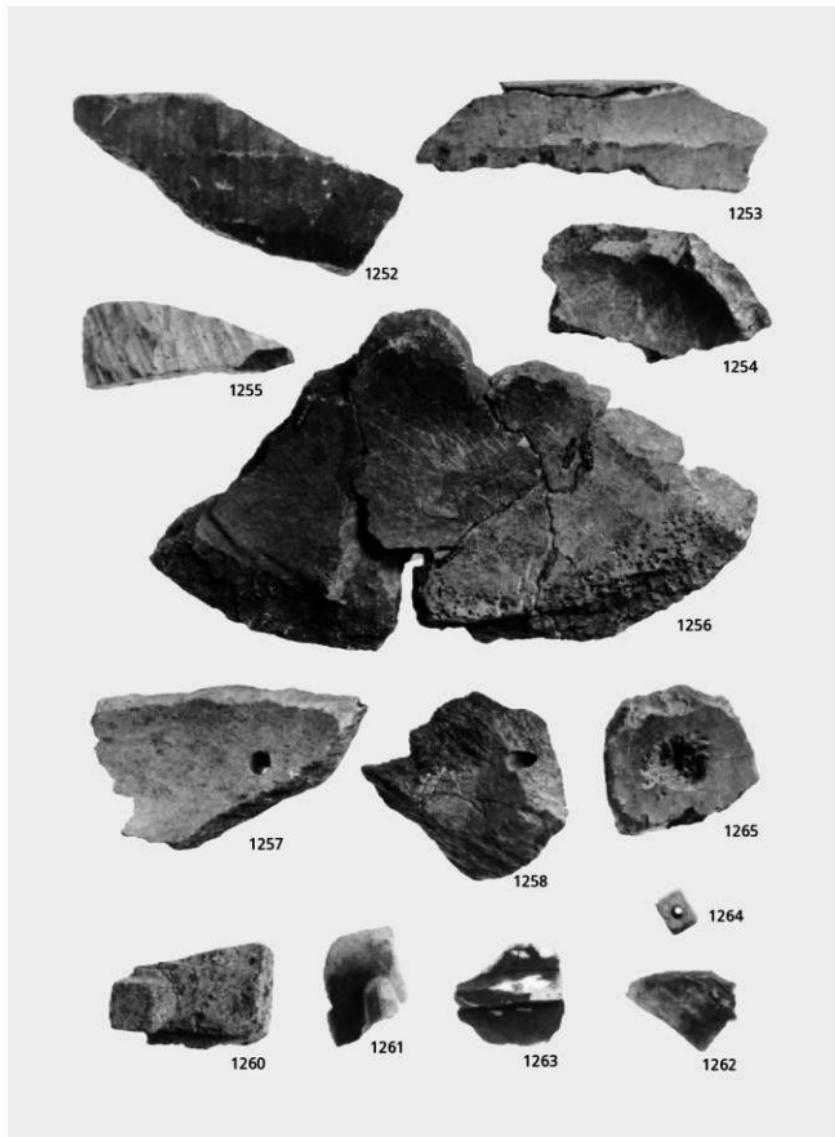
瓦器質土器



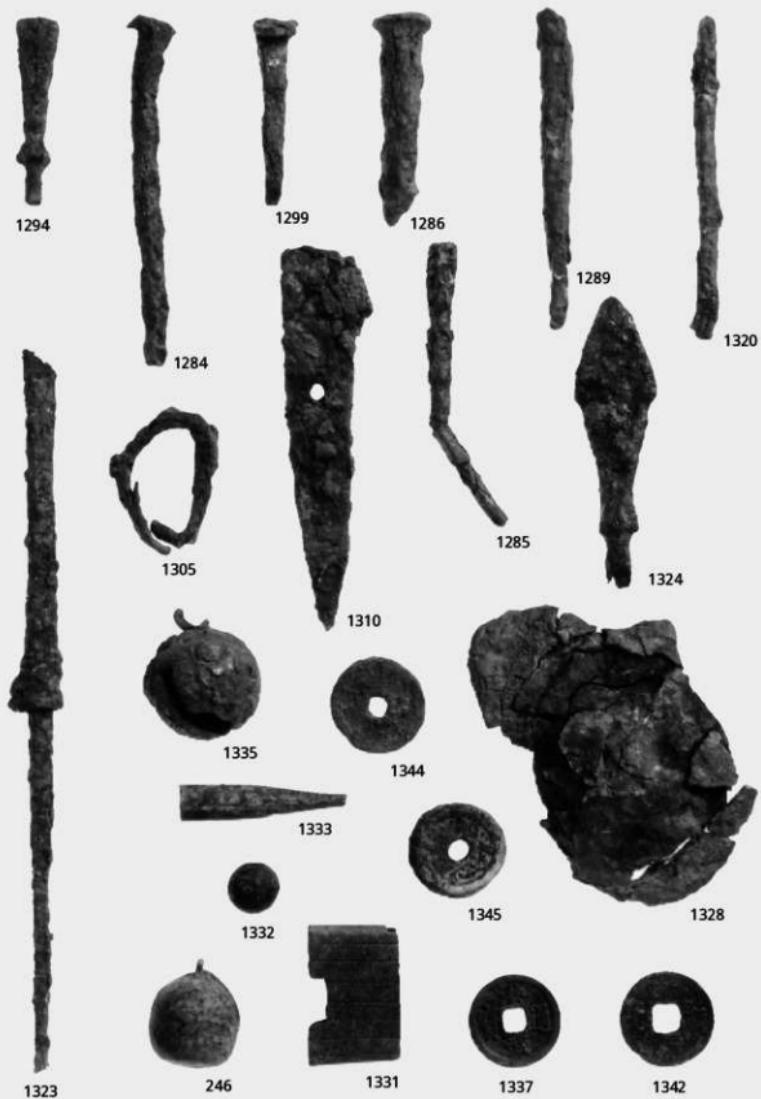
土器 塚・皿



輕石製品・石製品



石銅・滑石製品



金屬製品

あとがき

平成3年に九州新幹線鹿児島ルートの建設が始まった。当時は県知事が「米つきバッタ」で永田町にお願いし、九州は、北陸・東北新幹線の後の三男坊ということで知事は県民に申し訳ないと言うインタビュー放送があったことを思い出す。ただ、その時に最初の工事は博多からではなく、鹿児島と八代間ということで何とか面目を保った顔を思い出す。

それが本年暫定開業という形で3月13日に開始した。それは13年という長い期間でのことである。最初は線路幅が今まで使われている狭軌道を通すスーパー特急方式であった。それは時速180kmで走る列車であった。その工事計画はトンネルや橋梁・高架橋はフル規格で造ることで国と合意していたため、県民の悲願であった時速260kmで走るフル規格新幹線誘致が可能になった。

埋蔵文化財の発掘調査は平成5年5月に西鹿児島駅整備事業の関係で最初に始まった武遺跡であった。偶然、この調査をいただいたことが平成12年度の最終年度までの発掘調査、平成15年度の報告書作成終了年度まで担当することになった。

平成5年度の武遺跡終了の後、次年度の計画を鉄道公団と調整していたが、年度末に予算が付かないと言う連絡があり、発掘調査が数年延びることになった。それは何年延びるか分からぬことであり、愕然とした。原因は北陸新幹線の長野までの長野オリンピックに合わせての開通であった。やはり、三男坊と言う訳かと思った。次に、東北新幹線の八戸までの延長は着々と進み、平成14年の博覧会に合わせて12月に開通と言う報道が流れた。九州新幹線の発掘調査の話はない。ようやく、平成10年に本格的な調査依頼が来た。この間、スーパー特急の狭軌道から本来の新幹線であるフル規格への運動が実を結び、上野城跡を調査する平成11年の頃にはフル規格ということで発掘調査を実施していた。

新幹線建設に関する遺跡の発掘調査は全部で22遺跡であった。平成8・9・10年度は東下原遺跡等の小規模遺跡の調査をし、平成11・12年度は大坪遺跡や大島遺跡、京田遺跡、上ノ平遺跡そして上野城跡等大規模遺跡の調査を実施した。平成16年開通に合わせて、担当14人の職員は各遺跡を必死に調査した。その戦い方は、未買収地のある中で、少しでも調査了解地があればそこを調査し広げていった。また、各調査班は、伊集院町と鹿児島市を掛け持ちしながら調査をし、川内市内の調査班は川内川の北部から川を渡って調査した。もちろん発掘作業員も一緒に行動した。作業員の安全確保を図りながらこのように大変な移動の中で発掘作業を実施し、事故が起らなかつたことは調査員のかねてからの指導によるものであった。

報告書作成は新幹線開通までの3年間の作業に限定され実施した。22遺跡の内1年目は10遺跡を発刊した。2年目は6遺跡を発刊し、3年目は6遺跡の報告書作成を実施した。2年目、3年目は大規模遺跡の報告書作成のため苦労があった。特に3年目は超大物で500～600ページのものであった。よって、印刷だけを次年度に回すことになった。これも職員の努力で何とかできそうである。

最後に、本年度で新幹線発掘調査班は解体するが、これらが達成できることはこの調査班の職員が有能でありチームワークもあったためこの大事業を終えることができたと思う。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（68）
九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IX

上野城跡

発行日 平成16年3月31日
発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1
TEL (0995) 48-5811
印刷所 日本高速印刷株式会社
〒892-0834 鹿児島市南林寺町25-10
TEL (099) 226-0128